

川原平（１）遺跡Ⅳ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

平場地区・クラック地区

2017年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第576集

川原平（1）遺跡Ⅳ

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

平場地区・クラック地区

2017年3月

青森県教育委員会

第 576 集 川原平(1)遺跡Ⅳ 正誤表

例言・凡例

- 【誤】 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。なお、自然科学分析の委託者については、『川原平(1)遺跡Ⅳ』にまとめて掲載した。
- 【正】 7 発掘調査から整理・報告書(第576集から第580集)作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。なお、自然科学分析の委託者については、第580集『川原平(1)遺跡Ⅳ』にまとめて掲載した。

12頁

【誤】			
KK-4	58.633.240	-51.513.368	203.644
NS-1	58.614.894	-51.601.672	190.478
NS-2	58.597.435	-51.603.327	191.549
NS-3	58.583.519	-51.611.555	189.264
NS-4	58.593.180	-51.612.395	189.543
NS-5	58.633.245	-51.603.697	189.312
NS-6	58.628.273	-51.610.378	189.491

【正】			
KK-4	58.633.240	-51.513.368	203.644
KK-5	58.620.939	-51.562.558	204.170
NS-1	58.614.894	-51.601.672	190.478
NS-2	58.597.435	-51.603.327	191.549
NS-3	58.583.519	-51.611.555	189.264
NS-4	58.593.180	-51.612.395	189.543
NS-5	58.633.245	-51.603.697	189.312
NS-6	58.628.273	-51.610.378	189.491

000-05249-512 浮球第一地点

555頁

【誤】		【正】	
13ののみ33	S=1/3	13ののみ	S=1/3

398頁

【誤】

72	27			1302	遺構	F11.3213	礎土	5/3	石製円筒	66.3	66.6	27.9	176.3	未測定	平型円筒、内 側平し、 アスファルトナリ
----	----	--	--	------	----	----------	----	-----	------	------	------	------	-------	-----	----------------------------

【正】

72	27			1302	遺構	F11.3213	礎土	5/3	石製円筒	66.3	66.6	27.9	176.3	未測定	平型円筒、内 側平し、 アスファルトナリ
----	----	--	--	------	----	----------	----	-----	------	------	------	------	-------	-----	----------------------------

398頁

【誤】

71	6	111		1073	遺構	1813	礎土	5/3	石製円筒	55.8	55.8	17.1	9.2	7.5	未測定	
71	6	111		2084	遺構	1860	礎土	5/3	石製円筒	63.5	66.9	31.1	157.9	位置不明	石製	

【正】

71	6	111	2	1073	遺構	1813	礎土	5/3	石製円筒	55.8	55.8	17.1	9.2	7.5	未測定	
71	6	111	2	2084	遺構	1860	礎土	5/3	石製円筒	63.5	66.9	31.1	157.9	位置不明	石製	



川原平(1)遺跡遠景 北西上空→



川原平(1)遺跡全景(合成写真) 写真上が北 上空→



川原平(1)遺跡全景(合成写真) 写真上が北 写真左が川原平(1)遺跡、右が川原平(4)遺跡 上空→



平場地区 盛土遺構に設定したトレンチ 北は写真上



平場地区 盛土遺構全景 南→



クラック地区 3c 層出土土器



クラック地区 5c 層出土土器



クラック地区 5e 層出土土器



クラック地区 8c 層出土土器



平場地区出土土製品



クラック地区出土土製品

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から平成27年度にかけて津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。そのうち、川原平(1)遺跡では、平成15・23・25～27年度に発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代中期から晩期にかけての建物跡・土坑・土器埋設遺構・配石遺構・焼土遺構・盛土遺構・捨場等が確認され、縄文時代の集落が営まれていたことがわかりました。遺物は土器・土製品、石器・石製品、漆製品、木製品、骨角器、動植物遺存体等が出土しました。特に縄文時代後期後葉～晩期にかけての遺物は、この地域では稀少な出土例として注目され、晩期の亀ヶ岡文化を考える上で貴重な発見となりました。

本報告書は、平成25年度から27年度に実施した川原平(1)遺跡発掘調査事業のうち、平場地区とクラック地区の調査成果をまとめたものです。この成果が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成29年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 田村博美

例言・凡例

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成15・23・25～27年度に発掘調査を実施した西目屋村川原平（1）遺跡の発掘調査報告書のうち、平成25～27年度に行った平場地区とクラック地区の発掘調査報告書である。
- 2 川原平（1）遺跡の所在地は青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡地内、青森県遺跡番号は343009である。
- 3 川原平（1）遺跡の発掘調査報告書は、既に以下3冊が刊行されている。
 - ・『川原平（1）・（4）遺跡・大川添（2）遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第564集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第565集また、本書と同時期に、以下の4冊の刊行も予定されている。
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅴ（東捨場地区・北東捨場地区）』青森県埋蔵文化財調査報告書第577集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅵ（北捨場地区）』青森県埋蔵文化財調査報告書第578集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅶ（西捨場地区）』青森県埋蔵文化財調査報告書第579集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅷ（自然科学分析・補遺・総括）』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成25年5月7日～同年11月14日
	平成26年5月1日～同年11月14日
	平成27年4月20日～同年8月28日
整理・報告書作成期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
	平成27年4月1日～平成28年3月31日
	平成28年4月1日～平成29年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、報告書抄録記載の編著者が担当し、執筆者名は文末に記した。なお、発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においては本書が優先する。

- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。なお、自然科学分析の委託者については、「川原平（1）遺跡Ⅷ」にまとめて掲載した。

基準点・水準点測量	株式会社キタコン
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
土器・小型土器の図化作業の一部	株式会社アルカ、株式会社ラング 株式会社シン技術コンサル
石器の図化作業の一部	株式会社アルカ、株式会社ラング
土器の復元の一部	株式会社文化財ユニオン、株式会社吉田生物研究所
漆製品の保存処理	株式会社吉田生物研究所
土器等水洗い・注記作業の一部	ナカシャクリエイテプ株式会社、第一合成株式会社 株式会社イビソク
遺物の写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ、有限会社無限
遺物写真切り抜き・回転作業の一部	ワタナベサービス株式会社、株式会社サンエイ

- 8 石器の石質鑑定は調査員の柴正敏氏と島口天氏に依頼した。

- 9 地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。

- 10 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2000)に基づく平面直角座標第X系による。挿入中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

- 11 遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組合わせた番号を付した。基本的な略号は、以下のとおりである。

S I -建物跡、S B -掘立柱建物跡、S N -焼土遺構、Pit -ピット(柱穴)、S K -土坑、S R -土器埋設遺構、S Q -配石遺構、M -盛土遺構

- 12 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。

P -土器 S -石器 C -炭化材

- 13 土層の色調表記には、「新版土色帖2005年度版」(小山正忠・竹原秀雄)を用い、遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土には算用数字を使用した。土層断面図には、水準点を基にした海拔標高を付した。

- 14 遺構図版中で使用した網掛けの説明は以下の通りであるが、一部は図版に記したのものもある。

焼土範囲 

- 15 遺物実測図で使用した網掛けの説明は以下の通りである。



16 遺構実測図および遺物実測図の各図版にはスケールを付している。

17 実測図の掲載を省き、写真のみで報告した遺物もあるため、土器及び石器・石製品の実測図には遺物写真の個別番号、土製品・小型土器の実測図には遺物写真の通し番号を付した。また、写真の掲載を省き、実測図のみで報告した遺物については、実測図に個別番号を付した。なお、本文中で遺物実測図あるいは遺物写真を引用する場合は、以下のように記した。

例1) 写真19の1の場合 → 写19-1

例2) 「川原平(1)遺跡Ⅲ」の図11の1の場合 → 報告書Ⅲ-図11-1、Ⅲ-図11-1

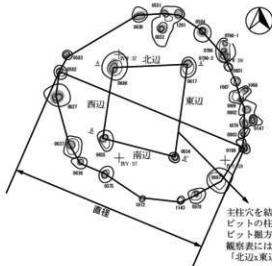
18 遺物の実測図及び写真の縮尺は、原則として土器は1/3あるいは1/4、土製品は1/2あるいは1/3、剥片石器・磨製石斧・石製品は1/2、礫石器は1/3である。この原則からはずれるものについては、個別に縮尺を示した。

19 遺構(建物跡と掘立柱建物跡)について

建物跡の直径は、中心を經由して壁柱穴間で最大長を計った。ピットに柱痕がある場合はその中心、柱痕のない場合は、掘方の中心から計測してある。平面形は円形なので、基本最大長から直径を計測したが、平面形が楕円形の場合、最大長の中心を直交するラインを短軸とした。その場合、ピットにかかっていない場合は、推定住居のラインから長さを計測した。

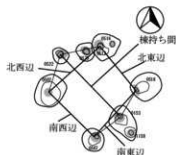
支柱穴並びに、掘立柱建物跡は4辺すべて計測した。表11には

北→東→南→西もしくは、軸が傾いている場合、北東→南東→南西→北西の順で記載している。



直径：円の中心を走る、最大径。両端はピットの柱痕中心、もしくは、ピット掘方の中心

建物跡



軸が傾いている場合、観察表には、
「北東辺x南東辺x南西辺x北西辺」で記入
6本柱の場合、樑持ち柱を除いた4辺を計測
さらに樑持ち柱間の長さを計測
観察表には、
「北辺x東辺x南辺x西辺x樑持ち間」もしくは、
「北東辺x南東辺x南西辺x北西辺x樑持ち間」

掘立柱建物跡

凡例 建物跡の計測基準

20 土器の整理・分類について

口縁から底部まで接合した土器は原則として図化したのが、写真掲載のみとしたものもある。区分・分類基準等については、『川原平（1）遺跡Ⅵ』（第578集）の「第2章第2節2土器」を準用した。また、口径あるいは器高が10cm以下の容器については小型土器・ミニチュア土器として扱った（詳細については『川原平（1）遺跡Ⅶ』（第580集参照）。土器観察表における（ ）内計測値は、口径・底径については推定値（残存1/2未満）、器高については残存値を示す。

21 石器の整理・分類について

石器の整理・分類については、『川原平（1）遺跡Ⅲ』（第565集：pp.9-10）を準用した。なお、石製円盤については、集合写真を併用し、「円1（円盤集合写真1）」、「円2（円盤集合写真2）」…と名称を付した。また、出土地点等の情報を記載するため、写真中には表示しないものの、右のように1,2,3…と左上から番号を付した形で観察表を作成した。



円●

22 時期区分

本報告書で触れる遺構・遺物の時期は、『川原平（1）遺跡Ⅱ』（564集）を準用した（表①参照）。

表① 時期区分表

				本報告	青森県史 (関根2013)	型式等		備考
後期	後業	縮付土器				十腰内V群		本文中で7-3期以前を縮付土器前半とした
			7~3期	7期3段階				
			7~4期	7期4段階	(十腰内V群に欠落する時期)		縮付土器第Ⅲ段階 (小林2008)	
	末業		8期	8期	(十腰内VI群)		縮付土器第Ⅳ段階 (小林2008)	
晩期	前半	亀ヶ岡式土器	1期	1a期	1a期	大洞B	大洞B1	
				1b期	1b期		大洞B2	
			2期	2期	大洞BC			
		前業		3期	3期	大洞C1		
		中業		4期	4期	大洞C2	聖山式	
		後業		5期	5期	大洞A		
		後半		6期	6期	大洞A'		

23 古代以降の遺物について

今回の報告範囲において、古代以降の土器・陶磁器等が僅かに出土しているが、今回報告以外の地区で得たものとあわせて、『川原平（1）遺跡Ⅶ』（第580集）に掲載する。

24 自然科学分析

今回の報告範囲出土遺物等について、放射性炭素年代測定や樹種同定、漆製品・土器の塗膜分析などの自然科学分析を外委託しているが、これらの成果については今回報告以外の地区で得たものとあわせて、『川原平(1)遺跡Ⅷ』(第580集)に掲載する。ただし、本報告における遺構・遺物の記載にあたり、それらの結果を部分的に引用した箇所がある。分析に使用した試料は、観察表の備考欄に下記のように試料番号を記載した。

- Ⅷ第1編第3章 木質遺物の同定→「AOM-●」「YBL-●」「PLD-●」
- Ⅷ第1編第5章第7節 放射性炭素年代測定→「年代測定KAWA(1)-●」
- Ⅷ第1編第6章第4・5節 漆関連遺物の塗膜分析→「塗膜分析No.●」
- Ⅷ第1編第7章第3節 土器内面炭化植物遺体の同定および放射性炭素年代測定
→「炭化物材質分析・年代測定●」
- Ⅷ第1編第7章第5節 炭素・窒素安定同位体比分析→「安定同位体比分析試料●」
- Ⅷ第1編第8章 胎土分析→「胎土分析●」
- Ⅷ第1編第9章 黒曜石産地推定→「黒曜石産地推定No.●」

25 引用文献については巻末に掲載したが、参考文献については『川原平(1)遺跡Ⅷ』(第580集)に掲載した。

26 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

27 発掘調査及び第576集から第580集の報告書の作成に際して、下記の機関・諸氏からご指導・ご協力を得た(敬称略、順不動)。

西日屋村教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、栗原市教育委員会、東京国立博物館、東北歴史博物館、七飯町教育委員会、階上町教育委員会、八戸市教育委員会、東村山市教育委員会、国立大学法人弘前大学、飯島義雄、岡村道雄、長田友也、小野映介、片岡太郎、小岩直人、小林謙一、小林克、須藤隆、関根達人、千葉敏朗、羽生淳子。

目次

序

例言・凡例

目次

図版目次

表目次

巻頭写真目次

写真図版目次

第1編 調査の経過

第1章 調査に至る経緯

第2章 調査体制

第1節 発掘調査体制 1

第2節 整理・報告書作成体制 3

第3章 作業経過

第1節 発掘作業の経過 4

第2節 整理・報告書作成作業の経過 6

第3節 各報告書の区分 8

第2編 平場地区

第1章 調査の方法

第1節 発掘作業の方法 13

第2節 整理・報告書作成作業の方法 14

第3節 基本層序 15

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 遺構 16

1 概要 16

2 ビット 41

3 土坑 101

4 焼土遺構 103

5 盛土遺構 133

第2節 遺構外出土遺物 185

1 土器 185

2 土製品 185

3 石器・石製品 185

第3章	まとめ	
第1節	遺構	195
1	建物跡・掘立柱建物跡	195
2	盛土遺構	197
3	まとめ(遺構の変遷)	199
第2節	遺物	200
第3編	クラック地区	
第1章	調査の方法	
第1節	発掘作業の方法	207
第2節	整理・報告書作成作業の方法	207
第2章	検出遺構と出土遺物	
第1節	遺構	210
第2節	クラック地点	213
1	調査方法	213
2	地形	213
3	堆積層	214
4	出土遺物	220
第3章	まとめ	
第1節	堆積層の形成	296
第2節	土器	297
第3節	まとめ	299
引用文献		306
観察表		307
写真図版		455
報告書抄録		

図版目次

凡例	建物跡・掘立柱建物跡計測基準	図58	第114b号建物跡のビット(主柱穴)	75
第1編 調査の経過		図59	第114a号・第114b号建物跡出土遺物	75
図1	川原平(1)遺跡平成28年度行方報告書掲載範囲	図60	第115号建物跡	76
図2	川原平(1)遺跡の地形	図61	第115号建物跡出土遺物	76
図3	川原平(1)遺跡 調査前の状況	図62	第116号建物跡	76
図4	年度別調査範囲・グリッド配置図・測量杭	図63	VC-VG-37-40一帯の遺構配置図	77
第2編 平場地区		図64	第117号建物跡	78
図5	川原平(1)遺跡遺構配置図(1)	図65	第117号建物跡出土遺物	78
図6	川原平(1)遺跡遺構配置図(2)	図66	第1号掘立柱建物跡	104
図7	川原平(1)遺跡IVの報告範囲	図67	第1号掘立柱建物跡出土遺物	104
図8	川原平(1)遺跡 平場地区掲載区分図	図68	第2号・第3号掘立柱建物跡	105
図9	平場地区遺構配置図(1)	図69	第2号・第3号掘立柱建物跡出土遺物	105
図10	平場地区遺構配置図(2)	図70	第4号掘立柱建物跡	105
図11	平場地区遺構配置図(3)	図71	第4号掘立柱建物跡出土遺物	105
図12	平場地区遺構配置図(4)	図72	第5号・第6号掘立柱建物跡	106
図13	平場地区遺構配置図(5)	図73	第6号掘立柱建物跡出土遺物	106
図14	平場地区遺構配置図(6)	図74	第7号・第8号掘立柱建物跡	107
図15	平場地区遺構配置図(7)	図75	第7号・第8号掘立柱建物跡出土遺物	107
図16	平場地区遺構配置図(8)	図76	第9号掘立柱建物跡	108
図17	平場地区遺構配置図(9)	図77	第9号掘立柱建物跡出土遺物	108
図18	平場地区遺構配置図(10)	図78	第10号掘立柱建物跡と出土遺物	109
図19	平場地区遺構配置図(11)	図79	第11号掘立柱建物跡	109
図20	平場地区遺構配置図(12)	図80	第11号掘立柱建物跡出土遺物	110
図21	平場地区遺構配置図(13)	図81	第13号掘立柱建物跡	110
図22	平場地区遺構配置図(14)	図82	IVX-VA-43-46一帯の遺構配置図	110
図23	平場地区遺構配置図(15)	図83	第12号・第14号-第17号掘立柱建物跡	111
図24	平場地区遺構配置図(16)	図84	第17号掘立柱建物跡出土遺物	111
図25	平場地区遺構配置図(17)	図85	第18号・第20号・第21号掘立柱建物跡	112
図26	平場地区遺構配置図(18)	図86	第20号・第21号掘立柱建物跡出土遺物	112
図27	平場地区の旧地形とビットの分布	図87	第19号掘立柱建物跡	113
図28	NU-NW-35-38一帯の遺構配置図	図88	第19号掘立柱建物跡出土遺物	113
図29	第102号建物跡	図89	第22号・第23号掘立柱建物跡	114
図30	第102号建物跡出土遺物	図90	第22号掘立柱建物跡出土遺物	114
図31	IVT-IV-38-40一帯の遺構配置図	図91	VH-VI-42-45一帯の遺構配置図	115
図32	第103号建物跡	図92	VG-VH-40-42一帯の遺構配置図	115
図33	第103号建物跡出土遺物	図93	第24号掘立柱建物跡	116
図34	IVT-IVX-41-45一帯の遺構配置図	図94	第25号掘立柱建物跡	116
図35	第104a号・第104b号・第105号建物跡	図95	第24b号・第25号掘立柱建物跡出土遺物	117
図36	第104a号・第105号建物跡出土遺物	図96	第26号-第28号掘立柱建物跡	118
図37	第104a号建物跡のビット(主柱穴)	図97	第26号-第28号掘立柱建物跡出土遺物	118
図38	IVU-IVX-45-48一帯の遺構配置図	図98	第29号-第32号掘立柱建物跡	119
図39	第106号建物跡	図99	第29号掘立柱建物跡のビット	120
図40	第107号建物跡と出土遺物	図100	第29号-第32号掘立柱建物跡出土遺物	120
図41	第109号建物跡	図101	VC-VF-33-36一帯の遺構配置図	121
図42	NU-VA-46-50一帯の遺構配置図	図102	第33号-第35号掘立柱建物跡	121
図43	第108a号・第108b号建物跡	図103	第33号-第38号掘立柱建物跡出土遺物	122
図44	第108号・第111号建物跡セクション図	図104	IVX-VA-35-37一帯の遺構配置図	123
図45	第108a号建物跡のビット(主柱穴)	図105	第36号-第38号掘立柱建物跡	124
図46	第108a号・第108b号建物跡出土遺物	図106	IVW-VB-37-41一帯の遺構配置図	125
図47	IVX-VA-48-51一帯の遺構配置図	図107	第39号-第43号掘立柱建物跡と出土遺物	126
図48	第110号建物跡	図108	第44号掘立柱建物跡と出土遺物	127
図49	第111号建物跡	図109	ビット出土遺物(1)	127
図50	第111号建物跡出土遺物	図110	ビット出土遺物(2)	128
図51	第112号建物跡	図111	ビット出土遺物(3)	129
図52	第112号建物跡出土遺物	図112	ビット出土遺物(4)	130
図53	VC-VF-48-51一帯の遺構配置図とビット	図113	ビット出土遺物(5)	131
図54	第113号建物跡と出土遺物	図114	土坑と出土遺物	132
図55	VC-VG-44-47一帯の遺構配置図	図115	平場地区の地形図(調査前)	144
図56	第114a号・第114b号建物跡	図116	第2号盛土遺構セクション配置図	145
図57	第119号建物跡	図117	第2号盛土遺構セクション図	145

図118	第43号配石遺構(第2号盛土遺構)	146
図119	第2号盛土遺構出土土器	147
図120	第2号盛土遺構出土土器(1)	147
図121	第2号盛土遺構出土土器(2)	148
図122	第2号盛土遺構出土土器(3)	149
図123	第2号盛土遺構出土土器(4)	150
図124	第3号盛土遺構トレンチ・セクション配置図	151
図125	第3号盛土遺構セクション図	153
図126	第3号盛土遺構と土坑	155
図127	第3号盛土遺構下層検出のピット	155
図128	第3号盛土遺構出土遺物の分布	156
図129	第3号盛土遺構出土土器(1)	157
図130	第3号盛土遺構出土土器(2)	158
図131	第3号盛土遺構出土土器(3)	159
図132	第3号盛土遺構出土土器(4)	160
図133	第3号盛土遺構出土土器(5)	161
図134	第3号盛土遺構出土土器(6)	162
図135	第3号盛土遺構出土土器(7)	163
図136	第3号盛土遺構出土土器(8)	164
図137	第3号盛土遺構出土土器(9)	165
図138	第3号盛土遺構出土土器(10)	166
図139	第3号盛土遺構出土土器(11)	167
図140	第3号盛土遺構出土土器(12)	168
図141	第3号盛土遺構出土土器(13)	169
図142	第3号盛土遺構出土土製品	170
図143	第3号盛土遺構出土土器(1)	171
図144	第3号盛土遺構出土土器(2)	172
図145	第3号盛土遺構出土土器(3)	173
図146	第3号盛土遺構出土土器(4)	174
図147	第3号盛土遺構出土土器(5)	175
図148	第4号盛土遺構セクション配置図	176
図149	第4号盛土遺構出土遺物の分布	176
図150	第4号盛土遺構セクション図	177
図151	第4号盛土遺構出土土器(1)	179
図152	第4号盛土遺構出土土器(2)	180
図153	第4号盛土遺構出土土器(3)	181
図154	第4号盛土遺構出土土器(1)	182
図155	第4号盛土遺構出土土器(2)	183
図156	第4号盛土遺構出土土器(3)	184
図157	遺構外出土土製品	188
図158	遺構外出土土器(1)	189
図159	遺構外出土土器(2)	190
図160	遺構外出土土器(3)	191
図161	遺構外出土土器(4)	192
図162	遺構外出土土器(5)	193
図163	遺構外出土土器(6)	194
図164	川原平(1)遺跡検出建物跡	202
図165	青森県内の縄文後期後葉・晩期建物跡	203
図166	平場地区の旧地形と盛土遺構・建物跡の位置	204
図167	平場地区の時期別遺構配置図	205

第3編 クラック地区

図168	クラック地形図・セクション位置	209
図169	第118号建物跡	211
図170	第118号建物跡出土遺物	212
図171	クラック地点セクション図(1)	217
図172	クラック地点セクション図(2)	218
図173	クラック地点セクション図(3)	219
図174	3c層・3e層下位遺物分布	222
図175	5c層上面・5e層遺物分布	223
図176	5e層遺物分布	225
図177	8c層遺物分布	226
図178	クラック地点出土土器(1)	230

図179	クラック地点出土土器(2)	231
図180	クラック地点出土土器(3)	232
図181	クラック地点出土土器(4)	233
図182	クラック地点出土土器(5)	234
図183	クラック地点出土土器(6)	235
図184	クラック地点出土土器(7)	236
図185	クラック地点出土土器(8)	237
図186	クラック地点出土土器(9)	238
図187	クラック地点出土土器(10)	239
図188	クラック地点出土土器(11)	240
図189	クラック地点出土土器(12)	243
図190	クラック地点出土土器(13)	244
図191	クラック地点出土土器(14)	245
図192	クラック地点出土土器(15)	246
図193	クラック地点出土土器(16)	247
図194	クラック地点出土土器(17)	248
図195	クラック地点出土土器(18)	249
図196	クラック地点出土土器(19)	250
図197	クラック地点出土土器(20)	251
図198	クラック地点出土土器(21)	252
図199	クラック地点出土土器(22)	257
図200	クラック地点出土土器(23)	258
図201	クラック地点出土土器(24)	259
図202	クラック地点出土土器(25)	260
図203	クラック地点出土土器(26)	261
図204	クラック地点出土土器(27)	262
図205	クラック地点出土土器(28)	263
図206	クラック地点出土土器(29)	264
図207	クラック地点出土土器(30)	265
図208	クラック地点出土土器(31)	266
図209	クラック地点出土土器(32)	267
図210	クラック地点出土土器(33)	268
図211	クラック地点出土土器(34)	269
図212	クラック地点出土土器(35)	270
図213	クラック地点出土土器(36)	271
図214	クラック地点出土土器(37)	272
図215	クラック地点出土土製品(1)	274
図216	クラック地点出土土製品(2)	275
図217	クラック地点出土土製品(3)	276
図218	クラック地点出土土器・石製品(1)	280
図219	クラック地点出土土器・石製品(2)	281
図220	クラック地点出土土器・石製品(3)	282
図221	クラック地点出土土器・石製品(4)	283
図222	クラック地点出土土器・石製品(5)	284
図223	クラック地点出土土器・石製品(6)	285
図224	クラック地点出土土器・石製品(7)	286
図225	クラック地点出土土器・石製品(8)	287
図226	クラック地点出土土器・石製品(9)	288
図227	クラック地点出土土器・石製品(10)	289
図228	クラック地点出土土器・石製品(11)	290
図229	クラック地点出土土器・石製品(12)	291
図230	クラック地点出土土器・石製品(13)	292
図231	クラック地点出土土器・石製品(14)	293
図232	クラック地点出土土器・石製品(15)	294
図233	クラック地点出土土器・石製品(16)	295
図234	土器の重量分布	300
図235	堆積層の形成	301
図236	1a層~5c層上面の土器	303
図237	5c層~5e層の土器	304
図238	6層~8c層・上層・下層・Ⅲ層の土器	305

表 目 次

表① 時期区分表		表13 平場地区掘立柱建物跡のビット一覧表	321
表1 単独ビット出土遺物と時期	99	表14 平場地区ビット一覧表	325
表2 第3号盛土遺構出土土器グリッド別重量	137	表15 平場地区ビット出土土器観察表	359
表3 第3号盛土遺構下層出土土器グリッド別重量	137	表16 平場地区第2号盛土遺構出土土器観察表	380
表4 第3号盛土遺構中層出土土器グリッド別重量	137	表17 平場地区第3号盛土遺構出土土器観察表	381
表5 第3号盛土遺構上層出土土器グリッド別重量	137	表18 平場地区第4号盛土遺構出土土器観察表	390
表6 第3号盛土遺構表土出土土器グリッド別重量	137	表19 平場地区遺構外出土土器観察表	393
表7 層位別土器重量	221	表20 平場地区土製品観察表	394
表8 時期別出土点数	302	表21 平場地区石器・石製品観察表	395
表9 精製・粗製比	302	表22 クラック地区土器観察表	410
表10 粗製土器の地文	302	表23 クラック地区土製品観察表	445
表11 遺構一覧表	307	表24 クラック地区ミニチュア・小型土器観察表	446
表12 平場地区建物跡のビット一覧表	311	表25 クラック地区石器・石製品観察表	447

巻頭写真目次

巻頭写真1
巻頭写真2
巻頭写真3
巻頭写真4
巻頭写真5
巻頭写真6

写真図版目次

第2編 平場地区		写真25 掘立柱建物跡(1)	479
写真1 川原平(1)遺跡	455	写真26 掘立柱建物跡(2)	480
写真2 基本層序	456	写真27 掘立柱建物跡(3)	481
写真3 土杭・焼土遺構	457	写真28 掘立柱建物跡(4)	482
写真4 ビット航空写真(1)	458	写真29 掘立柱建物跡(5)	483
写真5 ビット航空写真(2)	459	写真30 掘立柱建物跡(6)	484
写真6 ビット航空写真(3)	460	写真31 掘立柱建物跡(7)	485
写真7 建物跡(1)	461	写真32 掘立柱建物跡(8)	486
写真8 建物跡(2)	462	写真33 掘立柱建物跡(9)	487
写真9 建物跡(3)	463	写真34 掘立柱建物跡(10)	488
写真10 建物跡(4)	464	写真35 掘立柱建物跡(11)	489
写真11 建物跡(5)	465	写真36 掘立柱建物跡(12)	490
写真12 建物跡(6)	466	写真37 掘立柱建物跡(13)	491
写真13 建物跡(7)	467	写真38 掘立柱建物跡(14)	492
写真14 建物跡(8)	468	写真39 掘立柱建物跡(15)	493
写真15 建物跡(9)	469	写真40 掘立柱建物跡(16)	494
写真16 建物跡(10)	470	その他ビット等	495
写真17 建物跡(11)	471	写真42 盛土遺構	496
写真18 建物跡(12)	472	写真43 第2号盛土遺構(1)	497
写真19 建物跡(13)	473	写真44 第2号盛土遺構(2)	498
写真20 建物跡(14)	474	写真45 第43号配行遺構(1)	499
写真21 建物跡(15)	475	写真46 第43号配行遺構(2)	500
写真22 建物跡(16)	476	写真47 第3号盛土遺構(1)	501
写真23 建物跡(17)	477	写真48 第3号盛土遺構(2)	502
写真24 建物跡(18)	478	写真49 第3号盛土遺構(3)	503

写真50	第3号盛土遺構(4)	504	写真111	Bベルト土層	562
写真51	第3号盛土遺構(5)	505	写真112	東西ベルト土層・クラック地区完掘	563
写真52	第3号盛土遺構(6)	506	写真113	クラック地点遺物出土状況(1)	564
写真53	第4号盛土遺構(1)	507	写真114	クラック地点遺物出土状況(2)	565
写真54	第4号盛土遺構(2)	508	写真115	クラック地点遺物出土状況(3)	566
写真55	第4号盛土遺構(3)	509	写真116	クラック地点遺物出土状況(4)	567
写真56	第4号盛土遺構(4)	510	写真117	クラック地点遺物出土状況(5)	568
写真57	遺構出土遺物(1)	511	写真118	クラック地点遺物出土状況(6)	569
写真58	遺構出土遺物(2)	512	写真119	クラック地点遺物出土状況(7)	570
写真59	遺構出土遺物(3)	513	写真120	クラック地点遺物出土状況(8)	571
写真60	遺構出土遺物(4)	514	写真121	クラック地点遺物出土状況(9)	572
写真61	遺構出土遺物(5)	515	写真122	クラック地点遺物出土状況(10)	573
写真62	遺構出土遺物(6)	516	写真123	第118号建物跡出土遺物	574
写真63	遺構出土遺物(7)	517	写真124	クラック地点出土土器(1)	575
写真64	遺構出土遺物(8)	518	写真125	クラック地点出土土器(2)	576
写真65	遺構出土遺物(9)	519	写真126	クラック地点出土土器(3)	577
写真66	遺構出土遺物(10)	520	写真127	クラック地点出土土器(4)	578
写真67	遺構出土遺物(11)	521	写真128	クラック地点出土土器(5)	579
写真68	遺構出土遺物(12)	522	写真129	クラック地点出土土器(6)	580
写真69	遺構出土遺物(13)	523	写真130	クラック地点出土土器(7)	581
写真70	遺構出土遺物(14)	524	写真131	クラック地点出土土器(8)	582
写真71	遺構出土遺物(15)	525	写真132	クラック地点出土土器(9)	583
写真72	遺構出土遺物(16)	526	写真133	クラック地点出土土器(10)	584
写真73	遺構出土遺物(17)	527	写真134	クラック地点出土土器(11)	585
写真74	土柱出土遺物	528	写真135	クラック地点出土土器(12)	586
写真75	第2号盛土遺構出土土器	528	写真136	クラック地点出土土器(13)	587
写真76	第43号配石遺構出土土器	529	写真137	クラック地点出土土器(14)	588
写真77	第2号盛土遺構出土土器(1)	529	写真138	クラック地点出土土器(15)	589
写真78	第2号盛土遺構出土土器(2)	530	写真139	クラック地点出土土器(16)	590
写真79	第2号盛土遺構出土土製品	531	写真140	クラック地点出土土器(17)	591
写真80	第3号盛土遺構出土土器(1)	532	写真141	クラック地点出土土器(18)	592
写真81	第3号盛土遺構出土土器(2)	533	写真142	クラック地点出土土器(19)	593
写真82	第3号盛土遺構出土土器(3)	534	写真143	クラック地点出土土器(20)	594
写真83	第3号盛土遺構出土土器(4)	535	写真144	クラック地点出土土器(21)	595
写真84	第3号盛土遺構出土土器(5)	536	写真145	クラック地点出土土器(22)	596
写真85	第3号盛土遺構出土土製品	537	写真146	クラック地点出土土器(23)	597
写真86	第3号盛土遺構出土土器拡大	537	写真147	クラック地点出土土器(24)	598
写真87	第3号盛土遺構出土土器(1)	538	写真148	クラック地点出土土器(25)	599
写真88	第3号盛土遺構出土土器(2)	539	写真149	クラック地点出土土器(26)	600
写真89	第3号盛土遺構出土土器(3)	540	写真150	クラック地点出土土器(27)	601
写真90	第3号盛土遺構出土土器(4)	541	写真151	クラック地点出土土器(28)	602
写真91	第3号盛土遺構出土土器(5)	542	写真152	クラック地点出土土器(29)	603
写真92	第3号盛土遺構出土土器(6)	543	写真153	クラック地点出土土器(30)	604
写真93	第3号盛土遺構出土土器(7)	544	写真154	クラック地点出土土器(31)	605
写真94	第3号盛土遺構出土土器(8)	545	写真155	クラック地点出土土製品	606
写真95	第4号盛土遺構出土土器(1)	546	写真156	クラック地点出土土器・石製品(1)	607
写真96	第4号盛土遺構出土土器(2)	547	写真157	クラック地点出土土器・石製品(2)	608
写真97	第4号盛土遺構出土土器(1)	548	写真158	クラック地点出土土器・石製品(3)	609
写真98	第4号盛土遺構出土土器(2)	549	写真159	クラック地点出土土器・石製品(4)	610
写真99	遺構外出土土器	550	写真160	クラック地点出土土器・石製品(5)	611
写真100	遺構外出土土製品	551	写真161	クラック地点出土土器・石製品(6)	612
写真101	遺構外出土土器(1)	552	写真162	クラック地点出土土器・石製品(7)	613
写真102	遺構外出土土器(2)	553	写真163	クラック地点出土土器・石製品(8)	614
写真103	遺構外出土土器(3)	554	写真164	クラック地点出土土器・石製品(9)	615
写真104	遺構外出土土器(4)	555	写真165	クラック地点出土土器・石製品(10)	616
写真105	遺構外出土土器(5)	556	写真166	クラック地点出土土器・石製品(11)	617
写真106	遺構外出土土器(6)	557	写真167	クラック地点出土土器・石製品(12)	618
写真107	平場地区円盤など集合	558	写真168	クラック地点出土土器・石製品(13)	619
第3編 クラック地区					
写真108	クラック地区全景	559	写真169	クラック地点出土土器・石製品(14)	620
写真109	第118号建物跡	560	写真170	クラック地点出土土器・石製品(15)	621
写真110	Aベルト土層	561	写真171	クラック地点出土土器・石製品(16)	622

第1編 調査の経過

第1章 調査に至る経緯

津軽ダム建設に先立つ発掘調査は平成15年度に着手している。川原平(1)遺跡については平成15年度、同23年度、同25・26年度に発掘調査を実施、同27年度も継続して行い同年8月28日で全ての調査を終了している。調査報告書は、これまで平成15年度調査区域の1冊(青森県埋蔵文化財調査報告書第409集)と平成23・25年度調査区域の2冊(青森県埋蔵文化財調査報告書 第564集・第565集)を刊行しており、調査に至る経緯も記載済みである。

今回の調査報告書は、これまでの調査のうち、平成25・26・27年度の発掘調査区域の一部を対象としたものである。なお、今回の調査報告書を含め、今年度は5冊(全8冊)の調査報告書の刊行を予定しており、その刊行をもって川原平(1)遺跡の発掘調査・整理報告書作成業務は完了する。

(笹森)

第2章 調査体制

第1節 発掘調査体制

平成25年度の発掘調査は、斜面を含め樹木の伐採作業が終了した調査区の北西部分と平成23年度調査区の北側部分の調査を行うこととした。縄文時代の遺構や遺物が多量に検出すると予想される地点でもあり、遺物包含層や検出遺構の層位的な調査に主眼をおいて発掘作業を進めることとした。平成26年度の発掘調査は、前年度の調査で検出された北斜面捨場(以下、北捨場)と平場区域の調査を行うこととした。北捨場は、その形成過程に、平場区域は、集落を構成する遺構の検出と層位的な調査に主眼をおいて発掘作業を進めることとした。平成27年度の発掘調査は、前年度の調査で検出された西斜面捨場(以下、西捨場)と平場区域の調査を進めることとした。西捨場は、その形成過程と前年度の調査でも下層部分から見ついていた有機質遺物の発見と取り上げ、平場区域は本遺跡の集落変遷や最終段階と考えられる遺構の検出・精査に主眼をおいて発掘作業を進めることとした。

各年度の発掘調査体制は、以下のとおりである。

[平成25年度]

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	柿崎 隆司	(平成27年3月定年退職、現文化財保護課主幹専門員)
	次長(総務GM)	高橋 雅人	(現中南教育事務所長)
	調査第三GM	白鳥 文雄	(平成26年3月定年退職)
	文化財保護主幹	齋藤 岳	(発掘調査担当者、現総括主幹)
	文化財保護主幹	木村 高	(発掘調査担当者)
	文化財保護主査	岡本 洋	(発掘調査担当者)
	文化財保護主事	高橋 哲	(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員 藤沼 邦彦 前国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学)

- ＊ 三浦 圭介 青森中央学院大学非常勤講師（考古学）
- ＊ 福田 友之 青森県考古学会会長（考古学）
- ＊ 上條 信彦 国立大学法人弘前大学人文学部准教授（考古学）
- ＊ 柴 正敏 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授（地質学）
- ＊ 佐々木 辰雄 日本地質学会会員・故人（地質学）
- ＊ 山口 義伸 日本第四紀学会会員（地質学）

〔平成26年度〕

調査主体

青森県埋蔵文化財調査センター

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 所長 | 三上 盛一 |
| 次長(総務GM) | 高橋 雅人(現中南教育事務所長) |
| 調査第三GM | 笹森 一朗 |
| 文化財保護主幹 | 齋藤 岳(発掘調査担当者、現総括主幹) |
| 文化財保護主幹 | 新山 隆男(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主幹 | 木村 高(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主幹 | 成田 滋彦(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主査 | 葛城 和穂(発掘調査担当者、現文化財保護課文化財保護主幹) |
| 文化財保護主査 | 浅田 智晴(発掘調査担当者、現文化財保護主幹) |
| 文化財保護主査 | 岡本 洋(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主事 | 荒谷 伸郎(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主事 | 高橋 哲(発掘調査担当者) |

専門の事項に関する指導・助言

- | | | |
|-----|-------|----------------------------|
| 調査員 | 藤沼 邦彦 | 前国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学） |
| ＊ | 三浦 圭介 | 青森中央学院大学非常勤講師（考古学） |
| ＊ | 福田 友之 | 青森県考古学会会長（考古学） |
| ＊ | 上條 信彦 | 国立大学法人弘前大学人文学部准教授（考古学） |
| ＊ | 柴 正敏 | 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授（地質学） |
| ＊ | 山口 義伸 | 日本第四紀学会会員（地質学） |

〔平成27年度〕

調査主体

青森県埋蔵文化財調査センター

- | | |
|----------|--------------------|
| 所長 | 三上 盛一(現青森県教育庁教育次長) |
| 次長(総務GM) | 川上 彰雄 |
| 調査第三GM | 笹森 一朗 |
| 総括主幹 | 齋藤 岳(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主幹 | 成田 滋彦(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主事 | 最上 法聖(発掘調査担当者) |
| 文化財保護主事 | 高橋 哲(発掘調査担当者) |

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼 邦彦	前国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）
〃	三浦 圭介	青森中央学院大学非常勤講師（考古学）
〃	福田 友之	青森県考古学会会長（現青森県史編さん考古部会長） （考古学）
〃	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文学部（現人文社会科学部）准教授 （考古学）
〃	柴 正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授（地質学）
〃	山口 義伸	日本第四紀学会会員（地質学）

第2節 整理・報告書作成体制

整理・報告書作成体制は、発掘調査に携わった職員と整理作業担当職員で構成する。

各年度の整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

[平成26年度]

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター
	文化財保護主幹 齋藤 岳（報告書作成担当者、現総括主幹）
	文化財保護主幹 木村 高（報告書作成担当者）
	文化財保護主幹 茅野 嘉雄
	文化財保護主幹 畠山 昇
	文化財保護主査 岡本 洋（報告書作成担当者）
	文化財保護主査 岩井 美香子（報告書作成担当者）
	文化財保護主事 高橋 哲（報告書作成担当者）

[平成27年度]

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター
	総括主幹 齋藤 岳（報告書作成担当者）
	文化財保護主幹 木村 高（報告書作成担当者）
	文化財保護主幹 畠山 昇
	文化財保護主幹 成田 滋彦（報告書作成担当者）
	文化財保護主査 岡本 洋（報告書作成担当者）
	文化財保護主査 岩井 美香子（報告書作成担当者）
	文化財保護主事 高橋 哲（報告書作成担当者）
	文化財保護主事 中澤 寛将（報告書作成担当者）
	文化財保護主事 久保 友香理（報告書作成担当者）

[平成28年度]

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター
	総括主幹 齋藤 岳（報告書作成担当者）
	文化財保護主幹 成田 滋彦（報告書作成担当者）

文化財保護主幹	木村 高 (報告書作成担当者)
文化財保護主査	岡本 洋 (報告書作成担当者)
文化財保護主査	岩井 美香子 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	最上 法聖 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	高橋 哲 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	中澤 寛将 (報告書作成担当者)

(笹森)

第3章 作業経過

第1節 発掘作業の経過

平成25年度の川原平(1)遺跡の発掘調査は、斜面を含め樹木の伐採作業が終了した平成23年度調査区域の北西部、及び北側の一部、平成26年度は前年度の調査で検出された北捨場と平場の遺構、平成27年度は盛土遺構を含む平場の遺構と、前年度の調査で検出された西捨場の調査を行った。各年度の発掘作業の経過は以下のとおりである。

[平成25年度]

- 5月7日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査を開始した。調査測量基準点については、委託設置した基準点に基づいて4m単位のグリッドを設定した。水準点についても委託設置した水準点に基づき調査区内に適宜設置した。
- 5月中旬 表土層の除去及び遺物包含層の掘り下げを行った。
- 5月下旬 遺物包含層の掘り下げを行うとともに、遺構確認・遺構精査を行った。
- 6月上旬 堅穴建物跡、土坑、土器埋設遺構や焼土遺構が検出され、それらの精査を行った。
- 6月中旬 引き続き各遺構の精査を行うとともに、掘り下げを行った。
- 6月下旬 遺物包含層の掘り下げ、遺構確認及び遺構精査を行った。
- 7月上旬 引き続き、遺物包含層の掘り下げ、遺構確認及び遺構精査を行った。
- 7月中旬 遺構精査に時間がかかるようになった。
- 7月下旬 出土遺物の取り上げにも時間がかかるようになった。
- 8月上旬 遺物取り上げと遺構精査を継続した。
- 8月中旬 引き続き、遺物の取り上げと遺構精査を行った。
- 8月下旬 遺物の取り上げと遺構精査を継続した。
- 9月上旬 遺構精査と掘り下げを継続した。また、盛土遺構の精査に着手した。
- 9月中旬 遺構精査と掘り下げ、及び遺物取り上げを継続した。
- 9月下旬 遺構確認と精査、及び掘り下げを継続した。
- 10月上旬 遺構確認と盛土遺構を含む遺構精査を継続した。
- 10月中旬 引き続き、遺構確認と遺構精査を行った。
- 11月上旬 遺構精査を継続した。
- 11月14日 未精査の遺構を養生し、今年度の発掘作業を終了した。出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

〔平成26年度〕

- 5月1日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査を開始した。調査測量基準点については、委託設置した基準点に基づいて4m単位のグリッドを設定した。水準点についても委託設置した水準点に基づき調査区内に適宜設置した。
- 5月2日 平場北東部分の表土層の除去及び遺物包含層の掘り下げを行った。また、北捨場の掘り下げに着手した。
- 5月中旬 引き続き平場遺物包含層の掘り下げを行うとともに、遺構確認・遺構精査を行った。また、北捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 5月下旬 平場遺物包含層の掘り下げを行うとともに、遺構確認・遺構精査を継続した。また、北斜面に続き検出された北東斜面の捨場(以下、北東捨場)の掘り下げ・遺物取り上げを行った。
- 6月上旬 西側斜面下の平場の掘り下げに着手した。上面の平場、北・北東捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 6月中旬 西側斜面下の平場が斜面を含む捨場であることを確認し、西捨場とした。上面平場、北・北東斜面捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 6月下旬 西・北・北東捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 7月上旬 引き続き各捨場の掘り下げを行った。どの捨場からも遺物が多量に出土した。
- 7月中旬 各捨場の掘り下げに時間がかかるようになった。
- 7月下旬 出土遺物の取り上げにも時間がかかるようになった。
- 8月上旬 調査可能となった平場部分の調査に着手した。各捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 8月中旬 平場で、盛土遺構を3基確認した。盛土遺構の精査、平場の掘り下げ・遺構確認、各捨場の掘り下げ・遺物取り上げを行った。
- 8月下旬 引き続き、盛土遺構と平場の遺構精査を行った。各斜面捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 9月上旬 村道下の遺物包含層の掘り下げに着手した。盛土遺構と平場の遺構精査、各斜面捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 9月中旬 村道下の遺物包含層が、前年度に調査した東捨場の延長であることを確認した。盛土遺構と平場の遺構精査、各斜面捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 9月下旬 各作業を継続した。
- ～
- 10月下旬 各作業を継続した。
- 11月上旬 北捨場の作業が終了した。盛土遺構と平場の遺構精査、東捨場、西・北東捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 11月14日 未精査の遺構を養生し、今年度の発掘作業を終了した。出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

〔平成27年度〕

- 4月20日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査を開始した。調査測量基準点については、委託設置した基準点に基づいて4m単位のグリッドを設定した。水準点についても委託設置した水準点に基づき調査区内に適宜設置した。
- 4月下旬 平場北東部分の遺構と盛土遺構の精査、及び西捨場の掘り下げを行った。
- 5月中旬 各作業を継続した。
- 5月下旬 平場の遺構確認・遺構精査を継続した。また、西捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 6月上旬 各作業を継続した。盛土遺構の精査を終了し、盛土遺構下の遺構確認を開始した。
- 6月中旬 盛土遺構下を含む平場の遺構確認・遺構精査、及び西捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。西捨場からは有機質遺物が散見し始めた。
- 6月下旬 平場の遺構確認・遺構精査を継続するとともに、北東クラック部分の精査を開始した。西捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 7月上旬 引き続き各作業を継続した。西捨場の下層黒色土中から有機質遺物が多量に出土し始めた。
- 7月中旬 各作業を継続した。
- 7月下旬 各作業を継続した。平場の遺構精査を終了した。
- 8月上旬 クラック部分の精査と西捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 8月中旬 クラック部分の精査を終了した。西捨場の掘り下げ・遺物取り上げを継続した。
- 8月28日 すべての作業を終了し、出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

第2節 整理・報告書作成作業の経過

報告書の刊行事業は平成26年度から実施することになったが、写真類の整理作業及び遺構図面の整理作業の一部は、調査終了後の平成25・26・27年の11月中に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成26年4月1日から平成29年3月31日までの期間で行った。平成25・26・27年度に調査を行った川原平(1)遺跡は縄文時代の集落跡の一部である。竪穴建物跡や土坑、配石遺構、盛土遺構、捨場を始めとして多数の遺構が検出され、遺物も遺物包含層、遺構堆積土、盛土遺構、捨場内から多量に出土した。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁は2,952頁で、遺構や遺物の数に応じて各々の記載にあてることにした。

各年度の整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

〔平成26年度〕

- 4月～ 平成25年度調査出土遺物の接合・復元作業を行った。
- 5～6月 出土遺物の接合・復元作業を継続した。
- 7～8月 石器の抽出作業を行った。また、出土遺物の接合・復元作業を継続した。
- 9月～ 石器の抽出作業及び、出土遺物の接合・復元作業を継続するとともに、遺物の図化作業を開始した。
- 10月～ 報告書掲載遺物の写真撮影を行った。遺物の図化作業を継続した。

- 11月～ 土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を行った。トレースが終了した遺構実測図から図版への割り付け作業を開始した。また、遺物の検討・分類・整理作業を進め、報告書掲載遺物の観察表の作成を開始した。
- 12月～ 報告書掲載遺物の選別を行い、土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を継続した。土器片の抽出を行い、断面実測・拓本等の図化作業を進めた。
- 1月～ 図化作業が終了した遺物から順次トレースを行った。また、デジタル作業による図版作成を開始した。
- 2～3月 遺物図化作業、遺物トレース作業、図版作成作業を継続した。
〔平成27年度〕
- 4～5月 平成26年度調査出土遺物の接合・復元・図化作業を行った。
- 6月～ 引き続き、出土遺物の接合・復元・図化作業を行うとともに、遺構や断面図の修正作業を行った。
- 7～8月 出土遺物の図化作業を行うとともに、トレース作業を開始した。また、図面のトレース作業を開始した。
- 9月～ 引き続き、出土遺物の図化・トレース作業や図面のトレース作業を行った。
- 10月～ 出土遺物の図化・トレース作業を行うとともに、図版作成作業を開始した。また、報告書掲載遺物観察表の作成を開始した。
- 11月～ 土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を行った。トレースが終了した遺構実測図から図版への割り付け作業を開始した。また、遺物の検討・分類・整理作業を進め、報告書掲載遺物の観察表の作成を開始した。
- 12月～ 報告書掲載遺物の選別を行い、土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を継続した。土器片の抽出を行い、断面実測・拓本等の図化作業を進めた。
- 1月～ 図化作業が終了した遺物から順次トレースを行った。また、デジタル作業による図版作成を開始した。
- 2～3月 遺物図化作業、遺物トレース作業、図版作成作業を継続した。
〔平成28年度〕
- 4～5月 平成27年度調査出土遺物の接合・復元・図化作業を行った。
- 6月～ 引き続き、出土遺物の接合・復元・図化作業を行うとともに、遺構や断面図の修正作業を行った。
- 7～8月 出土遺物の図化作業を行うとともに、トレース作業を開始した。また、図面のトレース作業を開始した。
- 9月～ 引き続き、出土遺物の図化・トレース作業や図面のトレース作業を行った。
- 10月～ 出土遺物の図化・トレース作業、図面のトレース作業を行うとともに、各種図版作成作業を開始した。また、報告書掲載遺物観察表の作成を開始した。
- 11月～ 報告書掲載遺物の写真撮影を行うとともに、各種図版作成作業を継続した。また、原稿執筆作業を開始した。
- 12月～ 原稿・版下が揃ったので、報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定した。

また、印刷業者との契約事務が完了した後、原稿及び版下を入稿した。

3月24日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。

3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。

(笹森)

第3節 各報告書の区分

川原平(1)遺跡は、今年度報告書ⅣからⅧの5集にまたがって報告される。その内容は以下の通りである。

川原平(1)遺跡Ⅳ(第576集) : 平場地区・クラック地区(本報告書)

川原平(1)遺跡Ⅴ(第577集) : 東捨場地区・北東捨場地区

川原平(1)遺跡Ⅵ(第578集) : 北捨場地区

川原平(1)遺跡Ⅶ(第579集) : 西捨場地区

川原平(1)遺跡Ⅷ(第580集) : 自然科学分析・補遺・総括

それぞれの地区の区分は図1に示した通りである。ただしクラック地区を中心に、北捨場・北東捨場・平場地区、平場地区と東捨場は、重複する部分もある。そのため、その内容に応じて、報告書掲載号に遺構・遺物を振り分けているので、図1の区分はあくまでおおまかな目安である。また、本報告書において、遺構の性質から、報告書Ⅱ(図1の赤線内)と、報告書Ⅲ(図1の青線内)で報告されている部分の一部を併せて扱っている。

なお周辺遺跡・歴史的環境などは、報告書Ⅱ(第564集)において、詳細な記述があるので、そちらを参照してもらいたい。

ここで簡単に本報告書以外の内容について紹介する。

既刊報告書として、報告書Ⅱ(第564集)では、遺跡の南側にある南捨場や各種遺構を扱っている。南捨場では後期後葉から晩期後葉までの遺物が出土しているが、特に後期後葉から晩期前葉までの遺物が充実している。また、石棺墓に類似した配石遺構が確認されており、秋田県矢石館遺跡の事例を含め東北地方の墓制を考える上で非常に貴重な遺構である。それ以外に晩期前半を中心とした堅穴住居跡などが検出されており、晩期前半の集落を考える上で重要な地区である。

報告書Ⅲ(第565集)では、遺跡の北西隅に位置する第1号盛土遺構を扱っている。晩期後半に形成された盛土遺構である。青森県内ではほぼ同時期に弘前市薬師遺跡などがあり、その比較検討が望まれる。また、盛土遺構の下から晩期前半の墓域が確認され、配石を伴った墓や土器埋設遺構などが確認されている。その中で日時計状に組まれた上面配石を持つものもあり、下部の土坑から緑色凝灰岩の玉が出土するなど、非常に貴重な例である。県内のみでなく、北海道・秋田県でも同種の配石遺構が確認されており、それら地域との比較検討が待たれる。また、この範囲では中期後半の堅穴住居や土坑などが確認されている。

次に今年度刊行の報告書について触れる。

報告書Ⅴでは、東捨場と北東捨場について掲載している。共に川原平(1)遺跡の調査範囲の東側に位置し、中規模な捨場が確認されている。東捨場は、晩期中葉を中心とした捨場で、他に配石遺構や土器埋設遺構が確認され、晩期中葉のまとまった資料が出土している地点である。北東捨場は、北捨

場に連続する部分であり、捨場内に配石遺構が確認され、捨場も後期後葉から晩期までの遺物を含んでいる。

報告書Ⅵでは、北捨場を扱っている。西捨場と並ぶ川原平(1)遺跡の大規模捨場の一つであり、晩期前葉から後葉までの遺物を包含している。包含層の中に、晩期前葉頃の配石遺構が確認され、一時期は晩期の活動面でもあったと思われる。

報告書Ⅶでは、西捨場を扱っている。川原平(1)遺跡の捨場では最大規模であり、後期後葉から晩期後葉までの遺物を包含している。特にこの捨場で注目される点は、内陸地の遺跡では希少な有機質遺物が出土した所である。植物・動物遺存体、木製品、骨角器などが出土しており、内陸部におけるこれら有機質遺物のあり方、生業形態などについて検討できる資料となった。特に動物遺存体ではクマ・カモシカなどの資料が確認され、また、海産のものとしてはニシン・アホウドリなどが見つかっており、周辺環境の利用、日本海側との関係が注目される。

報告書Ⅷでは、これまでの自然科学分析の成果を掲載した。また、上記報告書に掲載漏れした遺物などを補遺という形で扱った。そして、総括としてこれまでの調査成果全体をまとめるため、遺跡の集落変遷、墓域の変遷、長距離接合の例、出土土器をはじめ各種遺物について総括した。

(高橋)

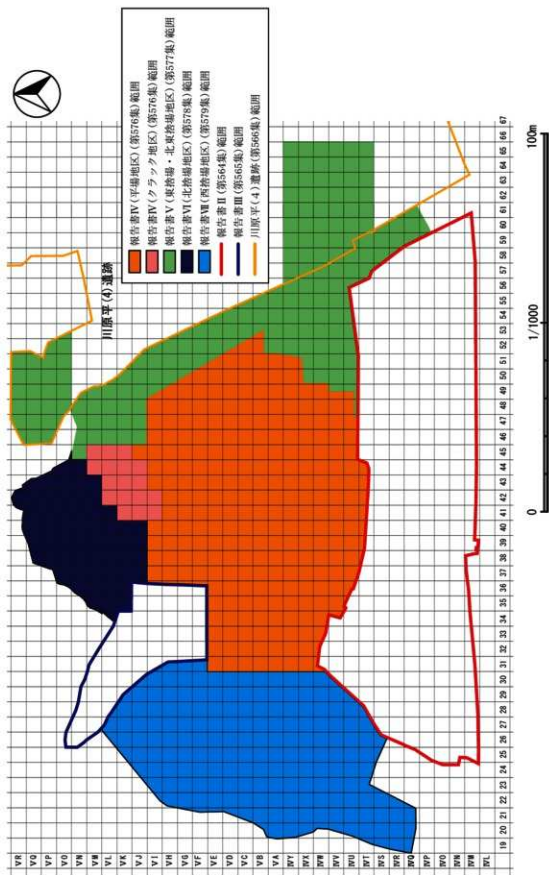


図1 川原平(1)遺跡平成28年度刊行報告書掲載範囲

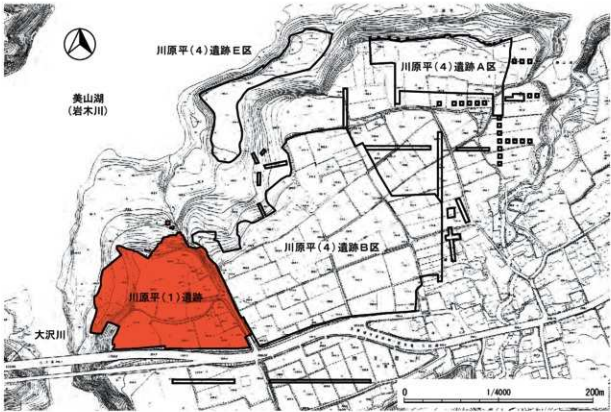


図2 川原平(1)遺跡の地形

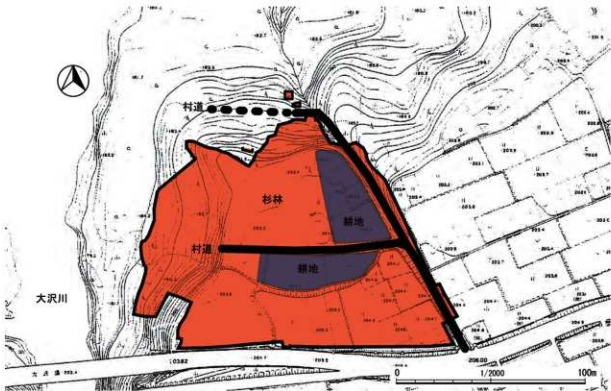


図3 川原平(1)遺跡 調査前の状況

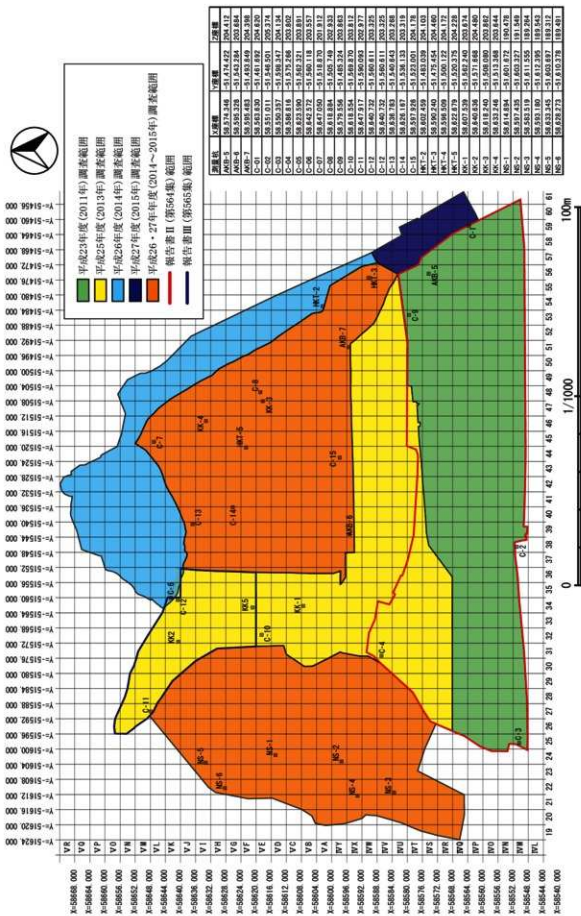


図4 年度別調査範囲・グリッド配置図・測量杭

第2編 平場地区

第1章 調査の方法

第1節 発掘作業の方法

本報告範囲は平場地区である(図、クラック地区については、第3編を参照)。その内、南部分は、報告書Ⅱ(第564集)、北西隅は報告書Ⅲ(第565集)で報告済みである。以下の内容は、本報告の報告書Ⅳのみでなく、報告書ⅤからⅦまで一部を除き(表土の調査方法など)共通である。

【測量基準点・水準点の設置】(図4)各地区の測量及びレベル原点の設置にあたっては、1グリッドは4×4mとし、原点から北方向(南北ライン)にローマ数字(I~V)とアルファベット(A~Y)を組み合わせた名称を、原点から東方向(東西ライン)へは算用数字(1、2、3…)を付した。南北ラインでは4m北進する毎に「IA」、「IB」…とアルファベットが進み、IY(IAから100m)に達すると、ローマ数字が繰り上がり「IIA」が始まるようにした。東西ラインは4m東進する毎に算用数字が1ずつ増えるようにした。

グリッドの名称は、南北ライン(ローマ数字+アルファベット)と東西ライン(算用数字)を組み合わせて、IA-99のように表し、各グリッドの名称は、南西隅のライン交点枕を用いた。グリッド設置の基準原点(IA-0)の座標はX=58200.000、Y=-51700.000である。

※平成15年度(2003年)調査時のグリッド(青埋報第409集)名は、これとは異なる方法で付されている(「川原平(1)遺跡Ⅱ」参照)。

【グリッドの設置】遺構・基本土層の精査や遺構外出土物の取り上げにあたっては、調査区あるいは遺跡全体を網羅するような、公共座標を基準とした4mグリッドを設置して記録した。グリッド設定の詳細にあたっては、平成23年度調査の設定にしたがった。

【表土の調査】調査区全体に切り株が残されていることと、3基の盛土遺構があるため、重機をいれることができないと判断し、人力で表土を除去した。第1号盛土遺構と第4号盛土遺構の間や第2号盛土遺構と第3号盛土遺構の間は、まずトレンチを入れ、人力掘削した後、遺物の出土がほとんどないので、その部分については重機で表土を除去した。

【遺物包含層・ピット(柱穴)・盛土遺構等の調査】盛土遺構は、上層から層位毎に人力で掘削した。遺存状態が良好な遺物や、特徴的な遺物が出土した場合は、トータルステーションにて点取りを行った。原則としてはグリッド単位で層位毎に取り上げた。遺構内の堆積土層には、上層・中層・下層などに区分し、細分に算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。

ピット(柱穴)は、覆土上層を掘り下げて柱痕を探し、柱痕を確認した段階で半載を行った。柱痕が確認できない場合は、ある程度掘り下げた段階で、半載した。遺物は覆土、掘方、柱痕に分けて取り上げた。ピットは主柱穴と思われるものについては数基、遺構堆積土断面図を作成した。他は遺構堆積土断面の写真撮影により記録した。

土層の色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用いた。

検出遺構には、種別毎のアルファベット略号と算用数字を組合せた番号を付した。

ほとんどの遺構平面図と、一部遺構堆積土断面図は、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や、配石遺構の配石平面図、

出土遺物の形状実測等は簡易遺り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成し、遺構の規模や性格に応じて変更した。遺構内の出土遺物は遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げたが、床面(底面)や炉などで密に出土した遺物については、トータルステーションや簡易遺り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

セクションベルトは、遺構の形態・大きさに応じて2分割または4分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。

【写真撮影】写真撮影は、原則として35mmモノクローム・35mmカラーリバーサルの各フィルムカメラ及びデジタルカメラ(キヤノン製EOS7D 5184×3456ピクセル 約1800万画素)を併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影は業者に委託した。

第2節 整理・報告書作成作業の方法

3ヶ年の調査と整理作業によって、川原平(1)遺跡Ⅳの報告範囲では、ピット2628基、配石遺構1基、焼土遺構1基、土坑7基、盛土遺構3基、捨場(クラック)1ヶ所が検出されている。遺物は3ヶ年の調査で遺跡全体で6481箱が出土した。

出土遺物の掲載方法並びに基準は以下の通りである。

【今回の報告範囲と各年度の調査範囲】(図1・4)

今回の報告範囲について、各年度の調査範囲との関係で具体的に示すと、報告書Ⅱ(第564集)と平成25年度(2013年)から27年度(2015年)調査区にまたがる。

【図面類の整理】遺構の平面図や堆積土層断面図等は、簡易遺り方で主に作成したため、遺構毎に図面修正を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

【写真類の整理】35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構や遺物包含層からの遺物の出土状態、遺構の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付し、ハードディスク・DVD等に保存した。

【遺物の洗浄・注記と接合・復元】遺物の洗浄を早期に終え、接合・復元作業を進めるようにした。遺物の注記は、調査年度・遺跡名、遺構名・グリッド名、層位、取り上げ番号等を略記したが、直接注記できない剥片石器等については、収納したチャック付きポリ袋に注記した。また、接合・復元にあたっては、出土地点・出土層等を点検しながら入念に行った。

【報告書掲載遺物の選別】遺物全体の分類を行った上で、所属時代(時期)・型式・器種等の分かる資料等を主として選別し、漆付着遺物・アスファルト付着遺物等の特殊な遺物ではできるだけ多くを抽出し、可能な限り掲載した。ピット出土の土器については、有文土器は、小片でも抽出した。

【遺物の観察・図化】充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。一部の遺物については、写真のみで報告した。なお、土器の文様構成がわかりやすいように、展開の拓本を数点の土器で作成した。この展開拓本は、調査員の藤沼邦彦氏よりご教授頂いた。

【遺物の写真撮影】業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・

文様表現等を伝えられるように留意した。

【トレース・版下作成】遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ペンによる手作業とアドビシステムズ㈱製「Adobe Illustrator CS4・6・CC」を用いたデジタルトレースを併用し、実測図版・写真図版等の版下は「Adobe Illustrator CS4・6・CC」と「Adobe InDesign CS4・6・CC」で主に作成した。

【遺構の検討・分類・整理】遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

【遺物の検討・分類・整理】遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品構成・個体数等について検討した。

【調査成果の検討】遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

【自然科学分析】検出火山灰の墳起源を特定するため、火山灰分析、炭化材や土器付着炭化物の年代を特定するため放射性炭素年代測定を、外部機関等に委託した。その成果は『川原平(1)遺跡Ⅶ』(第580集)に掲載されている。(笹森)

第3節 基本層序

基本層序の基本的な名称・基準などは報告書Ⅱに記載してある。土層の色調表記には、『新版標準土色帖2006年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用いた。

ここでは、ロングセクションを作成した部分(図44、144)を用いて基本層序の特徴を記載するととどめる。

第Ⅰ層 10YR 3 / 3 暗褐色土、他

表土の類いである。縄文時代晩期の遺物が含まれているが、近現代の遺物を含んでいる。

第Ⅱ層 10YR 4 / 4 褐色土、他

表土の類いである。縄文時代晩期の遺物が含まれているが、近現代の遺物を含んでいる。本報告範囲は、図44に見られ、水田層と思われる鉄分を含んだ褐色の堆積層でもある。

第Ⅲ層 10YR 4 / 4 褐色土、他

シルト質で、縄文時代晩期に形成された土層と考えられる。遺構外出土遺物は、この層名で取り上げているが、この層名を生かした層名も付けられている。

例：東Ⅲ-1層(北捨場)、KⅢ層(東捨場)など

第Ⅳ層 10YR 5 / 4 にぶい黄褐色土、他

いわゆるローム層である。川原平(1)遺跡の地山は基本的には礫層であるが、地点によっては、ローム層によって地山が形成されている。シルト質の地山にも礫が多く含まれている。東捨場では、地山の礫層を第Ⅴ層として区分した。(高橋)

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 遺構

1 概要

ここでは、段丘平坦面(平場地区、図7)で検出できた遺構(表11)について報告する。

報告範囲の調査前の状況は、旧村道が調査区のはほぼ中央を東西に走り、その南側と北東側に近代以降の水田などが広がる(図3)。旧村道よりも北側は、水田を除けば杉林が広がり、調査開始前は切り株が残された状態であった。

表土並びに堆積層は、地点によって差があるが、概ね10～30cm程度の厚さである。調査区にある近代以降の水田一帯は堆積層が薄い(図44、写真2-1～3)、遺構の上面は削平されていると考えられる。杉林が広がっている一帯の調査区は、後世に削平を受けたような痕跡は認められないが、こちらも地山まで10～30cm程度の厚さである(図114、写真2-4、5)。そのため、本報告範囲の平場地区は、全体に地表面から地山までは薄い。

川原平(1)遺跡で検出された遺構は、建物跡、ピット、土坑、焼土遺構、配石遺構、土器埋設遺構と盛土遺構である(図5、6)。図5は川原平(1)遺跡全体の遺構配置図であり、遺構名などを除いた白地図である。図6はこれに代表的な遺構、盛土遺構の分布図である。全体に平場地区では、中心にピット群が環状に集中している。ピット群の内側に、第2号・第3号盛土遺構が位置し、ピット周辺に各種の遺構が分布する。遺構確認面は、大半は第IV層である。

ピットは本報告範囲のはほぼ全域に広がり、その中に他の遺構も点在する(図9～26)。遺構の性格上、報告書Ⅱ・Ⅲや、東捨場、北捨場、北東捨場地区の報告範囲の一部も含めて、これら地域で検出されたピットもここであわせて報告する(図8、赤枠の範囲)。

遺跡の中央、旧村道よりも北側には、4箇所の地形の高まりが確認でき、その内1基は第1号盛土遺構として報告した(報告書Ⅲ)。残り3基も、同種の遺構と判断し、それぞれ第2号から第4号の盛土遺構名を与え、調査を実施した。

上記以外の遺構としては、土坑、焼土遺構、配石遺構が確認されている。配石遺構(SQ43)については、第2号盛土遺構と重複しているため、盛土遺構の中で合わせて記述する。グリッドVB-33～35に位置する4基の土坑は、平面形態が楕円形・隅丸長方形であり、土坑墓の可能性もある。焼土遺構は、第3号盛土遺構の下部から検出できた。本報告範囲には、報告書Ⅱの南捨場一帯に見られたような、焼土遺構の集中した分布は確認できなかった。なお、土器埋設遺構は、本報告範囲には確認できなかった。

(高橋)

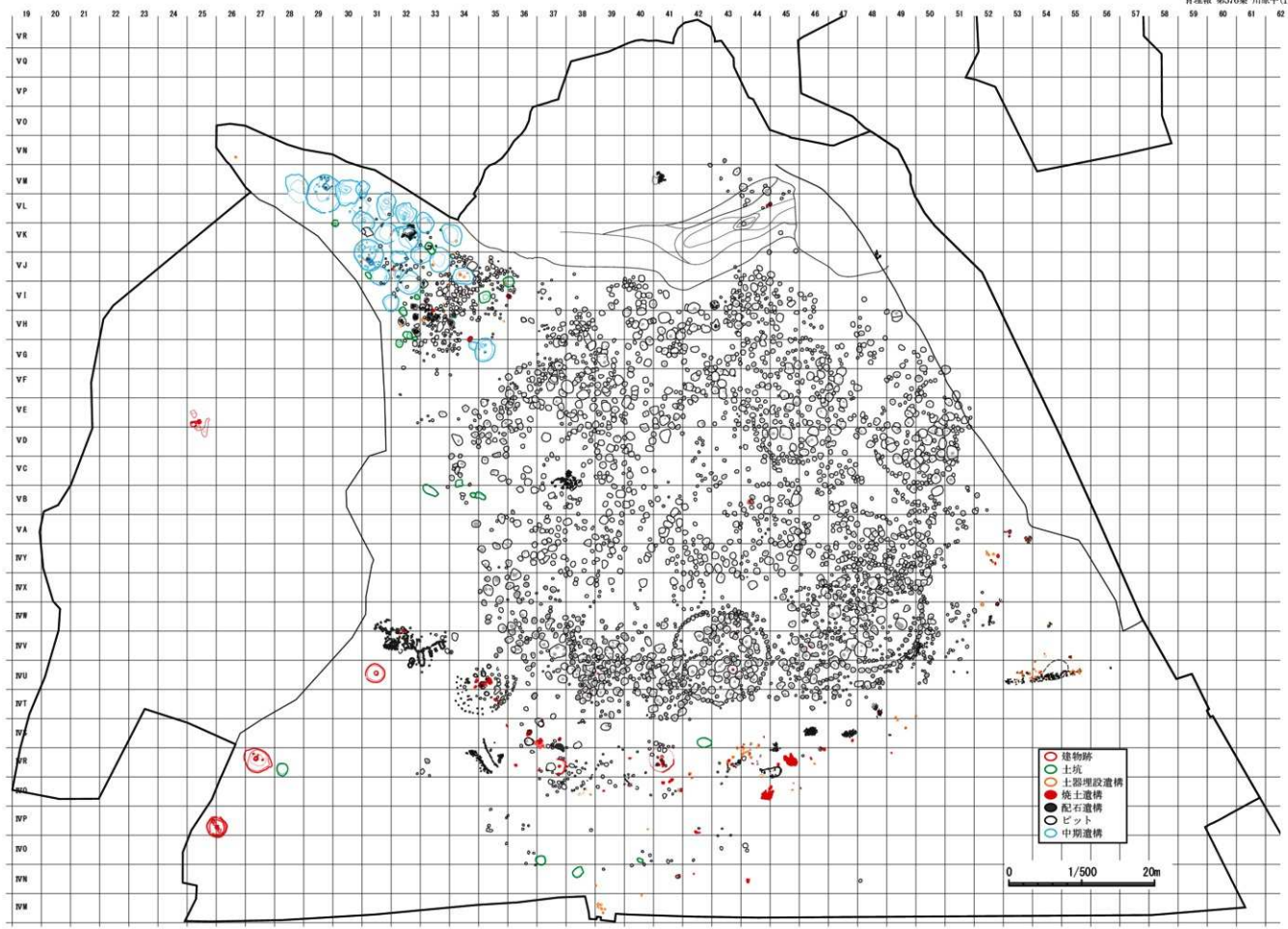


図5 川原平(1)遺跡遺構配置図(1)

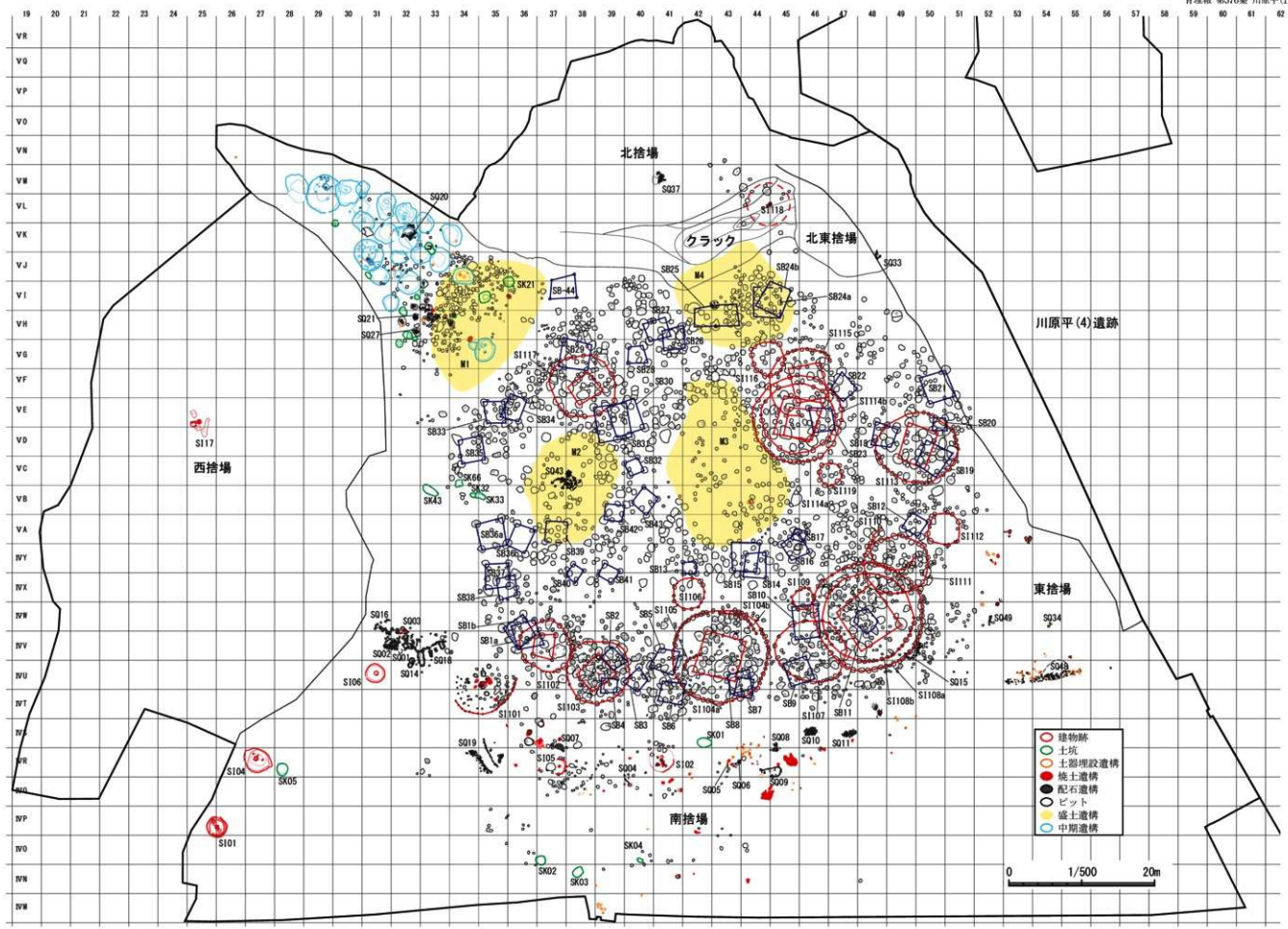


図6 川原平(1)遺跡遺構配置図(2)

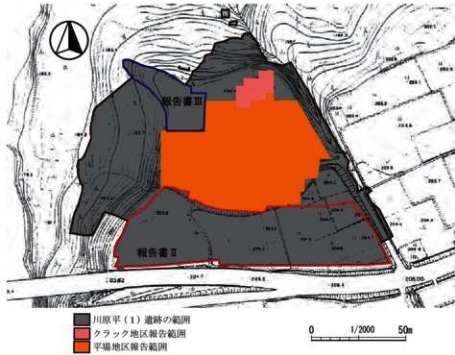


図7 川原平(1)遺跡Ⅳの報告範囲

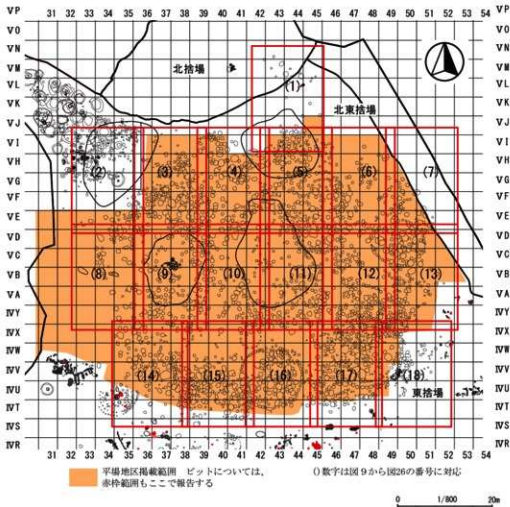


図8 川原平(1)遺跡 平場地区掘載区分図

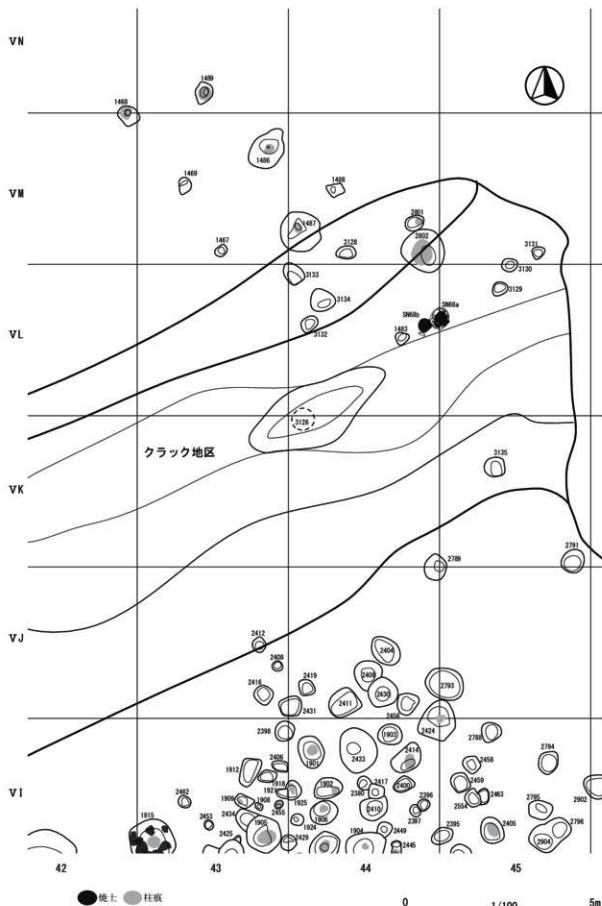


図9 平場地区遺構配置図(1)

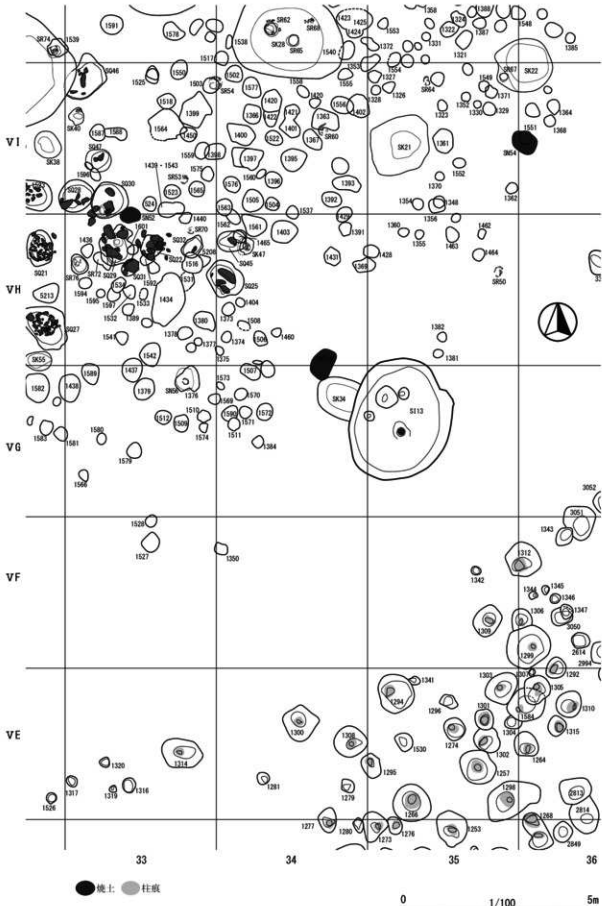


図10 平場地区遺構配置図(2)

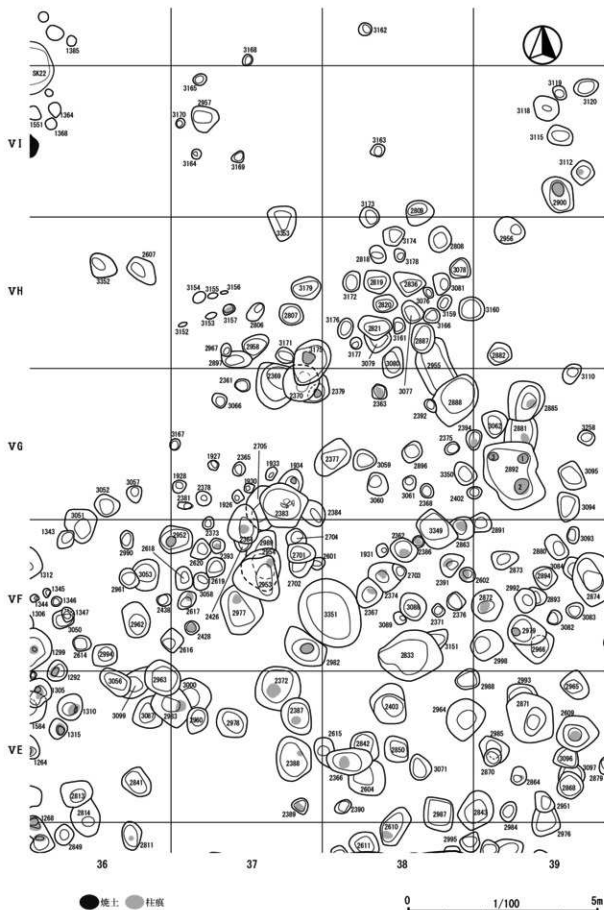


図11 平場地区遺構配置図(3)

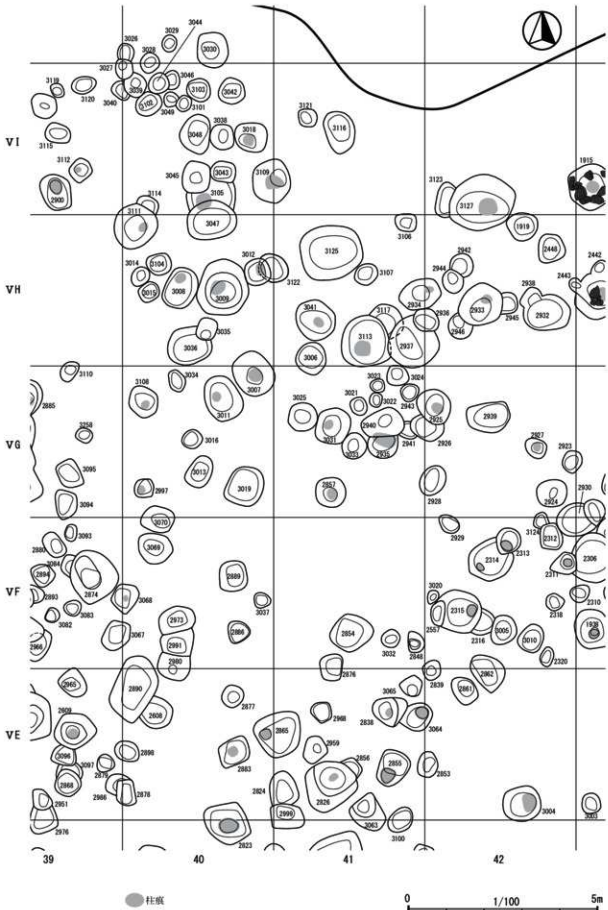


図12 平地地区遺構配置図(4)

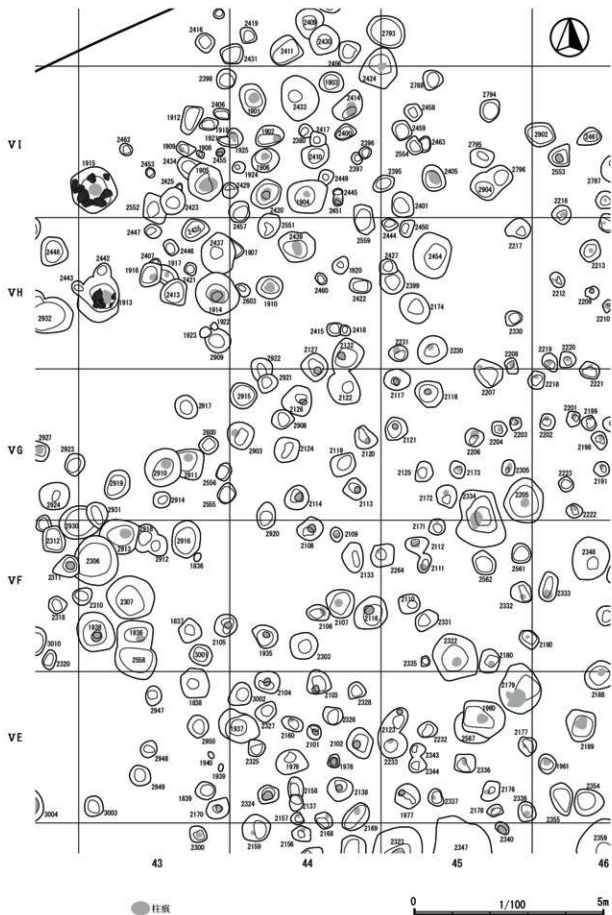


図13 平場地区遺構配置図(5)

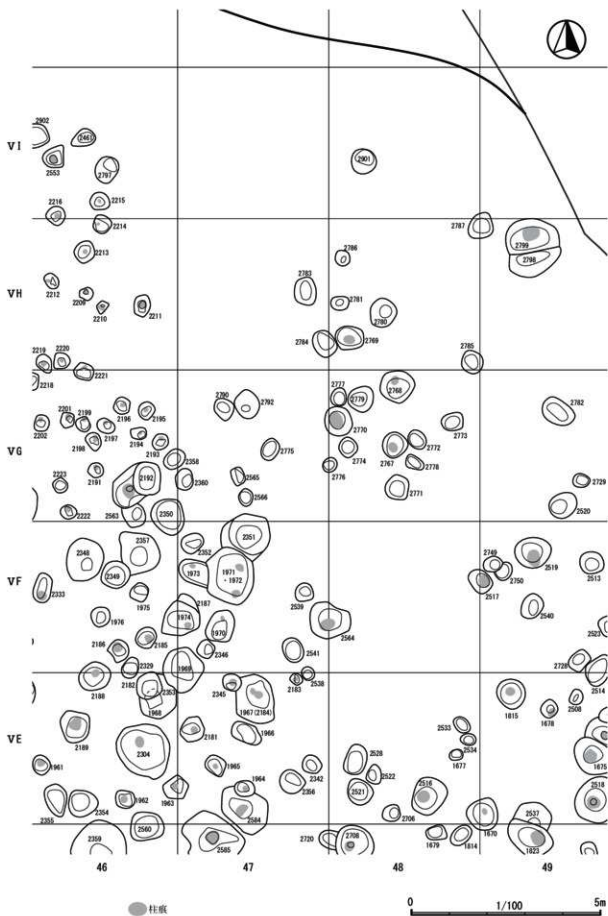


図14 平場地区遺構配置図(6)

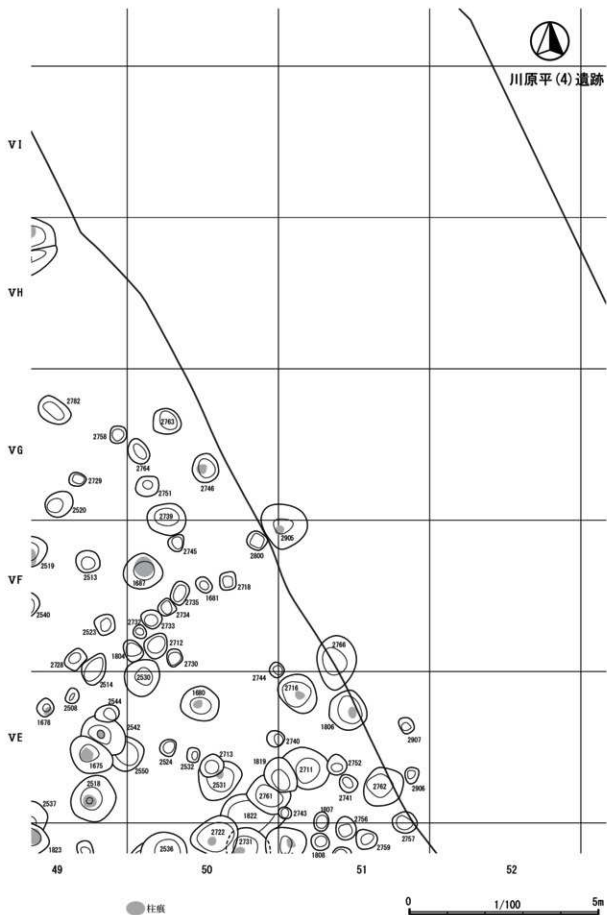


図15 平場地区遺構配置図(7)

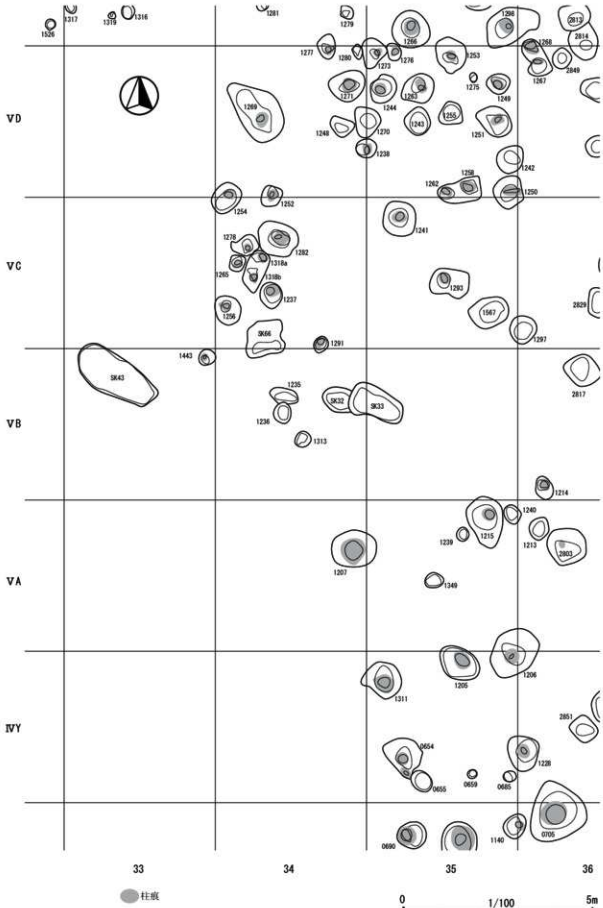


図16 平場地区遺構配置図(8)

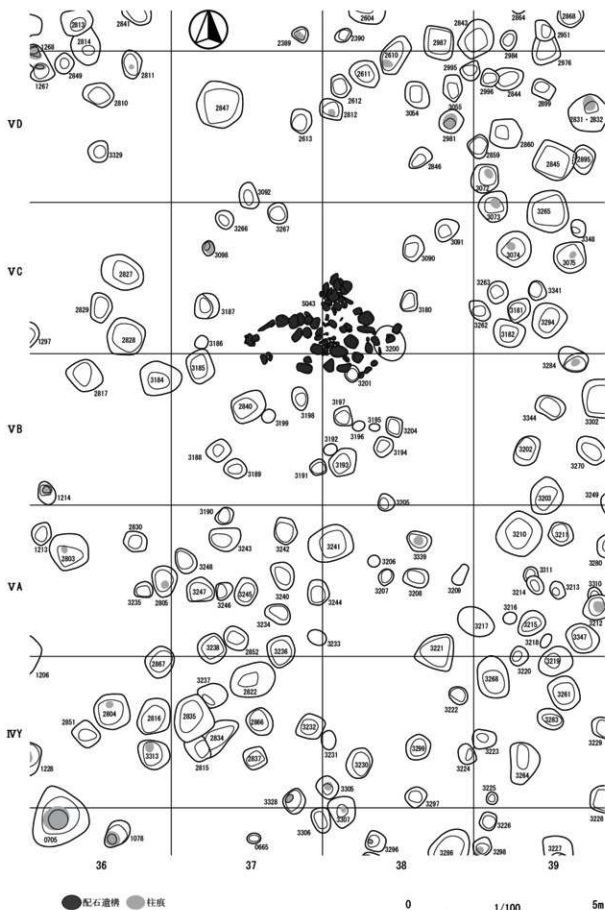


図17 平場地区遺構配置図(9)

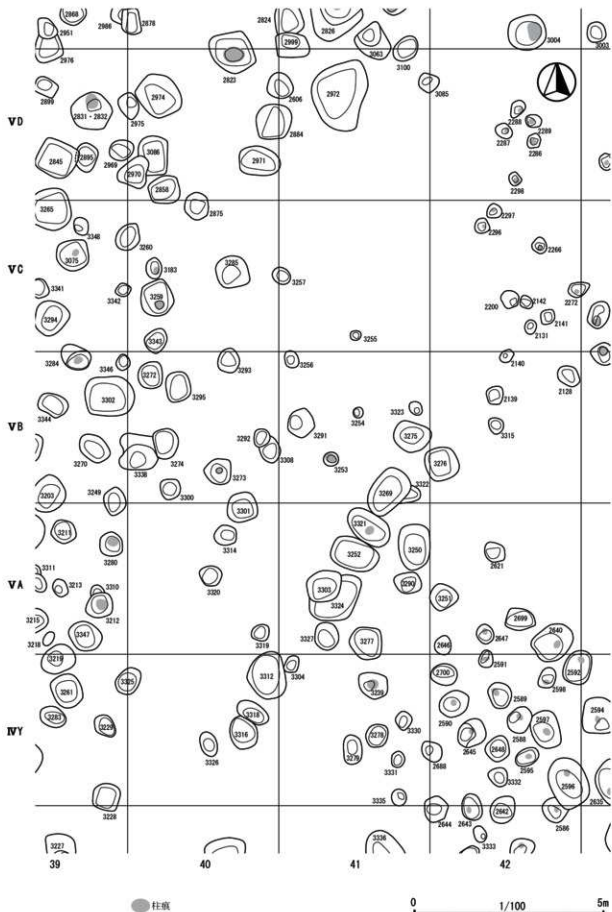


図18 平場地区遺構配置図(10)

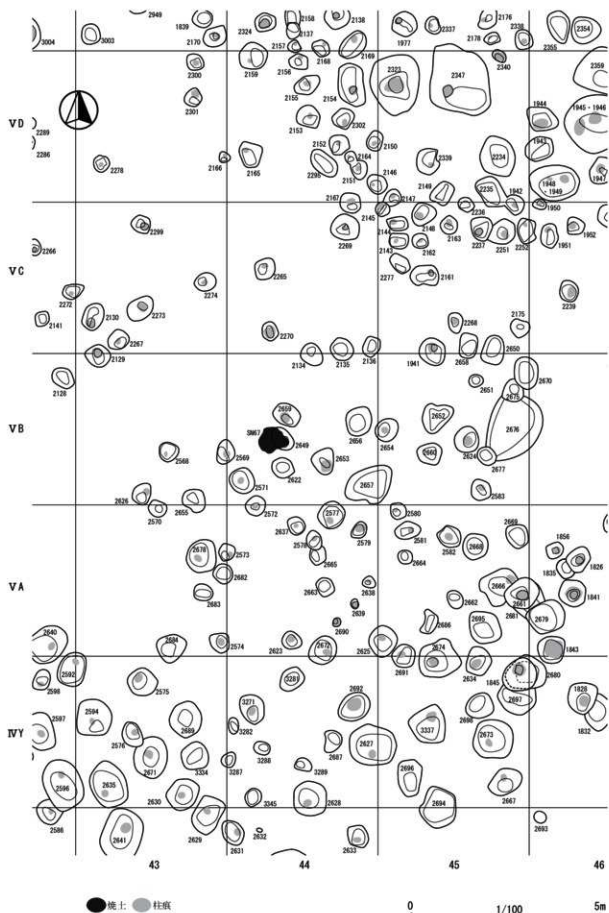


図19 平場地区遺構配置図(11)

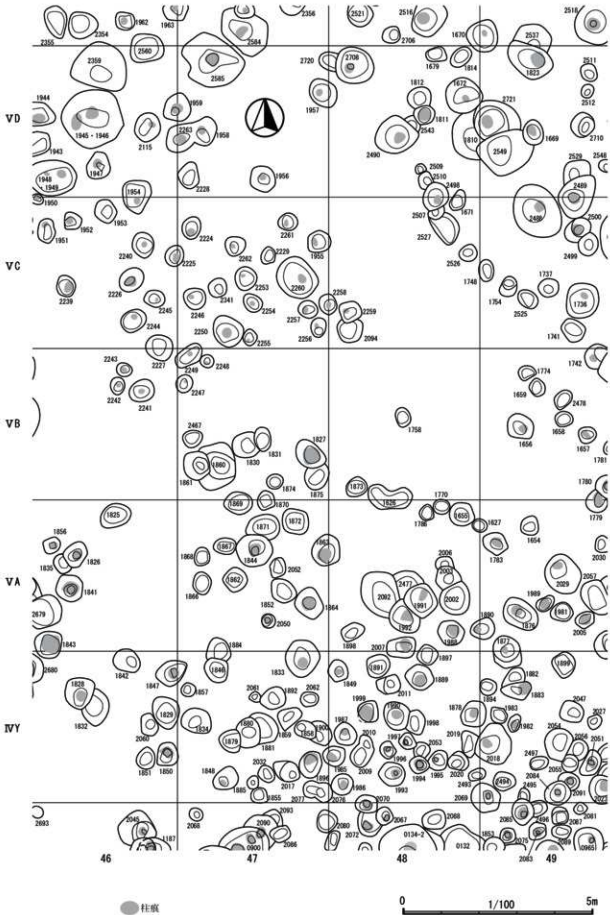


図20 平場地区遺構配置図(12)

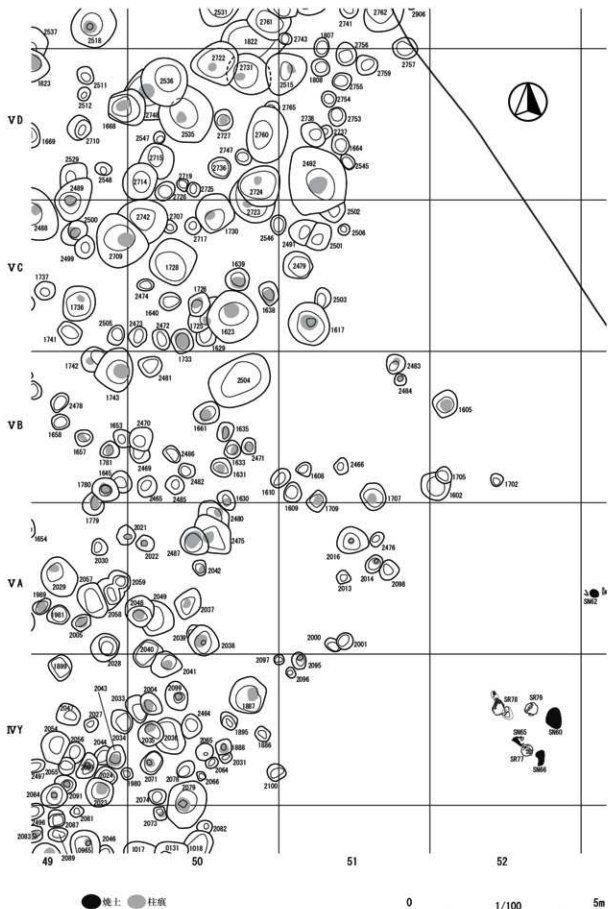


図21 平場地区遺構配置図(13)

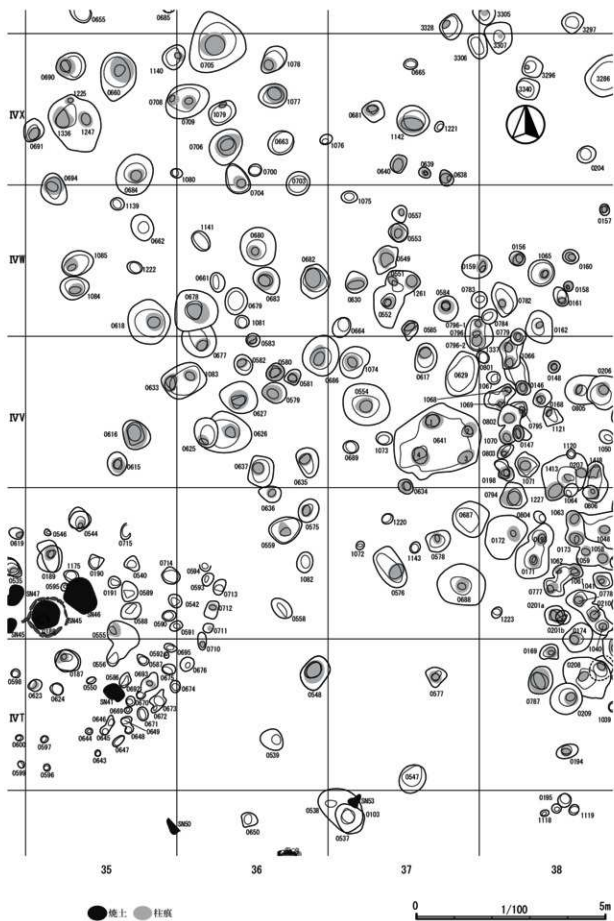


図22 平場地区遺構配置図(14)

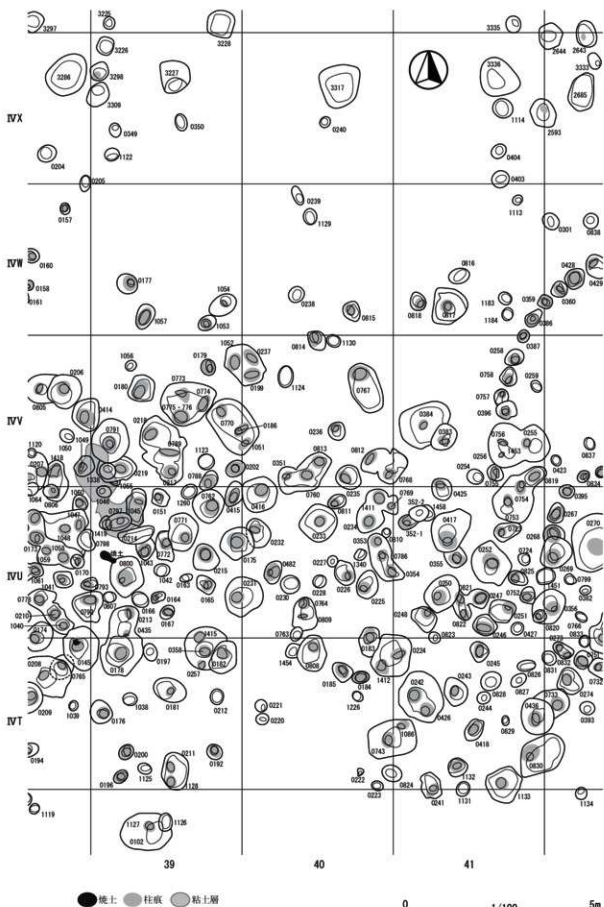


図23 平場地区遺構配置図(15)

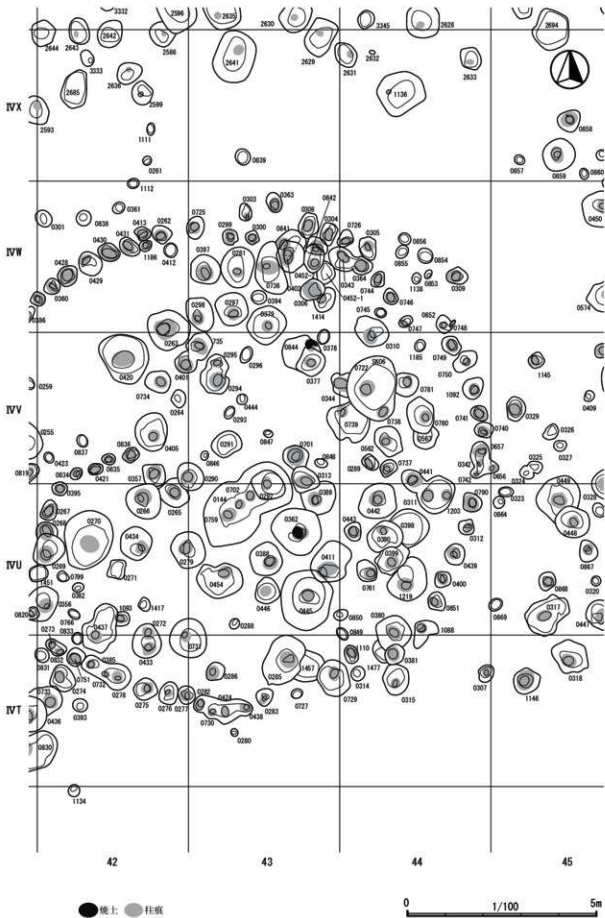


図24 平場地区遺構配置図(16)

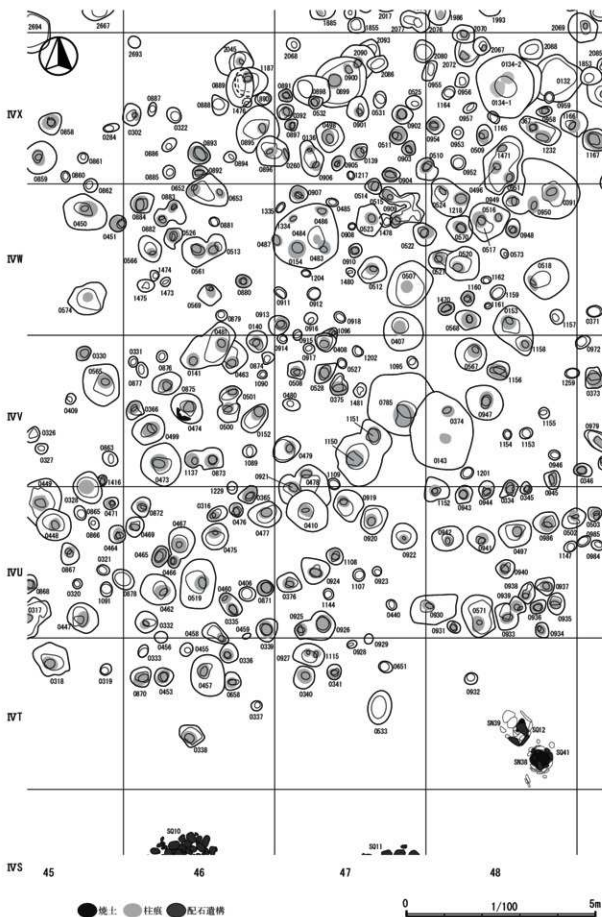


図25 平場地区遺構配置図(17)

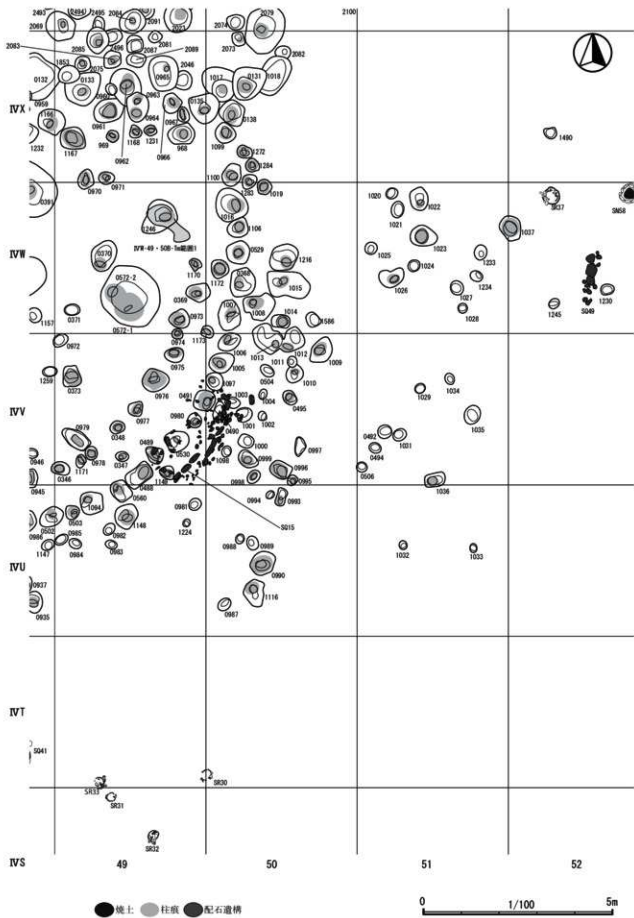


図26 平場地区遺構配置図(18)

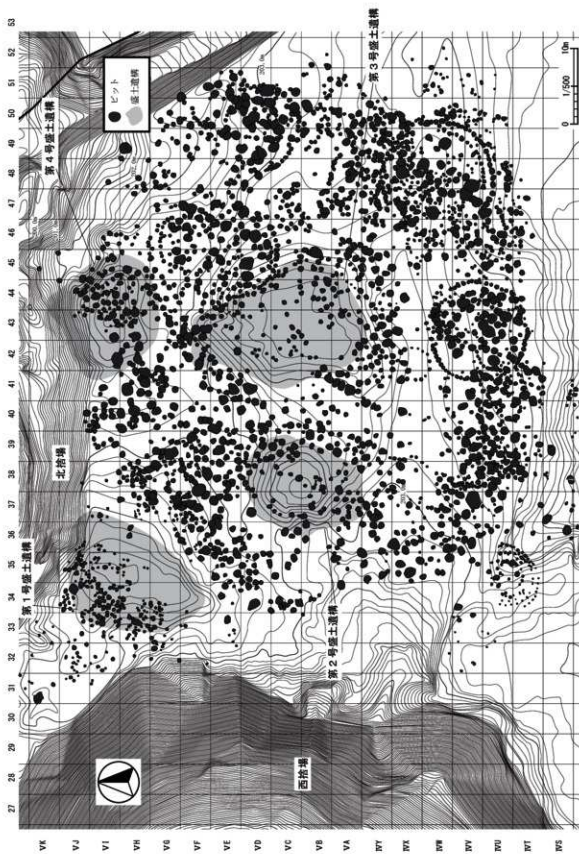


図27 平場地区の旧地形とピットの分布

2 ビット(柱穴、略称Pit)

平場地区では、報告書Ⅱ・Ⅲを含め総数3079基のビットを調査している。その内、本報告書に関わる地区並びに、北捨場、報告書Ⅱ・Ⅲの一部を含めた、2628基のビット(表12,13,14)をここで扱う。ビットは、平面規模が小さく、堆積土が単層であることを基準として、小穴をビットとして扱うことを基本としたが、土坑との区分は必ずしも明確ではない。中には、径1mを超え、柱痕が認められるものも多数ある。確認面は、ほとんどが第Ⅳ層である。

平場地区で確認できたビットは(図9～26、写4～6)、無秩序に分布しているわけではない。分布密度に差がみられ、ⅣTグリッド列以南の報告書Ⅱの大部分の範囲はビットの分布密度が低い。また、VE～VG-36グリッドあたりを境に、第1号盛土遺構下のビット群とそれ以後のビット群の間に、ビットのほとんどない空白地帯(図10)がある。

第1号盛土遺構下のビット群を除くと、ビットの検出範囲は、概ね台地の中央に環状に分布する。また、第1号盛土遺構下のビットの大半が、晩期前半期の遺物を出土し、シルト質の地山を掘り込んでいるのに対し、台地の中央は、晩期後半期の遺物が主体的であり、礫層の地山を掘り込んでいるといった差異が見受けられる。また、第2号～第4号盛土遺構下の地山は、高まっており(写44-6～8、写52-5～8)、特に第3号盛土遺構下の地山が高まっている地点では、ビットの分布密度が低い(図27)。全体に地山が高まる周辺の低い地点にビットが広がっている。

ビットの中には、連続して円形に並ぶもの、同規格のビットが2～3mの間隔で方形に並ぶものなどが確認できる。前者は建物跡、後者は掘立柱建物跡と分類している。それぞれの組み合わせは、柱穴の位置関係、規模、切り合い、埋土の特徴、建物とした場合の連続性を考慮して推定した。これ以外に径1mを超える主柱穴規模も含め、組み合わせが不明なものも多数ある。

ビットの調査方法は、柱痕を探するため、覆土上面を適宜掘り下げて、柱痕を探した。柱痕が見つかった場合、状況に応じて、柱痕を先に丸掘りし、その後掘方覆土を半載する方法、掘方、柱痕を合わせて半載する方法などを行った。柱痕が検出できない場合は、ある程度掘り下げた段階で半載をし、掘り進めた。

覆土は、黒褐色・暗褐色を基調としている。特に、主柱穴規模は、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。

ビットの時期認定は、出土土器から判断した。遺物の出土状況は、堆積土中から復元できるような土器はほとんどなく、破片での出土が多い。よって土器については、時期の判断できるものは、小破片でも資料化した(表15)。

遺物の取り上げは、柱痕、掘方に分け、検出面・確認面などそれ以外は覆土として扱った。覆土は、柱痕検出過程でビット上面調査中に出土した遺物や、ビットの規模が小さく、掘方・柱痕の分離ができない場合などが含まれている。

時期認定は、主に掘方と柱痕出土の土器を用いた。掘方出土土器はビット構築時、柱痕はビット廃絶時を示すものとした。覆土は掘方・柱痕の上面を覆うので、廃絶後に混入したものと判断した。柱痕と覆土出土の土器の時期が異なる場合は、より廃絶時に近いと推定される柱痕出土の土器の時期を採用した。

建物跡と掘立柱建物跡の記載の中で【出土遺物】の所に各ビット出土の土器の時期を、掘方・柱痕・

覆土ごとに記載しているが、複数の時期の土器が出土している場合は、一番新しい土器の時期を記載してある。表の中の○は土器(時期不明)が出土したことを示す。

本報告範囲では、ピットの配置から、建物跡は21棟、掘立柱建物跡は47棟確認した(建物跡の1棟は第3編のクラック地区で報告)。ピットの大半は柱痕を持つことから、柱穴と推定されるので、文章中ではピットと柱穴を併用した。また、図・表では数字のみで記載している場合もある。(高橋)

(1) 建物跡(略称SI、表12)

弧を描くように連続して分布するピットと、その内側に大型ピットの組み合わせがある場合、もしくは、弧を描くように連続して分布するピットのみが確認できた場合も建物跡と分類した。弧を描くのは壁柱穴、大型ピットは主柱穴と推定される(建物跡の計測値については凡例を参照)。遺構の概要で述べた通り、これらの遺構は、上面が削平された可能性が高いため、掘方や、炉跡などは確認できなかったと考えられる。大半の建物跡は、連続する壁柱穴が分布していることと、現場における空中撮影によって、おおよその規模は把握されていた。

報告書Ⅱにおいて、掘方がなく、ピットと炉跡から推定した建物跡にはSI101の遺構名を与えているので、今回の報告では、SI102から遺構名を振っていく。

第102号建物跡(略称SI102、図29、写真7)

【関連するピット番号】

	198	551	575	578	582	583	584	617	627	630
SI102	634	635	636	637	686	687	790	796-1	796-2	801
	802	803	1067	1068	1069	1070	1072	1143	1261	

【位置・確認・重複】IVU~IVW-36~38グリッドに位置する。一帯には、多数のピットが確認でき(図28)、その中で円形に並んだピットと、主柱穴と思われるピットが確認でき、建物跡と認定した。Pit686を第1b号掘立柱建物跡と共有する。

【規模・形状】Pit198とPit582から直径7.46m程の円形を呈する(図29)。主柱穴は4本柱構成で、主柱穴の各柱列間は、東辺が3.47mで他の3辺は2m台の台形状の平面形態である。壁柱穴群は、北西側に隙間が見られる。

【柱穴・施設】ピットは全部で29基確認でき、その内、配置などからPit617、634、635、686が主柱穴と思われる。

ピットは、主柱穴の4本の内、掘立柱建物跡と共有するPit686を除き、ほぼ同程度の規模である。Pit686のみ、深さ、開口部径において、他の3基の規格を上回る。この規格は第1b号掘立柱建物跡と共通するので、Pit686は本来第1b号掘立柱建物跡に帰属する可能性が高い。

壁柱穴は開口部の径22~60cm、深さは30cm前後が一番多い。ピット底面標高は、主柱穴については、Pit686が202.0mであり、他は202m後半台である。壁柱穴は、202.2~203.1mの範囲に収まり、平均が202.7mである。

壁柱穴の隙間が北西側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図30、写真57) ピットから晩期の土器片などが出土している。掘方からは、晩期4~5期の土器片が出土している。柱痕からは、時期の分かる土器が出土していない。覆土から晩期後半

の土器が多く出土している。石器は石鏃、石核などが出土している。

SI102	ピット	551	578	617	627	636	686	687	796	801	796-1
	掘方					晩期4~5	晩期4				
	柱痕					○	○	○			○
	覆土	晩期5	晩期	晩期4~5	晩期3か		晩期中葉 ~後葉	晩期5	晩期5	晩期5	

【小結】出土土器片などから、晩期4期に構築され、晩期5期には廃絶されたものと思われる。

(高橋)

第103号建物跡(略称SI103、図32、写真8・9)

【関連するピット番号】

SI103	145	147	171	176	180	181	182	186	198	206
	209	215	416	482	687	770	773	774	787	791
	803	805	1038	1039	1051	1121	1223			

【位置・確認・重複】グリッドⅣT~ⅣV-38~40グリッドに位置する。一帯には多数のピットが確認でき(図31)、その中で円形に並んだピットと、主柱穴と思われるピットが確認でき、建物跡と認定した。第2号・第3号・第4号掘立柱建物跡が重複している。

【規模・形状】Pit482とPit687から直径9.25mの円形を呈する(図32)。主柱穴は4本柱構成で、北東・南西に向いている辺は3m台であり、北西・南東辺は4m台の長方形平面形態である。壁柱穴は西側に隙間がある。

【壁・床面】Pit791の南側に黄褐色粘土の堆積層が確認できた(図32のセクション図、写真8-1~3)。貼床の可能性もあるが、調査前、この一帯は近代の水田が広がっていたので、その床土の可能性もある。

【柱穴・施設】ピットは全部で27基確認でき、その内、配置などからPit145、171、215、791が主柱穴と考えられる。開口部が1mを超えるのが2基、1m以下が2基あり、Pit215のみ掘り込みが浅い。

壁柱穴は、開口部の径28~116cmとばらつきがある。深さは50cm前後が多く、それ以上は深さ90cmあり、これらは開口部も90cm以上あるので、別の建物跡などの主柱穴の可能性もある。ピットの深さは、主柱穴が、Pit215を除き3本が1m前後で揃う。壁柱穴は、202.2~203.1mの範囲に取まり、平均が202.7mである。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写8-7、9など)、柱を固定していたものと思われる。Pit145の覆土上面において焼土が確認できた(写8-6)。

壁柱穴の隙間が西側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【炉】建物跡のほぼ中央に焼土らしき痕跡(写8-4)が認められるが、不明瞭である。かりに炉跡の場合、地床炉と推定される。

【出土遺物】(図33、写真57) ピットから土器片が出土している。掘方から晩期4期、柱痕から晩期4~5期の土器が出土している。覆土から各時期の晩期の土器が出土している。Pit145から粘土塊(写57-19)、石器は石鏃、石匙、礫石器が出土している。Pit145から赤色顔料の付着した石皿(写57-16)が確認されている。

SI103	ピット	145	171	176	181	182	206	209	215	416	687
	掘方		晩期4	○	○			○		○	
	柱痕	○	○	○	○	○		○		○	○
	覆土						晩期2-3		晩期4	晩期5	晩期5
SI103	ピット	770	773	787	791	805					
	掘方				○						
	柱痕	晩期4-5		○	○	○					
	覆土	晩期4-5	晩期2		晩期4-5						

【小結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。

(高橋)

第104a号建物跡(略称SI104a、図35、写真10-12)

【関連するピット番号】

SI104a	256	258	262	263	270	273	275	276	277	278	
	282	283	304	305	308	312	314	342	359	360	
	381	385	386	387	396	400	413	424	428	429	
	430	431	438	439	445	657	722	723	725	736	
	727	729	730	732	738	740	741	742	748	749	
	750	751	752	755	756	757	758	790	830	825	
	832	851	852	1088	1092	1138	1186				

【位置・確認・重複】IVT-IVW-41～44グリッドに位置する(図34)。一帯には多数のピットが確認できる。その中で円形に並んだピットと、支柱穴と思われるピットが確認でき、建物跡と認定した(写真14-1、2)。Pit722の上面に、第6号土坑(写真10-7)が位置する。

【規模・形状】Pit748とPit825から直径13.2m程の円形を呈する(図35)。支柱穴は4本柱構成で、西辺が6m台である他は、5m台であるので、平面形は台形状を呈する。壁柱穴群は、北側と北東側に隙間が見られる。

【柱穴・施設】ピットは全部で67基確認でき、その内、配置からPit263、270、445、722(738)が支柱穴と思われる(図37)。Pit263の脇に同規模のPit420が位置する。開口部はいずれも1mを超え、深さも90cm以上ある。

壁柱穴は、開口部の径20～98cmとばらつきがある。深さは20～50cm前後が多い。ピット底面標高は、支柱穴は201.8～202.0mの範囲に収まる。壁柱穴は、202.7～203.2mの範囲に収まり、平均は202.8mである。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写真10-1～6、9など)、柱を固定していたものと思われる。

壁柱穴の隙間が北側から北東側にかけてあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図36、写真58)ピットから土器片が出土している。掘方からは時期の明確な土器は出土していないが、柱痕から晩期4～5期の土器が出土している。覆土からは後期末から晩期全般の土器が出土している。石器は、石鏃や礫石器が出土している。

SI104a	ピット	256	263	270	278	304	308	381	396	428	445
	掘方		○	晩期中重 ～後重	○		○			○	○
	柱痕	○	○	晩期4-5				○	○		○
	覆土					後期後重～ 晩期前重					晩期4
SI104a	ピット	722	729	732	738	820	1092				
	掘方	○	○	○		○					
	柱痕	○			○		○				
	覆土		晩期2-4								

【年代測定】Pit445の炭化材から、2点とも2760±20yrBP、Pit722は2710±20yrBPという結果であった。

【結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第104b号建物跡(略称SI104b、図35、写真13)

【関連するピット番号】

SI104b	299	300	343	364	744	746	747	841	842	1185
--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

【位置・確認・重複】第104a号建物跡の内側で弧状に並ぶピットを建物跡とした。

【規模・形状】不明であるが、第104a号建物跡とほぼ同心円に位置することから、第104a号建物跡より一回り小さな規模が想定される(図35)。

【柱穴・施設】主柱穴に相当するピットは確認できなかった。壁柱穴は部分的であり、一巡していない。主柱穴候補のPit405、420(図37)、377、266、362などが確認されている(写13-13～18)。

ピットは、開口部の径32～56cmの範囲に収まる。深さは20cm前後である。ピット底面標高は、壁柱穴は202.4～203.0mの範囲に収まり、平均が202.8mである。

【出土遺物】(写真58) 掘方から晩期の土器、柱痕から晩期4～5期の土器が出土している。

SI104b	ピット	364	841
	掘方		晩期
	柱痕	晩期4～5	
	覆土		

【結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第105号建物跡(略称SI105、図35、写真13)

【関連するピット番号】

SI105	267	268	269	295	421	834	835	836
-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

【位置・確認・重複】第104a号建物跡の内側で弧状に並ぶピットを建物跡とした。

【規模・形状】不明である(図35)。

【柱穴・施設】主柱穴に相当するピットは確認できなかった。壁柱穴は部分的であり、一巡していない。

ピットは、開口部の径28～88cmの範囲に収まり、深さは20cm前後が多い。Pit269のみ規格が少し外れる。ピット底面標高は、202.9～203.1mの範囲に収まり、平均は203.0mである。

【出土遺物】(図36、写真58) 覆土から晩期5期の土器が出土しているが、掘方・柱痕から時期の明確な土器は出土していない。

SI105	ピット	268	269
	掘方		
	柱痕	○	○
	覆土	晩期5	

【結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第106号建物跡(略称SI106、図39、写真15)

【関連するピット番号】

SI106	251 (2593)	301 2599	361 2636	403 (2685)	404 3333	838	1111	1112	1113	1114
-------	---------------	-------------	-------------	---------------	-------------	-----	------	------	------	------

【位置・確認・重複】IVW・IVX-41.42グリッド、第104a号建物跡の北西側で確認できた(図34)。

【規模・形状】Pit1113とPit2636から直径4.47m程の円形を呈する(図39)。

【柱穴・施設】15基のピットで構成されているが、主柱穴に相当するピットは2基(図34、Pit2593、2685)確認されている。ピットの掘り込みは浅い。

ピットは、開口部の径24~103cmの範囲に収まり、Pit2685のみ1mを超える。深さは20cm前後が多い。ピット底面標高は、202.6~203.2mの範囲に収まり、平均が203.0mである。

【出土遺物】ピットから遺物は出土していない。

【小結】時期など詳細は不明である。

(高橋)

第107号建物跡(略称SI107、図40、写真15)

【関連するピット番号】

SI107	321	324	328	329	376	406	408	410	448	460
	462	527	574	867	871	878	880	911	916	924
	1096	1108	1145	1151	1473	1475	1481			

【位置・確認・重複】IVU・IVW-45~47グリッドに位置する(図38)。第9号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】Pit329とPit1151から長軸直径9.99m、短軸8.37m程の楕円形を呈する(図40)。壁柱穴群は、北西側に空隙が見られる。

【柱穴・施設】ピットは全部で27基確認でき、主柱穴に相当するピットはPit410と328である。ただし規格は異なる。

壁柱穴、開口部の径27~100cmの範囲に収まり、深さは40cm前後が多い。Pit574のみ規格が異なる。ピット底面標高は、202.3~203.5mの範囲に収まり、平均は203.1mである。

壁柱穴の隙間が北西側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(写真59) 掘方から後期末葉から晩期前葉の遺物が出土している。

SI107	ピット	328	410	448	400	527	574	1096
	掘方			後期8~ 晩期1a			○	
	柱痕		○		○	○		晩期
	覆土	後期7-4						

【小結】出土土器片などから、後期後葉から晩期前葉以降に構築された可能性がある。

(高橋)

第108a号建物跡(略称SI108a、図43、写真16~18)

【関連するピット番号】

SI108a	134-1	134-2	135	143	152	154	368	374	463	478
	479	481	483	484	486	487	488	489	491	497
	502	503	529	530	560	561	569	572-1	572-2	652
	888	889	892	893	919	920	922	941	942	965
	980	986	1005	1006	1007	1016	1094	1097	1099	1100
	1106	1187	1334	1885	1896	1985	1995	1996	2010	2017
	2020	2032	2046	2053	2068	2087	2493	2494	2495	2496

【位置・確認・重複】IVU~IVY-46~50グリッドに位置する。遺構確認面は第IV層である(図44)。一帯には多数のピットが確認でき(図38・42)、その中で円形に並んだピットと、主柱穴と思われるピットが確認でき(写14-1, 3)、建物跡と認定した。第109号、第110号、第111号建物跡、第10号掘立柱建物跡と重複している。第15号配石遺構(SQ15東捨場、報告書V(第576集)で報告)を切っている。

【規模・形状】Pit530とPit889から直径15.3m程の円形を呈する(図43)。主柱穴は4本柱構成で、北東辺の7.42mを除き、6m台なので、平面形は台形状を呈する。壁柱穴群は、北西側に隙間が見られる。

【柱穴・施設】ピットは全部で70基(掘方を共有するものもある)確認でき、その内、配置などからPit134、143、484、572などが主柱穴と思われる(図44、45)。開口部は150cmを超え、深さはPit484を除き、1mを超える。Pit134(写16-2~4)など、主柱穴は深さが1.5m強ほどになる大型のピットがある。

壁柱穴は、開口部の径34~115cmであり、深さは40cm前後が多い。規格から外れるPit481は、第10号掘立柱建物跡のピットと重複しているのが異なる要因とも考えられる。ピット底面標高は、主柱穴が201.6~201.8m、壁柱穴が202.2~203.6mの範囲に収まり、平均は203.0mである。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写16-8など)、柱を固定していたものと思われる。

壁柱穴の隙間が北西側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図46、写真58・59) ピットから土器片が出土している。掘方から後期・晩期の土器が出土している。柱痕から晩期4~5期が出土している。覆土も同様である。石器は石匙や礫石器が出土している。

SI108a	ピット	134-1	134-2	143	152	154	374	481	483	484	487	488	489
	掘方	晩期4	晩期4	○	○	○		○		晩期4~5	○		
	柱痕			晩期中業~後業		晩期4~5		○	○	晩期3	○	後期後業	○
	覆土					晩期5	晩期5	晩期	晩期3	晩期5			晩期4
SI108a	ピット	491	497	502	529	572-1	572-2	530	561	652	1005	1016	1094
	掘方	後期7-4	○				○		○	晩期2~3	○		
	柱痕	○		○	○		晩期3	○	○		○	○	後期7-4
	覆土					晩期							

【年代測定】Pit143出土炭化材を測定した結果、 3030 ± 20 と、 2920 ± 20 yrBP、Pit572-2出土炭化材は、 2830 ± 20 と、 2890 ± 20 yrBPという結果であった。

【小結】出土土器片などから、晩期4期に構築され、晩期4~5期には廃絶されたものと思われる。

(最上・高橋)

第108b号建物跡(略称SI108b、図43、写真18・19)

【関連するピット番号】

SI108b	140	334	345	346	348	369	480	532	874	880
	806	897	898	899	900	943	944	945	960	964
	973	974	975	976	977	978	1150	1152	1170	1171
	1231	2070	2075	2080	2088	2090				

【位置・確認・重複】IVV-IVX-46~49グリッドに位置する。遺構確認面は第IV層である(図44)。一帯には多数のピットが確認でき(図42)、その中で円形に並んだピットが確認でき、建物跡と認定した。第109号、第110号、第111号建物跡、第10号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】Pit896とPit976から直径12.2m程の円形を呈する(図43)。主柱穴は、当初第11号掘立柱建物跡を想定したが、直径の規模に対して小さいことから、独立した建物跡と認定した。よって、第108b号建物跡に相当する主柱穴は確認できなかった。壁柱穴群は、南東側が密に分布している。東側のPit1170と1231の間、西側のPit880と896の間は、ピットの間隔が大きく開いている。

【柱穴・施設】ピットは全部で36基確認できた。

ピットは、開口部の径28~138cmの範囲に収まり、深さは30cm前後である。規格から外れるPit1150は深さが34.8cmと他の壁柱穴と大きく異ならず、開口部のみ大きい。ピット底面標高は、202.2~203.4mの範囲に収まり、平均は202.9mである。

壁柱穴の隙間が南東以外の側にあることから、東もしくは西側に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図46、写真59) ピットから土器片が出土している。掘方・柱痕から時期の明確な土器は出土していない。覆土から後期の土器を主体に晩期前葉までが出土している。石器は石鏃、礫石器などが出土している。

SI108b	ピット	140	480	532	896	899	900	2090
	掘方	○		○	○		○	○
	柱痕	○	○	○	○	○	○	○
	覆土	後期後葉~ 晩期前葉				後期7-4	後期7-4	

【結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期前葉には廃絶された可能性が高い。(最上・高橋)

第109号建物跡(略称SI109、図41、写真19)

【関連するピット番号】

SI109	284	302	322	451	652	861	862	882	883	887
	892	893								

【位置・確認・重複】IVV-IVX-45・46グリッドで確認され(図38)、第108a号建物跡と第10号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】Pit862とPit893から直径3.04m程の円形を呈し、主柱穴に相当するピットは存在しない。

【柱穴・施設】ピットは全部で12基確認できた。

ピットは、開口部の径28~60cmの範囲に収まり、深さは40cm前後が多い。ピット底面標高は、202.3~203.1mの範囲に収まり、平均は202.8mである。

【出土遺物】(写真59) 掘方から晩期の土器が出土しているが、第108a号建物跡と共有している。石鏡がPit302から出土している。

SI109	ビット	652
	掘方	晩期2~3
	柱痕	
	覆土	

【結】出土土器は他の遺構と共伴であるので不確定要素が強いが、晩期2~3期頃構築されたと考えられる。(高橋)

第110号建物跡(略称SI110、図48、写真20)

【関連するビット番号】

SI110	1990	1991	1992	1994	1997	2003	2007	2011	2034	2044
	2051	2069	2084	2091	2495					

【位置・確認・重複】IVY・VA-48~50グリッドに位置する。一帯には多数のビットが確認でき(図47)、その中に円形に並んだビットが確認でき、建物跡と認定した。

【規模・形状】Pit1991とPit2051から直径6.28m程の円形を呈する。壁柱穴の北東側は、ビットの連続が確認できなかった。また、Pit1994と2069の間も、幾分隙間が見受けられる。

【柱穴・施設】ビットは全部で15基確認できた。主柱穴に相当するビットは認められないが、Pit1889が主柱穴になる可能性がある。その周辺でもPit1833(図48下段)のような柱痕を持つのが見られる(写20-3)。

ビットは、開口部の径47~91cmの範囲に収まり、深さは40cm前後である。ビット底面標高は、202.4~203.1mの範囲に収まり、平均は202.8mである。

【出土遺物】(写真59) 覆土から晩期中葉の土器が出土している。石器は礫石器などが出土している。

SI110	ビット	1991	1992	2051
	掘方			
	柱痕			○
	覆土	晩期3か	晩期3か	

【結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期3期には廃絶された可能性が高い。(最上・高橋)

第111号建物跡(略称SI111、図49、写真20)

【関連するビット番号】

SI111	131	132	135	367	967	969	1017	1167	1168	1231
	1232	1876	1890	1891	1981	1988	1989	1999	2005	2007
	2009	2010	2040	2041	2070	2072	2078	2079	2099	2464

【位置・確認・重複】IVX~VA-48~50グリッドに位置する(図42)。遺構確認面は第IV層である(図44)。

【規模・形状】Pit2072とPit2099から直径8.97m程の円形を呈する。壁柱穴群は、南西側に、隙間が見られる。

【柱穴・施設】ビットは全部で30基確認できたが、主柱穴に相当するPit132のみである。

壁柱穴は、開口部の径30~130cmの範囲に収まり、深さは50cm前後が多い。Pit2079のみ規格外である。ビット底面標高は、202.5~203.3mの範囲に収まり、平均は202.9mである。

壁柱穴の隙間が南西側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図50、写真60) ビットから土器片が出土している。掘方から晩期前葉、柱痕から晩期前葉の土器が出土している。覆土から晩期中葉以降の土器が出土している。石器は剥片石器などが出土している。

SI111	ビット	131	132	367	1017	1876	1988	1999	2041	2072
	掘方				○	晩期1a1b		○	○	
	柱痕	晩期1b		○	○		○	○	○	○
	覆土		晩期5					晩期4		後期8

【小結】覆土出土と掘方・柱痕出土の土器に時期差がある。掘方・柱穴を基準とすれば、この建物跡は、晩期前葉には廃絶された可能性が高い。(最上・高橋)

第112号建物跡(略称SI112、図51、写真20・21)

【関連するビット番号】

SI112	1609	1630	1709	2000	2001	2013	2016	2037	2038	2039
	2042	2065	2097	2475	2480					

【位置・確認・重複】IVY-VB-50・51グリッドに位置する。

【規模・形状】Pit2037とPit2016から直径4.59m程の円形を呈する。壁柱穴群は、東と南側に隙間が見られる(図51)。

【柱穴・施設】ビットは全部で15基確認できた。

ビットは、開口部の径28~123cmの範囲に収まり、深さは40cm前後が多い。ビット底面標高は、202.4~203.2mの範囲に収まり、平均は202.8mである。その内、Pit2016、2037、2038、2475は平均から大きくはずれる。

壁柱穴の隙間が東と南側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図52、写真60) 掘方に後期後葉、柱痕に晩期4期、覆土からも晩期4期の土器が出土している。

SI112	ビット	2037	2038	2475	2480
	掘方	後期8	後期後葉		
	柱痕	後期7-4	晩期4		
	覆土			晩期4	晩期4

【小結】出土土器片などから、掘方と柱痕出土の土器の時期差がある。晩期4期には廃絶された可能性が高い。(最上・高橋)

第113号建物跡(略称SI113、図54、写真21)

【関連するビット番号】

SI113	1629	1638	1664	1670	1675	1728	1733	1741	1748	1754
	1808	1811	1814	2472	2473	2479	2488	2498	2501	2502
	2505	2507	2509	2510	2518	2524	2525	2535	2527	2532
	2545	2713	2731	2743	2753	2754				

【位置・確認・重複】VC-VE-48~51グリッドで確認できた。一帯には多数のビットが確認でき(図53)、その中で円形に並んだビットと、主柱穴と思われるビットが確認でき、建物跡と認定した。第18

号～第20号掘立柱建物跡と重複する。

【規模・形状】Pit2509とPit2545が11.3mの長軸、直交する軸は9.63mの楕円形を呈する。主柱穴は4本柱構成で、東辺5.36m、西辺5.06m、他の2辺は4m台なので、平面形は長方形を呈する。壁柱穴群は、南側に比べ、北側はピットの分布は隙間があいている。

【柱穴・施設】ピットは全部で36基確認でき、その内、配置などからPit1728、2488、2518、2731が主柱穴と思われる。南辺が3.81m、北辺が4.2mであり、東西辺は5m台である。主柱穴は開口部、深さともに1mを超える。

建物跡範囲内には、主柱穴に相当するピットが分布している。Pit2760(図54)は主柱穴規模のピットであるが、柱痕は確認できなかった。

壁柱穴は、開口部の径29～127cmの範囲に収まり、深さは30cm前後が多い。規格外のPit1670と1675は北西隅に位置し、その間にピットは分布しない。出入り口に相当する可能性がある。ピット底面標高は、主柱穴が201.6～201.8m、壁柱穴が201.8～202.9mの範囲に収まり、平均は202.6mである。

主柱穴規模は、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写21-8、9、11など)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図54、写真60) 覆土から晩期中葉の土器が出土している。掘方・柱痕から時期の明確な土器は出土していない。覆土から晩期4期の土器が出土している。石器は礫石器などが出土している。

SI113	ピット	1675	1733	2488	2518	2731
	掘方			○		
	柱痕	○	○	○		○
	覆土				晩期4	

【結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期4期には廃絶された可能性が高い。(最上・高橋)

第114a号建物跡(略称SI114a、図56、写真22)

【関連するピット番号】

SI114a	1946	1951	1952	1953	1954	1958	1964	1966	1968	1975
	1979	2103	2110	2116	2137	2146	2147	2148	2151	2152
	2153	2155	2156	2157	2158	2160	2163	2164	2237	2251
	2252	2322	2323	2345	2348	2349	2353	2561	2562	2584

【位置・確認・重複】VC～VF-44～47グリッドで確認できた。一帯には多数のピットが確認でき(図55)、その中で円形に並んだピットと、主柱穴と思われるピットが確認でき、建物跡と認定した。第115号建物跡、第22号・第23号掘立柱建物跡と重複する。内側には相似形の小型の第114b建物跡がある。建物跡の西側は、第3号盛土遺構と重複しているため、確認面が東側よりも標高が高い。

【規模・形状】Pit1979とPit2584から直径12.1m程の円形を呈する(図56)。主柱穴は4本柱構成で、北辺が5.52mと最大であり、他の3辺も5m台なので、平面形は方形を呈する。壁柱穴は、北から東側に隙間が見られ、南から西にかけては密集して分布する。北から東側のピットは、2基一組の配列をなしている。壁柱穴群は、北東側にあるPit1975と2345の間に広い隙間がある。

【柱穴・施設】ピットは全部で40基確認でき、その内Pit1946、1968、2322、2323が主柱穴と思われる。

支柱穴は開口部、深さともに1mを超える。

壁柱穴は、開口部の径34～144cmの範囲に収まり、深さは、40cm前後が多い。ビット底面標高は、支柱穴が201.7～202.1m、壁柱穴が202.0～203.4mの範囲に収まり、平均は202.7mである。Pit2348と2584が規格外である。

支柱穴規模は、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写22-3～12)、柱を固定していたものと思われる。

壁柱穴の隙間が北東側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図59、写真60) 掘方から後期末、柱痕からは時期の明確な土器は出土していない。覆土からは晩期中葉以降の土器片が出土している。石器は石鏃などが出土している。

SI114a	ビット	1945	1958	1968	2110	2116	2147	2155	2251	2322	2323	2348
	掘方	○		○					○	後期7-4	○	
柱痕										○	○	○
覆土	○	○	晩期5	○	○	晩期3-4						○

【結】 覆土出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶された可能性が高い。(高橋)

第114b号建物跡(略称SI114b、図56、写真23)

【関連するビット番号】

SI114b	1945	1947	1948	1949	1959	1960	1965	1976	1978	2115
	2138	2154	2169	2185	2235	2304	2326	2328	2331	2332
	2333	2339	2347							

【位置・確認・重視】 第114a号建物跡の内側で確認できた(図55)。

【規模・形状】 Pit1959とPit2326から直径10m程の円形を呈する(図56)。支柱穴は4本柱構成で、西と南辺が3m台、北と東は4m台である。東辺は、4.58mで最大長であるので、平面形は台形状を呈する。壁柱穴は部分的に2基一組の構成になっている。壁柱穴群は、北東側に少し隙間が見られる。

【柱穴・施設】 ビットは全部で23基確認でき、その内Pit1960、2304、2347、1945が支柱穴と思われる(図58)。支柱穴は開口部、深さともに1mを超える。

壁柱穴は、開口部の径36～115cmの範囲に収まり、深さは、40cm前後が多い。Pit2154のみ1mを超える規格外であるが、細長い形態であるので、Pit1948・1949のように実際は2つのビットであった可能性もある。ビット底面標高は、支柱穴が202.0～202.1m、壁柱穴が202.4～203.1mの範囲に収まり、平均は202.7mである。

ビットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写23-1～5)、柱を固定していたものと思われる。

壁柱穴の東側に隙間があることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】(図59、写真60) 縄文後期末から晩期前葉の土器片が出土している。石器は石鏃、磨製石斧(図59-写60-22)が出土している。

SI114b	ビット	1945	1947	1959	1960	1976	2138	2235	2304	2332	2339
	掘方	○				○				○	
柱痕											
覆土	○	○	○	○	○	○	晩期4	後期6-7		○	○

【結】 覆土出土土器片などから、遅くとも晩期4期には廃絶された可能性が高い。(高橋)

第115号建物跡(略称SI115、図60、写真23)

【関連するピット番号】

SI115	1961	1969	2125	2179	2192	2193	2194	2197	2199	2201
	2202	2203	2204	2206	2232	2264	2334	2336	2338	2360

【位置・確認・重複】VE～VG-45～47グリッドの第114a号・第114b号建物跡の北側で、重複して確認できた。

【規模・形状】Pit2336とPit2358から直径9.95m程の円形を呈する。主柱穴は4本柱構成で、北辺が4.29mと一番短い、他も4m台なので、平面形は方形を呈する。壁柱穴は、東側は連続を追うことができなかった。また西側もピットの分布はまばらであり、北側辺のみがまとまってピットが並んでいる。

【柱穴・施設】ピットは全部で20基確認でき、その内配置などからPit1969、2179、2192、2334が主柱穴と思われる。主柱穴は開口部が1mを超え、深さは60～100cmほどである。Pit2334の東隣にはPit2205(図60)という柱痕を持つ主柱穴規模のピットが単独で位置する。

壁柱穴は、開口部の径37～62cmの範囲に収まり、深さは40cm前後の収まるものが多い。ピット底面標高は、主柱穴が201.8～202.2m、壁柱穴が202.3～203.0mの範囲に収まり、平均は202.6mである。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写23-6～13)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図61、写真60) 掘方・柱痕から時期の明確な土器は出土していない。覆土から晩期後葉以降の土器片や、磨製石斧(図61-写60-29)の再加工作品が出土している。

SI115	ピット	1969	2179	2192	2194	2334
	掘方		○	○		○
	柱痕					
	覆土	○	○	○	晩期5	晩期5

【小結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶された可能性が高い。(高橋)

第116号建物跡(略称SI116、図62、写真23・24)

【関連するピット番号】

SI116	2108	2112	2114	2117	2118	2122	2124	2136	2133	2171
	2172	2173	2264	2208						

【位置・確認・重複】VF・VG-44・45グリッドに位置し、第115号建物跡と重複する。

【規模・形状】Pit2108とPit2118から直径4m程の円形を呈する(図62)。Pit2118と2173の間に隙間がある。

【柱穴・施設】主柱穴に相当するピットは存在しない。

ピットは、開口部の径45～98cmの範囲に収まり、深さは50cm前後で、ばらつきがある。ピット底面標高は、202.0～202.8mの範囲に収まり、平均は202.4mである。

壁柱穴の隙間が東側にあることから、この地点に出入り口があった可能性がある。

【出土遺物】時期の明確な遺物は出土していない。

SI116	ビット	2114	2126	2171
	掘方	○		
	柱痕			
	覆土	○	○	○

【小結】時期など詳細は不明である。

(高橋)

第117号建物跡(略称SI117、図64、写真24)

【関連するビット番号】

SI117	1934	2364	2366	2372	2375	2377	2387	2403	2426	2615
	2870	2880	2892-1	2892-2	2892-3	2896	2965	2977	2979	2985
	3059	3071	3083	3084	3349	3351				

【位置・確認・重複】VE～VG-37～39グリッドに位置し、一帯には多数のビットが確認でき(図63)、その中で円形に並んだビットと、主柱穴と思われるビットが確認でき、建物跡と認定した。第29号～第31号掘立柱建物跡と重複する。なお、この遺構の北側半分は地山がシルト質である。下の【小結】でも触れるが、建物跡でない可能性もある。

【規模・形状】Pit2364とPit2965から直径9.62m程の円形を呈する(図64)。主柱穴は4本柱構成で、南東側が3.78mと最大、西側が2.85mと最短であり、平面形は台形状を呈する。壁柱穴は不明確ではあるが、東側に隙間が見られる。なお主柱穴と認定した4基の内、2基は、当初規模、柱痕が見られないことから土坑として扱っていたが、建物跡の主柱穴なので、土坑からビットに変更した。

【柱穴・施設】ビットは全部で26基確認でき、その内配置などからPit2403、2979、3349、3351が主柱穴と思われる。南西辺が2.8mの他は、3m台である。Pit3349は第29号掘立柱建物跡と共有されている。主柱穴の開口部は1m以上、深さは、54～64cm程度である。

壁柱穴は、開口部の径39～132cmの範囲に収まり、深さは、40cm前後が多い。西側に並ぶ壁柱穴ほど大形である。ビット底面標高は、主柱穴が、202.3～202.6m、壁柱穴が、202.3～202.9mの範囲に収まり、平均は202.5mである。

ビットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図65、写真60) 柱痕から晩期後葉の土器片が出土している。ただ、Pit2892は複数のビットの集合であり、遺物もこの集合の中から出土しているので、SI117と関連するかは判然としない。石器は、石鏃、礫石器などが出土している。

SI117	ビット	2892
	掘方	
	柱痕	晩期5
	覆土	

【小結】他の建物跡と比較して、以下の点で様相が異なる。第1に、壁柱穴が一見弧状に並んでいるが、各ビットの規格は統一性がなく、並びも乱雑である。次に、主柱穴が、他の建物跡の主柱穴は、柱痕が見つかる場合が多いのに対し、この建物跡の主柱穴は、当初土坑と認定したように、柱痕が見られなかったなどである。ここでは、建物跡として掲載するが、建物跡でない可能性も否定できない。

建物跡の場合、出土土器片などから、晩期5期には廃絶された可能性が高い。

(高橋)

第118号建物跡(略称SI118)

詳細は、第3編クラック地区を参照。

第119号建物跡(略称SI119、図57)

【関連するピット番号】

SI119	2224	2226	2227	2240	2244	2249	2250	2253	2254	2262
-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

【位置・確認・重複】VC-46・47グリッドに位置し、一帯には多数のピットが確認でき(図55)、その中で円形に並んだピットが確認でき、建物跡と認定した。第114a号・第114b号建物跡の南側に位置する。

【規模・形状】Pit2226とPit2254から直径3.30m程の円形を呈する(図57)。円の内側に支柱穴候補のピットが4基確認されている。

【柱穴・施設】ピットは全部で10基確認できた。

壁柱穴は、開口部の径54～83cmの範囲に収まり、深さは、30cm前後が多い。ピット底面標高は、202.7～203.1mの範囲に収まり、平均は203.0mである。

【出土遺物】なし。

【小結】時期など詳細は不明である。

(高橋)

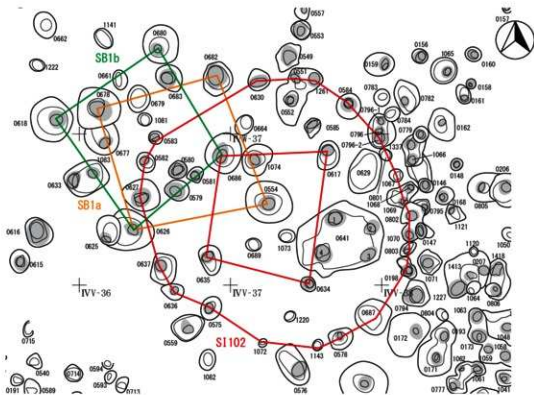


図28 IVU~IVW-35~38一帯の遺構配置図

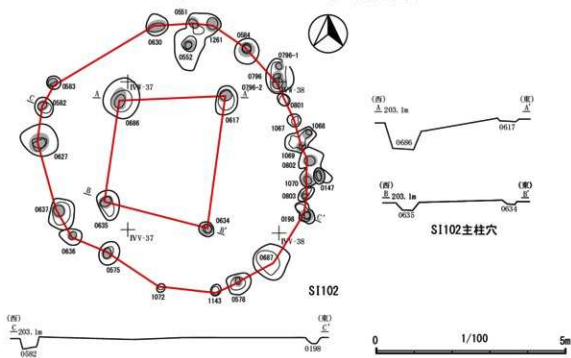


図29 第102号建物跡

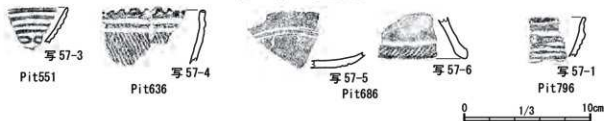


図30 第102号建物跡出土遺物

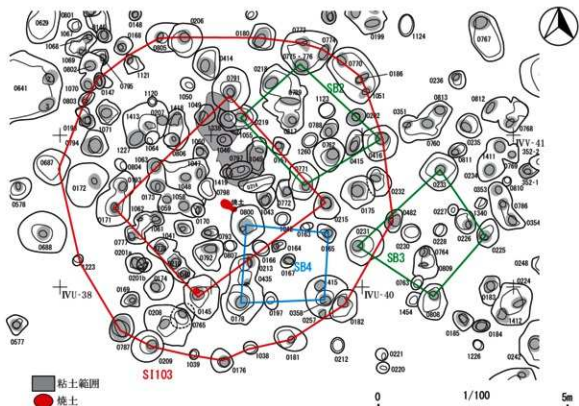


図31 IVT~IVV-38~40一帯の遺構配置図

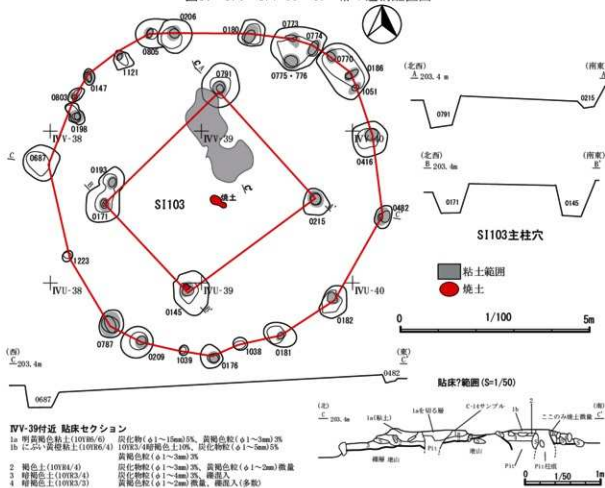


図32 第103号建物跡



図33 第103号建物跡出土遺物

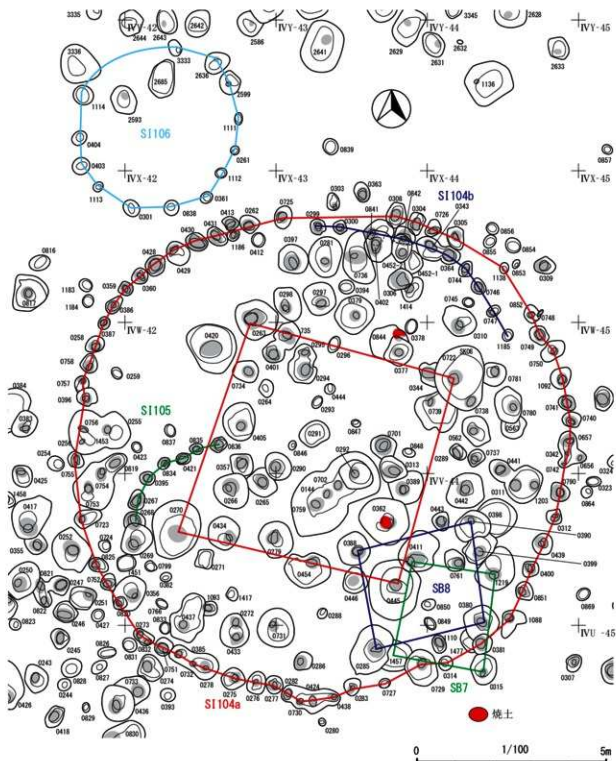


図34 IVT~IVX-41~45一帯の遺構配置図

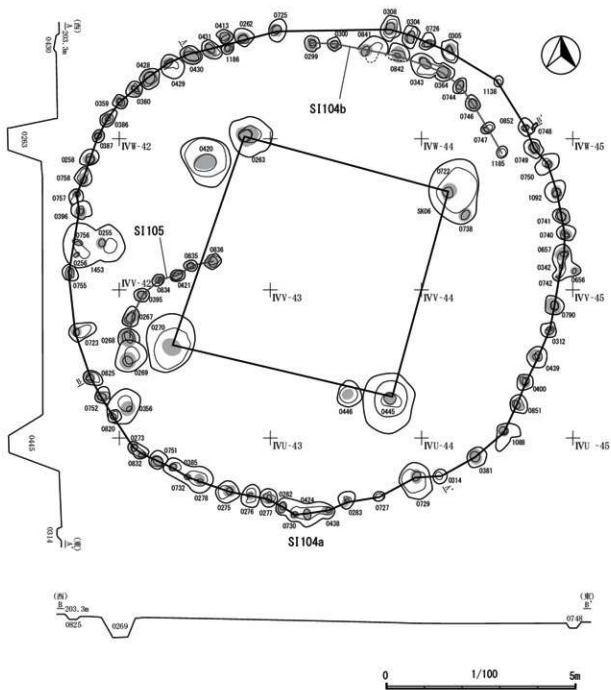


図35 第104a号・第104b号・第105号建物跡

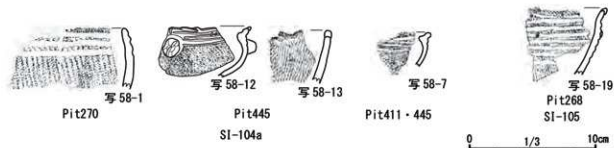


図36 第104a号・第104c号建物跡出土遺物

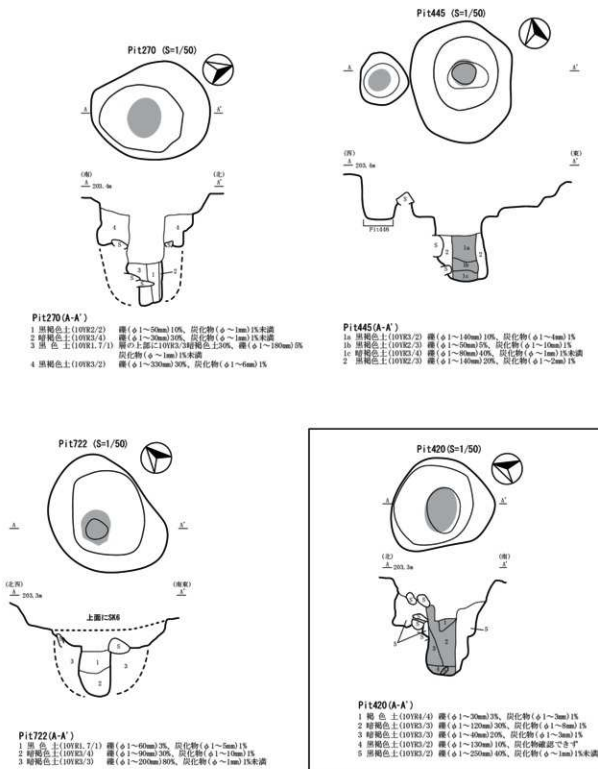


図37 第104a号建物跡のピット(主柱穴)

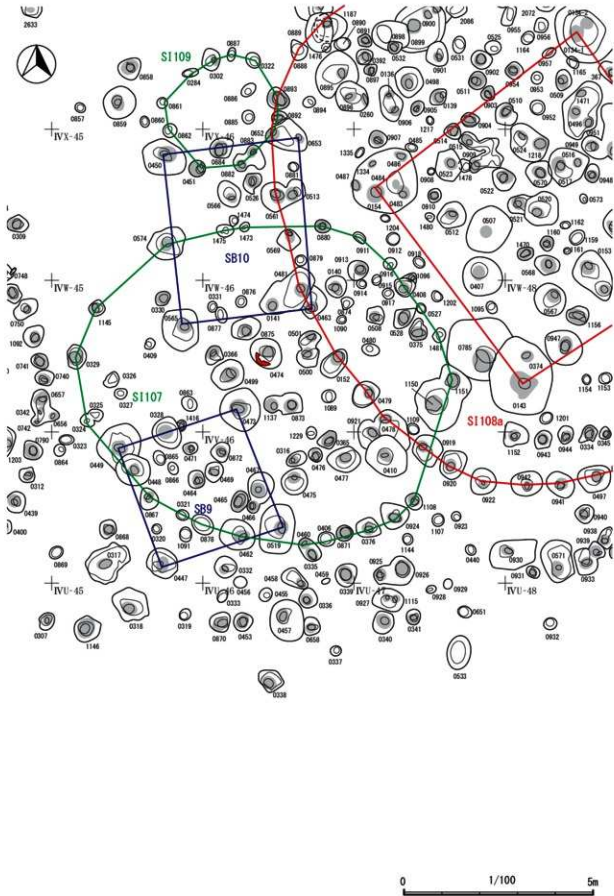


図38 IVU~IVX-45~48一帯の遺構配置図

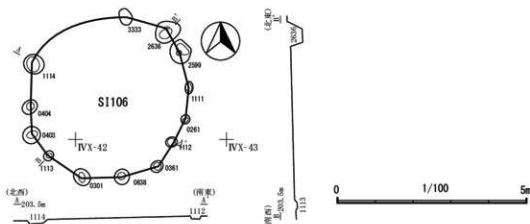


図39 第106号建物跡

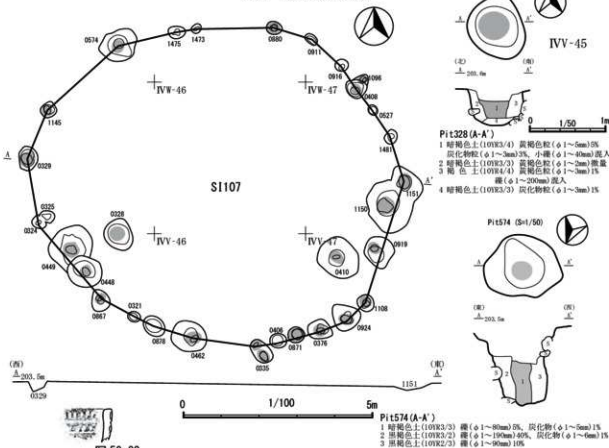
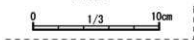


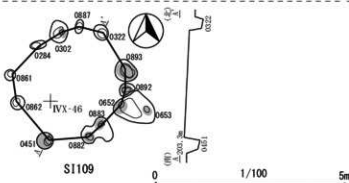
図40 第107号建物跡と出土遺物



写 59-32

Pit 328

図41 第109号建物跡



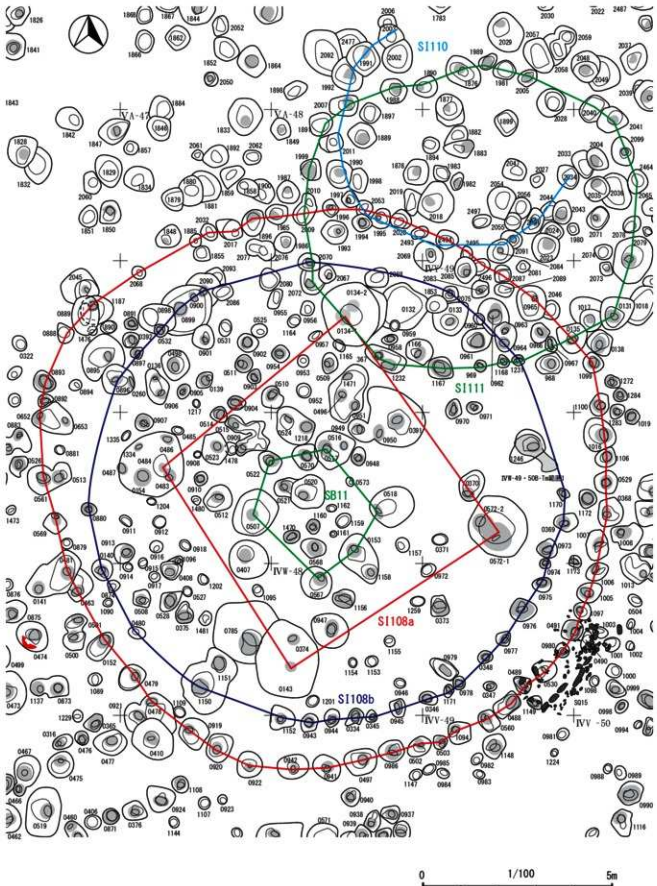


図42 IVU~VA-46~50一帯の遺構配置図

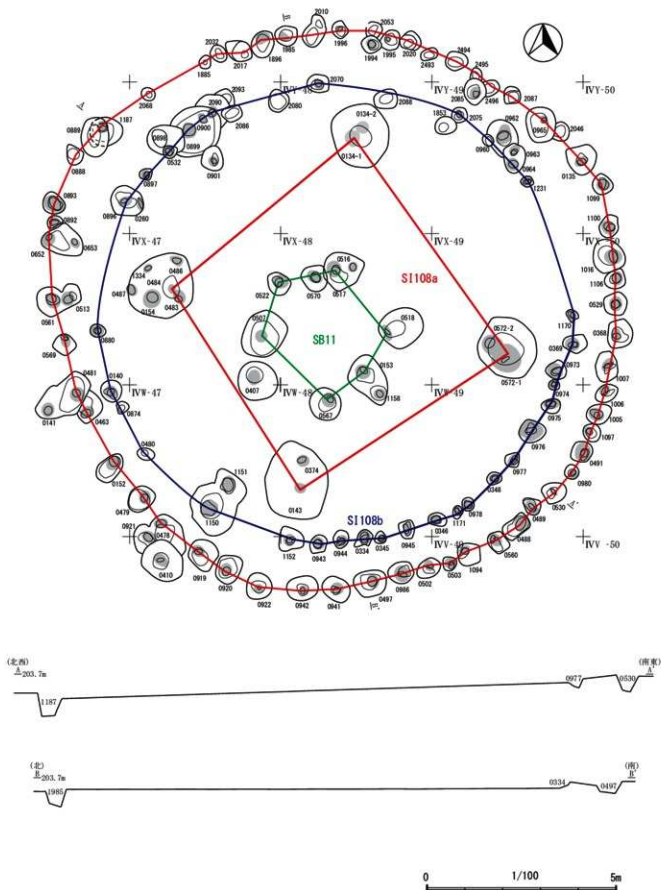
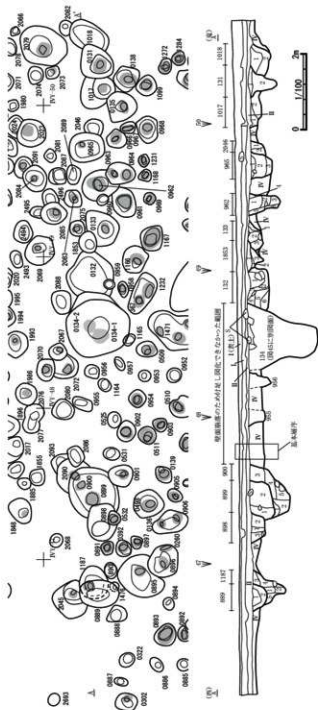


図43 第108a号・第108b号建物跡・第11号掘立柱建物跡



- Pit1689**
 1層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ20~50mm)20%
 2層 黒褐色土(107K3.4) 層(φ20~100mm)10%
- Pit1187**
 1層 黒褐色土(107K2.3) 層(φ15~30mm)3%
 2層 黒褐色土(107K3.4) 層(φ5~20mm)1%
 3層 黒褐色土(107K2.3) 層(φ5~20mm)10%
 4層 黒褐色土(107K2.4) 107K3.2層褐色土25%
 5層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ10~50mm)20%
- Pit1889**
 1層 黒土(107K2.1) 層(φ140~170mm)20%
 2層 黒褐色土(107K2.3) 層(φ200~250mm)10%
- Pit1900**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ50~80mm)10%
 2層 黒褐色土(107K2.3) 層(φ20~70mm)10%
 3層 黒褐色土(107K2.1) 層(φ20~70mm)10%
 4層 黒褐色土(107K2.3) 層(φ30~110mm)10%
- Pit1998**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ70~110mm)5%
 2層 黒褐色土(107K2.3) 層(φ50~80mm)10%
 3層 黒褐色土(107K2.4) 層(φ60~180mm)30%
- Pit1955**
 1層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ10~50mm)5%
- Pit1314**
 0 黒褐色土(107K2.2) 層(φ10~100mm)10%
 1 黒褐色土(107K3.2) 層(φ10~50mm)2%
- Pit1132**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ10~30mm)30%
 2層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ5~20mm)2%
 3層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ5~20mm)10%
 4層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ5~50mm)20%
 5層 黒褐色土(107K3.4) 107K3.2層褐色土20%
 6層 黒褐色土(107K3.4) 107K3.2層褐色土20%
 7層 褐色土は砂質
- Pit1853**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~50mm)2%
 2層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ20~70mm)10%
- Pit1133**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ10~30mm)10%
 2層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ5~20mm)10%
 3層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ5~50mm)10%
- Pit1962**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ5~15mm)20%
 2層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ5~15mm)10%
 3層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ5~50mm)30%
 4層 黒褐色土(107K2.4) 層(φ50~80mm)30%
 5層 黒褐色土(107K2.4) 層(φ50~80mm)30%
- Pit1895**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~50mm)15%
 2層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ20~70mm)15%
 3層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~110mm)15%
- Pit2046**
 1層 黒褐色土(107K3.4) 層(φ15~20mm)1%
 2層 黒褐色土(107K3.6) 107K3.2層褐色土25%
 3層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~60mm)25%
- Pit1017**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ10~20mm)10%
 2層 黒褐色土(107K3.6) 107K3.2層褐色土10%
 3層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~60mm)25%
- Pit1311**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ15~20mm)1%
 2層 黒褐色土(107K3.6) 107K3.2層褐色土25%
 3層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~60mm)25%
- Pit1019**
 1層 黒褐色土(107K2.2) 層(φ20~50mm)15%
 2層 黒褐色土(107K3.2) 層(φ20~110mm)25%

図44 第108号・第111号建物跡セクション図

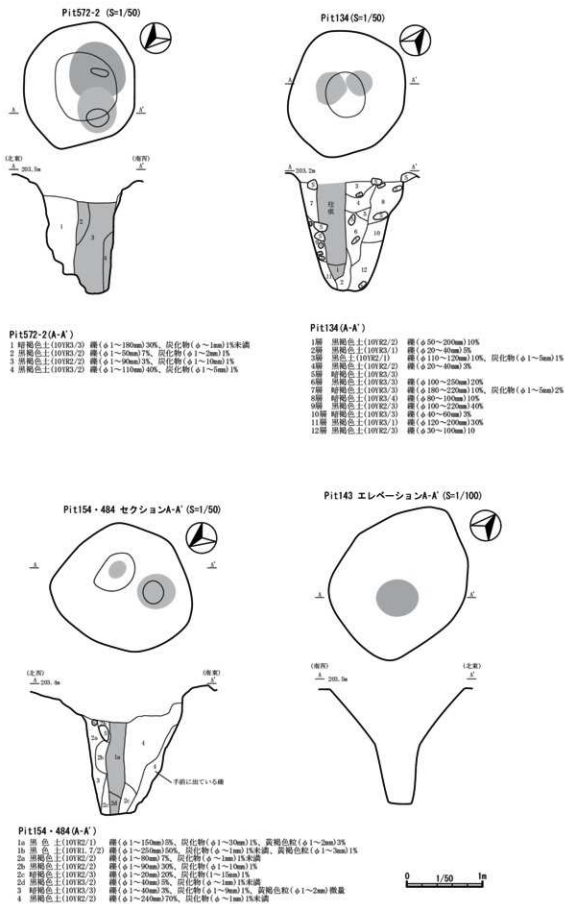
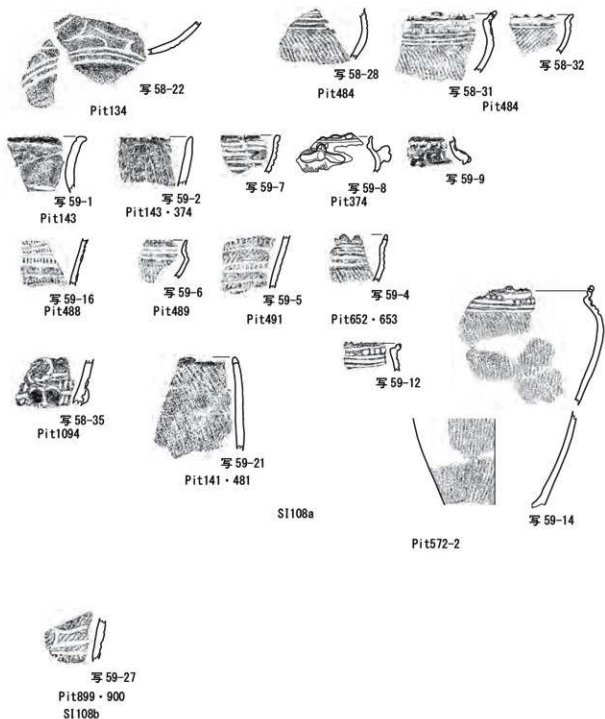


図45 第108a号建物跡のビット(主柱穴)



0 1/3 10cm

図46 第108a号・第108b号建物跡出土遺物

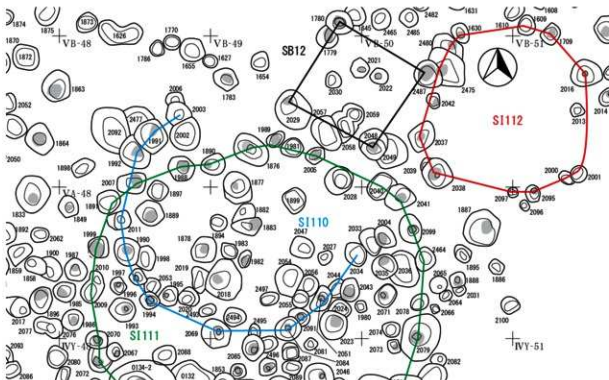


図47 IVX～VA-48～51一带の遺構配置図

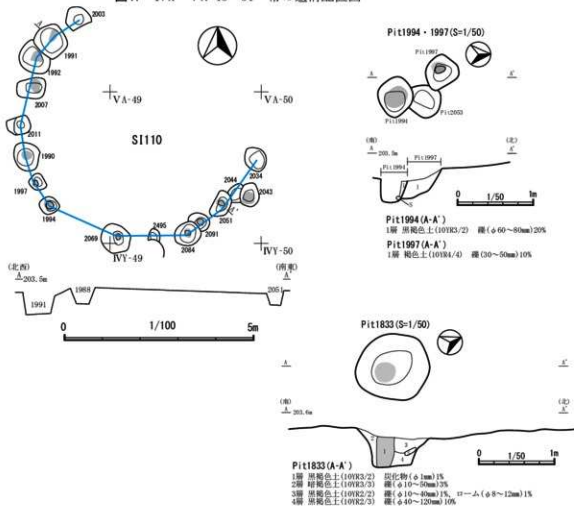


図48 第110号建物跡

圖50 第111号建物跡出土遺物

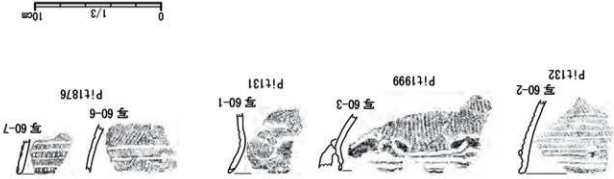
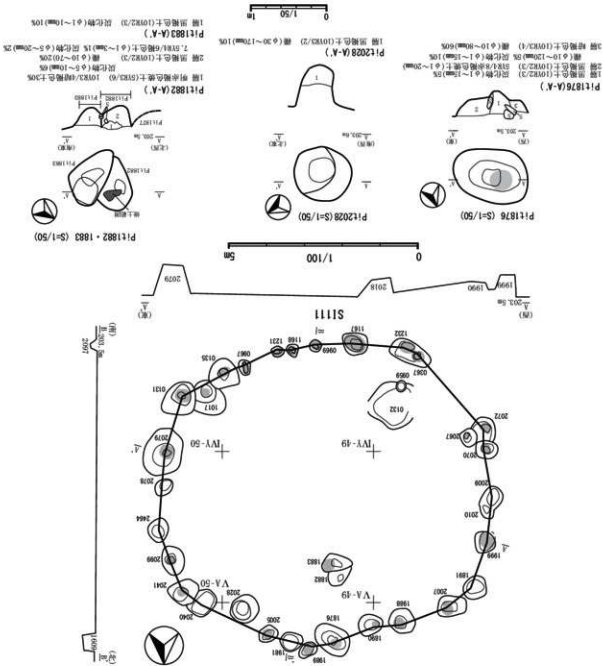


圖49 第111号建物跡



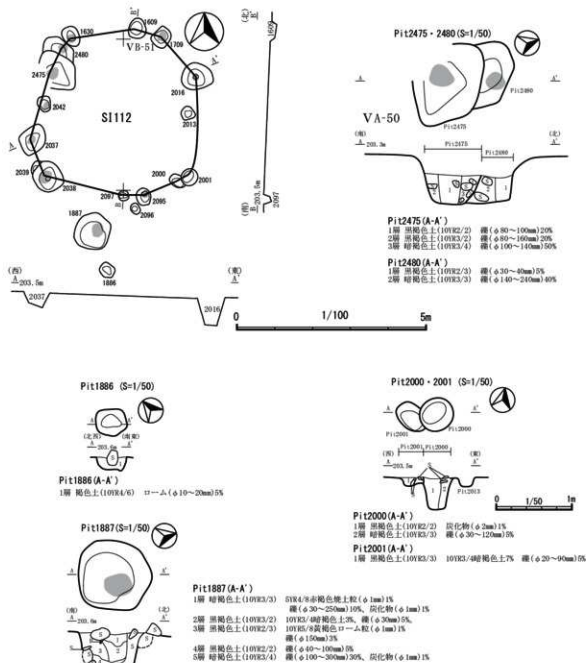


図51 第112号建物跡



図52 第112号建物跡出土遺物

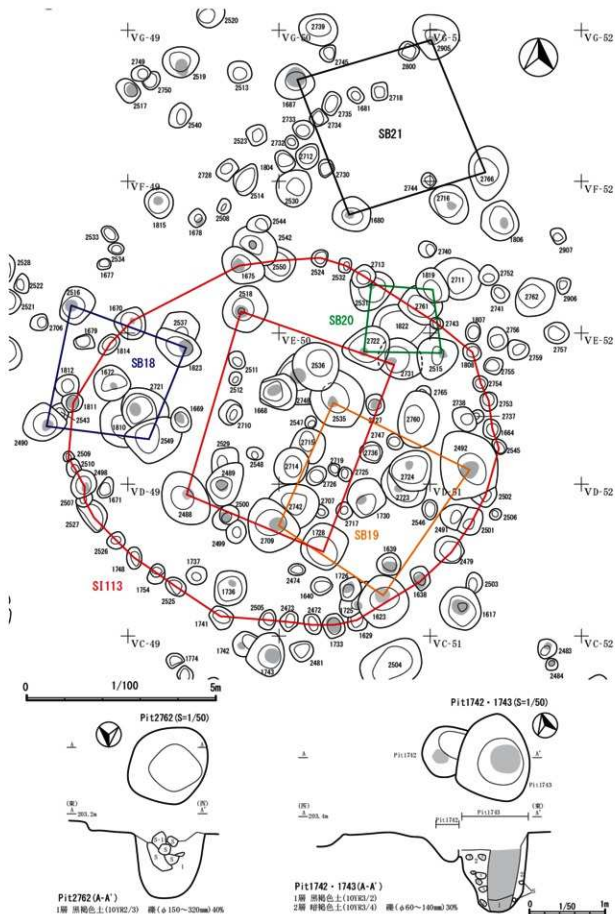


図53 VC~VF-48~51一帯の遺構配置図とピット

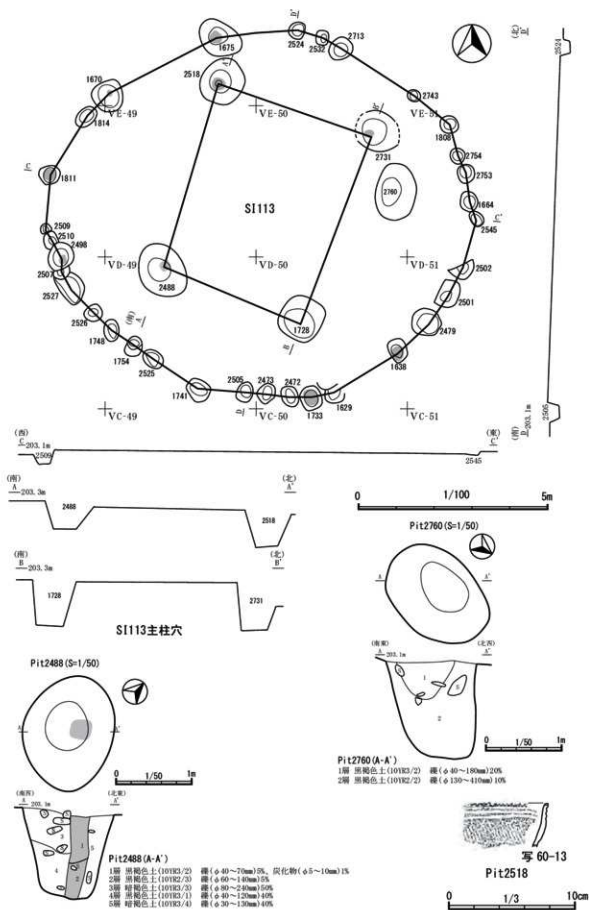


図54 第113号建物跡と出土遺物

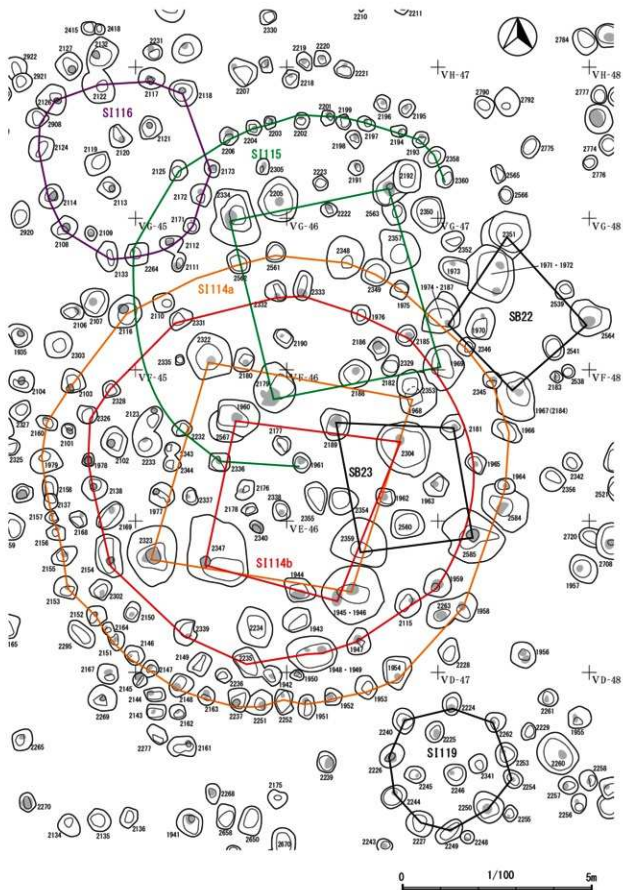


図55 VC~VG-44~47一帯の遺構配置図

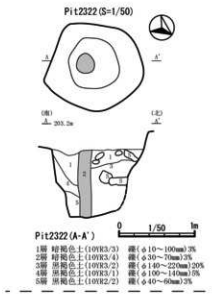
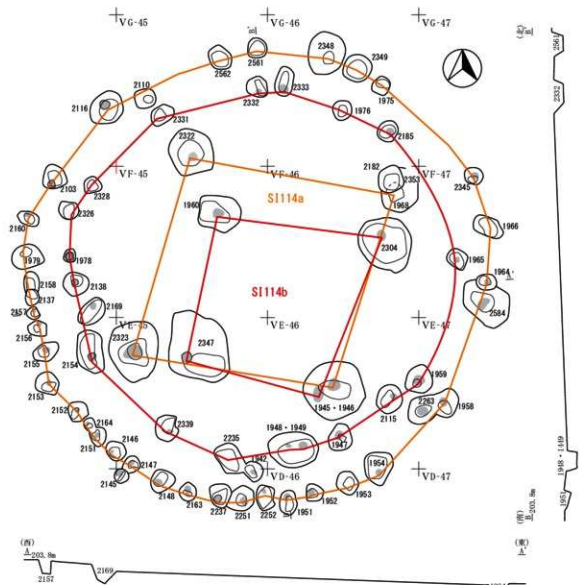


図56 第114a号・第114b号建物跡

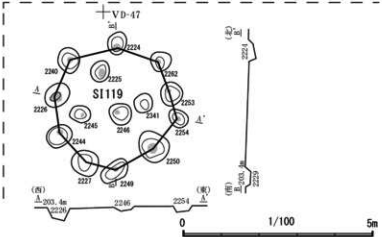


図57 第119号建物跡

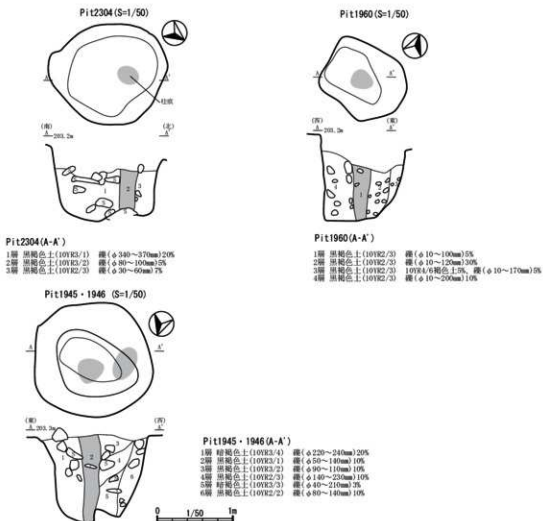


図58 第114b号建物跡のビット(主柱穴)

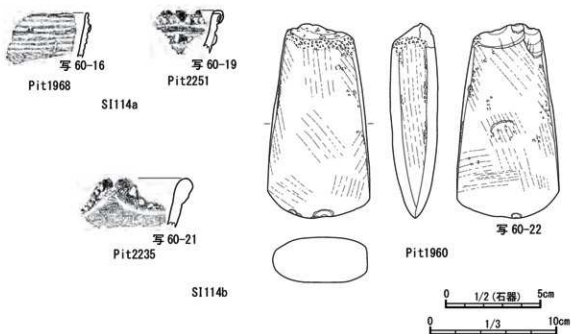


図59 第114a号・第114b号建物跡出土遺物

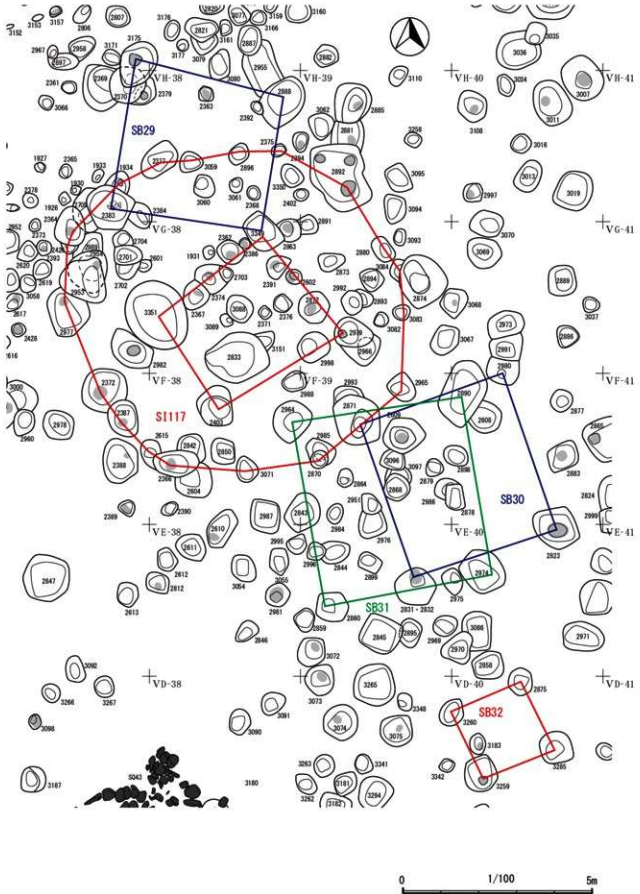
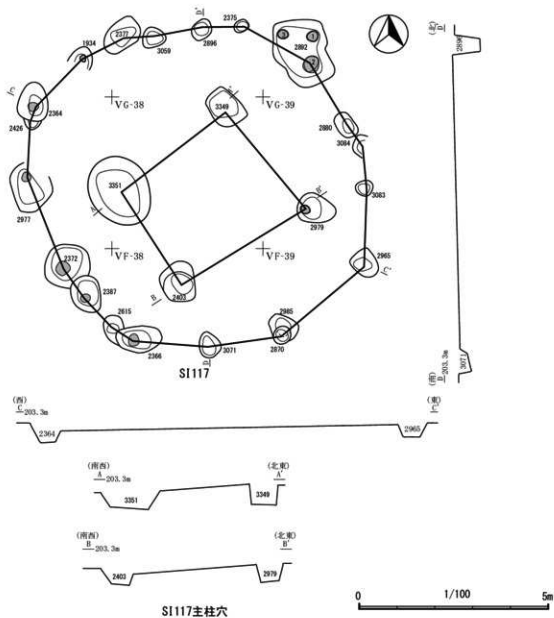


図63 VC~VG-37~40一帯の遺構配置図



SI117主柱穴

図64 第117号建物跡

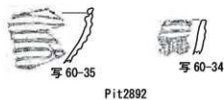


図65 第117号建物跡出土遺物

(2) 掘立柱建物跡(略称SB、表13)

4ないし6基のピットで構成され、壁柱穴と推定される周囲を取り囲むような配置が認められない場合は、掘立柱建物跡(略称SB)とした。壁柱穴のない建物跡の可能性は否定できないが、それ以上判断できる根拠もない。また、建物跡と用語の統一がとれないが、整理作業の経緯もあるので、ここでは便宜的に掘立柱建物跡と分類する。現場と整理作業段階で組み合わせを確認した。

掘立柱建物跡計測値については判例を参照。遺構の計測値などは表11を参照。(高橋)

第1a号掘立柱建物跡(略称SB1a、図66、写真25)

【位置・確認・重複】IVV・IVW-36・37グリッドに位置する(図28)。Pit626を第1b号掘立柱建物跡と共有している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南側辺3.62mが一番長く、平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit554、626、678、682で構成されている。

ピットは、開口部の径90~125cm、深さは87~110cmである。ピット底面標高は、4本とも201.9m前後で揃う。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写25-1、3、5、8)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図67、写真61) 柱痕から晩期4~5期の土器片が出土している。石器は、大形石皿の断片などがPit554から出土している。

SB1a	ピット	554	626	678	682
	掘方			○	
	柱痕	晩期4~5	○		
	覆土	晩期5	晩期3か	晩期5	晩期4

【結】出土土器片などから、晩期4~5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第1b号掘立柱建物跡(略称SB1b、図66、写真25)

【位置・確認・重複】IVV・IVW-35・36グリッドに位置する(図28)。Pit626を第1a号掘立柱建物跡と、Pit686を第102号建物跡と共有している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南東辺が3.42m、他も同程度であるので、平面形はほぼ方形である。

【柱穴】Pit618、626、680、686で構成されている。

ピットは、開口部の径103~125cm、深さは79~95cmである。ピット底面標高は、4本とも202.0m前後で揃う。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写25-10、13、15)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図67、写真61) 掘方から晩期4期、柱痕から晩期前半の土器が出土している。

SB1b	ピット	618	626	680	686
	掘方	晩期5か		○	晩期4
	柱痕	晩期2~3	○	晩期前半	○
	覆土		晩期3か		晩期中葉~後葉

【小結】掘方と柱痕出土の土器の時期が逆転している。掘方出土土器を基準とすれば、晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第2号掘立柱建物跡(略称SB2、図68、写真26)

【位置・確認・重複】IVU・IVV-39・40グリッドに位置する(図31)。第103号建物跡の内側にある。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が2.86mと一番長く、北西辺が2.08mと一番短い。他はその中間程度であるので、平面形は、台形状を呈する。

【柱穴】Pit219、416、771、775・776によって構成されている。柱痕が確認できた。

ピットは、開口部の径63～99cm、深さは30～88cmとばらつきがある。ピット底面標高は、202.3～202.8mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写26-3, 8)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図69、写真61) 晩期の土器片などが出土している。石器は、大形剥片石器などが出土している。

SB2	ピット	219	416	771
	掘方		○	○
	柱痕	○	○	
	覆土	晩期5	晩期5	晩期5

【小結】出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第3号掘立柱建物跡(略称SB3、図68、写真26)

【位置・確認・重複】IVT・IVU40グリッドに位置する(図31)。第103号建物跡の内側にある。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北西辺が2.92mと長く、南東・北東辺は2.00m台と短いので、平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit225、231、233、808によって構成されている。比較的浅い掘方である。

ピットは、開口部の径74～102cm、深さは35～52cmである。ピット底面標高は、202.8前後で揃う。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写26-14、15)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図69、写真61) 台付鉢が出土している。石器は、石鏃が出土している。

SB3	ピット	225	231	233	808
	掘方				○
	柱痕	晩期4～5	○	○	
	覆土		晩期2～4		

【小結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第4号掘立柱建物跡(略称SB4、図70、写真27)

【位置・確認・重複】IVT・IVU-39グリッドに位置する(図31)。第103号建物跡の内側にある。

【規模・形状】4本柱構成で、西側辺が少し長い台形状を呈する。

【柱穴】Pit165、178、358、800によって構成されている。

ピットは、開口部の径56～117cm、深さは13～105cmで、Pit165のみが浅い。ピット底面標高は、202.2～202.7mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写27-3, 6, 7)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図71、写真61) 破片資料が多いピット出土遺物の中で、完形に近い土器や大型土器片が出土している。器種としては、鉢・壺形土器や、台付鉢などである。図71-写61-27から29の深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器はPit178の柱痕から出土し、比較的復元できた個体が柱痕からまとまって検出できたことになる。第25号掘立柱建物跡にも類似した例が見られる。

SB4	ピット	178	257	358	800
	掘方			○	
	柱痕	晩期4～5		○	○
	覆土		晩期5	晩期	晩期5

【小結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第5号掘立柱建物跡(略称SB5、図72、写真27)

【位置・確認・重複】IVU・IVV-41グリッドに位置する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南辺が3.41mと少し長く、平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit234、252、255、384によって構成されている。

ピットは、開口部の径69～138cm、深さは31～62cmである。ピット底面標高は、202.6～202.9mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写27-13)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(写真62) 土部が出土している。

SB5	ピット	234	252	255
	掘方			
	柱痕	○	○	晩期5
	覆土			

【小結】出土土器片などから、晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第6号掘立柱建物跡(略称SB6、図72、写真28)

【位置・確認・重複】IVT・IVU-41・42グリッドに位置する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南辺が3.24m、北辺が3.08、東西は2m台の長方形を呈する。

【柱穴】Pit242、250、356、436で構成されている。

ピットは、開口部の径99～142cmで、深さは83～100cmである。ピット底面標高は、202.4m前後の範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写28-1, 3)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図73、写真62) 晩期の土器片などが出土している。覆土から晩期5期の土器片が出土している。報告書Ⅱ掲載の、Pit436から晩期5期の壺形土器が出土している。

SB6	ピット	250	356	426	436
	掘方	○			○
	柱痕	○	○	○	○
	覆土	晩期5			

【小結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第7号掘立柱建物跡(略称SB7、図74、写真28)

【位置・確認・重複】IVT・IVU-43・44グリッドに位置する(図34)。第104a号建物跡と第8号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は2m台なので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit315、411、1219、1457によって構成されているが、掘方の深さが一律ではない。

ピットは、開口部の径80~117cm、深さはPit411のみ134.4cmと深く、他は50cmである。ピット底面標高は、Pit411を除き、202.7~202.8mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写28-9)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図75、写真62) 晩期の土器片などが出土している。石器は、石鏃などが出土している。

SB7	ピット	315	411
	掘方		○
	柱痕	晩期2	○
	覆土		晩期4-5

【小結】出土土器片などから、晩期2期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第8号掘立柱建物跡(略称SB8、図74、写真29)

【位置・確認・重複】IVT・IVU-43・44グリッドに位置する。第7号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北辺3.12mが長く、いくぶん東西が長い。

【柱穴】Pit285、380、388、390によって構成されている。Pit285は明瞭な柱痕を残している。

ピットは、開口部の径85~138cm、深さは62~110cmとばらつきがある。ピット底面標高は、Pit380が202.6mで他は202.2程度である。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写29-1~7)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図75、写真62) 深鉢の底部、鉢形土器、石器は石鏃、石錐、石製円盤などが出土している。

SB8	ピット	285	380	388	390
	掘方		○	○	
	柱痕	晩期3		後期後葉 ~ 晩期前葉	○
	覆土				

【小結】出土土器片などから、晩期3期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第9号掘立柱建物跡(略称SB9、図76、写真29)

【位置・確認・重複】IVU・IVV-45・46グリッドに位置する(図38)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、一辺が3m台なので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit447、449、473、519によって構成されている。北辺と南辺ライン状にPit328とPit462があり、当初これらを含めた6本柱と推定したが、位置的に不釣り合いが大きいため最終的に4本柱と判断した。

ピットは、開口部の径85～131cm、深さはPit447が85cmである以外は、100cmを超える。ピット底面標高は、202.3～202.6mの範囲に取まる。

【出土遺物】(図77、写真62) Pit449から大形の礫石器(図77-写62-26)の他、剥片石器が出土している。

SB9	ピット	447	449	473	519
	掘方	晩期4	晩期5	○	
	柱痕	晩期中重	○	○	○
	覆土	晩期4～5		晩期4～5	

【小結】掘方と柱痕出土の土器の時期が逆転している。掘方出土土器を基準とすれば、晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第10号掘立柱建物跡(略称SB10、図78、写真30)

【位置・確認・重複】IVV・IVW-45・46グリッドに位置する(図38)。第108a号建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、北辺3.58m、南辺3.39m、東辺4.43m、西辺4.54mと南北に長い長方形を呈する。

【柱穴】Pit450、463、653、565の構成である。Pit463は、掘方が浅い。

ピットは、開口部の径87～118cm、深さは38～110cmとばらつきがある。ピット底面標高は、202.3～203.0mの範囲に取まる。

【出土遺物】(図78、写真62) 第108a号建物跡と共有するPit652・653から晩期前半の土器が出土している。Pit450の覆土から晩期5期の土器片が出土している。

SB10	ピット	450	565	653
	掘方			晩期2～3
	柱痕		○	
	覆土	晩期5		

【小結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第11号掘立柱建物跡(略称SB11、図79、写真30)

【位置・確認・重複】IVV・IVW-47・48グリッドに位置する(図42)。第108b号建物跡の内側にあり、当初その主柱穴とも考えたが、建物跡の直径に対し、主柱穴としては規模が小さいので、掘立柱建物跡として独立させた。

【規模・形状】6本柱構成で、平面形は亀甲形を呈する。各柱列間は、北西辺2.59m、他も2m台の方形である。棟持柱に相当するPit153、522間は3.24mである。

【柱穴】Pit567、518、517、507の主柱穴とPit522と153の6本柱の構成である。

ピットは、開口部の径63～128cm、深さは48～104cmとばらつきがある。ピット底面標高は、202.3～203.0mの範囲に取まるものが多い。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写30・8・9)、柱を固定していたものと思われる。Pit507脇のPit407の底面近くに、柱を支える台石が確認されている(図79)。

【出土遺物】(図80、写真62) 後期後葉から晩期中葉までの鉢形土器片、Pit153から大形の石皿などが出土している。

SB11	ピット	153	507	517	518	522	567
	掘方	晩期1b			○		○
	柱痕	○	○	○	○	○	晩期1a1b
	覆土	晩期1aか	晩期4		後期7-4		後期7-4

【小結】出土土器片などから、晩期前葉には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第12号掘立柱建物跡(略称SB12、図83)

【位置・確認・重複】VA・VB-49・50グリッドに位置する(図47)。第110号・第111号・第112号建物跡に囲まれている。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺2.65m、他も2m台なので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit1780、2029、2048、2487で構成されている。Pit2487以外はほぼ同じ深さの掘方である。

ピットは、開口部の径74~104cm、深さは77~98cmである。ピット底面標高は、202.3mの範囲に収まるものが多い。

【出土遺物】(写真62) 石器は、石錐、不定形石器、礫石器などが出土している。

【小結】時期等詳細は不明である。(最上・高橋)

第13号掘立柱建物跡(略称SB13、図81)

【位置・確認・重複】IVY-42グリッドに位置する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、1辺が1.58~1.74mの方形に近い形状を呈する。

【柱穴】Pit2642、2644、2648、2688で構成されている。Pit2688以外はほぼ同じ深さの掘方である。

ピットは、開口部の径61~77cm、深さはPit2688が38.4cmで、他は50cm台である。ピット底面標高は、202.8mの範囲に収まるものが多い。

【出土遺物】なし。

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第14号掘立柱建物跡(略称SB14、図83、写真30)

【位置・確認・重複】IVX・IVY-44グリッドに位置する(図82)。第15号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、東辺が3.54mと長い、台形状を呈する。

【柱穴】Pit2631、2633、2692、3271で構成されている。比較的浅い掘方のピットである。

ピットは、開口部の径61~89cmで、深さは32~61cmとばらつきがある。ピット底面標高は、Pit2631が202.5m以外は、202.9mの範囲に収まる。

【出土遺物】(写真62) 石製円盤が出土している。

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第15号掘立柱建物跡(略称SB15、図83、写真30)

【位置・確認・重複】IVY-43・44グリッドに位置する(図82)。第14号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北・東辺が4m台、南・西辺が3m台の台形状を呈する。

【柱穴】Pit2628、2630、2672、2684で構成されている。

ピットは、開口部の径77～90cm、深さは45～66cmである。ピット底面標高は、202.6～203.2mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写30-14、15)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】なし。

【小結】時期等詳細は不明である。

(高橋)

第16号掘立柱建物跡(略称SB16、図83、写真31)

【位置・確認・重複】IVY・VA-45・46グリッドに位置する(図82)。第17号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が3.14mの台形状を呈する。

【柱穴】Pit1828、2661、2673、2674で構成されている。

ピットは、開口部の径83～113cm、深さは74～105cmである。ピット底面標高は、202.2～202.7mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写31-10)、柱を固定していたものと思われる。Pit1828は柱痕が明瞭であり、深さ88mほどである。

【出土遺物】(写真62) 時期の明確な土器は出土していない。石裂円盤が出土している。

SB16	ピット	1828	2673	2674
	掘方	○		
	柱痕	○		○
	覆土		○	

【小結】時期等詳細は不明である。

(高橋)

第17号掘立柱建物跡(略称SB17、図83)

【位置・確認・重複】VA-45・46グリッドに位置する(図82)。第16号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北辺1.79m、東辺1.50m、南辺1.92m、西辺1.48mの長方形を呈する。

【柱穴】Pit1841、1843、2666、2695で構成されている。

ピットは、開口部の径76～105cm、深さは50～81cmである。ピット底面標高は、202.9mの範囲に収まる。

【出土遺物】(図84、写真63) 鉢形土器や、台部などが出土している。

SB17	ピット	2666
	掘方	
	柱痕	
	覆土	晩期4～5

【小結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第18号掘立柱建物跡(略称SB18、図85)

【位置・確認・重複】VD・VE-48・49グリッドに位置する(図53)。第113号建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北辺3.24m、西辺が3.20m、他が2m台であるので、平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit2490、2516、1823、2549で構成されている。西辺のピット2基よりも東辺のピット2基の方が深い。

ピットは、開口部の径99～127cm、深さは63～123cmとばらつきがある。ピット底面標高は、201.7～202.2mの範囲に収まる。

【出土遺物】なし

【小結】時期等詳細は不明である。(最上・高橋)

第19号掘立柱建物跡(略称SB19、図87、写真31)

【位置・確認・重複】VC・VD-50・51グリッドに位置する(図53)。第113号建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が3.97m、南東辺が3.87m、他が3m前半台である。平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit1623、2492、2535、2709で構成されている。ほぼ同規模の掘方であり、柱痕もはっきり残っている。

ピットは、開口部の径130～180cm、深さは114～119cmである。ピット底面標高は、201.8～201.9mの範囲に収まる。

Pit1623や2709(図87)のように、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写31-2、4、7)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図88、写真63) 晩期中葉以降の土器が出土している。

SB19	ピット	1623	2492	2535	2709
	掘方	○	○	○	○
	柱痕	晩期4～5	○	○	○
	覆土			晩期4	○

【小結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(最上・高橋)

第20号掘立柱建物跡(略称SB20、図85)

【位置・確認・重複】VD・VE-50・51グリッドに位置する(図53)。第113号建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南辺が2.06mと長く、他が1m台であるので、平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit1819、2515、2531、2722で構成されている。ピットの掘方の深さに一定性はない。

ピットは、開口部の径101～127cm、深さは70cmと、104cm、138cmとばらつきがある。ピット底面標高は、201.6～202.2mの範囲に収まる。

【出土遺物】(図86、写真63) 壺形土器の体部下半に黒色付着物がみられる。石器は、剥片石器など

が出土している。

SB20	ピット	2722
	掘方	
	柱痕	晩期
	覆土	

【小結】晩期に帰属する。

(最上・高橋)

第21号掘立柱建物跡(略称SB21、図85、写真32)

【位置・確認・重複】VE・VF-50・51グリッドに位置する(図53)。

【規模・形状】4本柱構成で、北辺3.86mが一番長いが、他の辺も3m後半台なので、ほぼ等しい。平面形は方形である。

【柱穴】Pit1680、1687、2766、2905によって構成されている。ほぼ同規模の掘方である。

ピットは、開口部の径100～143cm、深さは85～123cm前後とばらつきがある。ピット底面標高は、201.4～201.8mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写32-2)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図86、写真63) 鉢形土器や剥片石器が出土している。

SB21	ピット	1680	1687	2905
	掘方		○	
	柱痕	晩期4～5	○	○
	覆土			

【小結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。

(最上・高橋)

第22号掘立柱建物跡(略称SB22、図89、写真33)

【位置・確認・重複】VE・VF-47グリッドに位置する(図55)。第114a号・第114b号建物跡と重複する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が3.12mと一番長く、他は2m台であるので、平面形は不整形形状を呈する。

【柱穴】Pit1967、1974(2187)、2351、2564によって構成されている。ほぼ同規模の掘方である。

ピットは、開口部の径107～129cm、深さは99～129cmである。ピット底面標高は、201.6～202.0mの範囲に収まるものが多い。

ピットの覆土は、Pit1967のように(図89)、柱穴は掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写33-3)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図90、写真63) 鉢形土器、台部、石器などが出土している。

SB22	ピット	1967	1974	2351	2564
	掘方	○	晩期	晩期5	○
	柱痕	晩期3			
	覆土	晩期		晩期5	

【小結】掘方と柱痕出土の土器の時期が逆転している。掘方出土土器を基準とすれば、晩期5期には廃絶されたものと思われる。

(高橋)

第23号掘立柱建物跡(略称SB23、図89、写真34)

【位置・確認・重複】VD・VE-46・47グリッドに位置する(図55)。第114a号・第114b号建物跡と重複する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、西辺が3.45mと長く、北辺が3.16m、他の2辺は2m台であるので、平面形は台形状を呈する。

【柱穴】Pit2181、2189、2359、2585によって構成されている。北辺を構成するPit2181、2189は南辺を構成する2基のピットよりいくぶん平面形状は小さい。深さはPit2181が浅く、他はほぼ同じ深さである。

ピットは、開口部の径65~186cm、深さは59~125cmとばらつきがある。開口部は65~84cmと146~168cmの2つに区分できる。深さも59~87cmと、124~125cmの2つに区分できる。両者是对応しているわけではない。ピット底面標高は、201.6~202.4mの範囲に収まる。

ピットの覆土は、Pit2189のように(図89)、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写34-8)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】時期の明確な土器は出土していない。

SB23	ピット	2359
	掘方	○
	柱痕	
	覆土	

【小結】時期等詳細は不明である。

(高橋)

第24a号掘立柱建物跡(略称SB24a、図93、写真34)

【位置・確認・重複】VH・VI-44・45グリッドに位置する(図91)。第4号盛土遺構下に位置する。第24b号掘立柱建物跡とPit2454を共有する。

【規模・形状】3本柱構成で、Pit2433と2455を結んだ線あたりから斜面が始まる。斜面下側、北東隅部分に、組み合わせるピットは確認できなかった。各柱列間は、西辺4.02m南辺3.63mである。

【柱穴】Pit2433、2439、2454によって構成されている。

ピットは、開口部の径99~113cm、深さは96~108cmである。ピット底面標高は、202.0~202.2mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写34-4)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】時期の明確な土器は出土していない。

【小結】時期等詳細は不明である。

(齋藤・最上・高橋)

第24b号掘立柱建物跡(略称SB24b、図93、写真33)

【位置・確認・重複】VH・VI-44・45グリッドに位置する(図91)。第4号盛土遺構下に位置する。第24a号掘立柱建物跡とPit2454を共有する。

【規模・形状】4本柱構成で、東辺4.10m、他の3辺は3m台の台形状を呈する。

【柱穴】Pit1904、2424、2454、2494で構成される。Pit2794は斜面下にあるので、掘方下面のみ検出さ

れている。

ピットは、開口部の径61～112cmで、深さは、Pit2794が斜面下にあるので、掘方は20cm程度であるが、他は90～98cmである。ピット底面標高は、201.9～202.3mの範囲に収まる。

【出土遺物】(図95、写真64) Pit1904の上層から石製品が出土している。

【小結】時期等詳細は不明である。(齋藤・最上・高橋)

第25号掘立柱建物跡(略称SB25、図94、写真35～36)

【位置・確認・重複】VH・VI-42・43グリッドに位置する(図91)。第4号盛土遺構の下に位置する。

【規模・形状】6本柱構成で、平面形は長方形を呈する。各柱列間は、北辺5.77m、南辺6.02m、東辺2.88m、西辺2.39mの長方形を呈する。

当初Pit1905、1913、1914、1915の4本柱と考えていたが、その西で検出されたPit3127と2933によって6本柱と判断した。ただ後で検出された2本、特にPit3127は位置的に少し南側になるので、北辺は一直線というわけではない。Pit3127は掘方の大きさ深さ共に他のピットと異なっているので、4本柱であった可能性もある。4本柱の場合は東辺2.88m、南辺2.92m、西辺2.77m、北辺2.98mの方形である。

【柱穴】Pit1905、1913、1914、1915、2933、3127で構成されている。

ピットは、開口部の径96～182cmで、深さは69～128cm、Pit3127と2933は59.2cmと96.0cmである。ピット底面標高は、201.8～202.2mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写35-2,5)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図95、写真64) Pit1914の柱痕から4個体の土器が出土している。図95-写64-10は大型の壺形土器であり、平口縁で突起1箇所残存(欠損。2個一組か)している。口縁部はミガキ整形であり、RL縄文が体部に施文されている。接合しなかったが、底部は平底である。図95-写64-11は、晩期3期の赤彩の壺形土器である。口縁にB突起1単位(2個一組)を持ち、頸部と胴部の境に隆帯1条(隆帯上沈線1条、突起1箇所残存)を有する。器面はミガキで整形され、底部は凹底である。完形に近い壺形土器が2点まとまって柱痕から出土していることは注目される。

石器は、石匙など剥片石器や礫石器などが出土している。

SB25	ピット	1905	1913	1914	1915	2933
	掘方		晩期中葉	○		○
	柱痕	○	晩期2-4	晩期4	晩期4	○
	覆土	晩期3	後期7-4			晩期2

【小結】出土土器片などから、晩期4期には廃絶されたと考えられる。柱痕から壺形土器が2点出土したことは、何らかの儀礼(柴田1993)を示している可能性がある。(齋藤・最上・高橋)

第26号掘立柱建物跡(略称SB26、図96、写真36)

【位置・確認・重複】VG・VH-41・42グリッドに位置する(図92)。第27号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】4本柱構成で、東辺が3.09m、他が2m台の台形を呈する。

【柱穴】 Pit2925、2934、3031、3041で構成されている。

ピットは、開口部の径96～112cm、深さは84～97cmである。ピット底面標高は、201.9～202.1mの範囲に収まる。

【出土遺物】 (図97、写真63) 鉢形土器や石匙が出土している。

SB26	ピット	2925	3031
	掘方	晩期	晩期4～5
	柱痕		
	覆土		

【小結】 出土土器片などから、晩期4～5期には構築されたと考えられる。(最上・高橋)

第27号掘立柱建物跡(略称SB27、図96、写真36)

【位置・確認・重複】 VG・VH-40・41グリッドに位置する(図92)。第26号掘立柱建物跡と重複している。

【規模・形状】 4本柱構成で、各柱列間は、北辺が3.1mで他は2m台であるので、平面形は台形状である。

【柱穴】 Pit3007、3009、3113、3125で構成されている。

ピットは、開口部の径118～162cm、深さは72～96cmである。ピット底面標高は、201.9～202.2mの範囲に収まるものが多い。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写36-10)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】 (図97、写真63) 中期の土器片、後期から晩期の土器片、石器が出土している。

SB27	ピット	3009	3113	3125
	掘方	○		
	柱痕	後期7-4		
	覆土	中期	晩期1b	晩期4～5

【小結】 出土土器片などから、柱痕出土から、後期後葉には廃絶されたと考えられる。(最上・高橋)

第28号掘立柱建物跡(略称SB28、図96)

【位置・確認・重複】 VG-40グリッドに位置する(図92)。

【規模・形状】 4本柱構成で、各柱列間は、北辺が1.90mで、他は2m台の台形を呈する。

【柱穴】 Pit2997、3011、3019、3108で構成されているが、Pit2997のみ、規模、深さが他の3基と異なる。

ピットは、開口部の径50～120cm、深さは20～63cmとばらつきがある。ピット底面標高は、202.2～202.7mの範囲に収まる。

【出土遺物】 (図97、写真63) Pit2997から石錐(図97-写63-41)が出土している。

SB28	ピット	2997
	掘方	
	柱痕	
	覆土	○

【小結】 時期等詳細は不明である。(最上・高橋)

第29号掘立柱建物跡(略称SB29、図98、写真32)

【位置・確認・重複】VF～VH-37・38グリッドに位置する(図63)。第117号建物跡と重複している。このピットはシルト質の地山を掘り込んでいる。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北辺が4.00m、東辺が3.49mの台形を呈する。

【柱穴】Pit2383、2888、3175、3349で構成されている。Pit3175の柱痕下から柱を支える台石が検出できた(図99、写32-8・9)。台石には磨面などの使用痕はみられなかったので、石皿などの転用品ではない。

ピットは、開口部の径103～134cm、深さは64～92cmである。ピット底面標高は、202.2～202.5mの範囲に収まる。

ピットの主柱穴規模は、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。Pit3175の覆土に黄褐色の粘土層(写32-8)が確認できた。

【出土遺物】(図100、写真64) 鉢形土器や赤彩の石皿(写真64-31)が出土している。

SB29	ピット	2888	3175
	掘方		○
	柱痕		○
	覆土	晩期4～5	

【小結】出土土器片などから、遅くとも晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。柱痕下に台石が確認できた。柱痕の径も大きいので、太い柱が立てられていたと思われ、それを支える台石が敷かれたと思われる。シルト質の地山ということもあり、柱が上屋の重量で沈まない配慮であったと考えられる。(高橋)

第30号掘立柱建物跡(略称SB30、図98、写真37)

【位置・確認・重複】VD～VF-39・40グリッドに位置する(図63)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北辺と南辺が4m台、東西辺が3m台の台形状を呈する。

【柱穴】Pit2823、2831、2832、2871、2980で構成されている。

ピットは、開口部の径85～144cm、深さは、Pit2871が130cmと深い他は、60～70cmである。ピット底面標高は、Pit2871が201.7mであり、他は202.4m前後で揃う。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写37-1～3)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(写真65) 時期の明確な土器は出土していない。石核(写65-12)が出土している。

SB30	ピット	2823	2831	2871
	掘方	○	○	○
	柱痕	○	○	○
	覆土	○		

【小結】時期等詳細は不明である。

(高橋)

第31号掘立柱建物跡(略称SB31、図98、写真37)

【位置・確認・重複】VD・VE-38～40グリッドに位置する(図63)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南辺が4.17mと一番狭いが、他も4m台なので、平面形

は方形を呈する。

【柱穴】Pit2860、2890、2964、2974で構成されている。

ピットは、開口部の径84～161cm、深さは、98～113cmと、40cm前後の2種類ある。ピット底面標高は、201.9～202.7mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写37-4)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図100、写真65) 鉢形土器や、剥片石器・礫石器などが出土している。

SB31	ピット	2860	2890
	掘方		○
	柱痕		
	覆土	晩期5	晩期1b

【小結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第32号掘立柱建物跡(略称SB32、図98)

【位置・確認・重複】VC-40グリッドに位置する(図63)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南辺が2.05mで、他は1.9m台の方形状を呈する。

【柱穴】Pit2875、3259、3260、3285で構成されている。

ピットは、開口部の径72～91cm、深さは40～65cmである。ピット底面標高は、202.7～202.8m前後で揃う。

【出土遺物】なし

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第33号掘立柱建物跡(略称SB33、図102、写真37)

【位置・確認・重複】VE-35グリッドに位置する(図101)。第34号掘立柱建物跡と重複する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南辺が2.59mで短い、他も2m台であるので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit1266、1294、1298、1303で構成されている。

ピットは、開口部の径95～154cm、深さは53～100cm前後とばらつきがある。ピット底面標高は、202.3～202.8mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写37-5、7、8、12)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図103、写真65) 鉢形土器が出土している。

SB33	ピット	1294	1298
	掘方		晩期4～5
	柱痕	晩期4～5	
	覆土		

【小結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第34号掘立柱建物跡(略称SB34、図102、写真38)

【位置・確認・重複】VE・VF-35・36グリッドに位置する(図101)。第33号掘立柱建物跡と重複する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が2.27mで、南東・北西辺が3m台の長方形を呈する。

【柱穴】Pit1257、1299、2813、3056で構成されている。

ピットは、開口部の径82~120cm、深さは38~76cmとばらつきがある。ピット底面標高は、202.5~202.7mの範囲に取まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写38-2、3、5)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図103、写真65) 鉢形土器が出土している。

SB34	ピット	1257
	掘方	晩期4~5
	柱痕	
	覆土	

【小結】出土土器片などから、晩期4~5期には構築されたと考えられる。(高橋)

第35号掘立柱建物跡(略称SB35、図102、写真38)

【位置・確認・重複】VC・VD-34・35グリッドに位置する(図101)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、東辺が3.39mで一番長い、他の辺も3m台であるので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit1241、1244、1269、1282で構成されている。

ピットは、開口部の径76~184cm、深さは73~93cmである。開口部のばらつきが大きい。ピット底面標高は、202.2~202.4mの範囲に取まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写38-8、9、11、12、14)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図103、写真65) 浅鉢形土器、鉢形土器や壺形土器などが出土している。

SB35	ピット	1241	1269
	掘方	晩期3か	晩期3
	柱痕		
	覆土		

【小結】出土土器片などから、晩期3期には構築されたと考えられる。(高橋)

第36a号掘立柱建物跡(略称SB36a、図105、写真39)

【位置・確認・重複】IVY・VA-35グリッドに位置する(図104)。第36b号掘立柱建物跡とPit1206を共有する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、東辺が3.82mで一番長い、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit1206、1207、1215、1311で構成されている。

ピットは、開口部の径108~141cm、深さは34~75cm前後とばらつきがある。ピット底面標高は、202.1~202.3mの範囲に取まる。

ピットの支柱穴規模は、掘方覆土に大形の礫が入り込んでいる。中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写39-3)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図103、写真65) 鉢形土器、底部、石織、礫石器が出土している。

SB36a	ピット	1206	1215
	掘方	後期7-4	
	柱痕	晩期4-5	
	覆土		晩期3

【結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第36b号掘立柱建物跡(略称SB36b、図105)

【位置・確認・重複】IVY・VA-36グリッドに位置する(図104)。第36a号掘立柱建物跡とPit1206を共有する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、南東辺が3.46mで、一番長く、平面形は長方形を呈する。

【柱穴】Pit1206、2803、2804、2805で構成されている。

ピットは、開口部の径79～141cm、深さは44～75cmである。Pit1206は、規格としては第36a号ピットに近い。ピット底面標高は、202.1～202.6mの範囲に収まる。

【出土遺物】(写真65) Pit1206は第36a号掘立柱建物跡と同一である。

SB36b	ピット	1206	2805
	掘方	後期7-4	
	柱痕	晩期4-5	○
	覆土		○

【結】出土土器片などから、晩期4～5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第37号掘立柱建物跡(略称SB37、図105、写真39)

【位置・確認・重複】IVX・IVY-35・36グリッドに位置する(図104)。第38号掘立柱建物跡と重複する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、東辺が3.10mで一番短い、他の3辺も3m台なので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit654、709、1228、1336で構成されている。

ピットは、開口部の径93～158cm、深さは82～99cmである。ピット底面標高は、201.9～202.0mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写39-10,12,14)、柱を固定していたものと思われる。Pit654の柱痕の覆土は黄褐色土に近い。

【出土遺物】(図103、写真65) 鉢形土器、浅鉢形土器、石器などが出土している。

SB37	ピット	709	1225	1228	1336
	掘方		○	晩期5	
	柱痕	晩期5			○
	覆土				

【年代測定】Pit1228の土器(図103-写65-32)付着漆の測定の結果(年代測定:KAWA(1)-171)、2540±20 yrBPという結果であった。土器は晩期5期の矢羽状文を持つ浅鉢形土器である。

【小結】出土土器片などから、晩期5期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第38号掘立柱建物跡(略称SB38、図105、写真40)

【位置・確認・重複】IVX-35・36グリッドに位置する(図104)。第37号掘立柱建物跡と重複する。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、西辺が2.78mと一番長い、他の3辺も2m台なので、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit660、684、705、706で構成されている。

ピットは、開口部の径97～158cm、深さは59～71mである。開口部の径にばらつきはあるが、深さについては、ばらつきは少ない。ピット底面標高は、202.2前後で揃う。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写40-3)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図103、写真66) 鉢形土器、台部、剥片石器、磨製石斧、礫石器などが出土している。

SB38	ピット	660	684	705	706
	掘方	○			
	柱痕	○	晩期3		
	覆土	晩期2~4		晩期	晩期3

【小結】出土土器片などから、晩期3期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第39号掘立柱建物跡(略称SB39、図107、写40)

【位置・確認・重複】VA-37・38グリッドに位置する(図106)。

【規模・形状】3本柱構成で、平面形は推定で方形を呈する。各柱列間は、1辺2.8mの方形である。

【柱穴】Pit3238、3241、3243で構成されている。南東隅にあたる位置にはピットは確認できなかった。

ピットは、開口部の径74～119cm、深さは46～91cm前後とばらつきがある。Pit3241の規格が異なる。ピット底面標高は、202.4～202.5mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写40-11)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】なし

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第40号掘立柱建物跡(略称SB40、図107、写真40)

【位置・確認・重複】IVX・IVY-38グリッドに位置する(図106)。

【規模・形状】各柱列間は、南東辺が2.08m、他は1m台の台形を呈する。

【柱穴】Pit3230、3297、3306、3340で構成される。

ピットは、開口部の径53～78cm、深さは37～46cmである。ピット底面標高は、202.5～202.7mの範囲に収まる。

【出土遺物】なし

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第41号掘立柱建物跡(略称SB41、図107、写真40)

【位置・確認・重複】IVX・IVY-39グリッドに位置する(図106)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が2.35m、他は1m台であり、平面形は台形を呈する。

【柱穴】Pit3226、3227、3228、3264で構成されている。

ピットは、開口部の径47~110cm、深さは19~64cmとばらつきがある。Pit3226の規格が異なる。ピット底面標高は、202.5~203.0mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し(写40-15)、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】(図107、写真65) 鉢形土器が出土している。

SB41	ピット	3226	3227	3228
	掘方			
	柱痕		○	○
	覆土	晩期4		

【小結】覆土出土土器片などから、遅くとも晩期4期には廃絶されたものと思われる。(高橋)

第42号掘立柱建物跡(略称SB42、図107)

【位置・確認・重複】VA・VB-39・40グリッドに位置する(図106)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北辺が2.95m、平面形は台形を呈する。

【柱穴】Pit3202、3210、3280、3338で構成されている。

ピットは、開口部の径63~115cm、深さは40~52cmとばらつきがある。Pit3280の規格が異なる。ピット底面標高は、202.6~203.0mの範囲に収まる。

【出土遺物】なし

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第43号掘立柱建物跡(略称SB43、図107)

【位置・確認・重複】VA・VB-40・41グリッドに位置する(図106)。

【規模・形状】4本柱構成で、各柱列間は、北東辺が2.50mと一番短い他は、2.7m台であり、平面形は方形を呈する。

【柱穴】Pit3274、3291、3293、3301によって構成されている。ほぼ同規模の掘方である。

ピットは、開口部の径62~81cm、深さは32~68cm前後とばらつきがある。ピット底面標高は、202.7~203.1mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】なし

【小結】時期等詳細は不明である。(高橋)

第44号掘立柱建物跡(略称SB44、図108、写真40)

【位置・確認・重複】VI・VJ-37・38グリッドに位置する(図108)。北捨場との境界付近で検出された。多くの建物跡、掘立柱建物跡が確認できた地山は礫層であるのに対し、第44号掘立柱建物跡は地

山がシルト層の場所で検出された。

【規模・形状】 4本柱構成で、各柱列間は、南辺が3.70mであり、平面形は台形を呈する。

【柱穴】 Pit3162、3163、3168、3169によって構成されている。東辺を構成するピットの方が、深い掘方である。

ピットは、開口部の径31～40cm、深さは16～38cmである。ピット底面標高は、202.8～203.3mの範囲に収まる。

ピットの中には、柱痕の周囲を囲むように礫が分布し、柱を固定していたものと思われる。

【出土遺物】 (図108、写真65) 後期後葉の土器片が出土している。

SB44	ピット	3168
	掘方	
	柱痕	
	覆土	後期7-4

【小結】 出土土器片などから、遅くとも縄文時代後期後葉には廃絶されたものと思われる。(高橋)

(3) その他のピット

組み合わせが確認できなかつたピットは多数検出されている(表14)。

【規模・形状】これらは、開口部径が、20cmに満たないものから、150cmを超えるまで差がある。前述したように、建物跡の主柱穴と掘立柱建物跡は、ピットの開口部径は、60cmを超えるあたりから増加してくる。そして、主柱穴になるピットは1mを超えるものが多い。そのため、60～70cmが主柱穴と壁柱穴を分ける境があるものと思われる。

それぞれ柱痕を残すもの、そうでないものがあり、主柱穴クラスの規模は、柱痕が残っているものが多い。掘方の覆土は、暗褐色から黒褐色の色調で、礫が多く入り込んでいるものもある。中には覆土上面に黄褐色の硬化した粘土層が堆積しているピットが確認されている(写29-5など)。貼り床の一部が柱穴の上部に一部残存した可能性がある。

他に特記事項として、SI103を構成するPit186の覆土内に、配石状に礫を組んだ施設が確認できた(写9-4)。その性格は不明である。Pit407やSI104aを構成するPit270の底面付近に礫(写10-1)が確認できた。柱を支える台石と思われ、SB29のPit3175に類似(写32-9)が見られる。SI103を構成するPit787には、柱痕部に礫が立ったような状態(写9-16)で出土した。

【各地点での様相】北捨場の斜面にピットが確認されている(図9、写真41)。平坦な地形のみでなく、斜面にもピットが分布することが確認できた。ただ、これらのピットは、北捨場と北東捨場の境であり、包含層が比較的薄い部分で確認されている。他の斜面でも類似したピットはあった可能性はあるが、包含層掘り込みで、地山にまで掘方がのびない場合、検出は困難である。

第3号盛土遺構下部では、同遺構の下層を掘り込んでピットが構築されている(図127など)。

第33号・第34号掘立柱建物跡一帯より南東側は礫層の地山であり、同遺構より北から北西側は、地山がシルト質であり、晩期前半の土坑が形成されている。東捨場との境付近にSQ15が位置し、その辺りから徐々に地山は礫層からシルト質層に変わる。それにともないピットの密度は減少する。

【出土遺物】図109～図113(写真66～73) 確認グリッド・掘方・柱痕・覆土などの出土土器の時期については、表1に記載してある。以下特記事項のみ記述する。

土器は後期後葉から晩期後葉までであるが、晩期中葉以降の土器の方が多い。

Pit1839出土の小形鉢形土器(図111-写70-6)は、同一個体(写70-5・6 M3出土)が、第3号盛土遺構の下層、同一グリッドから出土している。そのため、第3号盛土遺構の下層出土の遺物の中には、本来ピット覆土に帰属する資料もあると考えられる。土器は、横位沈線4条、4条目に突起(横長、頂部刻目1本)があり、雲形文(沈線)が展開する。RL縄文が施文されている。底部は高台がつく。Pit2883(グリッドVE-40)出土の土器(図112-写72-12)は、破片が多い土器資料の中で、完形に近い状態で復元できた土器である。出土層は覆土であるが、かなりの破片は柱痕からも出土しているので、本来は柱痕であった可能性もある。性格的には第25号掘立柱建物跡のPit1914と類似したものであろう。口縁部に横位沈線2条、2条目に突起2単位残存し、RL縄文が施文され、底部は平底である。

写真70に掲載した、Pit2213、2214(VH-46グリッド)から縄文時代前期前葉の表館式が出土している。早期中葉から後葉の土器は川原平(4)遺跡E地区のある低位段丘上にまとまって出土している。早期から前期前葉にかけて、川原平(1)遺跡のある台地で人間活動があったと考えられる。

表1 単独ピット出土遺物と時期(1)

ピット	139	141	144	168	170	172	173	193	207	210
グリッド	ⅡX-47	ⅡV-46	ⅡU-43	ⅡV-38	ⅡU-38	ⅡU-38	ⅡU-38	ⅡU-38	ⅡV-38	ⅡU-38
掘方		○				○		晩期4		○
柱痕	晩期4		○	晩期4-5		○	石器	晩期4	○	
覆土		晩期3-4	晩期4か		晩期	晩期4		晩期5	晩期4-5	
ピット	213	214	217	218	248	260	265	279	281	292
グリッド	ⅡU-39	ⅡU-39	ⅡV-39	ⅡV-39	ⅡU-41	ⅡX-47	ⅡU-42	ⅡU-42	ⅡV-43	ⅡV-43
掘方		○			○	○			晩期	
柱痕	晩期4-5	晩期5			○		晩期5	○		
覆土			晩期5	晩期5	晩期4-5	晩期4				晩期
ピット	306	310	313	344	352-2	355	362	365	375	378
グリッド	ⅡW-43	ⅡV-44	ⅡV-43	ⅡV-44	ⅡU-41	ⅡU-41	ⅡU-43	ⅡU-46	ⅡV-47	ⅡV-43
掘方	○	晩期		○			○			
柱痕	晩期中葉～後葉	○	○		石器	○				晩期2-4
覆土	晩期4-5						晩期4-5	晩期4	晩期	
ピット	391	394	399	405	407	414	417	434	440	446
グリッド	ⅡW-48	ⅡW-43	ⅡU-44	ⅡV-42	ⅡW-47	ⅡV-38	ⅡU-41	ⅡU-42	ⅡU-47	ⅡU-43
掘方	○				晩期4-5		晩期3			
柱痕	○	石器			晩期4-5	○	○	石器		
覆土				晩期					晩期4-5	晩期5
ピット	452-1	452-2	467	475	476	477	490	492	494	499
グリッド	ⅡW-43	ⅡW-43	ⅡU-46	ⅡU-46	ⅡU-46	ⅡU-46	ⅡV-50	ⅡV-51	ⅡV-51	ⅡV-46
掘方									○	
柱痕	晩期中葉～後葉	晩期中葉～後葉	晩期	○	晩期4-5	後期7-4		○	○	○
覆土							晩期4-5	晩期2	晩期1a1b	
ピット	504	506	512	514	520	521	523	528	533	557
グリッド	ⅡV-50	ⅡV-51	ⅡW-47	ⅡW-47	ⅡW-48	ⅡW-48	ⅡV-47	ⅡV-47	ⅡT-47	ⅡV-37
掘方					○					
柱痕	○	○	○	○	晩期4	石器	晩期	石器		晩期5
覆土	後期7-4	後期7-4					晩期4-5か		晩期2-4	
ピット	563	566	568	641-1~4	661	677	679	688	734	759
グリッド	ⅡV-44	ⅡV-46	ⅡW-48	ⅡV-37	ⅡW-36	ⅡV-36	ⅡW-36	ⅡU-37	ⅡV-42	ⅡU-43
掘方		○							晩期4-5	後期後葉～晩期
柱痕		後期7-4						○	○	
覆土	晩期5		晩期2-3	晩期5	晩期5	晩期	晩期5	晩期5		
ピット	760	761	764	765	769	778	780	781	782	783
グリッド	ⅡV-40	ⅡU-44	ⅡU-40	ⅡT-38	ⅡU-40	ⅡU-38	ⅡV-44	ⅡV-44	ⅡW-38	ⅡW-38
掘方	○		晩期3		晩期		○	○		
柱痕	○			晩期1b-2				○		
覆土		晩期2か			晩期	晩期2-3	晩期5		晩期5	晩期4-5
ピット	784	785	788	792	797	806	807	809	875	1018
グリッド	ⅡW-38	ⅡV-47	ⅡV-39	ⅡU-38	ⅡU-39	ⅡU-38	ⅡU-39	ⅡU-40	ⅡV-46	ⅡX-50
掘方		石器						晩期3		
柱痕	晩期		石器	○	石器				石器	
覆土	晩期4-5			晩期5		晩期5	晩期5			後期7-4
ピット	1045	1066	1077	1214	1230	1238	1250	1251	1254	1263
グリッド	ⅡU-39	ⅡV-38	ⅡX-36	ⅡB-36	ⅡW-52	ⅡD-35	ⅡD-35	ⅡD-35	ⅡD-34	ⅡD-35
掘方		○								
柱痕	○	○	後期後葉～晩期前葉	晩期4-5	○	晩期3			石器	晩期
覆土	晩期2-3	晩期5					後期7-4	晩期		
ピット	1267	1268	1293	1304	1305	1308	1315	1414	1496	1639
グリッド	ⅡD-36	ⅡD-36	ⅡC-35	ⅡE-35	ⅡE-36	ⅡE-34	ⅡE-36	ⅡW-43	ⅡM-43	ⅡC-50
掘方								○		
柱痕			石器			晩期4-5	石器	後期後葉～晩期	石器	晩期中葉
覆土	晩期4-5	晩期4-5		晩期4-5	晩期4-5	晩期5				

表1 単独ピット出土遺物と時期(2)

ピット	1672	1839	1863	1877	1883	1887	1896	1916	1937	1941
グリッド	VD-48	VE-43	VA-47	VA-49	BY-49	BY-50	VA-48	VH-43	VE-44	VC-45
掘方	○	晩期5	後期7-3	後期7-4		晩期1a	石器	晩期前葉	○	○
柱痕	晩期2			○		後期7-4				
覆土					後期8か					晩期4~5
ピット	1971	1972	2049	2176	2182	2205	2213	2214	2267	2305
グリッド	VF-47	VF-47	VA-50	VE-45	VE-46	VG-45	VH-46	VH-46	VC-43	VG-45
掘方	○	○	石器						石器	石器
柱痕										
覆土	晩期5	晩期5		晩期4	晩期4~5	晩期4~5	表館式	後期8~晩期1a		
ピット	2314	2329	2350	2369	2379	2422	2462	2466	2491	2536
グリッド	VF-42	VF-46	VG-46	VG-37	VG-37	VH-44	VI-43	VB-51	VC-51	VD-50
掘方		晩期4~5		石器	晩期	石器		石器	石器	
柱痕		晩期4~5								
覆土	後期8~晩期1a		晩期4~5				後期後葉~晩期			晩期4
ピット	2560	2572	2602	2607	2634	2701	2723	2724	2730	2780
グリッド	VD・VE-46	VA-44	VF-38	VH-36	BY-45	VF-37	VC-50	VD-50	VF-50	VD-50
掘方		石器				石器	石器	石器		
柱痕										
覆土	後期後葉		後期7-4	晩期4~5	晩期3				晩期4~5	晩期4~5
ピット	2762	2800	2814	2826	2833	2841	2848	2863	2865	2872
グリッド	VE-51	VF-50	VE-36	VE-41	VF-38	VE-36	VF-41	VF-38	VE-40	VF-39
掘方	石器			○	石器		石器		晩期5	
柱痕				晩期4~5						晩期5
覆土		晩期	晩期	晩期5		晩期5				晩期中葉
ピット	2881	2883	2885	2935	2952	2958	2959	2960	2972	2983
グリッド	VG-39	VE-40	VG-39	VG-41	VF-37	VH-37	VE-41	VE-37	VD-41	VE-37
掘方	晩期5			晩期4~5					石器	
柱痕			晩期4	○	○					
覆土	○	晩期4~5				晩期5	晩期4~5	晩期5		
ピット	3043	3045	3047	3048	3091	3105	3109	3111	3154	3171
グリッド	VI-40	VI-40	VH-40	VI-40	VC-38	VI-40	VI-40・41	VH-40	VH-37	VH-37
掘方										
柱痕	石器	石器							晩期1aか	
覆土			晩期5	晩期5	後期8	晩期5	晩期5	晩期4~5		晩期5
ピット	3172	3215	3239	3262	3279	3286				
グリッド	VH-38	VA-39	BY-41	VC-39	BY-41	BX-38				
掘方			晩期5							
柱痕		石器	○	石器	石器	晩期				
覆土	晩期5									

組み合わせのないピットの内、時期の判明したピットは、多くは同時期の建物跡・掘立柱建物跡の周辺に分布している。しかし晩期前半は台地の縁辺側に多いのに対し、晩期後半になると、盛土遺構下にも分布している。

図113(写73-1～38)は報告書Ⅲ範囲のピットから出土した土器・石器である。晩期前半の遺物が出土している。この一帯は第1号盛土遺構の下から晩期前半の墓域が確認されており、ピットは当該期に構築されたものと推定されている。本報告の資料も晩期前半期が多いので、報告書Ⅲの報告内容と合致する。Pit1369(グリッドVH-34・35)から出土した図113-写73-33は、後期後葉から晩期前葉の土器であり、沈線間に短沈線列1条。LR縄文が施文され、底部は高台を持つ。図113-写73-5、Pit600出土の土器は、報告書Ⅱに記載したSI101出土である。

写真73-39～53の土器・石器は、当初ピットとしていたが、最終的に風倒木などピットと認定しなかった遺物である。本来遺構外であるが、ここで掲載する。

【年代測定】炭化材から、Pit420(SI04bの主柱穴候補)の測定の結果、 2830 ± 20 と、 2800 ± 20 yrBPという結果がでた。

IVW-49グリッド、Pit124の上面でB-Tm火山灰が確認されている(写41-15、16、報告書Ⅳで報告)。

【小結】ピットから出土した土器から、縄文前期、縄文時代後期後半から晩期後半までと幅があるが、主体的に出土しているのは晩期後半である。主柱穴規模のピットも多数あるので、建物跡などは現状で確認できる以上に存在したと思われる。

3 土坑

第6号土坑(略称SK06、図114、写真10-7)

【位置・確認・重複】IVV-44グリッド、Pit722上面で検出された。

【規模・形状】不整楕円形である。

【堆積土】炭化物層が確認されている。

【出土遺物】なし。

【小結】炭素年代測定の結果、近世と考えられる。

第32号・第33号土坑(略称SK32・SK33、図114、写真3)

【位置・確認・重複】VB-34・35グリッドに位置する。遺構確認面は第Ⅲ層である。第33号の方が新しい。

【規模・形状】楕円形の平面形態である。第32号土坑の開口部は 0.72×0.68 m、底面は 0.62×0.45 m、深さ20cmである。第33号土坑の開口部は 1.49×0.92 m、底面は 1.27×0.62 m、深さ16cmである。

【堆積土】共に黒褐色土の単層である。

【出土遺物】なし。

【小結】時期等詳細は不明である。

第43号土坑(略称SK43、図114、写真3)

【位置・確認・重複】VC-33グリッドに位置する。遺構確認面は第Ⅳ層(地山)である。

【規模・形状】楕円形の平面形態である。開口部は2.35×1.10m、底面は2.21×1.03m、深さ33.6cmである。

【堆積土】褐色土の単層である。

【出土遺物】(写真74) 勾玉状の石製品が出土している(図114-1、写真74-5)。

【小結】時期等詳細は不明である。

第66号土坑(略称SK66、IHSQ24、図114、写真3)

【位置・確認・重複】VB・VC-34グリッドに位置する。開口部は1.08×0.94m、底面は0.76×0.27m、深さ25.6cmである。

【規模・形状】楕円形の平面形態である。掘方内の縁を取り囲むように礫が確認できた。

【堆積土】単層である。

【出土遺物】なし。

【小結】時期等詳細は不明である。

次の第58号から第60号土坑は、第3号盛土遺構にて確認できた。第3号盛土遺構のセクションを細分している際に、礫の不自然な混入、不連続性が確認され、その一帯に堆積層が分離できることが分かった。この礫の不自然な入り方を追うと、第3号盛土遺構の水平堆積している層を掘り込むような輪郭が得られたので、第3号盛土遺構を掘り込む遺構と認定した。第1号盛土遺構においても、盛土遺構を掘り込む土坑(SK22)が確認されており、それと関連するものと思われる。掘り込み面は第3号盛土遺構の上層からで、その上を第I層が覆うように、セクションでは表現しているが、実際は、表土と土坑の堆積層の区分がはっきりと捉えられたわけではなく、便宜的にわけたので、表土掘り込みの可能性もある。

以下この3つの遺構について個別に記載する。

第58号土坑(略称SK58、図126、写真48-6)

【位置・確認・重複】VB・VC-42・43グリッド、第3号盛土遺構の東西ベルトにかかって検出できた。第3号盛土遺構の上面から掘り込んでいる。

【規模・形状】円形の平面形態である。

【堆積土】土色、構成物などは、第3号盛土遺構を掘り込んでいるため、ほぼ同じである(図125)。

【出土遺物】土器・石器などが出土している。第3号盛土遺構よりも新しい時期の遺物は含まれていない。

【小結】第3号盛土遺構を掘り込んでいるので、晩期5期以降の土坑である。

第59号土坑(略称SK59、図126、写真48-3)

【位置・確認・重複】VB・VC-44・45グリッド、第3号盛土遺構の東西ベルトにかかって検出できた。第3号盛土遺構の上面から掘り込んでいる。

【規模・形状】円形の平面形態である。

【堆積土】土色、構成物などは、第3号盛土遺構を掘り込んでいるため、ほぼ同じである(図125)。

【出土遺物】(写真74) 土器・石器・土製品などが出土している。第3号盛土遺構よりも新しい時期

の遺物は含まれていない。

【小結】第3号盛土遺構を掘り込んでいるので、晩期5期以降の土坑である。

第60号土坑(略称SK60、図126、写真49-5)

【位置・確認・重複】VC-43グリッド、第3号盛土遺構の南北ベルトにかかって検出できた。第3号盛土遺構の上面から掘り込んでいる。

【規模・形状】円形の平面形態である。

【堆積土】土色、構成物などは、第3号盛土遺構を掘り込んでいるため、ほぼ同じである(図125)。

【出土遺物】(写真74) 土器・石器などが出土している。第3号盛土遺構よりも新しい時期の遺物は含まれていない。石核(図114、写74-6)が出土している。

【小結】第3号盛土遺構を掘り込んでいるので、晩期5期以降の土坑である。

4 焼土遺構

第67号焼土遺構(略称SN67、図19、写真3)

【位置・確認・重複】VB-44グリッドに位置する。第3号盛土遺構の下層を除去したところ、地山面に赤い土層が確認できたので、焼土遺構とした。

【規模・形状】0.82×0.72mほどの不整形である。

【堆積土】非常に薄い覆土であり、セクション図は作成しなかった。土層は暗褐色の色調で、赤色土粒を含んでいた。

【出土遺物】なし

【小結】第3号盛土遺構の下から検出されたので、晩期4期以前と考えられる。

(高橋)

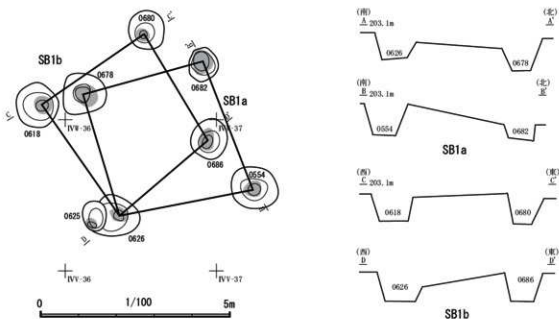


圖66 第1号掘立柱建物跡

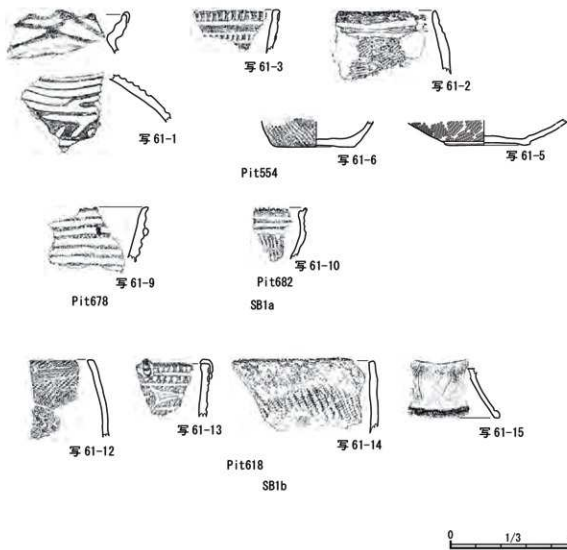


圖67 第1号掘立柱建物跡出土遺物

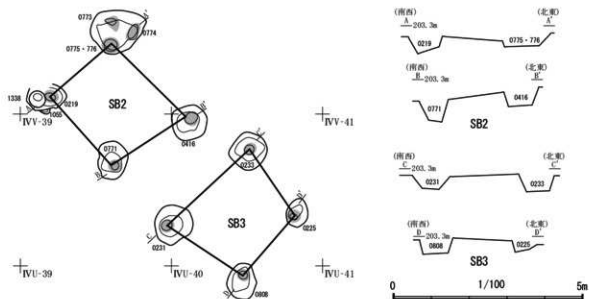


图68 第2号・第3号掘立柱建物跡



图69 第2号・第3号掘立柱建物跡出土遺物

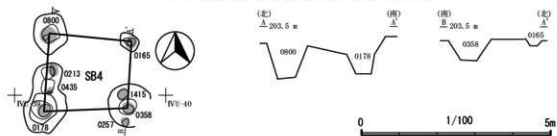


图70 第4号掘立柱建物跡

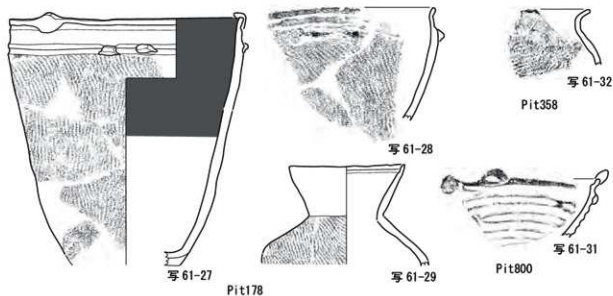


图71 第4号掘立柱建物跡出土遺物

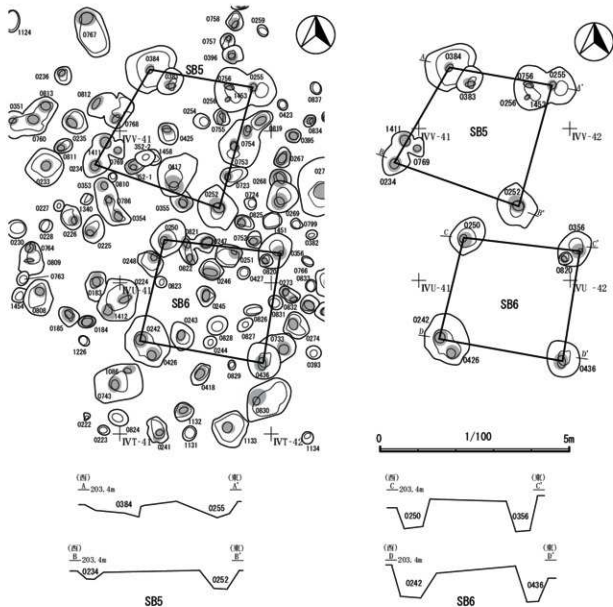


図72 第5号・第6号掘立柱建物跡



写 62-2

Pit248・250

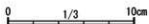


図73 第6号掘立柱建物跡出土遺物

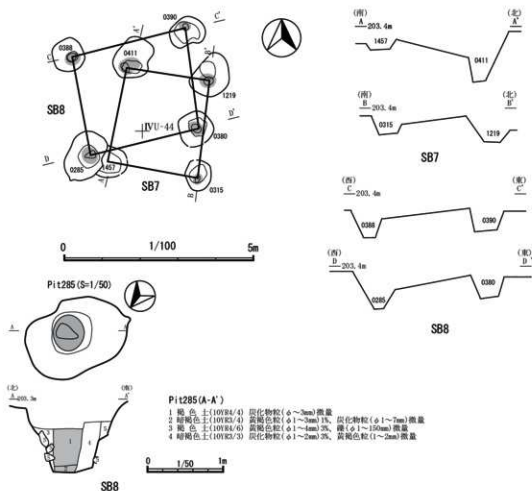


図74 第7号・第8号掘立柱建物跡

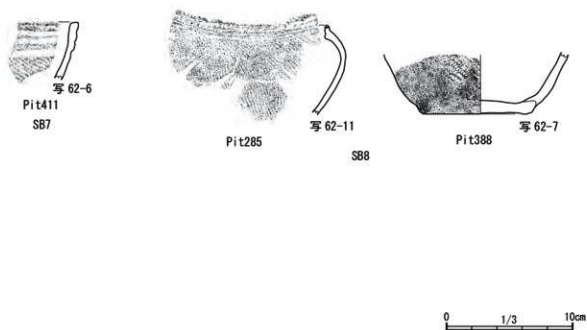


図75 第7号・第8号掘立柱建物跡出土遺物

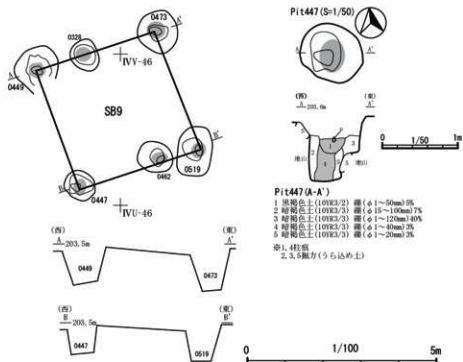


图76 第9号掘立柱建物跡

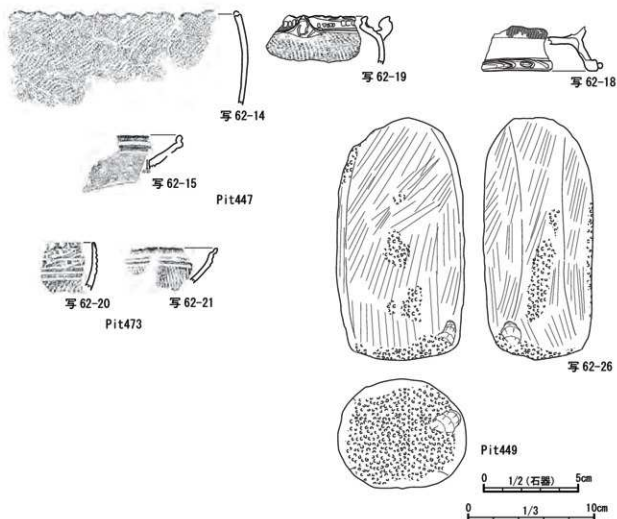


图77 第9号掘立柱建物跡出土遺物

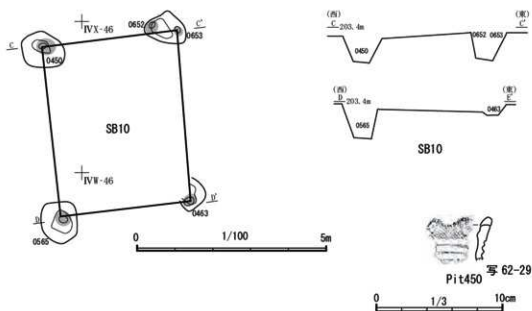


図78 第10号掘立柱建物跡と出土遺物

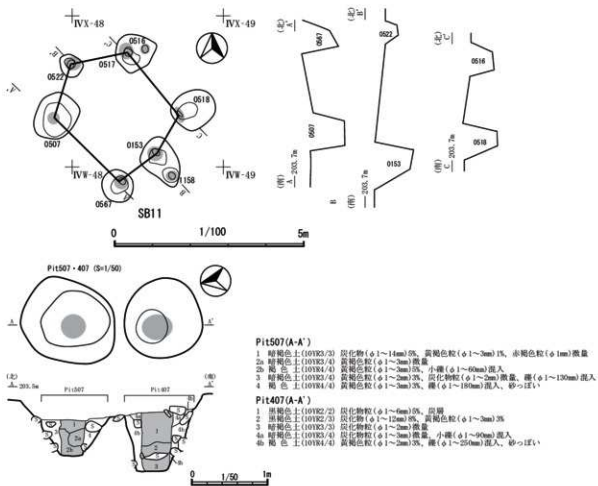


図79 第11号掘立柱建物跡

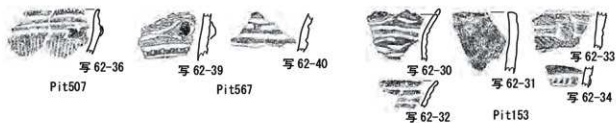


図80 第11号掘立柱建物跡出土遺物

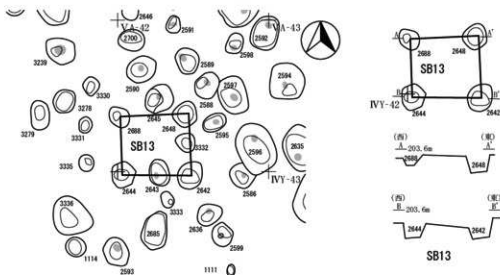


図81 第13号掘立柱建物跡

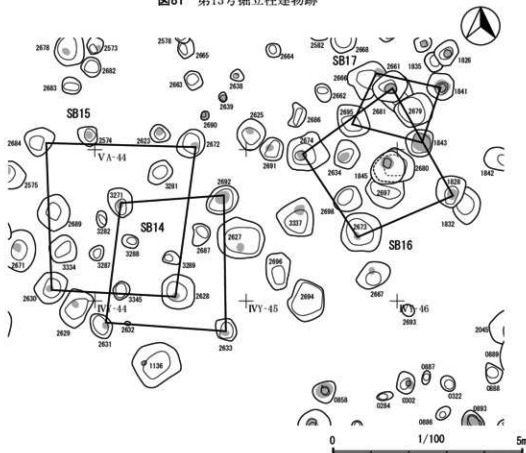


図82 IVX~VA-43~46一帯の遺構配置図

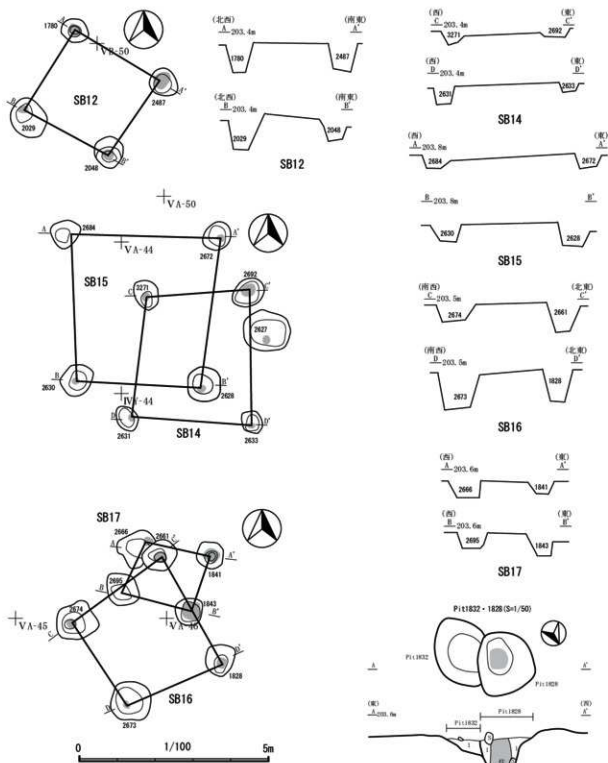


図83 第12号・第14号～第17号掘立柱建物跡

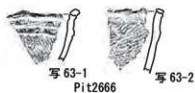
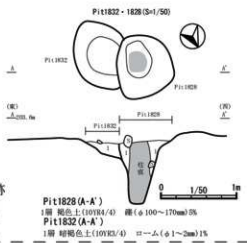


図84 第17号掘立柱建物跡出土遺物



Pit1822 (A-A)
1層 褐色土(10YR4/4) 礫(φ100~170mm)5%
Pit1832 (A-A)
1層 暗褐色土(10YR3/4) □→△(φ1~2mm)1%

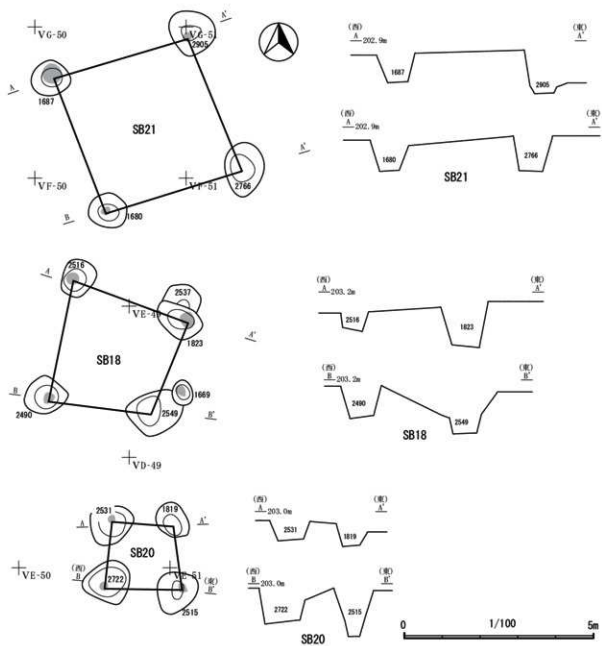


図85 第18号・第20号・第21号掘立柱建物跡

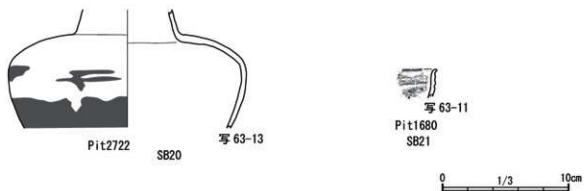
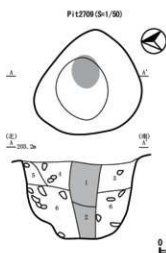
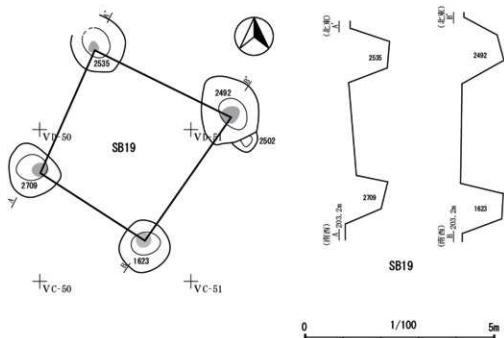


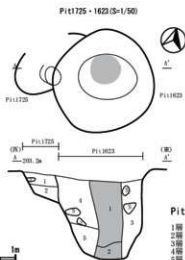
図86 第20号・第21号掘立柱建物跡出土遺物



Pit2709 (A-A')

- 1 暗褐色土(10YR3/4)
- 2 暗褐色土(10YR3/3)
- 3 濃い黄褐色土(10YR4/3)
- 4 褐色土(10YR4/4)
- 5 黄褐色土(10YR2/2)
- 6 黑褐色土(10YR2/3)

- SYR4/6赤褐色粘土粒(φ1mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%, 礫(φ20~60mm)3%
- 礫(φ20~100mm)3%, 炭化物(φ1mm)1%
- 礫(φ20~10mm)7%, 炭化物(φ1mm)1%
- SYR4/6赤褐色粘土粒(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 礫(φ30~100mm)20%



Pit1623 (A-A')

- 1 暗褐色土(10YR3/3)
 - 2 暗褐色土(10YR3/4)
 - 3 黄褐色土(10YR3/2)
 - 4 暗褐色土(10YR3/1)
 - 5 黄褐色土(10YR2/3)
- 礫(φ30~50mm)3%
- 礫(φ120~150mm)20%
- 礫(φ70~140mm)10%
- 礫(φ30~140mm)5%

Pit1725 (A-A')

- 1 暗褐色土(10YR3/3)
 - 2 暗褐色土(10YR3/4)
- 礫(φ90~120mm)2%
- 礫(φ30~70mm)5%

図87 第19号掘立柱建物跡

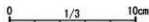


写 63-8
Pit1623



写 63-9
Pit2535・2536

図88 第19号掘立柱建物跡出土遺物



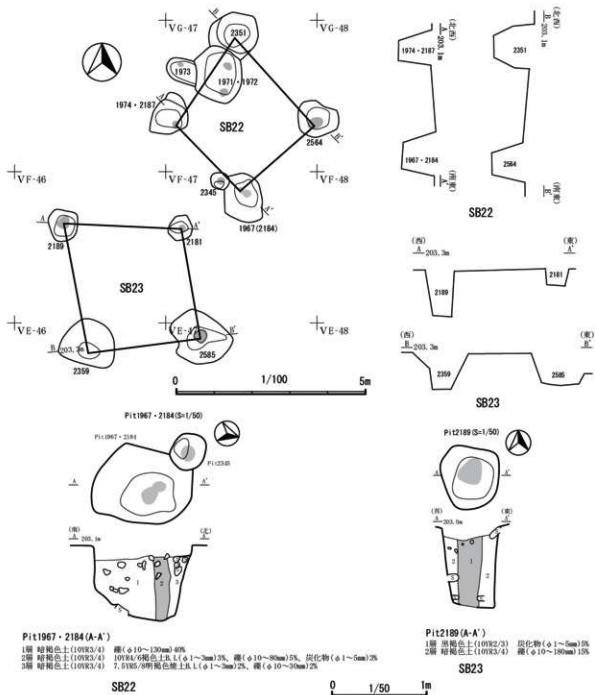


図89 第22号・第23号掘立柱建物跡



図90 第22号掘立柱建物跡出土遺物

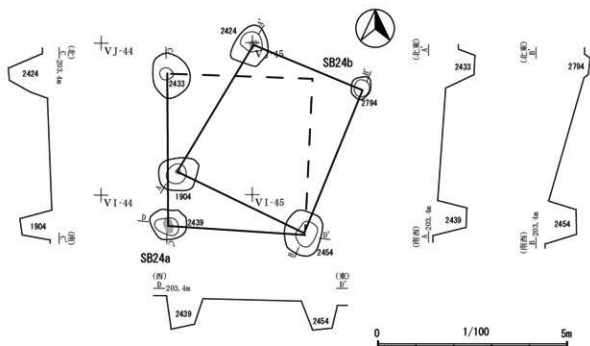


図93 第24号掘立柱建物跡

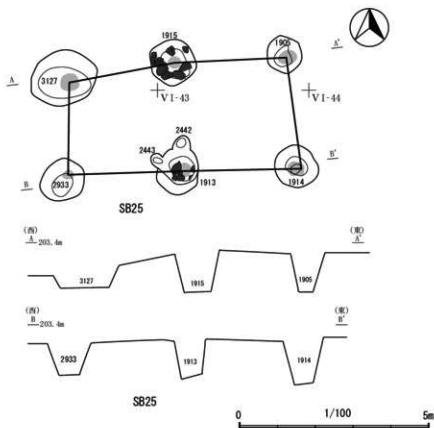


図94 第25号掘立柱建物跡

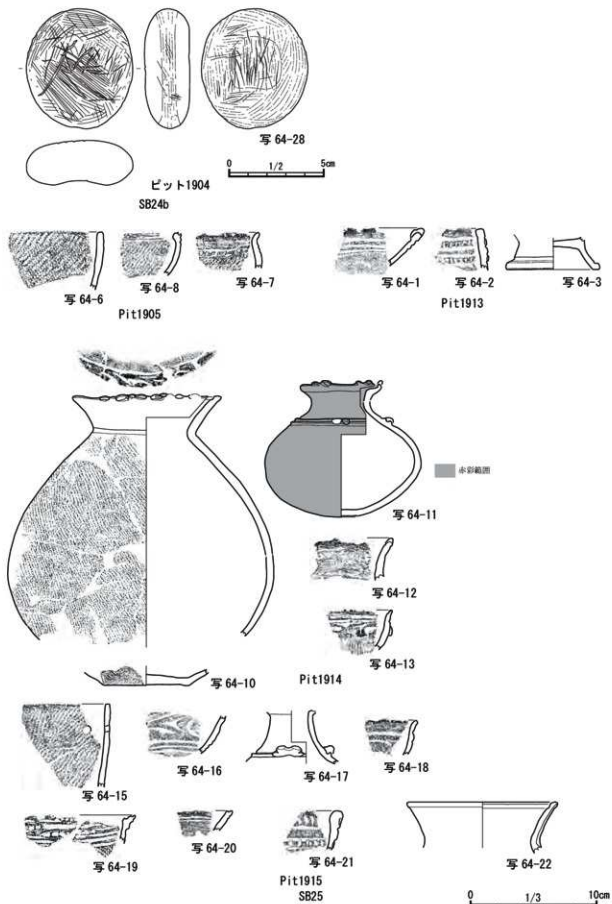


図95 第24b号・第25号掘立柱建物跡出土遺物

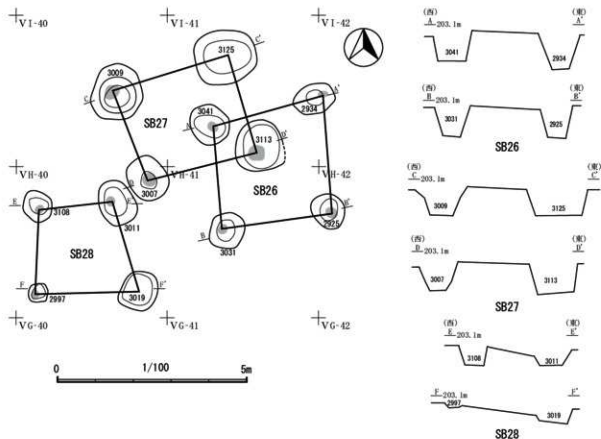


図96 第26号～第28号掘立柱建物跡

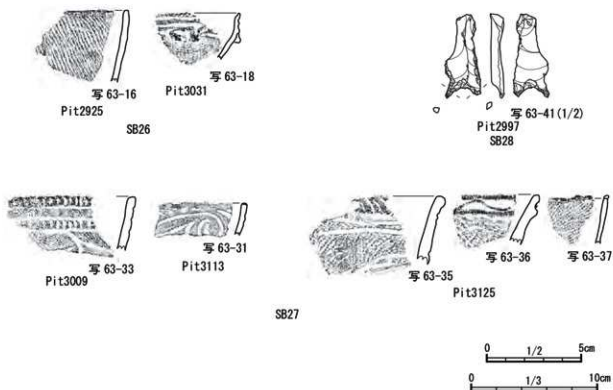


図97 第26号～第28号掘立柱建物跡出土遺物

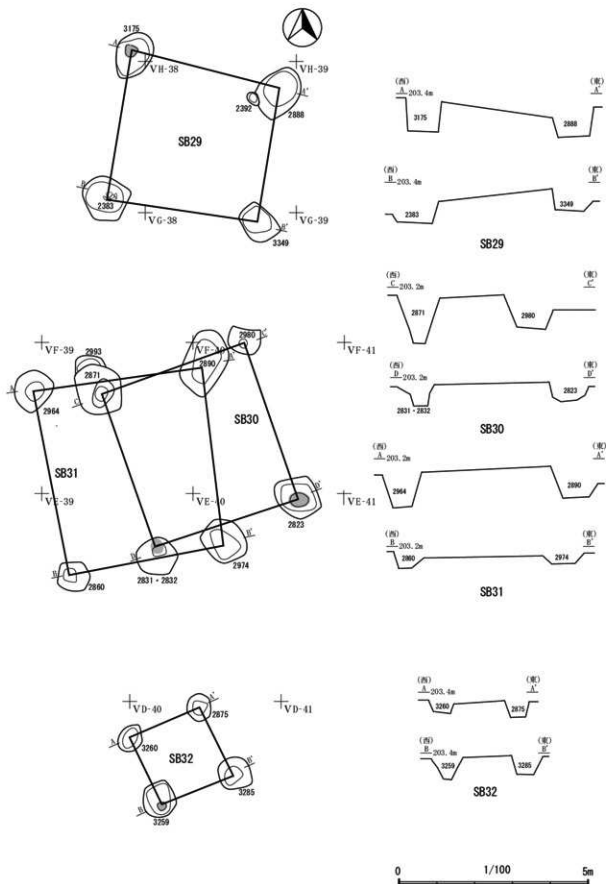


図98 第29号～第32号掘立柱建物跡

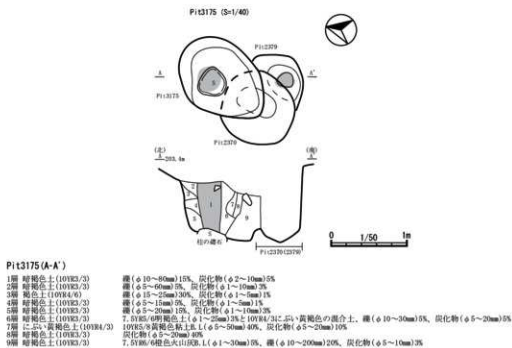


図99 第29号掘立柱建物跡のピット

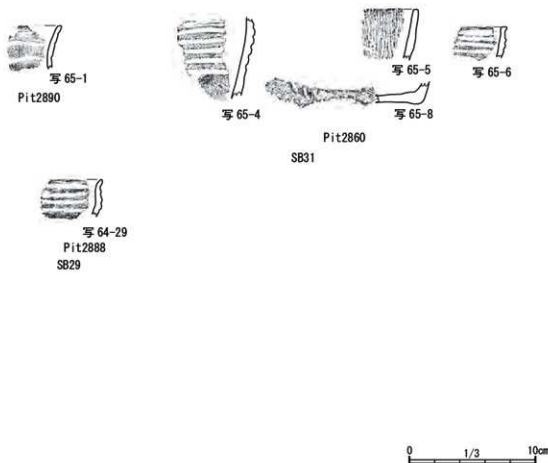


図100 第29号~第32号掘立柱建物跡出土遺物

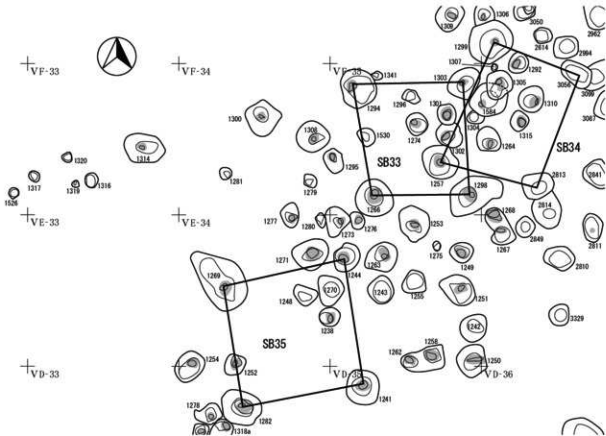


図101 VC~VF-33~36一帯の遺構配置図

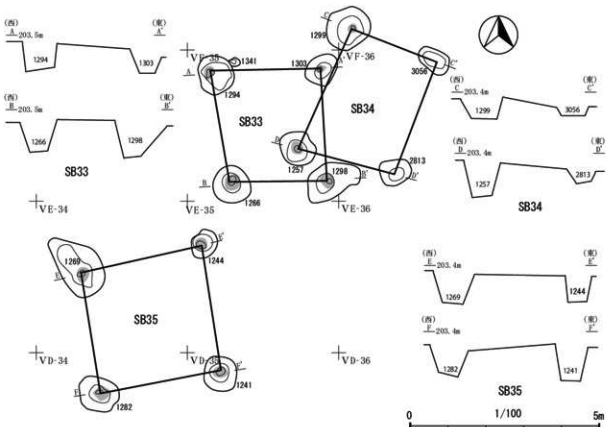


図102 第33号~第35号掘立柱建物跡

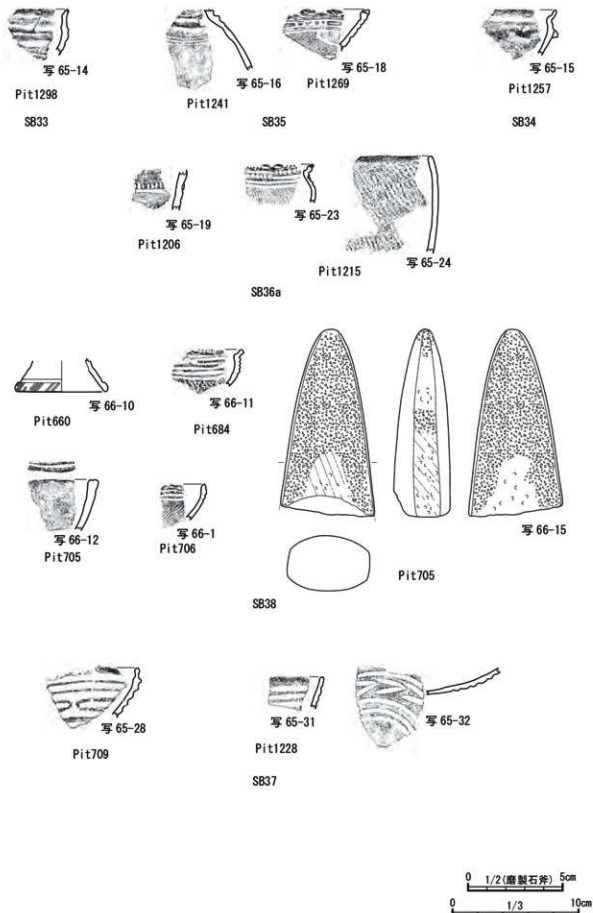


圖103 第33号～第38号掘立柱建物跡出土遺物

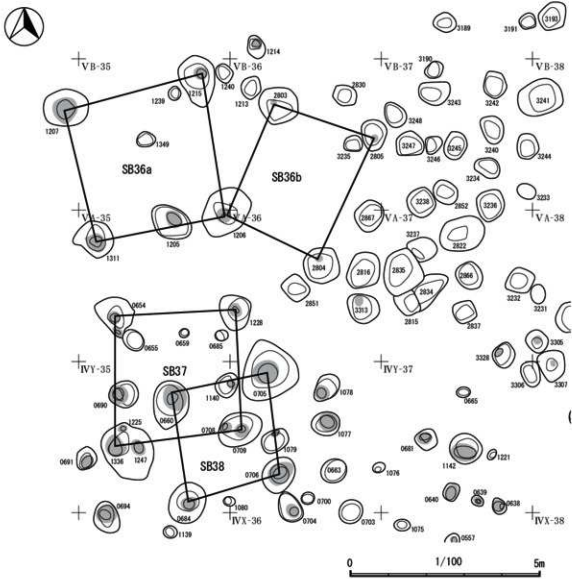


図104 IVX～VA-35～37一帯の遺構配置図

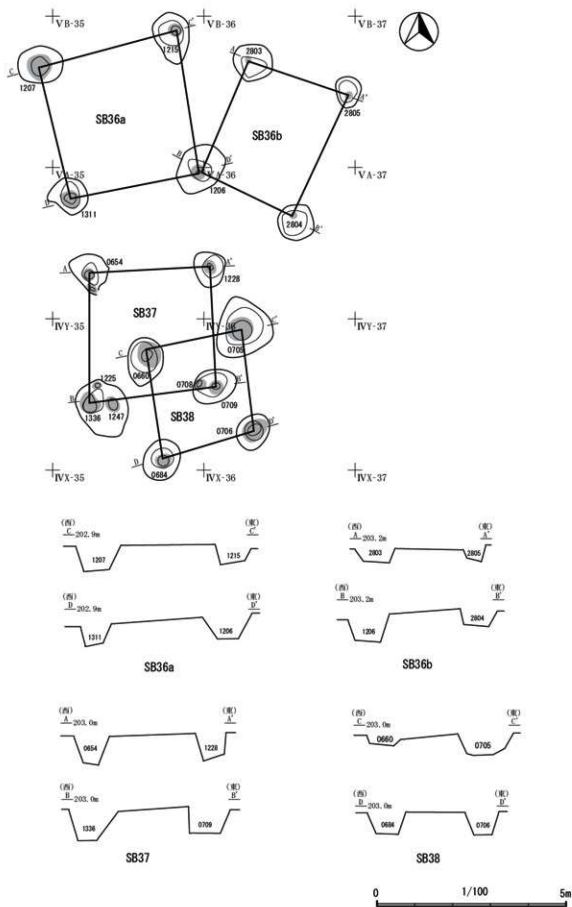


図105 第36号～第38号掘立柱建物跡

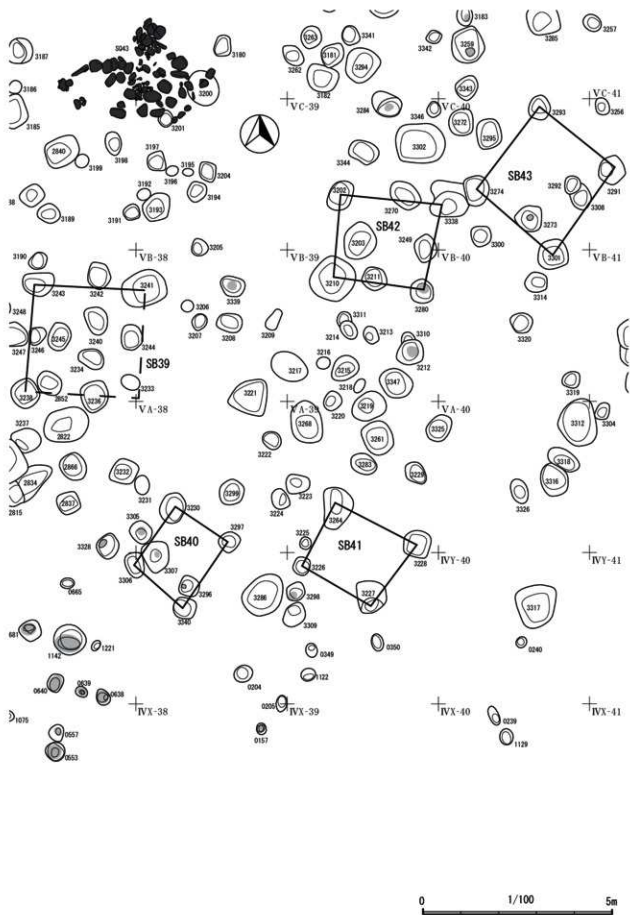


図106 IVW～VB-37～41一帯の遺構配置図

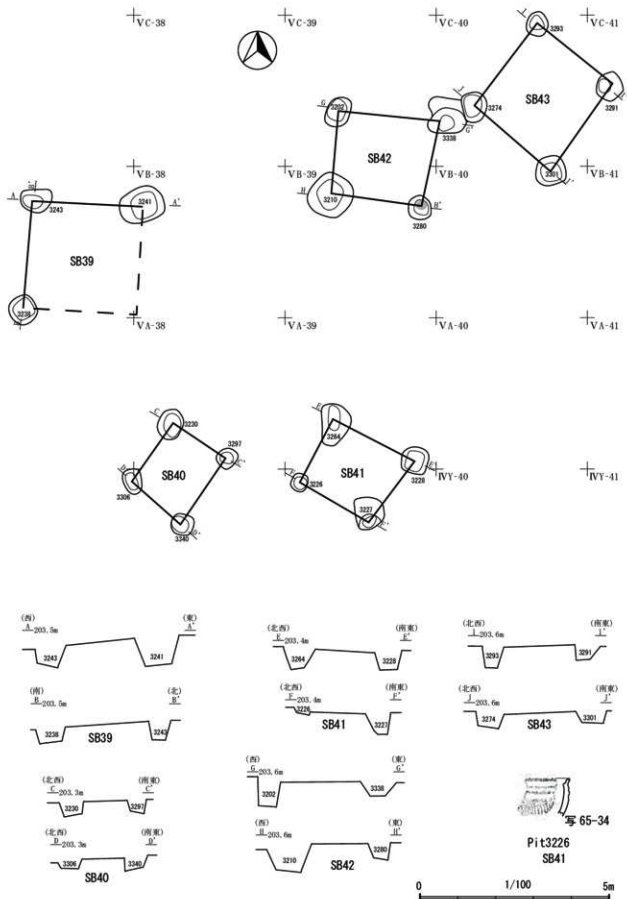


图107 第39号~第43号掘立柱建物跡と出土遺物

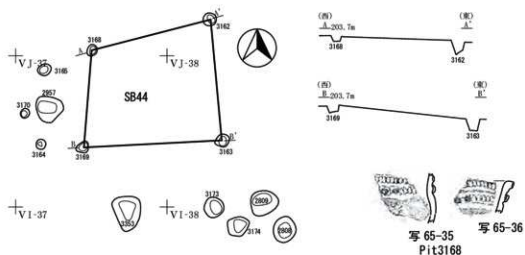


図108 第44号掘立柱建物跡と出土遺物

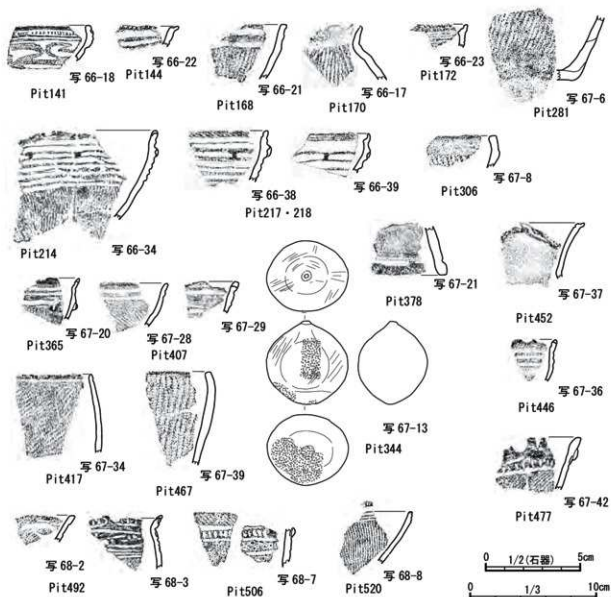


図109 ビット出土遺物(1)

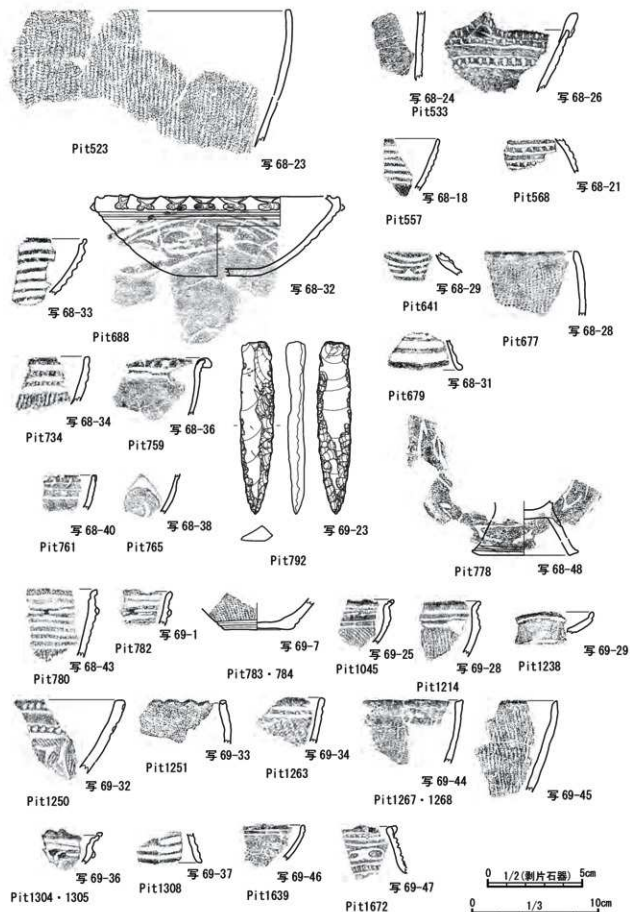


図110 ビット出土遺物(2)

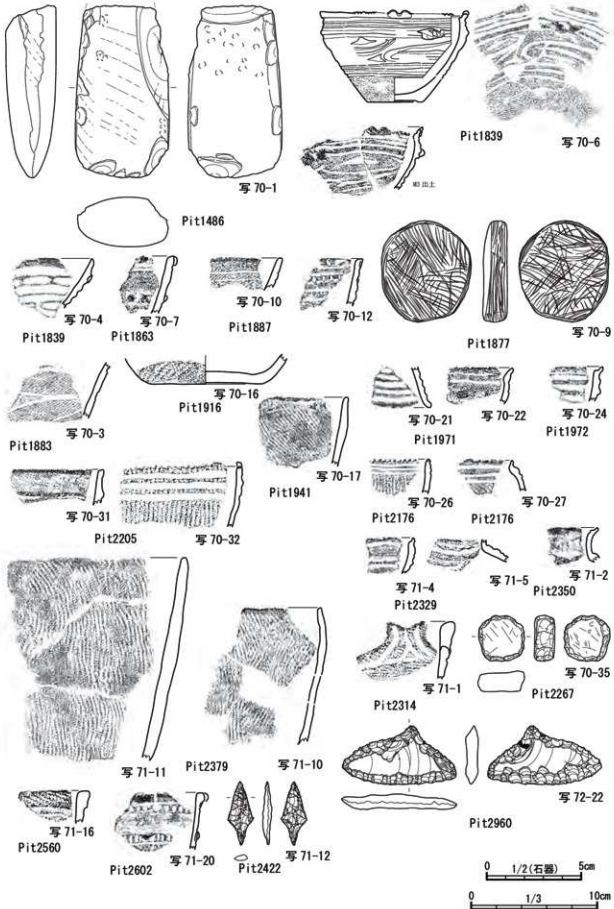


図111 ビット出土遺物(3)

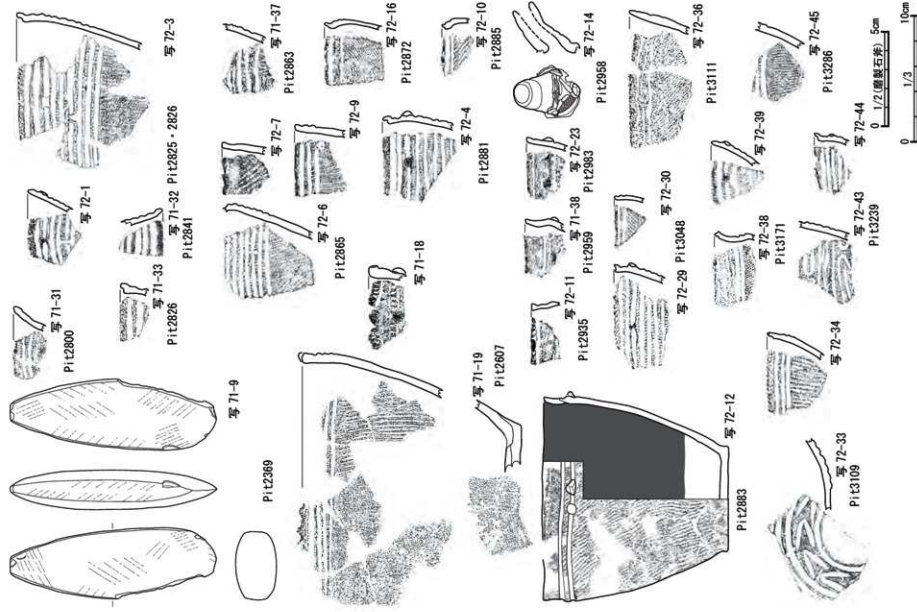


図112 ビット出土遺物(4)

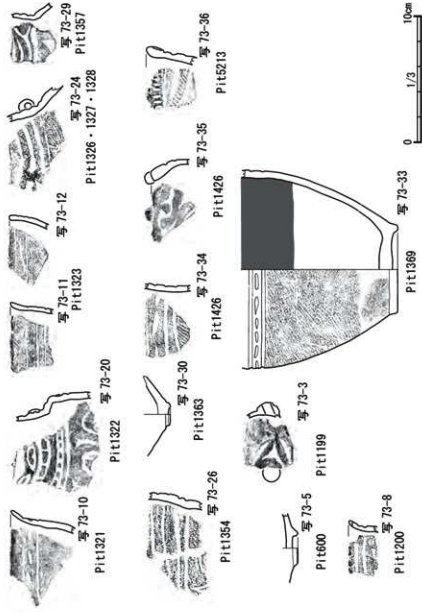
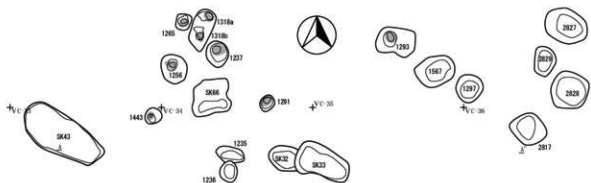


図113 ビット出土遺物(5)



VB33～VB36のセクション図 (S=1/50)



北西区東西		
1	厚褐色土 (10192/3)	礫 (φ10~25mm) 3%, 灰化物 (φ2~3mm) 1%
1 b	厚褐色土 (10192/4)	灰化物 (φ1~3mm) 2%, 小石 (多量あり)
II	暗褐色土 (7, 5192/4)	礫 (φ10~200mm) 1%, 炭屑 (多量)
F111235	厚褐色土 (10192/2)	礫 (φ10~100mm) 5%, 灰化物 (φ1~3mm) 1%
SK32	厚褐色土 (10192/3)	
SK33	厚褐色土 (10192/3)	10192/4 砂礫土を含む。礫 (φ20~150mm) 10%, 灰化物 (φ1~3mm) 1%
SK43	褐色土 (17, 5194/4)	灰化物 (φ3mm以下) 1%未満, シー・ムブレット (φ20mm以下) 1% (黒曜)

GW-11 SK06

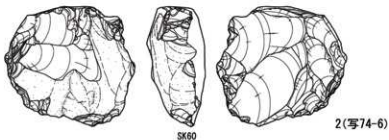
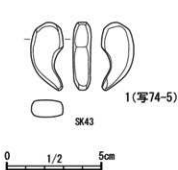
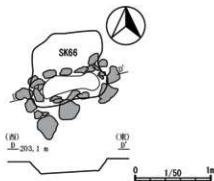
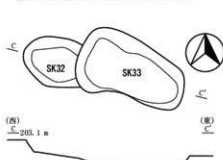
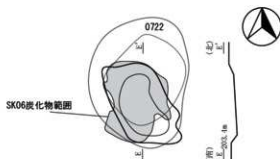
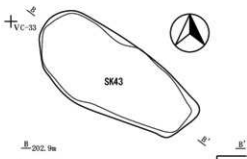


図114 土坑と出土遺物

5 盛土遺構

第2号から第4号盛土遺構は、調査区の中央、VA～VK-36～45グリッドに位置する(図115)。調査前に周辺の地形測量を行い、10cm単位の等高線の間隔を基に、3基の盛土遺構の規模の把握に努めた。

地形改変を受けており、グリッド45列よりも以東には水田が広がっているため、第3号・第4号盛土遺構の東側は削平を受けている。また、第2号・第3号盛土遺構の南側には、旧村道が東西に走っている。

第2号盛土遺構(略称M2)

【位置・確認】南北はVA～VD、東西は36～39グリッドに位置する。

【調査方法】地形測量後に東西と南北にグリッドラインを基本として土層観察用のベルトを設定した(図116)。ベルトに沿って幅60cmのトレンチ掘削し、堆積状況を把握した。北西側に第43号配石遺構(SQ43)を確認し、頂部に広がることを把握した。第43号配石遺構の精査終了後にさらに全体を掘り下げ、確認した柱穴を精査したうえで、地形を測量した。

【堆積層】(図117)第1層の下の第Ⅲ層相当の層を土層断面図で第1層とした。遺物は第Ⅲ層相当として取り上げている。また、掘削の有無を把握するため、漸移層である第Ⅲ層下部を土層に入れている。南北ベルト北側の第43号配石遺構付近にのみ2層が局所的に存在し、第Ⅲ層下部を欠失する。しかし平面的に掘り下げたところ、その範囲はごく狭く、人為的なものではないと判断した。

【重複】第43号配石遺構が頂部に形成される。縁辺部で柱穴との重複はあるが、第2号盛土遺構の堆積層が薄いうえで縁辺部では基本的に第1層のみが堆積しているため、新旧は不明である。

【規模・形状】東西約13m、南北約15mである。

【出土遺物】第1層からの出土がほとんどを占める。第1層及び漸移層(第Ⅲ層下部)の遺物の出土数量は少ない。

土器(図119、写真75) 土器は破片資料である。第43号配石遺構を含め5,162.5gの土器が出土した。時期としては、後期後葉から晩期後葉まで幅があるが、晩期中葉以降の土器片が多い。器種としては、深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器、壺形土器などである。

石器(図120～121、写真77) 石器の出土層位は、ほとんどが第1層である。

剥片石器は写真77に掲載した。13は石鏃、14・18は石匙、20は珪質頁岩の原石で、23は石核である。22は黒曜石製の石核で、他は削器及び二次加工剥片である。21は石錐とするには機能部の厚みが大きすぎ、横型石匙に類似した形状であるが刃部は未形成であり二次加工剥片とした。

礫石器は写真78に概ね磨石、敲石、凹石、石皿の順に掲載した。40は第43号配石の位置するM2のトレンチ北東部から出土した石皿で、SQ43の構成礫である可能性が高い。図121-1は赤色顔料の付着する磨石である。

石製品は石器円盤を中心に出土しており写真79に掲載した。

3・4は磨石であるが、小形で全面が磨面となっている。球状に研磨した石製品の可能性もあり、写真79の中に置いた。5は半球状の石製品である。6～34は石製円盤である。34は剥離のある板状礫であるが30・33と石材は共通し、左上の突出部を除去すると石製円盤になることから、本類においた。

石棒類は写真79(図121)に掲載した。石材は粘板岩であり、素文の柄頭を持つ。敲打痕が顕著であり、特に柄部の側面には顕著に残されている。

【小結】第2号盛土遺構は、規模としては小さいものの調査前には他の盛土と類似した景観を保っていた。しかし第1層の下の層厚は薄く、出土品も少ない。また、漸移層(第三層下部)も良く残り、人為的な擾乱は確認できなかった。土層の観察と出土品からは、土や遺物の培場としての様相は認められない。それらの廃棄が認められない理由は不明である。関連する可能性があるのは頂部に位置する第43号配石遺構である。柱穴も第43号配石遺構付近に分布するものは少ない。第43号配石遺構の形成された時期の詳細は不明確であるが、その維持を意識して土の廃棄や近接する柱穴・建物の構築を回避していた可能性も考えられる。継続期間の最後は出土土器から晩期5期と考えられる。(齋藤)

第43号配石遺構(略号：SQ43、図118)

【位置・確認】VC-37・38グリッドに位置する。第2号盛土遺構の東西ベルトの北側に沿ったトレンチを掘り下げ中に木の根に絡み合う花崗岩等の大形扁平礫が複数あった。それらを外したあとで土層ベルト断面に、花崗岩の礫が重なるように配置されていることから配石と確認した。配石の中央部分の上にも杉の根株が2本あり、上部から解体しながら除去した。配石を構成する礫の間には、根が入りこむものがあるが、ほぼ原位置に近いものと考えられる。

【重複】なし。

【規模・形状】東西4.19m、南北2.82mの範囲でまとまって礫が配置されている。確認時の事情により北西側(VC-37の北側)を欠失している。

礫は長径30cm～40cm大で、扁平なものも多く、棒状のものがある。花崗岩、凝灰岩など在地の礫が使用されている。中心部分はS-1～3であり、それらの空隙を埋めるように直径数cmの礫が組み込まれている。中核となるのはS-3であり、両脇に楕円形の礫を横に立てた状態となっていた。また、S-1は本配石で数少ない棒状礫であり、S-1とS-2の接する点の付近が南側のS-58から北のS-19に向かう石の弧の中心となっている。さらに反時計回りに記述していくと北側には南北1.1m、東西0.9mの礫の集中部がある。西側はS-39からS-43に向かって、石皿を含む扁平礫が折り重なるように配置されている。その南にも扁平礫が2点(石皿：S-51(写76-6)・52(写76-8))配置されている。S-47・48のさらに西側は第1層中から、選択性のない中小の礫が密集しており、花崗岩を含まない。そのため本遺構に伴わないと判断した。また、本配石の下にも、中小の礫があったが、石材や大きさに選択性がない。さらに第四層の地山の礫と連続性があることから本遺構から除外している。

【出土遺物】土器は後期後葉と、晩期2～3期の土器片が出土している(図119、写真75)。

配石構成礫のうちS-19・33・42～44・51・52(図118)の7点が石皿であり、S-1は敲石(図122-1)、S-4が磨石(図122-2)である。他に、凹石2点が出土している。本遺構に明確に伴う遺物は出土していない。関連する可能性を検討したものと、本遺構の周辺から出土した石製品(図123-7)を置いた。小形のうえ筒状で移動しやすい形状である。地形の傾斜を考慮に入れても、標高が低く判断を保留した。

【小結】本遺構は、第2号盛土遺構頂部に構築されていることが特徴である。第2号盛土遺構の部分で記したように両者を一体として理解するのが自然と思われる。本遺跡では配石遺構の多くは、建物

跡群の外側(南側)に弧を描くように分布している。それらと異なり、遺構群の中核部分で、標高の高い部分に構築されている事から他の配石とは異なる位置づけだった可能性がある。なお、第2号盛土遺構の項でふれたように、本配石に接近する土層断面に一部、黒褐色土(第2号盛土遺構の第2層)が存在する。大形礫を配置するための掘り込みが、地山まで及んだ部分である可能性も考えたが、標高差があり人為的なものではないと判断した。時期としては、配石遺構を覆っている第2号盛土遺構の時期と、近くから出土した土器片から晩期3期以前と考えられるが、いずれも小片である。第2号盛土遺構との関係を考慮すれば、晩期4期以降の構築とするほうが整合性は高いと思われる。(齋藤)

第3号盛土遺構(略称M3)

【位置・確認】南北はVA~VF、東西は41~45グリッドに位置する(図115)。最高点は204.97mである。

【調査方法】地形測量後に東西と南北にグリッドラインを基本として土層観察用のベルトを設定した(図124)。ベルトに沿って幅60cmのトレンチ掘削し、堆積状況を把握した。そのため、全体に4分割して掘り下げ、最後にベルトを除去した。

【堆積層】堆積層は、表土以下は大きく上層、中層、下層の3つに区分した(図125)。この大別層は、色調を元に区分している。上層は比較的暗い層であり、中層になると、幾分色調が明るくなり、下層は再び黒色の強い層となった。東西・南北ベルトによって4分割された部分は、この大分類の堆積層で調査を進めた。堆積層は程度の差はあるが、どの層も礫を多量に含んでいるのが特徴である。

ベルトのみが残った状態で、3つの大別層を細分し、ベルトは細分層に従って掘り進めた。

セクションについては、南北セクションは、南北ベルトの西側面を、東西セクションは東西ベルトの南側面を記録した。

第3号盛土遺構の東側は水田によって削平されている。南側は、村道部分に明るい色調の土砂によって盛り土がなされ、その下に盛土遺構の下層や基本層序の第Ⅲ層を確認した。

第1号盛土遺構のように、斜面下に向かって傾斜堆積しているのではなく、第3号盛土遺構は平坦な場所に土を盛り上げたような堆積状態である。特にどちらかに向かって傾斜堆積しているような状態ではない。

次に各堆積層について記述する。

【下層】盛土遺構の下部で、地山直上の堆積層である。基本黒褐色の色調で、礫を多量に含んでいる。盛土遺構の下で検出できたピットは、確認できた限り、この下層を掘り込んでいる。

【炭1層】盛土遺構のほぼ中央に堆積している。下層と中層の間に位置するが、焼土面、硬化面が確認できず、その場で焼成したのではなく、炭化物などを廃棄したと思われる。

【中層】炭1層・下層の上に乗る堆積層である。層の広がる範囲は下層に比べ狭くなる。中層全体は黒褐色の色調であるが、礫の入り具合から1~10層に細分した。

【上層】中層と表土の間の層であり、堆積範囲はさらに狭まる。基本黒褐色の堆積層であり、礫を含有するが、全体に中層よりは含有率は低い。

【重複】上層を掘り込んだ土坑(SK58~60)と、下層を掘り込んだピット群が確認されている。土坑は、南北・東西セクションの分層を行う際に、時折礫の混入が異なる箇所がみられ、盛土遺構を掘り込む遺構を想定した(詳細は土坑を参照)。

ピットは、セクションの中で土坑同様に不自然な礫の入り込みが確認され、第3号盛土遺構下層を掘り込んで構築されている。規模などから周辺で検出されているピットと同一と判断した。ベルト内で確認できたPit1941(VC-45グリッド)については、平面図などを作成した(図127)。

【規模】東西に16.40m、南北24.02mの不整形の楕円形である。

【出土遺物】記述は、土器・石器の一部(磨製石斧・石棒類)を高橋、石器は齋藤、土製品は成田が担当した。

土器 全体に157,427.8gの土器が出土している(表2)。盛土遺構のほぼ中央に分布のピークがある。その中でグリッド、層の明確な資料を検討すると、第3号盛土遺構から出土した土器は、ほぼ中央のVB-44グリッドで21,221.6g、VC-43で23,559.0g、VB-43グリッドで22,004.7g出土している(表2)。そして、そこから離れるにつれ、出土土器は減少する。ただ第1号盛土遺構のような、遺物が集中して出土するような場所はみられず、わりと散漫に出土している。また検出時には個体になるような出土状況ではなく、破片が多かった。上層の方が完形個体は多い(図128)。

この傾向は、下層、中層、上層、表土でも同様であるので(表3～6)、盛土遺構の中心、堆積の厚い部分に大量の遺物が出土したことになる。全体に上層から表土にかけての出土量が多い。図125の南北セクションの村道部分から、石器を含め、遺物はほとんど出土していない。

第1号盛土遺構では、1,138,915.1gの土器が出土している。第3号盛土遺構は、第1号盛土遺構よりも規格は大きいのが、出土した土器の量は少ない。第1号盛土遺構は遺物が集中している部分と散漫な出土状況が入り組んでいたが、第3号盛土遺構は、調査区全体の掘り下げ時の際も、遺物が多量に集中するような地点は確認できなかった。盛土遺構の中心あたりに、比較的土器がままとって出土している(写真51-4など)。

完形個体はほとんどなく、破片資料が多い。写80-24,25のような口縁部に沈線と突起を持つ鉢形土器の破片資料はそれなりの量が出土しているので、あまり小形のもの資料化しなかった。資料化した土器は、有文の時期のわかる土器、完形に比較的近くなった個体、土器片でも特徴的なものは抽出した。

次に出土土器について、堆積層ごとに記述する。

〔下層〕

下層からは深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器、四脚付土器、壺形土器、片口土器、などが出土している(図129～131)。

台付鉢形土器(図129-写80-3)は、口縁部に退化した羊歯状文が施文され、晩期3期と考えられる。

片口土器(図129-写80-4)は破片の多くは下層出土であるが、数片が中、上層からも出土している。内外面に炭化物が付着している。上層から出土した土器片は表面が磨蝕している。

四脚付土器は(図129-写80-5)、下半は形となったが上半部には同一個体と思われる破片が出土しており、上下別々に図化した。文様に工字文がみられ、外面に赤彩の痕跡がある。

壺形土器(図129-写80-6)は、頸部以外は赤彩がほどこされ、体部上半に連繫入組文が展開することから聖山I式と考えられる。口縁部に突起、頸部と胴部の境に沈線と突起を持つ壺形土器(図129-写80-7)、これ以外に、粗製壺形土器が出土している(図130)。図130-写80-8は大型の壺形土器であり、地文は条痕文である。後期後葉ごろの注口形土器の底部(図130-写80-12)が出土している。

表2 第3号盛土遺構出土土器グリッド別重量

	41	42	43	44	45	総計
VG					95.0	95.0
VF		49.9	26.7	1156.7	95.8	1329.1
VE		174.8	3074.9	420.2	228.5	3898.4
VD	703.8	6999.4	11911.3	7337.3	185.2	27137.0
VC	240.5	6782.8	23559.0	14900.6	4459.1	49942.0
VB		4504.2	22004.7	21221.6	7435.7	55166.2
VA		632.3	4007.9	3357.4	2131.4	10129.0
NY		10.6	633.9	26.8		671.3
NX				198.8	12.3	211.1
総計	944.3	19154.0	65218.4	48619.4	14643.0	148579.1

第3号盛土遺構出土土器総重量	157427.8g
----------------	-----------

表3 第3号盛土遺構下層出土土器グリッド別重量

	41	42	43	44	45	総計
VF				1071.4		1071.4
VE		9.6	788.3	162.3		960.2
VD		3078.7	1941.4	3180.0	185.2	8385.3
VC		288.5	1948.1	1834.3	1193.2	5264.1
VB		818.4	2380.4	6615.2	2857.6	12671.6
VA			718.8	627.8	14.2	1360.8
NY			282.7			282.7
総計		4195.2	8059.7	13491.0	4250.2	29996.1

表4 第3号盛土遺構中層出土土器グリッド別重量

	41	42	43	44	45	総計
VE		81.7	662.7			744.4
VD		2502.9	3805.3	263.4		6571.6
VC		2620.5	4805.8	1831.9		9258.2
VB		22.7	2952.6	1106.2	902.3	4983.8
VA			664.2			664.2
総計		5227.8	12890.6	3201.5	902.3	22222.2

表5 第3号盛土遺構上層出土土器グリッド別重量

	41	42	43	44	45	総計
VE			398.4			398.4
VD		690.7	2672.5	540.5		3903.7
VC		1725.4	6416.7	1919.6	887.9	10949.6
VB		994.7	7939.6	4887.4	1981.7	15803.4
VA		98.1	862.0			960.1
総計		3508.9	18289.2	7347.5	2869.6	32015.2

表6 第3号盛土遺構表土出土土器グリッド別重量

	41	42	43	44	45	総計
VG					95.0	95.0
VF		30.0	0.6	31.9	95.8	158.3
VE		72.7	719.3	4.6	228.5	1025.1
VD	22.4	727.1	676.9	284.9		1711.3
VC	43.2	468.5	2467.6	412.6	897.8	4289.7
VB		373.3	1570.3	1573.9	1015.2	4532.7
VA		197.6	189.5	141.9	366.4	895.4
NY		10.6	351.2	16.7		378.5
NX				198.8		198.8
総計	65.6	1879.8	5975.4	2665.3	2698.7	13284.8

他に深鉢形土器、鉢形土器などの土器片が出土している(図130・131)。図131-写80-32は台付土器の台部である。乳白色の胎土を用い透かし窓がみられ、渦巻文様が展開する。同一個体(西-土器19483)が西捨場から出土している。

多くは晩期4期前後の土器であるが、それ以前の時期も含まれる。

〔炭1層〕

下層と中層の間にある薄い層である。図131-写81-1は略完形の鉢形土器であり、口縁に平行沈線と突起が付く。他に工字文や並行沈線など晩期5期の鉢形土器が多い。

図131-写81-7は工字文を持ち、年代測定が行われている(年代測定:KAWA(1)-170)。その測定の結果、 2530 ± 20 yrBPの値が得られている。

第1号盛土遺構の第15層(炭化物層、晩期4～5期)の値が 2490 ± 20 yrBPの値であり、近似値が出ている。同じ第1号盛土遺構の第19層(晩期1～3期)では、 3090 ± 20 と 2910 ± 20 yrBPの値が出ている。

〔中層〕

深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器、壺形土器、注口形土器、皿形土器などが出土している(図132～134)。

図132はベルトの細分層出土の土器である。図132-写81-9のような中層1層という中層の比較的上の層から、古い時期の土器が混入する。図132-写81-10のような典型的な晩期5期の台付鉢形土器や、同時期の矢羽状沈線文を持つ皿形土器(図132-写81-19)などが出土している。刻みのある鉢形土器(図132-写81-12)、赤彩がかすかに残る無文の壺形土器(図132-写81-13)、平行沈線がめぐる鉢形土器(図132-写81-8)、などの完形に近い資料や、時期が特定できる土器片も出土している。

図133、134は中層一括出土の土器である。図133-写81-24は、口唇部に刻みを持ち、地文が条痕文の鉢形土器であり、内面に漆が付着している。漆を容れる容器であった可能性がある。他に口縁に3条沈線がめぐる深鉢形土器(図133-写81-20)、大型の台付鉢形土器(図133-写81-23)が出土している。

図133-写81-25・28のような晩期5期の台付鉢形土器や皿形土器(写81-22)が出土している。図133-写81-29は大形の鉢形土器である。同一個体が上層や、トレンチから出土している。口縁は、一山突起によって波状の口縁を持ち、その内、4単位残存している。口唇に沈線1条、沈線間に刻目列2条、体部に雲形文(沈線)、磨消縄文LRが施文され、口縁部はミガキで整形されている。図133-写81-30の壺形土器は晩期5期であり、各破片が分散して出土している。SK58、SK60からも出土しており、土器はかなり破壊されている。口唇に刻目、沈線文と隆帯(刻目列、2個一組の突起、磨消縄文LRが施文されている。また、晩期5期の工字文を持つ台付鉢形土器と伴に、連繫入組文を持つ聖山I式(図134-写82-3、5)が出土している。また晩期4期の雲形文を持つ皿形土器(図134-写82-2)が出土している。

多くは晩期4～5期の土器である。

〔上層〕

深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器、壺形土器などが出土している(図135～139)。

図135・136はベルトの細分層出土の土器である。工字文と匹字文を持つ壺形土器(図135-写82-9)、T字の組み合わせの工字文(図136-写82-19)など晩期5期の土器が出土している。これ以外に晩期5期の台付鉢形土器(図135-写82-6、図136-写82-23)、深鉢形土器(図135-写82-14)などもある。

図137～139は上層一括出土の土器である。口縁部と肩部に平行沈線と突起を持つ深鉢形土器(図137-写82-31)や工字文を持つ赤彩の台付鉢形土器(図137-写82-33、図139-写83-20)、壺形土器(図135-写82-9、図136-写82-19、図137-写82-34)など晩期5期の土器が主体的に出土している。

晩期5期の土器と共に、連繫入組文を持つ赤彩の(台付)浅鉢形土器(図138-写83-2)や鉢形土器(図138-写83-1)といった晩期4期の土器が出土している。図138-写83-1は第3号盛土遺構出土の土器の中では完形品の場合、大型品の一つである。口縁に二山状台形突起1単位、2個一組の突起(連続)、口唇に刻目、文様は横位沈線2条、隆帯(隆帯上沈線、2個一組の突起)、雲形文(沈線)、磨消縄文LRが施文され、体部下半はミガキで整形されている。破損部には補修孔と破断面にアスファルトと推定される黒色付着物がみられ(写真86)、破損後も補修されたものと思われる。

晩期4期から5期にかけての土器が出土しているが、特に晩期5期が多い。

〔第I層〕

深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器、壺形土器などが出土している(図139・140)。大型の鉢形土器(図139-写83-25)は、小波状口縁で一山突起1単位残存している。口唇に沈線、文様は横位沈線内に刺突列、工字文、磨消縄文LR、体部下半にLR縄文が施文されている。底部は幾分丸みを帯びている。同一個体が西捨場から出土している。晩期5～6期に比定される土器であり、川原平(1)遺跡では新しい段階の土器である。晩期5～6期まで廃棄活動が行われた可能性もある。

〔トレンチ〕

トレンチ調査で出土した土器で層位が不明な土器を掲載した。接合などで、堆積層が判明した場合は、そちらの堆積層の所に掲載している。

トレンチ1から、鉢形土器、台付鉢形土器、壺形土器などが出土している(図140)。台付鉢形土器は晩期5期(図140-写84-17)である。後期の土器片が1点出土している(図140-写84-18)。

トレンチ2から、鉢形土器、壺形土器(図140-写84-22)、注口形土器が出土している(図140-写84-23)。晩期中葉の土器が多い。

トレンチ3から、鉢形土器、台付鉢形土器が出土している(図141)。晩期5期に相当する資料が多い。

トレンチ4から、深鉢形土器(図141-写84-32)、台付鉢形土器(図141-写84-30)、壺形土器(図141-写84-31,33)が出土している。

第3号盛土遺構からは、以上から全体に晩期後半の土器が多く出土している。

土偶・土製品 第3号盛土遺構からは土偶2点・亀形土偶1点の計3点が出土した。

〔土偶〕(図142-1・2)

土偶は2点出土した。1は中実土偶で首部・手部・足部を欠損している。首部にはアスファルトが付着している。表表面に漆を塗布している。体部には粘土粒で乳房を表現し、腕部・下半部に横位及び弧状文を、裏面の体部には円形文を施文している。晩期5期に相当すると思われる。2は中実の体部破片であり、胴部は内側にくびれている。乳房は右乳房のみであり、胴部下半には横位沈線と縄文を施文している。

〔亀形土偶〕(図142-3)

亀形土偶は1点出土した。側縁部の破片で、文様は粘土粒を中心として放射状に沈線を施文してい

る。時期は晩期後葉期と思われる。

石器 遺跡内で最大の盛土であり、多数の石器が出土した。

〔剥片石器〕

写真87の1～38には石鎌、石錐、石筥を掲載した。39は削器や小形の石筥の可能性があり両面調整石器とした。40～50は石匙である。51～62は削器であり、51は一側縁にアスファルトが付着している。62は、良質な珪質頁岩製の石刃状の剥片を素材とする。その右側縁と末端に刃部が形成されている。

写真88は削器及び二次加工剥片、石核類である。8には自然の孔がある。15は黒曜石製の石核で、産地分析の結果、木造出来島群であった。17・18は、石核転用敲石である。石器の変形の履歴を示すうえ1/3の縮尺に適さないことから、石核の部分に掲載した。21は石核を素材として、写真の上部1/3のところを両側縁から抉りを作り出すように剥片を剥離して作業を終了している。異形石器を意識して、最終形状に至った可能性がある。写真89は石核と転用敲石である。3・4は3稜状で、3は両端が尖る形状となっている。

〔磨製石斧〕

磨製石斧は写真90-5(図144-2)に掲載した。石材は緑色岩である。刃部の断片資料である。

〔礫石器〕

写真90-93-8・14に、磨石、敲石、凹石、石皿を掲載した。一部の磨石・敲石・石皿には赤色顔料が付着している。写真94-1～7・9には自然礫を掲載した。1は方鉛鉱を含む礫で、3・4・9は有孔である。5は板状のくびれ石、6はキムラホタテの貝化石である。7は珪質頁岩のノジュールで、中心部は円形の玉髄が形成されている。外側は凝灰岩質の礫皮付近で淡黄色となり、全体として4つの同心円的な色の重なりとなっている。

〔石棒類〕

石棒類は写真93・94(図145・146)に掲載した。写93-13(図145-1)は、凝灰岩製であり、卵形の礫に溝のような太い沈線で文様を表現している。

粘板岩製の石棒類(写94)が出土している。

写94-8(図145-2)は、小形の断片品であり、盲孔や沈線が見られる。写94-12(図145-3)は、柄頭に沈線文と、側面には刻みがほぼ等間隔に施文されている。写94-13(図145-6)は、柄頭と胴部の境に1条の沈線が巡る。写94-14(図145-5)は、柄頭断片である。柄頭に沈線文が見られる。写94-22(図145-4)は、内反り石刀の刀身部である。写94-23(図146-1)は接合した石棒である。欠損面を打面として剥離を行い、擦切痕がみられるので、別の器種に転用しようとしたと思われる。

〔その他の石製品〕

写93-9(図146-2)は線刻礫、同11(図147-1)は自然礫を素材として、岩版に見られるような渦巻きや三角形、弧状の線刻が施される。同12は上面と下面に強めの敲打痕があり、側面を敲打痕が一周する。側面には部分的に研磨あるいは磨面がある。側面がふくらんだサイコロ状に成形している石製品である。写真94-15(図147-5)は線刻礫である。写94-16は岩版破片である。写真94-17～94には、石製円盤を掲載した。95は自然礫の形状を生かした容器状の石製品で、96は独鈷石の破片である。

【小結】第3号盛土遺構は、堆積層と土器の時期などから次のような内容になっている。

下層から晩期4期を中心とした土器が出土している。さらにこの面と掘り込みピットが形成されて

いる。そのため、下層は盛土遺構形成前の生活面であったと推定される。

中層、上層からは晩期4期・晩期5期の遺物が出土しており、本来の盛土遺構は中層から築かれたと考えられる。そのため、第3号盛土遺構は晩期後半に構築され、晩期5期には廃棄活動はほぼ終了したものと推定される。(高橋)

(4) 第4号盛土遺構(略称M4)

一部はクラック地区の上面を覆っている。第4号盛土遺構の範囲からは、晩期後半の遺物がほとんどであるので、クラック地区が埋没した後に、その上面に遺物などが廃棄されたと考えられる。

【位置・確認】南北はVG～VK、東西は41～45グリッドに位置する。

【調査方法】地形測量後に長軸にあわせて、北西～南東、北東から南西に土層観察用のベルトを設定した(図148)。また柱穴群の位置する平場中央部につながる南西部にもベルトを一本設定し、堆積状況を観察した。

【堆積層】第1層の下の第Ⅲ層相当の層を第1～4層に細分した(図150)。また漸移層をⅢ層下部とした。第3層は第2層の下部の黒褐色土で10YR2/3の色調を持つ。第2層と類似するため区分できない部分もある。しかしセクション4のように一部の柱穴の確認面にあたることから、認識できる部分は第3層を区分した。第4層は黒みが強く、東西ベルトの北壁の東側でのみ確認した。

【重複】下部に柱穴を多数確認した。

【規模・形状】東西約18m、南北約15mであり、東端付近は、近現代の削平を受けて欠失している。北端付近も一部が欠失している。

【出土遺物】

土器 第4号盛土遺構から45,759.1gの土器が出土している。

[第1層]

第1層から縄文時代中期・晩期の土器が出土している。形状がほぼ復元できるような土器は盛土遺構の中心に分布している(図149)。その周囲に石器も分布している。

晩期は5期の鉢・台付鉢形土器(図151-写95-3、4)が出土している。図151-写95-1は器壁の厚さ、縄文などから、晩期ではなく、中期の深鉢形土器と思われる。

図151-写95-5は口縁に一条の沈線がめぐり、縦方向の条痕が施文された深鉢形土器である。第1層と第2層からそれぞれ出土している。

[第1層]

第1層から晩期4期、4～5期の土器が出土している(図151)。深鉢形・鉢形土器が大半である。図151-写95-8がその中で比較的完形に近い形状である。また第1層・第2層から出土した土器が接合した晩期4～5期の鉢形土器(図151-写95-16)などがある。

[第2層]

第2層から晩期4期、4～5期の土器が出土している(図152)。鉢形土器(図152-写95-19,20)など、完形に近い資料が比較的多く出土した層である。

【トレンチ】トレンチから晩期4期、4～5期の土器が出土している(図153)。赤彩の壺形土器(図153-写96-12)、浅鉢形土器(図153-写96-11)など晩期4期の土器の他に、晩期5期の小型壺形土器の小片(図

153-写96-10)などが出土している。

石器

〔剥片石器〕

写真97-1～34に石鏃、石錐、石匙、削器、二次加工剥片を掲載した。24・28～31は石鏃未製品の可能性があるが、本遺跡では類似した形状の小形の削器がある。そのため現在の形状でみた場合、削器の方が適すると思われる。

〔石斧〕

写97-37は打製石斧、磨製石斧は写真97(図154)に掲載した。石材は粗粒玄武岩、緑色岩である。写97-35は、基部欠損で、折れ面に敲打痕が明瞭に残る。刃部は潰れ、敲打痕が残されているので、敲石に転用されたと思われる。写97-36は、刃部が欠損している。

〔礫石器〕

磨面と敲打痕など複数の種類の使用痕を持つものも多いが、主体となる使用痕から磨石、敲石、凹石、大きさと形状から石皿等に区分し、写97-38～写98-10に掲載した。写98-8は石皿で9は中高のものである。写98-11は上下両端の凹みを持つ石錘状の自然石である。

〔岩版〕

第4号盛土遺構から岩版は1点出土した(写98-35)。形態は端部が丸みを有し、両側縁が直線的で下部を欠損している。

文様は表裏面ともに中心部に横位・斜位の擦痕を施文している。

〔石棒類〕

石棒類は写真98(図155)に掲載した。石材は粘板岩である。

写98-12は、基部・先端欠損で、柄部に近くに、沈線文が巡っている。断面形状は石剣であるが、石刀のように内反り形状である。石材は点紋粘板岩を用いている。写98-17は、柄部断片である。写98-13は写真のみ掲載の石剣である。

〔その他の石製品〕

写98-14～16・18～33に石製円盤を置いた。34は岩版を思わせる弧状の線が入るが、部分的であり線刻礫とした。

なお第2号盛土遺構～第4号盛土遺構の石製円盤については写真107に円1～4として集合写真を掲載した。凡例に示したようにその配列によって観察表と対応する。なお、円2の21にクラック地点出土のものが入っているが、捨場毎の数量は報告書Ⅷで補正して掲載する。M4の石核についても一部を写真107に集合写真で示した。珪質頁岩製で硬質の良質なことから、珪化が少し弱いものまで含む。大きさも大小の幅がある。礫皮の残るものが多いことと共に、石材産地の様相といえる。長さが5～6cmの小形の石核は礫皮に近い軟質部が厚く、中心部分が良質な傾向がある。良質部分から剥片を剥離した後に、作業は終了している。下段の4点の石核は、長さが8～14cmの大きめの石核であり、縁辺から求心的に幅広の剥片を採取している。本遺跡で中核となる剥片剥離技術である。やや上方に位置する左端の石核は打面を交互に入れ替えながらの剥離が、右から2番目のものは90度の打面転移が加わるが、縁辺からの剥離という点で共通している。

【小結】第4号盛土遺構は北側のクラック地点への落ち際の台地北側縁辺に位置する。北側の層厚が

やや厚いものの土の廃棄が行われた第1号盛土遺構・第3号盛土遺構と比べると全体的に層厚は薄い。第3層は、2層と区分できない所もあり、調査時の所見としては、柱穴の構築等による土の汚れや柱穴付近の窪まりの可能性を考えた。また、第4層の黒褐色土の存在は北捨場で暗褐色土の下に黒褐色土がある事を思わせるが、層厚は10cm程度であり、分布は限定的である。第3層が確認できない部分に存在することから、色調は異なるものの第3層と同様にとらえられる可能性がある。第1～4層から出土した遺物は、遺物出土状況の写真にみられるように、一括性がなく、量的にも多いとはいえない。以上から、第4号盛土遺構の堆積土については、意図的な廃棄により形成されたとする積極的な根拠は得られなかった。廃棄が行われた可能性はあるが、継続性は認識できなかった。上部の第1層からの出土土器から他の盛土と同様に終末は晩期5期と考えられる。

(齋藤)

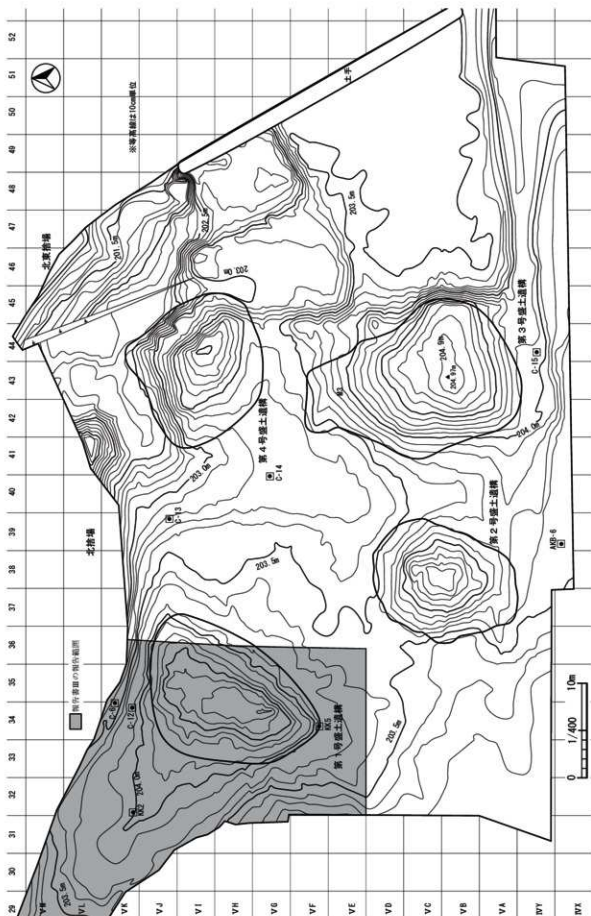


図115 平場地区の地形図(調査前)

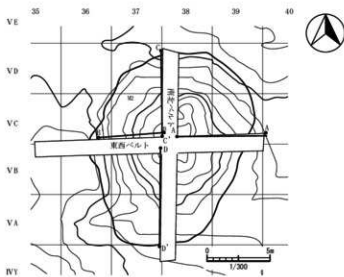
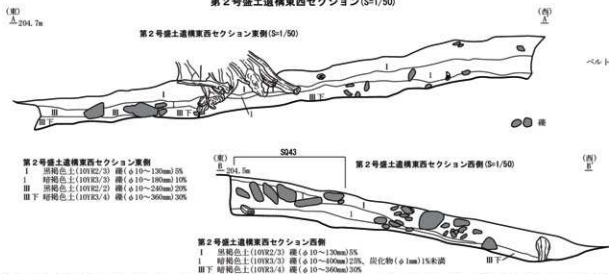


図116 第2号盛土遺構セクション配置図

第2号盛土遺構東西セクション(S=1/50)



- 第2号盛土遺構東西セクション東側
- I 粘粉色土(10YR2/3) 礫(φ10~130mm)5%
 - II 粘粉色土(10YR3/2) 礫(φ10~180mm)10%
 - III 粘粉色土(10YR2/2) 礫(φ10~240mm)20%
 - III下 粘粉色土(10YR3/4) 礫(φ10~360mm)30%

- 第2号盛土遺構東西セクション西側
- I 粘粉色土(10YR2/3) 礫(φ10~130mm)5%
 - II 粘粉色土(10YR3/2) 礫(φ10~180mm)12%
 - III下 粘粉色土(10YR3/4) 礫(φ10~360mm)30%
- 炭化物(φ1mm)1%未満

- 第2号盛土遺構南北セクション
- I 粘粉色土(10YR2/3) 礫(φ10~130mm)5%
 - 1 粘粉色土(10YR2/3) 礫(φ10~80mm)25%
 - 2 粘粉色土(10YR3/2) 礫(φ10~25mm)20%
 - III下 粘粉色土(10YR3/4) 礫(φ10~360mm)30%
- 炭化物(φ1mm)1%未満

図117 第2号盛土遺構セクション図

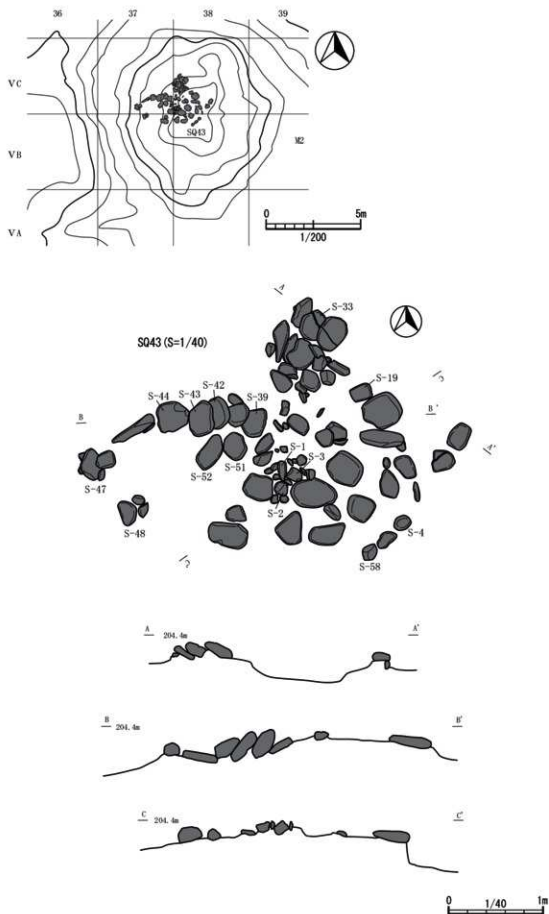


図118 第43号配石遺構(第2号盛土遺構)



图119 第2号盛土遺構出土土器

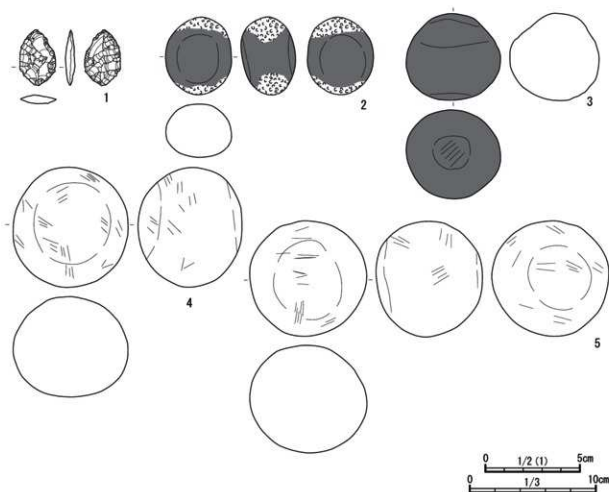


图120 第2号盛土遺構出土土器(1)

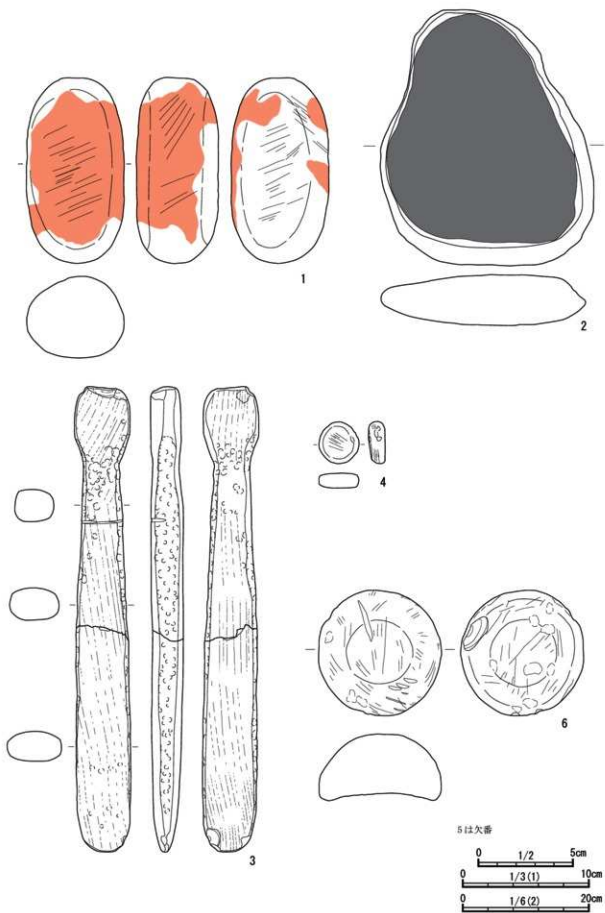
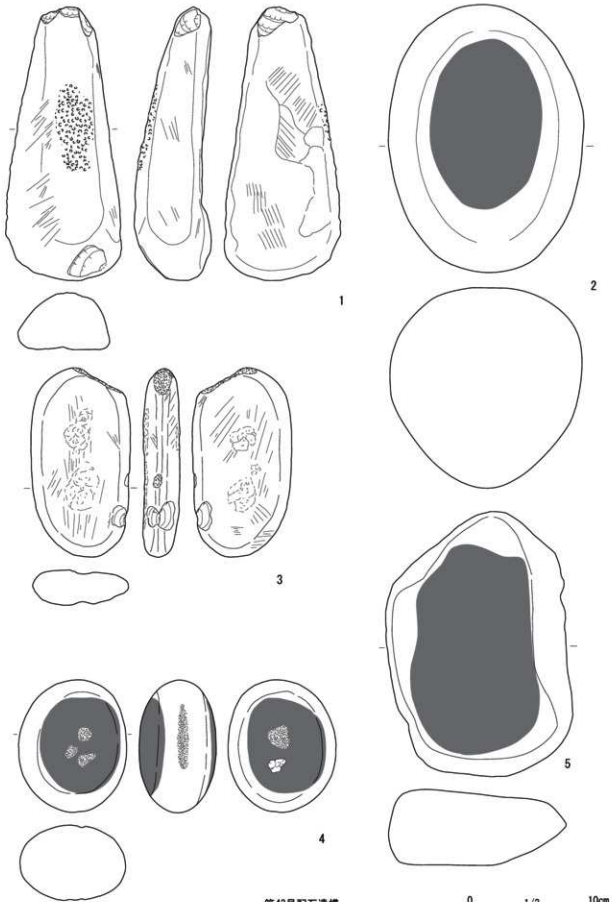
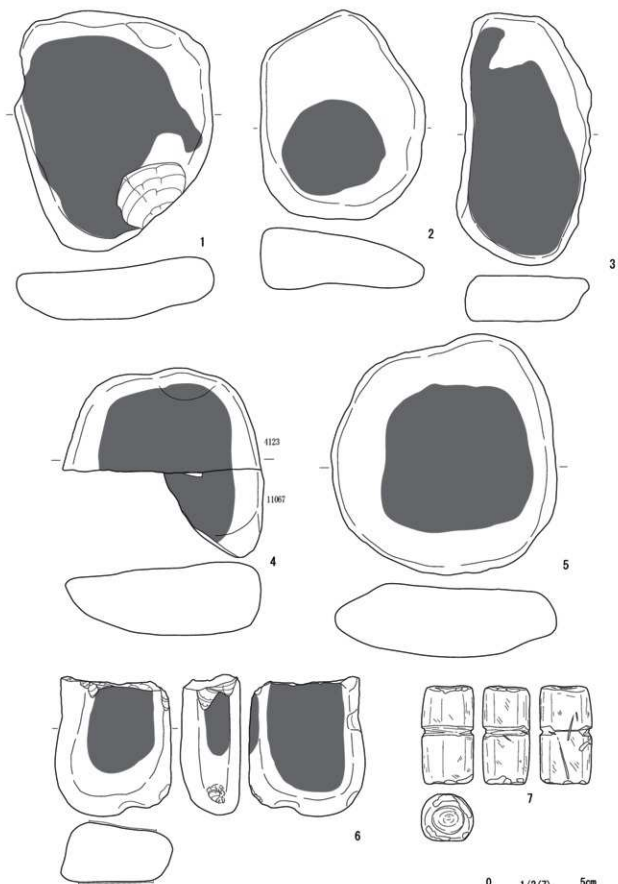


图121 第2号盛土遺構出土石器(2)



第43号配石遺構

图122 第2号盛土遺構出土石器(3)



第43号配石遺構

図123 第2号盛土遺構出土石器(4)

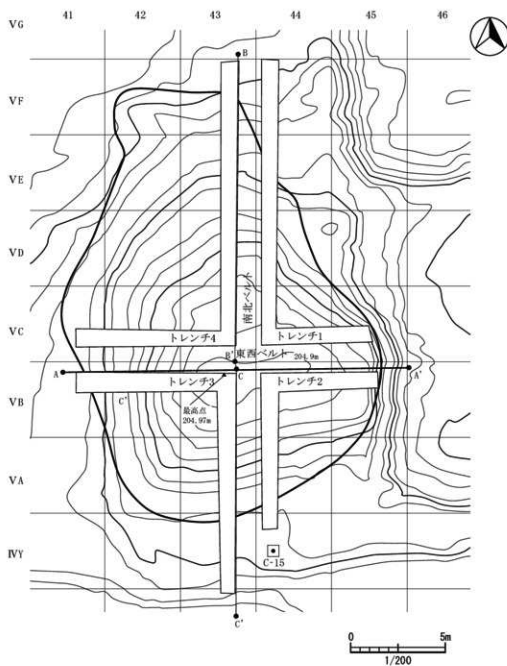


図124 第3号盛土遺構トレンチ・セクション配置図

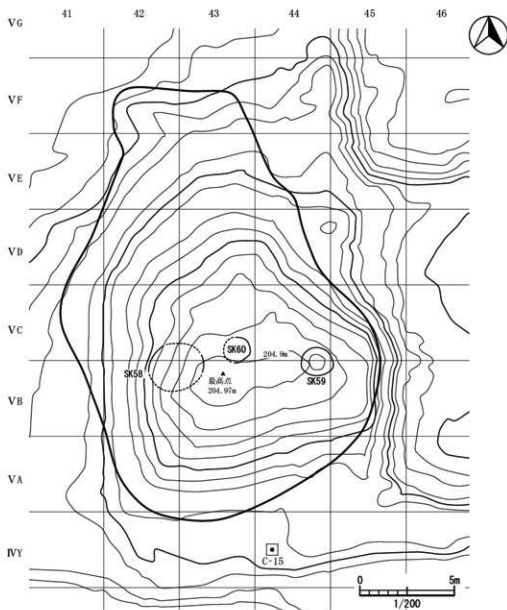
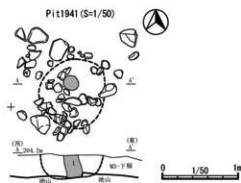


図126 第3号盛土遺構と土坑



VC-45グリッド(東西ベルト)

Pit1941
1層 赤褐色土(10YR2/3) 礫(φ1~50mm)20%、炭化物(φ1~3mm)1%

図127 第3号盛土遺構下層検出のピット

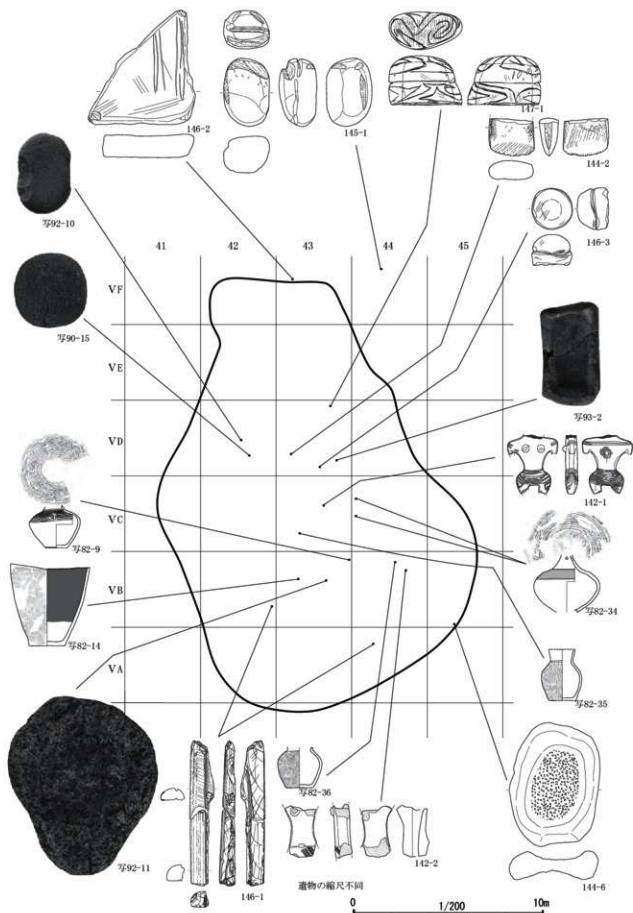


図128 第3号盛土遺構出土遺物の分布

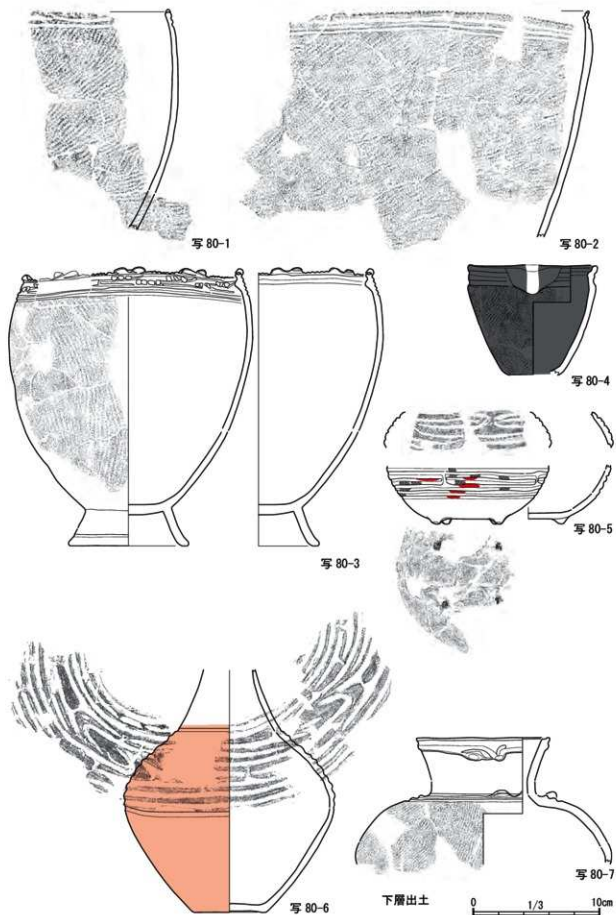


图129 第3号盛土遺構出土土器(1)

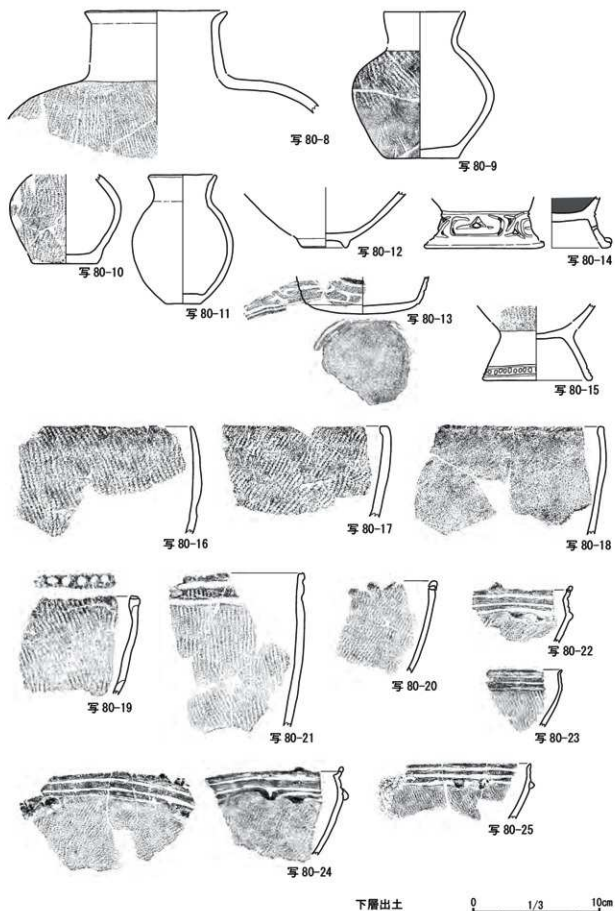
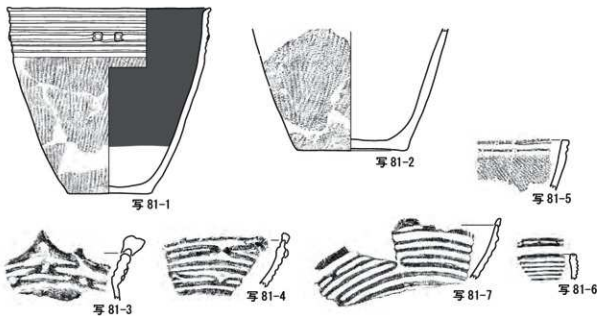


図130 第3号盛土遺構出土土器(2)



下層出土



炭 1 層出土

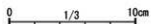


图131 第3号盛土遺構出土土器(3)

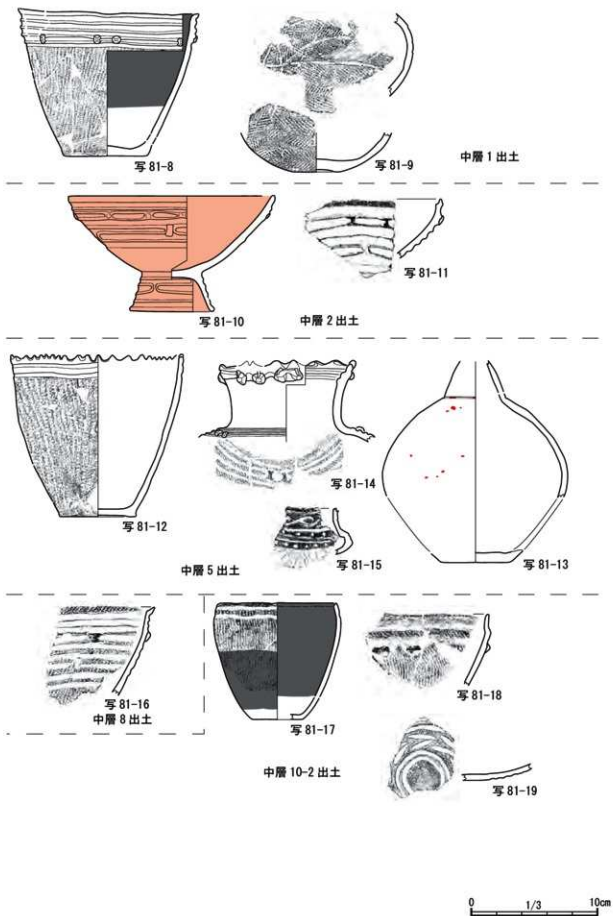
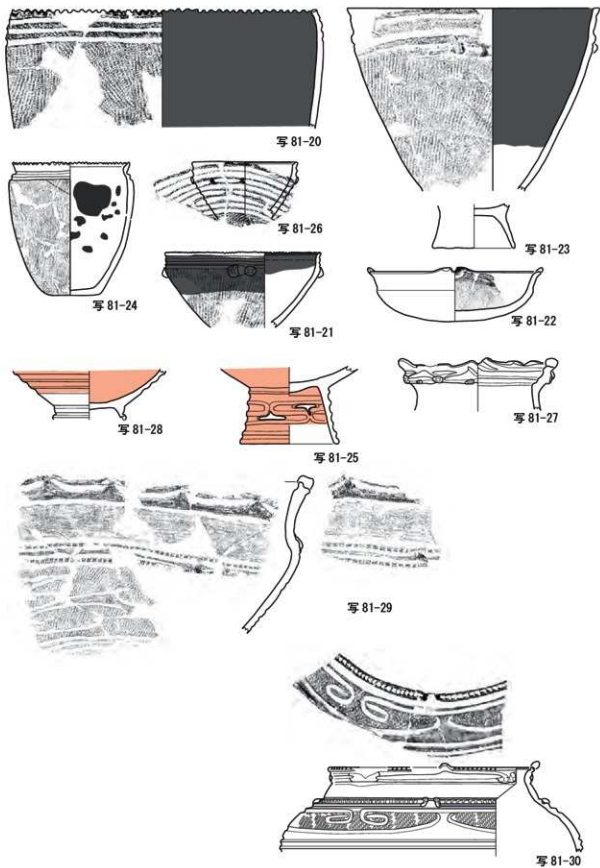


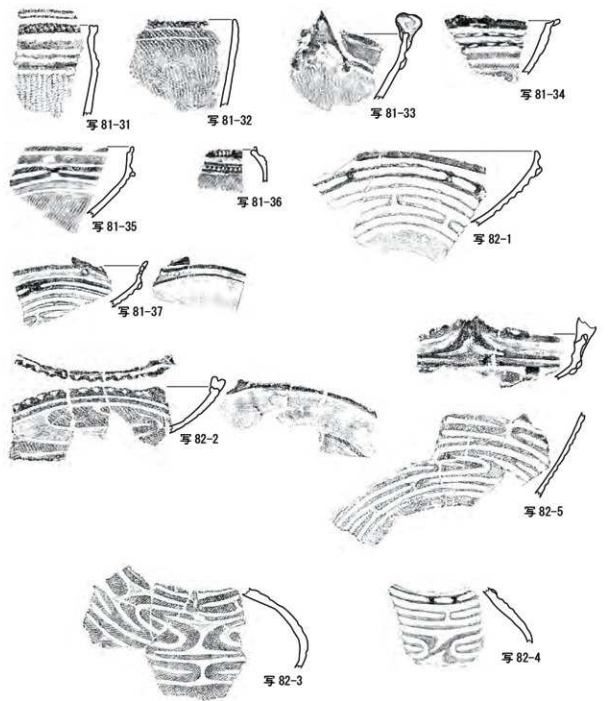
図132 第3号盛土遺構出土土器(4)



中層出土

0 1/3 10cm

图133 第3号盛土遺構出土土器(5)



中層出土

0 1/3 10cm

图134 第3号盛土遺構出土土器(6)

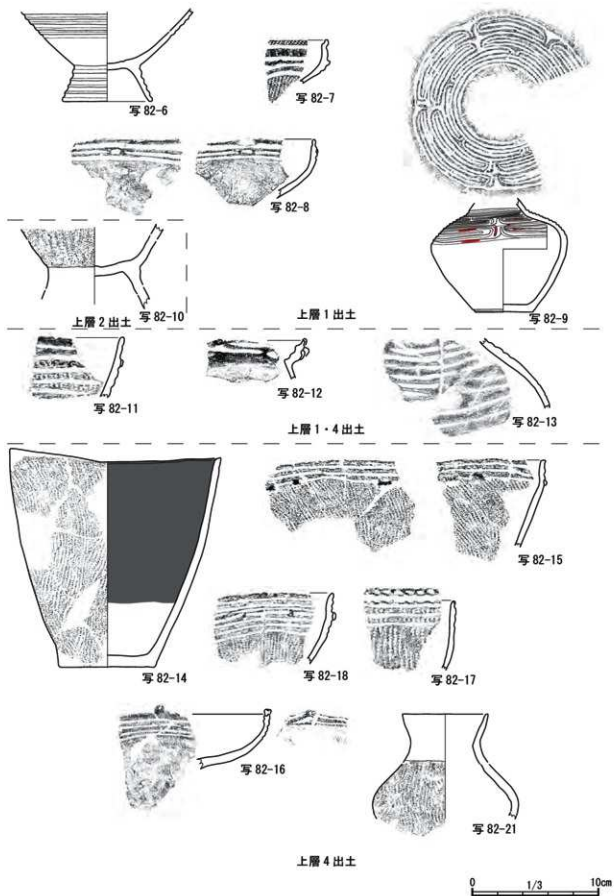


図135 第3号盛土遺構出土土器(7)

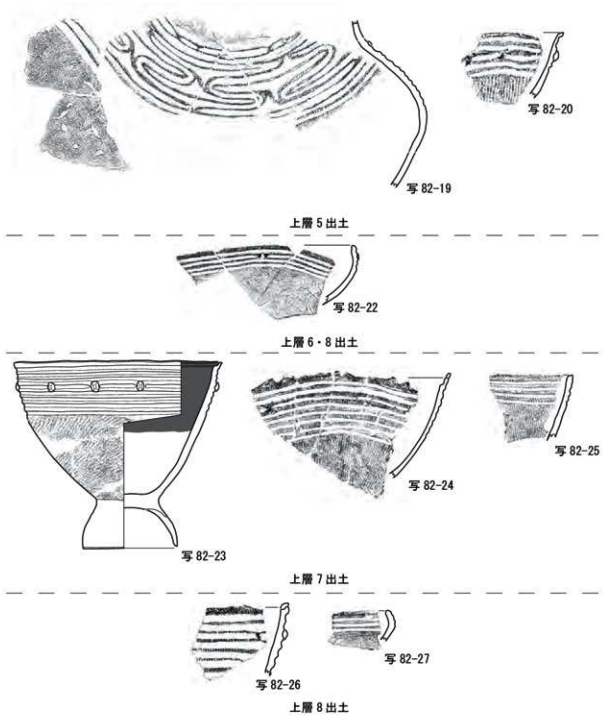
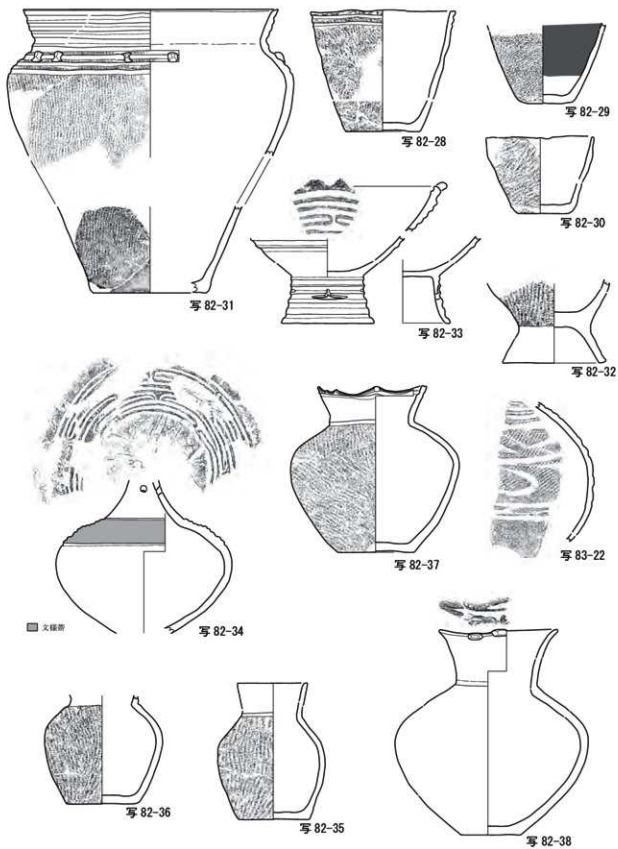
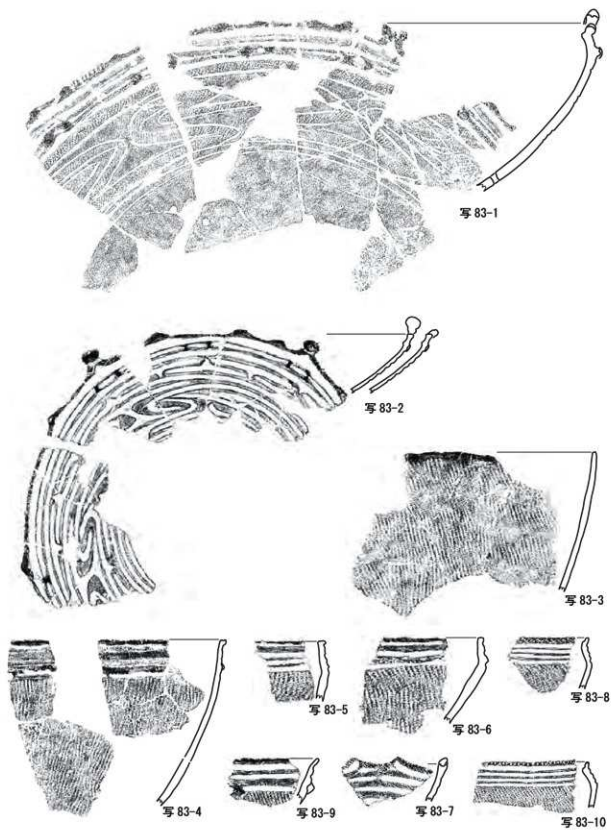


図136 第3号盛土遺構出土土器(8)



上層出土

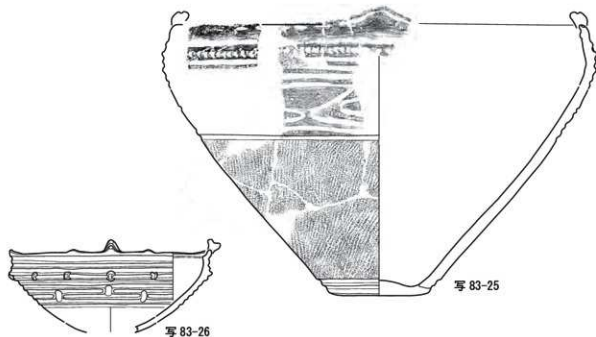
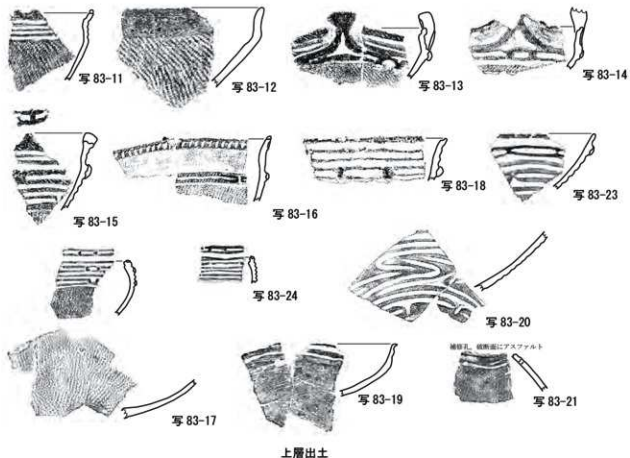
図137 第3号盛土遺構出土土器(9)



上層出土

0 1/3 10cm

图138 第3号盛土遺構出土土器(10)



第Ⅰ・上層出土

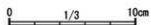
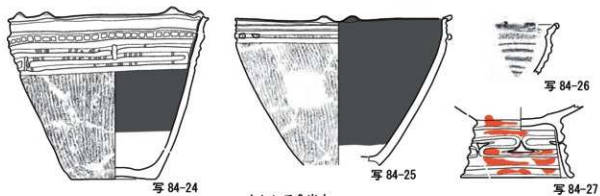


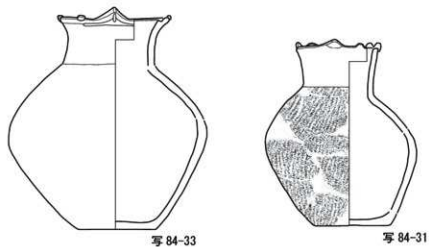
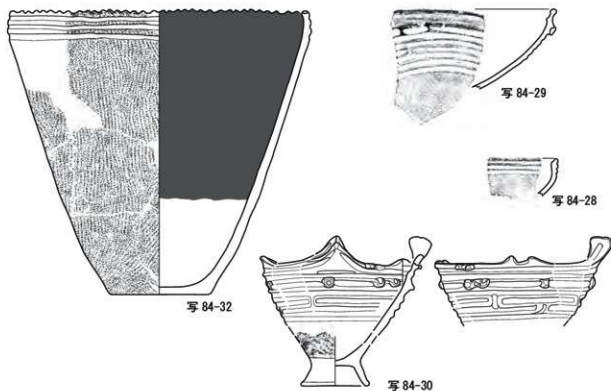
図139 第3号盛土遺構出土土器(11)



図140 第3号盛土遺構出土土器(12)



トレンチ 3 出土



トレンチ 4 出土

0 1/3 10cm

図141 第3号盛土遺構出土土器(13)

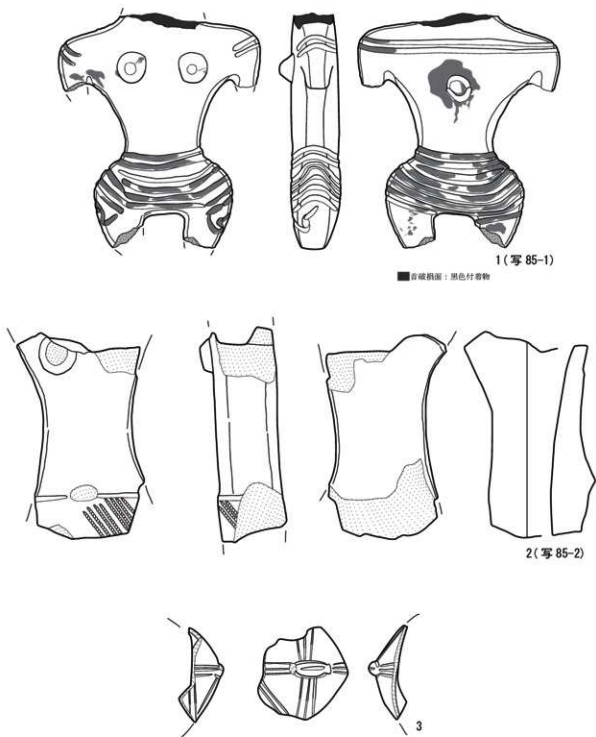


圖142 第3号盛土遺構出土土製品

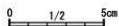
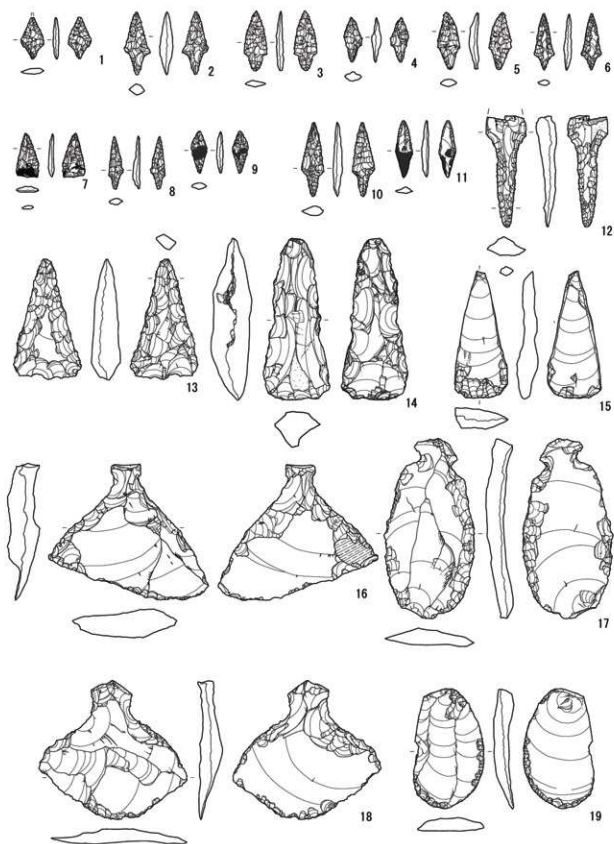


图143 第3号盛土遺構出土石器(1)

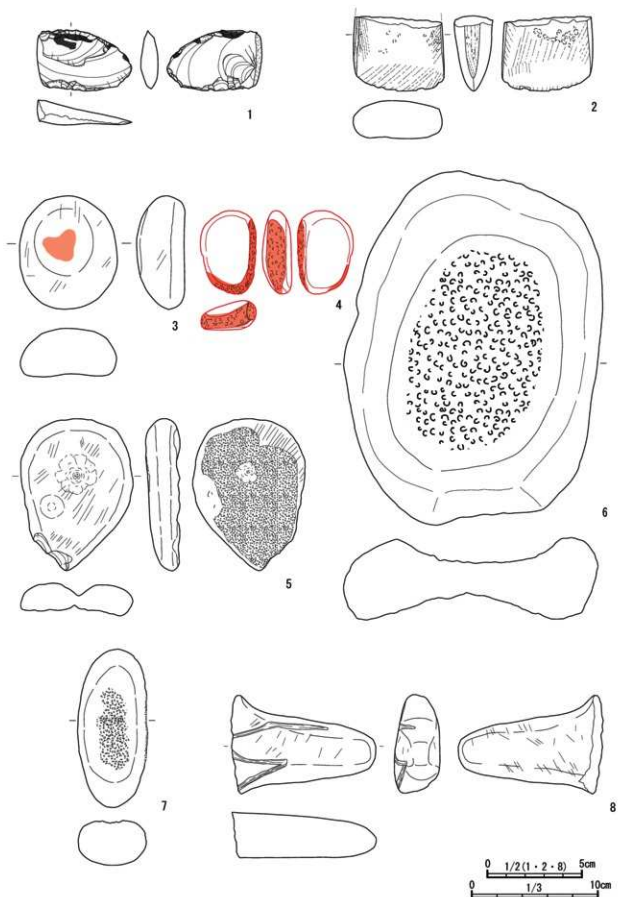


图144 第3号盛土遺構出土石器(2)

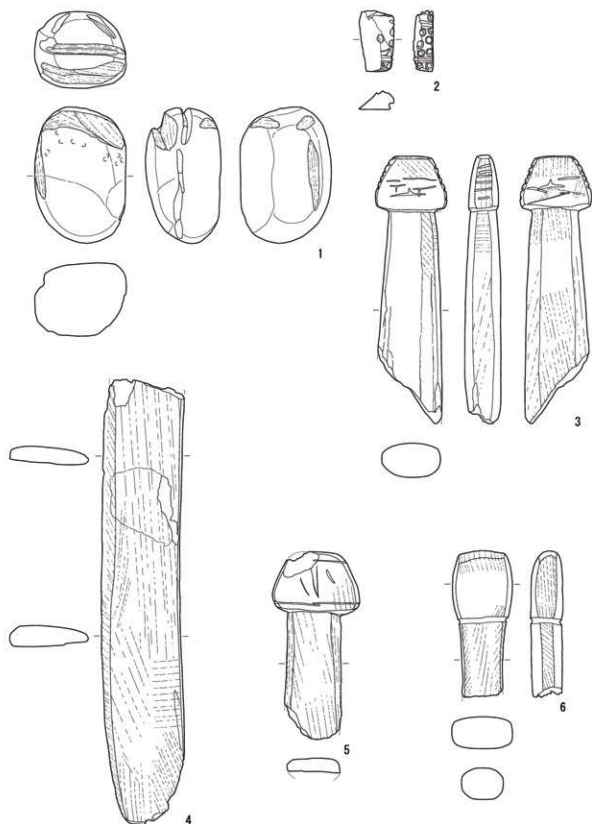


図145 第3号盛土遺構出土石器(3)

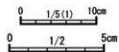
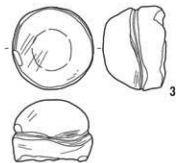
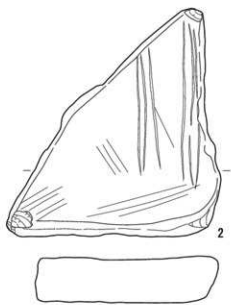
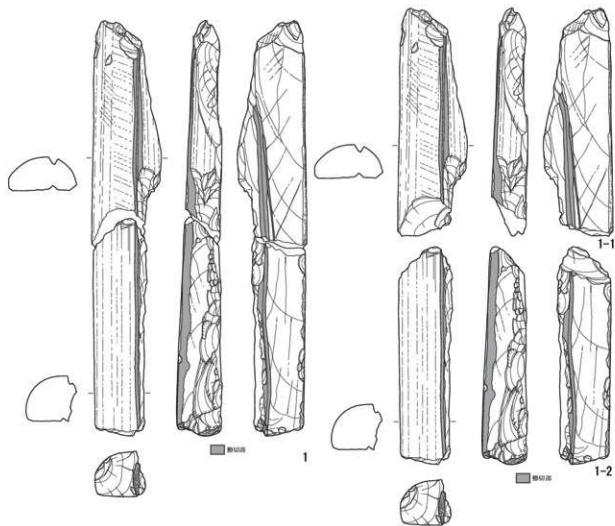


図146 第3号盛土遺構出土石器(4)

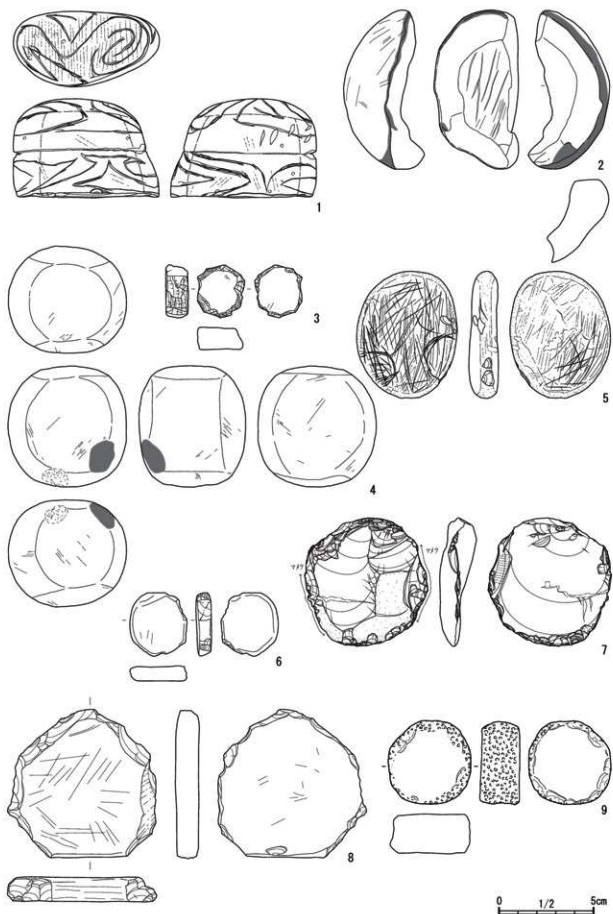


図147 第3号盛土遺構出土石器(5)

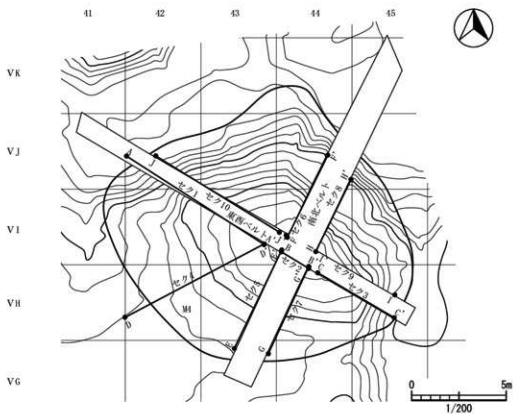


図148 第4号盛土遺構セクション配置図

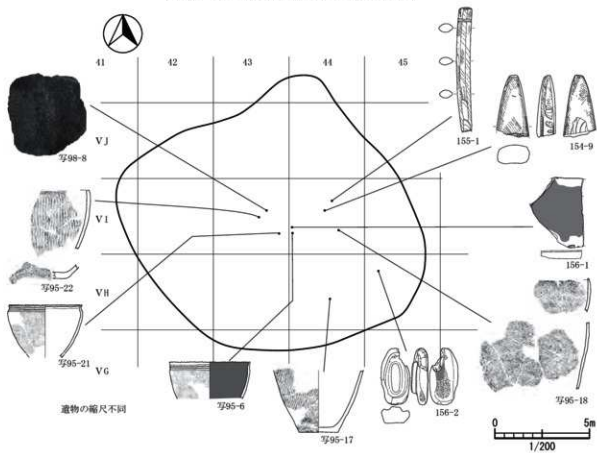


図149 第4号盛土遺構出土遺物の分布

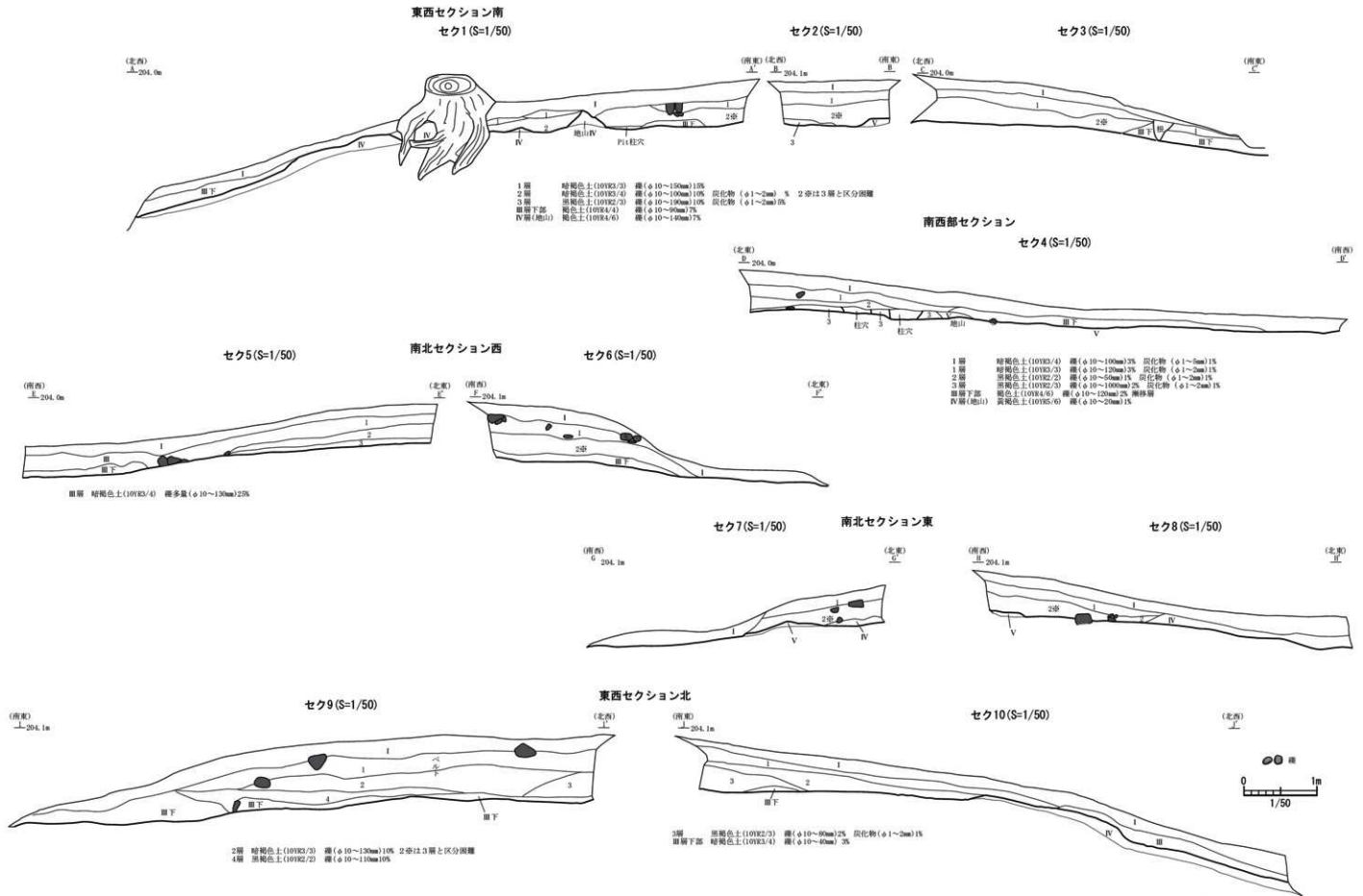


図150 第4号盛土遺構セクション図

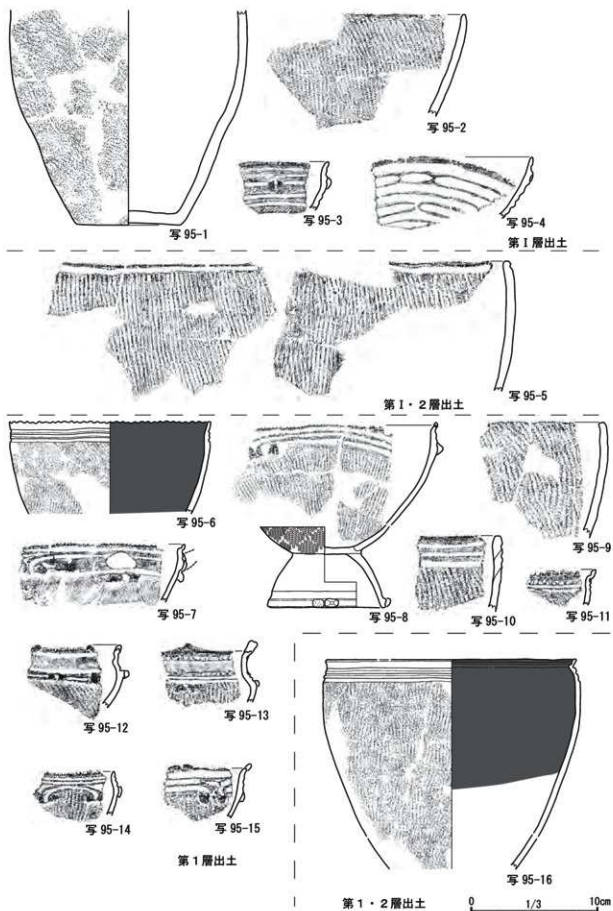


图151 第4号盛土遺構出土土器(1)

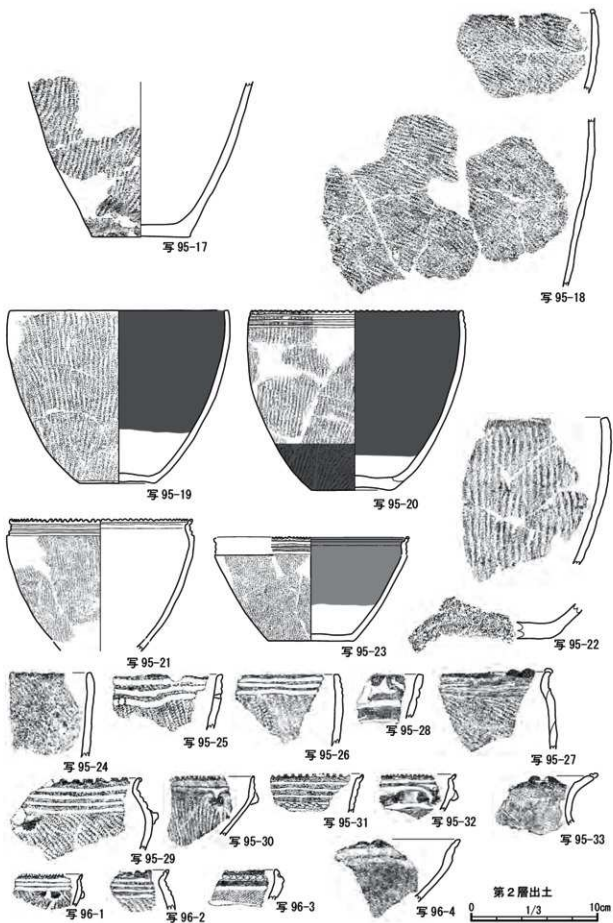
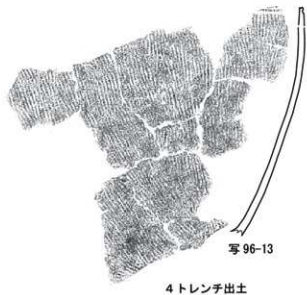
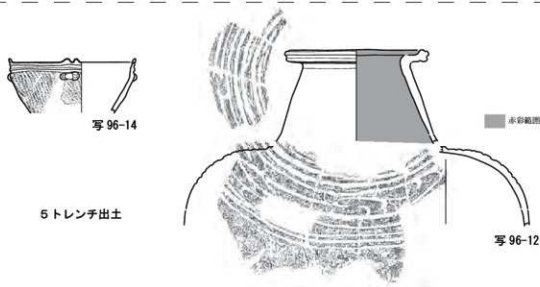
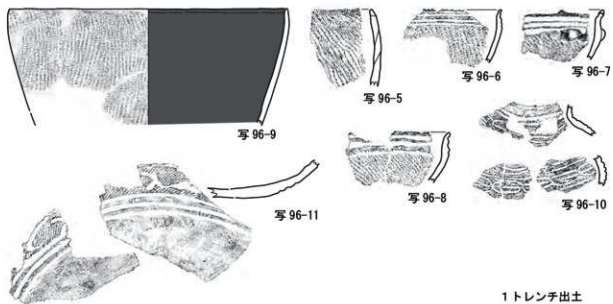


图152 第4号盛土遺構出土土器(2)



0 1/3 10cm

図153 第4号盛土遺構出土土器(3)

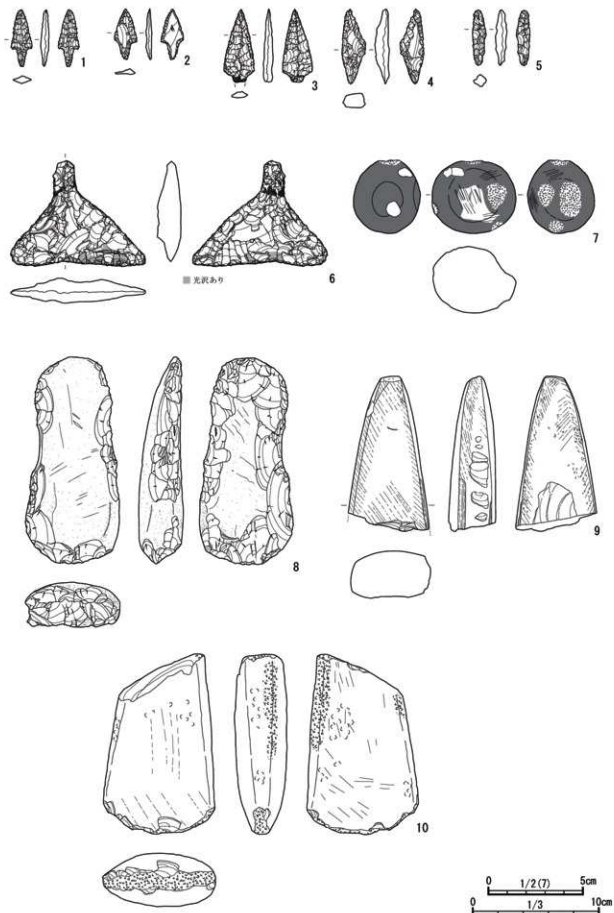


図154 第4号盛土遺構出土石器(1)

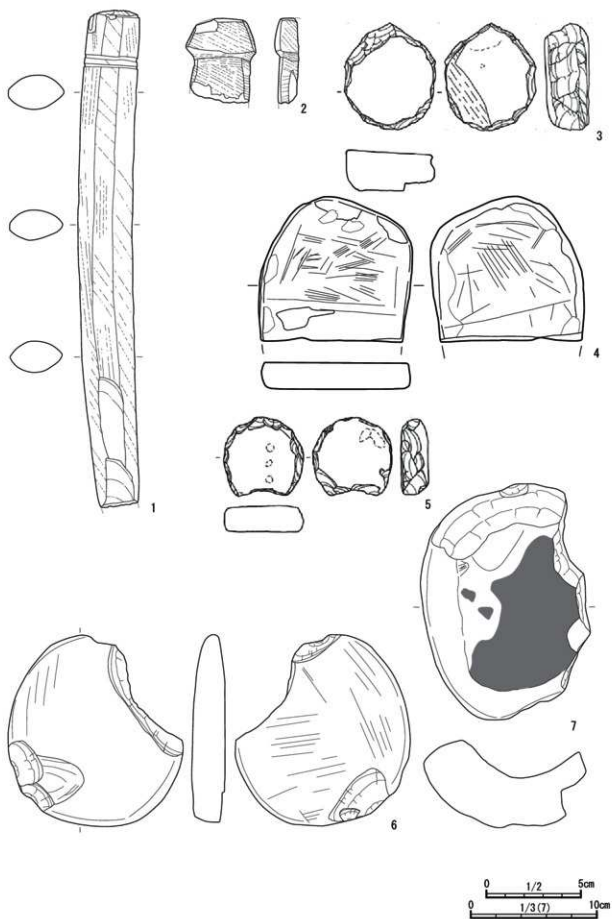


图155 第4号盛土遺構出土石器(2)

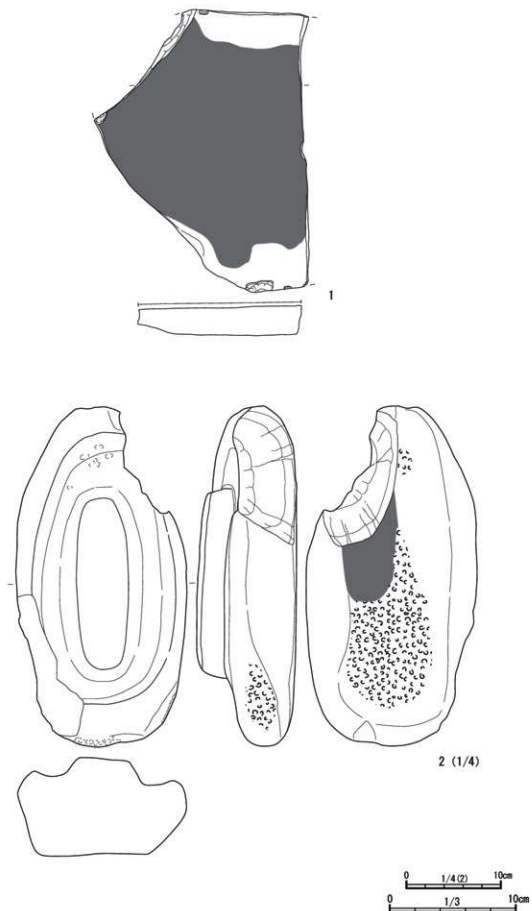


図156 第4号盛土遺構出土石器(3)

第2節 遺構外出土遺物

1 土器(写真99)

写真のみの掲載である。

遺構外は、基本は人力で調査しているが、第2号・第3号盛土遺構の間の範囲は遺物がほとんど出土しなかったため、その区域の一部は重機で表土を除去している。

平場地区の遺構外は、完形となる土器は少なく、大半は破片である。

この一帯はほとんどが晩期中葉以降の遺構が検出されているが、有文土器など時期のわかる資料から判断して、土器は後期から晩期後半まで出土している。幾分中葉以降が多いので、平場地区の中央部は晩期中葉以降に活発に活動が行われたと考えられる。

一方、台地の東縁(北東捨場・東捨場)と西縁(西捨場)側は、後期後葉から晩期までの土器出土しているが、後期から晩期前葉の土器が幾分多い。この区域は斜面捨場への連絡部分なので、捨場の遺物が混入していると思われる。

(高橋)

2 土製品(写真100・図157)

土偶・土製品(図157-1~12) 平場からは土偶5点、粘土塊7点の計12点が出土した。

土偶(図157-1~5) 2は中空土偶の体部下半、1は中空の左足部で、欠損しており欠損部にアスファルトを塗布している。3は右足部が欠損しているもの、ほぼ完形のX字形土偶で、表裏面に漆を塗布している。4・5は中実で4は体部、5は足部である。

粘土塊(図157-6~12) 8は底辺部が平坦であるが、他は不整形を呈する。直径4cm前後と小形なものが多い。

(成田)

3 石器・石製品(写真101~107)

第Ⅲ層が薄く、柱穴出土例が多いため、第Ⅰ層出土品が多くを占める。また、報告書Ⅱ・Ⅲの既刊行の範囲内の出土品については黒曜石の産地分析品など掲載できなかった物があつた。そこで、同じ平場にあることから本稿で掲載した。

剥片石器や礫石器、石製円盤などの石製品は出土量が多く、写真掲載を基本とした。そのため、それらの種類の石器・石製品では写真図版を優先して事実記載する。図化が進んだ岩版等については、この限りではない。写真・図ともに、上層から下層に向かって掲載することを基本とした。その他報告に関する考え方や石器出土点数及び組成については、報告書Ⅳに掲載する。

[剥片石器]

剥片石器は写真101~写102-30に掲載した。石鏃は写101-1~7に7点掲載した。1は正面側の両側縁のみ加工した石鏃である。報告書Ⅱで記述したように、本遺跡からは一少量出土している。2は両側縁に一对の突起を持つ。突起の上下は挟りを持ち、石鏃脚部の内側も内湾する。3はアスファルトが多量に付着しており、図158-1で図示した。4は黒曜石製であるが産地分析委託時点で未整理だったため、産地分析を行っていない。流れが入り、木造出来島群の肉眼的特徴である直径1~3mmの気泡が確認できない。そのため遠隔地産の可能性がある。7は平坦な剝離と茎の作出があり、アスファルトが付着するような完形品の石鏃よりも大形で幅広い形状の形状を持つ。上部の欠損は製作時

の可能性があり石鏃未製品とした。写101-20~28は削器である。20は上下ともに先端を持つが、正面右側の突起が小型石槍に全体形状が類似する削器のアスファルト付着部分と類似する。22・24・25は石鏃に類する形状を持つが、つまみ部が形成されていない。

写102-4は側縁が欠損した石鏃を再加工して整形したものであるが、石鏃の持つ左右対称の属性と実用性から離れるものであり異形石器とした。写102-7は石刃状の素材剥片の末端に加工があるが石鏃とするには断面が幅広く削器とした。写102-11は薄赤色と黄色が混じる剥片で、30(図158-8)は深みのある緑色の石核で、いずれも碧玉製である。硬質な石材であるためか、両者に両極打法の痕跡がみられ、前者の裏面には上下ともにバルブがある。写102-3・12~29は黒曜石製の二次加工剥片・剥片・石核である。産地分析をしたものは漆黒や透明感があるものなど不純物を含まないものを優先して選定し、残りを木造出来島群の特徴である直径1~3mmの気泡等の不純物を含むものとした。その結果、15・17~19・21・23・26・28が深浦八森山群で、29が秋田県鹿角ヶ崎群であった。他は木造出来島群であり、未分析の剥片類と石核は全て気泡等の同様の特徴を持つ。

【磨製石斧】

磨製石斧は写102(図159)に掲載した。石材は凝灰岩、緑色岩である。

写102-31は、基部に敲打痕が明瞭に残る。写102-32は、片刃状の刃部を持つ。写102-33は、基部が欠損している。写102-34は、片刃状の刃部を持つ。左辺に擦切痕を持つ。写102-35は、完形品で、側面の稜は不明瞭である。断面形状は丸い。側面・基部に敲打痕が明瞭に残る。

【礫石器】 磨面と敲打痕など複数の種類の使用痕を持つものも多いが、主体となる使用痕から概ね磨石、敲石、凹石、石皿の順に写103にまとめた。磨石は花崗岩などの硬質の石を含み、大きさも大形から小形まで変異がある。凹石は凝灰岩など軟質の石材が中心である。写103-41(図159-6)は楕円礫の短軸方向に一对の抉りを持つ石鏃である。石皿は写104にまとめたが、1のように有縁のものは凝灰岩製が多い。2はアイサイトで相馬安山岩と呼ばれている板状の石材であり、赤色顔料が付着している。7は花崗岩製であり、中央下の石の目が斜めに入り器表面が白みを帯びて灰白色に見える部分を中心に20×15cmほどの非常に滑らかな磨面を持つ。自然礫については写104-9~12に水晶や有孔自然石、異形の礫(11; 図158-11)を掲載した。

【石棒類】

石棒類は写真105(図160)に掲載した。石材は大半が粘板岩である。

写105-1は大形の石棒である。胴が膨らむ形状であり、敲打痕が残る。先端部は平場地区から出土しているが、柄部の方は北捨場から出土している。写105-2は大形の石刀である。凝灰岩製である。柄部が欠損した後、折れ面を再加工している。刃先に刻みが見られる。写105-3は、石刀断片である。写105-4は、接合資料であり、片方は報告書Ⅱ検出のSI03から出土している。もう一方は平場地区出土である。

【岩版】

遺構外からは岩版が4点出土し図162-1~4に図示した。1は周縁が丸みを呈し、2は端部が平坦で側縁が直線で全体の形状が方形を呈する。3は下部の両端部に出っ張りがみられるものである。

1・4は、中央部に直線の正中線を施文し、左右に施文している。3は左右に渦巻文を施文している。2は横位及び縦位に捺痕を施文している。1は大洞C₁式・3が大洞A式に該当すると思われる。

(成田)

〔その他の石製品〕

写105-6は中央部に両端から抉りを持つ。独鈷石と捉えられ、研磨されていないことから未製品の可能性がある。写105-7は、中央部に半球状の小さな突起を持ち、青竜刀形石器の破片である。シルト岩製で軟質である。被熱により欠損しており、器表面も一部が黒変している。青竜刀形石器の製作地域である函館市戸井地区や南茅部地区の製作地域で見られる典型例に比べて狭長である。また、典型例の色は淡い青灰色のものが多く、函館市白尻小学校遺跡の出土品にみられるように、石材は変質安山岩や砂岩、珪化した凝灰岩など硬質である。在地の石材を使用して形状を似せて製作された可能性がある。帰属すると考えられる縄文時代中期後葉から末期の遺構が遺跡北西部で見つっている(報告書Ⅲ)。第Ⅰ層の出土品であるが、平場地区でも、晩期遺跡と重層をなしていた可能性を示す資料である。写106-8は敲打痕が側面を全周する。軟質の凝灰岩製であり敲石に見られるような敲打痕からの剥落がなく、円盤状石製品とした。写106-9・10は半球状の石製品であり、9は裏面が平坦であるが、10は内側に向かって窪みを持つ。

(齋藤)

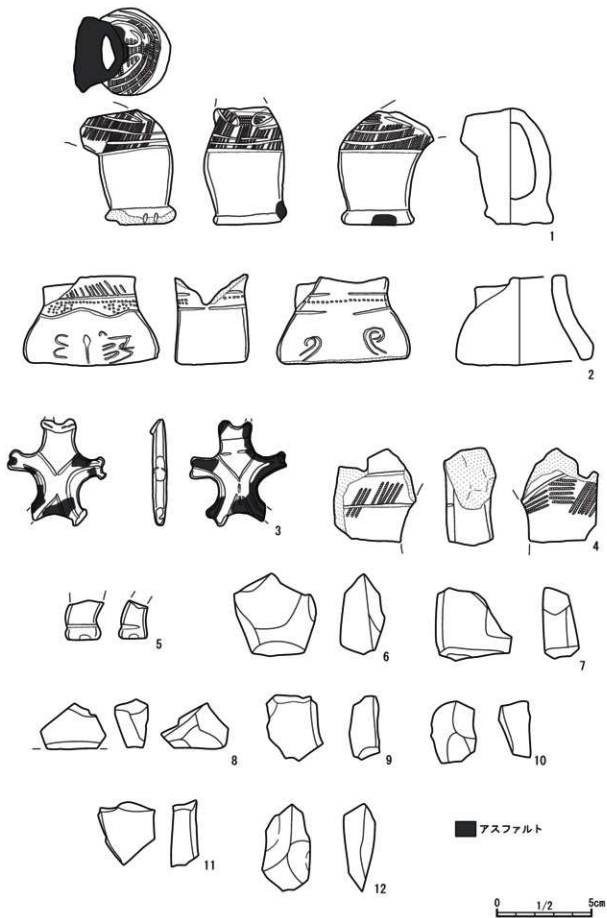


図157 遺構外出土土製品



圖158 遺構外出土石器(1)

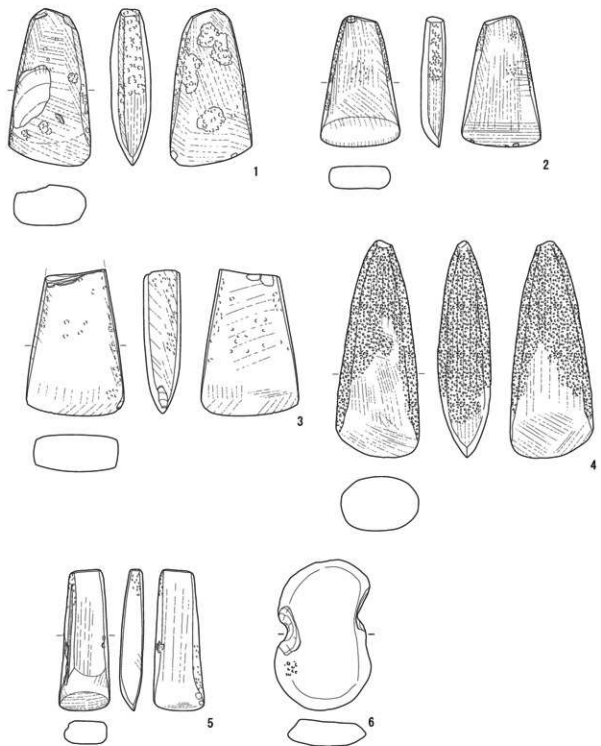


図159 遺構外出土石器(2)

0 1/2 5cm

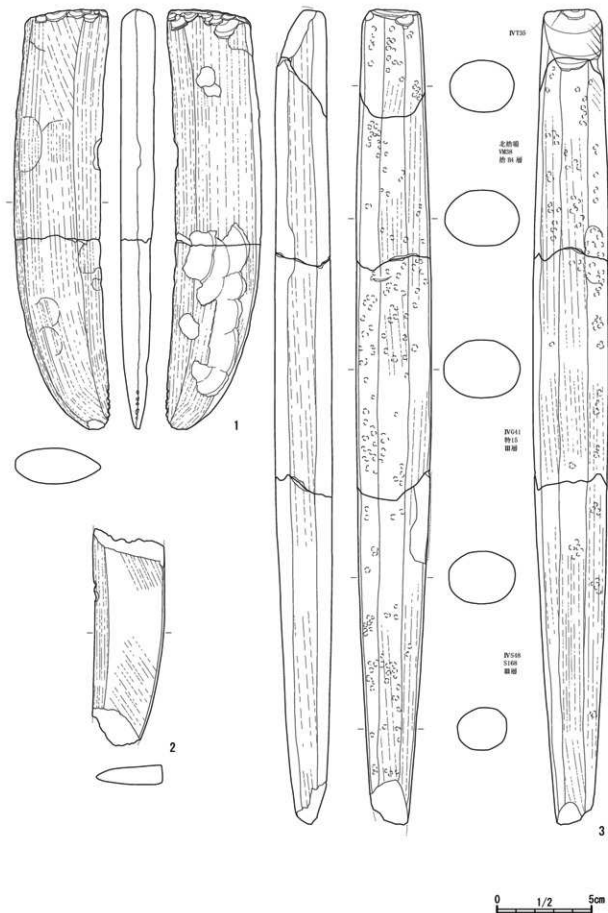


圖160 遺構外出土石器(3)

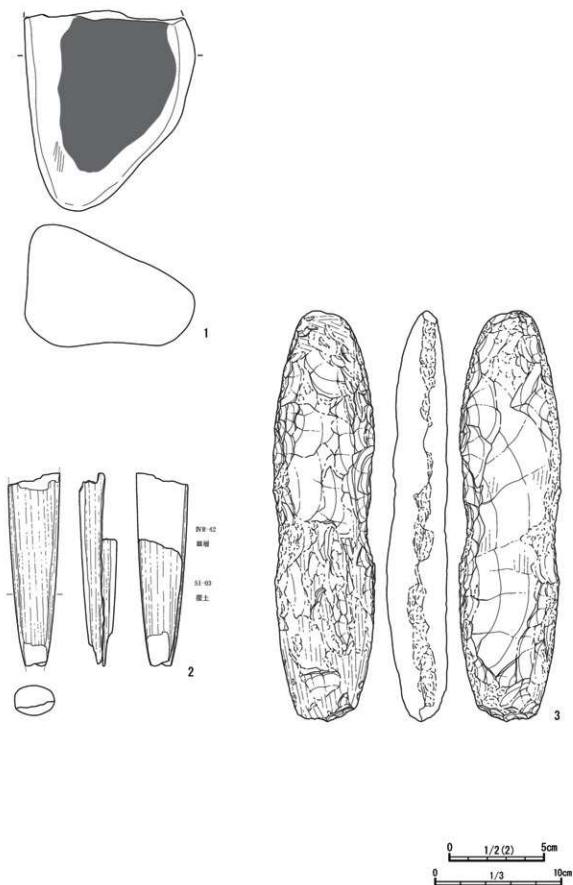


圖161 遺構外出土石器(4)

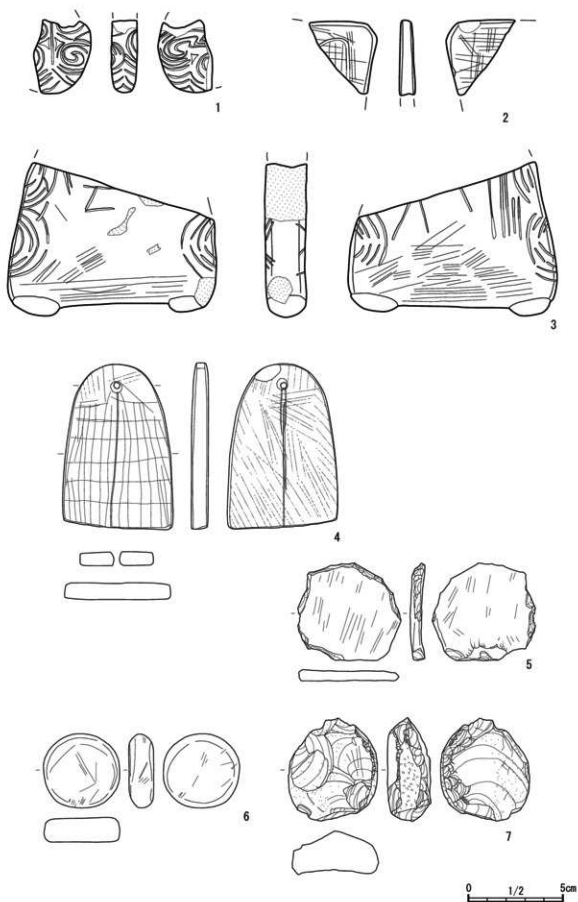


圖162 遺構外出土石器(5)

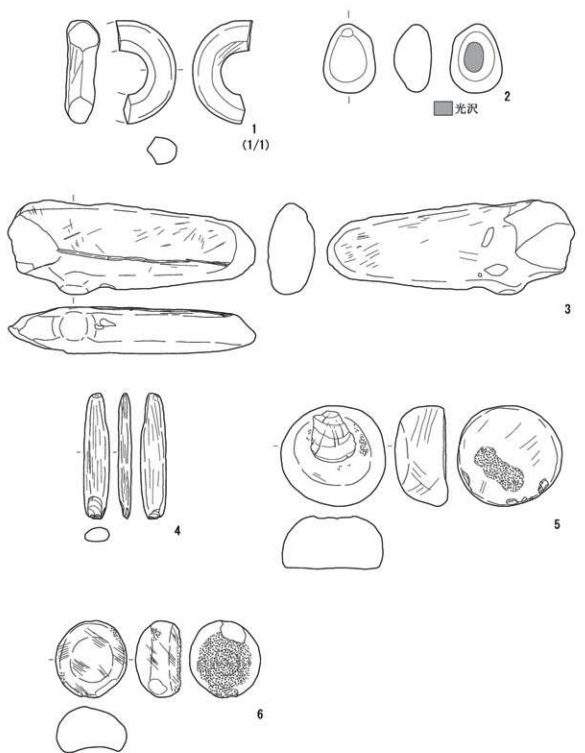


圖163 遺構外出土石器(6)

第3章 まとめ

第1節 遺構

1 建物跡・掘立柱建物跡

(1) 建物跡の特徴

本報告書範囲で確認できた柱穴(ピット)は、配置などから建物跡と掘立柱建物跡の2つに分類し、その特徴を第2章にて記述した。これらの遺構は柱穴のみの検出であり、遺構上面に何かしらの施設があったかは、判断はできない。現状では残された痕跡から、これらの遺構の特徴について明らかにする必要がある。以下記述を簡便化するため、水上遺跡(青森県教委2008第452集)の成果を参考に、柱穴の配置から、以下の3つに分類した。

- A) 主柱穴のみ : SB
- B) 壁柱穴のみ : SI106, 109, 110, 112, 116, 119
- C) 主柱穴と壁柱穴: SI102, 103, 104a, 107, 108a, 111, 113, 114a, 114b, 115, 117
- 不明 : SI104b, 105, 108b, 118

A)は本報告では、掘立柱建物跡に、B)とC)は建物跡として分類した。

図164に川原平(1)遺跡の代表的なB)とC)に分類した建物跡を集成した。柱穴のみからの復元であり、不確定要素もあるが、本遺跡で確認できた建物跡の特徴を浮かび上がらせるために、これらの建物跡について今一度記述する。建物跡は便宜的に大型を径10m以上、中型を径5m以上10m未満、小型を径5m未満とする。

C)の主柱穴と壁柱穴は、中～大型の建物跡に多く、平面形は円形がほとんどである。

主柱穴は開口部径が1mを超えるものが多く、小さくても60cmはある。1mを超える主柱穴は深さも1m以上ある。中型の建物跡は、4基の主柱穴を持つものと、SI107, SI111のような、1、2基の主柱穴を持つものがある。

主柱穴の配置は、概ね方形、もしくは方形に近い台形であり、後期後葉にみられるような台形の柱穴配置は見られなかった。柱痕間は3～4mが多い。

壁柱穴は開口部が50cm以下、掘方の浅いものが多い。壁柱穴は密に並んでいる部分とまばらに並んでいる部分とに分かれており、全周囲が均一に配置されていない。また、壁柱穴の中に時折開口部径や深さが他と異なる場合がある。別の建物跡の可能性もあるが、規格の異なる壁柱穴が並ぶとの指摘もある(宮本1988)。

出入り口施設は見られなかったが、壁柱穴間の隙間は、出入り口に関係する可能性が高く、壁柱穴の並びからおおよそ特定はできる。SI104a, SI108a, SI114a, SI114bなどは、北側の壁柱穴の間隔が開いているのが見受けられる。北側に出入り口が設けられていたためと考えられる。

建て替えを示すのは、壁柱穴が同心円を描く、SI104aとSI104b, SI108aとSI108b, SI114aとSI114bである。出土土器で判断する限り、内側の小さい住居の方が古い時期であるので、建て替えに伴う拡張と考えられる。

B)の壁柱穴のみの建物跡は、小型の建物跡が多い。中・大型建物跡の脇にある場合が多く、単独では存在しない。内側に主柱穴候補の柱穴は存在するが、明確に組み合わせるかは、判断ができない。

A)の掘立柱建物跡は、4本柱が基本である。柱痕間は3～4m前後が多いので、上記建物跡の柱痕

間と大差はない。一方で、6本柱構成の掘立柱建物跡が検出されている。SB11は、亀甲形と推定される柱穴の配置である。類例は、川原平(4)遺跡で後期後葉の例であるが、亀甲形の掘立柱建物跡が検出されている。SB25は6本柱構成であるが、亀甲形ではなく、1軒×2軒の長方形の配置である。M4と重複した箇所位置し、岩木川を望める地点に立地している。

(2) 晩期住居の類例

川原平(1)遺跡の建物跡は、柱穴配置から住居を復元したので、不確定要素が強い。そのため、構造を検討する上で、青森県内の特に津軽地域を中心に類例を集成し(図165)、これらの建物跡と比較検討する必要がある。川原平(1)遺跡は後期後葉から遺構が確認されているので、後期後葉から晩期後葉の建物跡について津軽地域を中心に集成した。

後期後葉の住居としては、大鰐町駒木沢(2)遺跡(図165-②)において、複数棟検出されている。主柱穴は4基構成の平面形態が台形状で、台形の狭い辺側に出入り口があり、遺構の周辺に壁柱穴が見られる。後期後葉は4本主柱台形配置、石囲炉、地床炉、出入り口施設、壁柱穴がセットになることが指摘されている(青森県史2013)。川原平(4)遺跡(図165-⑤)では、径3.6m程の後期後葉の住居が検出されている。掘方の中心に炉跡があるが、柱穴は検出されていない。また、芦沢(2)遺跡(図165-⑥)では、不規則な壁柱穴や主柱穴が配置されているなど、主柱穴の台形配置を採らない構造もある。

晩期になると、4基の主柱穴が正方形の配置を取り、その中心に炉を設けている(青森県史2013など)。大型住居と小型住居の分化が指摘されている(青森県教委2008第452集)。さらに以下のような住居が確認されている。

大型・中型住居として、五所川原市千荷(1)遺跡(図165-①)は、ピットのみが確認された建物跡である。第1号住居跡は、県内最大と呼ばれる建物跡であり、径が16mと推定されている。川原平(1)遺跡のSI108aもこの規格の住居と言えよう。北西側に出入り口に関わる溝状の施設を有する。第2号建物跡は、比較的全体像の分かる構造であり、径12mほどである。主柱穴は推定で4基であり、柱穴間は4mほどである。川原平(1)遺跡の大型建物跡の多くがこの住居と類似している。

これらの住居の時期は報告書では晩期とされているが、青森県史(青森県史2013)では晩期中葉、後葉と推定されており、川原平(1)遺跡の遺構時期に近い。

弘前市十腰内(1)遺跡(図165-⑩)では、大洞BC式期の住居が検出されている。4基の主柱穴と93基の壁柱穴がめぐる。直径13m程で、中心に石囲炉、北東側に平行溝を有する出入り口がある。主柱穴間は5m弱ほどであり、幾分台形状の平面形態である。他に3m程度の小型住居も検出されている。

弘前市大森勝山遺跡(図165-⑨)では、後期末葉から晩期初頭の住居が検出されている。直径13.7m程で、主柱穴の掘方は、開口部径1m以上、深さ1m近くである。その中心に石囲炉を持つ。周溝がみられ、壁柱穴は点在する程度である。

外ヶ浜町宇鉄遺跡(図165-⑦)では、大洞C2式期の中型住居が確認されている。6m×4.8mの楕円形である。2基の主柱穴と、その他の柱穴で構成され、掘方は確認されていない。

大型・中型住居はこれ以外に、青森市(旧浪岡町)源常平遺跡で検出されている。第70号住居跡は大洞B式頃で、97基の柱穴で構成される。

こうした構造の住居は、南部地域では弥生時代まで継続し、八戸市では、田向遺跡(八戸市教委2004第105集)、牛ヶ沢(4)遺跡(八戸市教委1997第71集)などで、方形の配置に組まれた4基の主柱穴と壁

柱穴を持つ住居跡が検出されている。

小型住居は以下の類例が挙げられる。

青森市(旧浪岡町)野尻(1)遺跡(図165-⑧)の例は、中心に地床炉と壁柱穴8基が取り囲む住居で、掘方は確認されていない。径3.9m程で、晩期中葉の住居である。

南部地域では、右エ門次郎窪遺跡(図165-④)では、2つの住居が重なって検出されている。3m弱の小型住居であり、主柱穴を囲むように壁柱穴が巡っている。外側に延びる八の字形の出入口を有する。時期は、大洞C2式である。

八戸市鴨平(2)遺跡(図165-③)では、晩期初頭の住居が確認されている。4.7m×4.4mの規模であり、出入口が東側と推定されている。中心に石囲炉、4基の主柱穴、2基一組の壁柱穴がみられる。2基一組の壁柱穴は、部分的ではあるが、川原平(1)遺跡のSI114aなどに見られる。川原平(4)遺跡A区では、掘方と炉跡のみ検出できた晩期5期の小型住居が確認されている。

(3) 建物跡・掘立柱建物跡のまとめ

川原平(1)遺跡検出の建物跡と、県内の住居跡の比較検討を行った。晩期的大型住居の多くは、壁柱穴と方形に配置された4基の主柱穴を持った構造を有しており、川原平(1)遺跡の建物跡と非常に類似している。しかし、大森勝山遺跡の住居は、周溝が巡り、壁柱穴がない構造である。川原平(1)遺跡では主柱穴のみしか確認できない場合、掘立柱建物跡と分類したが、このAの中には、大森勝山遺跡の大型住居のような例も含まれている可能性がある。

後期後葉の建物跡は川原平(1)遺跡(報告書Ⅱ第564集)にも存在しているが、明確な台形状の配置をした主柱穴はない。

本遺跡の建物跡は、炉跡が確認されていないので、遺構上面は削平されている可能性がある。SI108a一帯は、遺構確認面の第Ⅳ層の上面に第Ⅱ層(水田関連層を含む)が乗っており、本遺跡の立地する場所の一部が、近年まで水田として利用されていたため(図3など)、遺構上面が削平され、住居の掘方が確認できなかったことが挙げられる。しかし、その範囲は、調査区全域に及ぶわけではないので、すべてが近代以降に削平されたとは考えられない。そして他の原因として、当時の集落変遷の過程で、ある段階に大規模に整地された結果、遺構上面が削平された可能性が挙げられる。平場地区の周辺に確認されている捨場には、多量の礫を含む土砂が確認され、その礫の混入具合から、平場地区から廃棄された可能性が高い(報告書Ⅵなど参照)。

他にも原因はあると思われるが、現状ではどれか一つの要因に絞れるわけではなく、複合した要因で遺構上面が消失したと思われる。

潜在的に建物跡は、平場地区にはまだ存在していると思われるが、調査及び、整理の過程で柱穴配置から推定できた建物は、現状では以上である。

2 盛土遺構

(1) 盛土遺構の特徴

平場地区には報告書Ⅲで掲載したM1を含め、4基の盛土遺構が確認されている。

報告書Ⅲでは、M1下から、晩期前半ごろの墓域が確認されている。晩期後半以降、墓域の上面に盛土遺構が形成され、この遺構には生活を示す痕跡が認められないことから、晩期前半と後半とで集落

内の場の機能が変化したことを示している。

M1は堆積層の一部が北捨場と連続していること、堆積層の母材が捨場と類似していること、傾斜地に向かって堆積層が形成されていることから、捨場と同種の構造となっている。

本報告書で扱ったM2～M4については、M2は地山の高まり、堆積層が薄い点で、厳密には盛土遺構の範疇とは呼べないが、わずかながらに遺物包含層も形成されている。地山の最高地点に配石遺構が築かれている。M3は、水平堆積によって土饅頭のような高まりを形成している。下層は、その面を掘り込んだ遺構が数基確認されている。M1同様に盛土遺構形成前の生活面と推定される。M4は、遺物包含層は形成されているが、堆積層はそれほど厚くないため、層の堆積が水平堆積か特定方向への傾斜堆積かは判断できないが、北捨場へ傾く地形などから、傾斜堆積の可能性が高い。

4基の盛土遺構の構成母材は、黒褐色から暗褐色の層を基本とし、礫を多く含む。他に炭化物層なども含まれている。

盛土遺構の構築時期は、晩期4期と5期の土器が混在しているので、上限は晩期4～5期、主体は晩期5期と思われる。

(2) 類例

盛土遺構もしくは、類似した遺物包含層の類例について青森県内の事例について以下に記す。

弘前市薬師遺跡(青森県教委2014)では、盛土遺構が確認されており、晩期前半の遺物包含層の上面に晩期後半の盛土遺構が形成されている。地山は西側に向かって緩やかに傾斜しており、この傾斜地に盛土遺構が構築されている。盛土遺構の構成母材は、黒褐色から暗褐色の層、焼土層、炭化物層に加え、黄褐色の層も含まれている。堆積の方向、傾斜角度などに差異が見られるので、一度に盛土遺構が築かれたのではなく、複数回にわたって土砂などが廃棄されて構築されたと考えられる。

外ヶ浜町字鉄遺跡(三厩村教委1996)では、晩期後半の堆積層が傾斜して堆積しており、かつロームが人為堆積していると報告されており、薬師遺跡の盛土遺構と同じような母材、構成になっていると思われる。

盛土遺構の規模と、構成母材に違いはあるが、盛土遺構の構造は、川原平(1)遺跡のM1も薬師遺跡なども類似している。

川原平(1)遺跡の盛土堆積層には礫が多く含まれ、薬師遺跡には黄褐色層が形成されていることは、おそらく盛土遺構の母材が、周囲の地山などと関連しており、遺跡の整地、住居の改築などに伴う排土などを積み上げたとも考えられる。

(3) 盛土遺構の分布と他遺構との関係について

この盛土遺構の性格については、遺物の廃棄場、生活空間の積み重なり、物送りなどの祭祀的な意味あいなどの指摘がなされている(斉藤2010、福井2014、八木2010など)。物送りの祭祀的な意味については、本遺跡のみで解決できる問題ではなく、遺物の出土状況、層相など他の遺跡との詳細な比較検討を要するため、現状では保留せざるを得ない。ただ、生活空間の積み重なる点では、盛土遺構には、炉跡や貼床など、生活痕跡は確認されていないので、居住域として機能していなかったと考えられる。現状では、盛土遺構の性格を捉えることは困難な面もあるが、M1を取り上げれば、北捨場と層が連続しており、かつ礫を多量に含む類似した層相であることから、廃棄活動の一環として機能していたことが一つ挙げられる。廃棄活動の一環であれば、居住域と隣接していた場所に築かれている

こともあり、他の遺構との関係も考慮する必要がある。そして盛土遺構が築かれた地区の地山は周辺よりも一段高くなっており(図27など)、地山、遺構、微地形の関係(八木2004)を捉えることも、盛土遺構の解明の要素となりうる。

ここでは廃棄活動という観点に立ち、地山、遺構、微地形の3つの関係から盛土遺構について検討する。

各盛土遺構の立地及び微地形、遺構、並びに堆積層の傾斜方向を検討すると、次のような点が読み取れる。グリッド40列を中心に、4つの盛土遺構に囲まれた地帯は、遺物がほとんど確認できなかった地点である。等高線としては、緩やかであるが低くなっている(図166の「低位地区」)。3箇所断面図(地形断面図①～③)を作成したところ、盛土遺構のある地山をそれぞれ最高点として、その周囲は低くなる。盛土遺構外側の建物跡が分布する範囲は、建物跡の上面は削平されていることを考慮すると、本来の地表面は高かったと思われる。つまり4つの盛土遺構に囲まれた一帯は遺物出土が少なく、一段窪地になっていたことが窺える。

柱穴群との関係については、M1とM2、M3とM4の間に柱穴群が入り込む。つまり柱穴群の内側にM2とM3、外側にM1とM4が位置することになる。柱穴から読み取れる建物跡はM2とM3が外側に建物跡、掘立柱建物跡があり、M2の周辺に掘立柱建物跡が分布する。低位部分にも柱穴は分布し、SB26(晩期4～5期)もあるが、周囲の遺物の出土は少なく、組み合わせる建物跡も少ない。また、M2、M3の下は、柱穴は存在するが、組み合わせる建物跡はなく、柱穴もまばらである。よって低位部分やM2、M3の下は、環状にめぐる柱穴群の中で、比較的人間活動の希薄な場所である。

そして最後に、廃棄の方向について検討する。M1のある地点は、晩期中葉には居住域外になっているため、ゆるやかな傾斜に向かって(図166の→の方向)、土砂や遺物の廃棄が行われた。M4は、廃棄方向は、堆積層が薄くて判然としない点もあるが、北捨場の方向に向かって傾斜しており、同方向に向かって廃棄している可能性もある。

そして柱穴群内側のM3は、特にどちらの方向にむかって堆積層が傾斜しているわけではなく、その場に積み上げたような堆積状態である。M2については、SQ43の上に薄い堆積層が認められるが、どちらかに傾斜して堆積しているようではない。

以上をまとめると、柱穴群外側の盛土遺構は、柱穴群に背を向けた方向に土砂・遺物などを廃棄し、一方、柱穴群内側の盛土遺構は、その場に水平に積み上げたように堆積している。盛土遺構は建物跡などと隣接しているので、廃棄物がこれらの施設にかからないように配慮していたと推定される。

3 まとめ(遺構の変遷)

遺構は、後期後葉から晩期後半まで確認されているが、その間、各種の施設はかならずしも同じ場所に配置されているわけではない。報告書Ⅲ(第565集)で記載したように、墓域のあった地点の上に、晩期4～5期の盛土遺構が築かれるなど、晩期4～5期を境に、後期後葉から続いた集落の様相が大きく変化したと思われる。より詳細な遺構分布については、報告書Ⅳ(第580集)に譲るとし、ここでは本報告範囲を中心に、後期後葉から晩期3期と、晩期4期以降に区切って、2時期における遺構配置を呈示する。

〔後期後葉から晩期前半〕

建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。図167の上段に後期後葉から晩期前半の遺構配置図を示した。散漫な分布であるが、M2とM3一帯は遺構がなく、それを取り囲むように台地の縁辺などに分布している。

VJ-37・38グリッドにあるSB44から後期後葉の土器が出土したので、当該期と判断した。クラック地区では、グリッドVL-44グリッド付近に晩期2期のSI118がある。また、図164の右下にあるSI107、SI108bのような晩期前葉の建物跡、SI110のような晩期中葉(晩期3期)の建物跡が分布している。特に東捨場は晩期3期の遺物が多く出土しているので、SI110との関係が注目される。

他に注目される遺構は、報告書Ⅱで掲載された石棺状配石遺構SQ18(IW-33グリッド)と報告書Ⅲの日時計状組石遺構SQ21とSQ27(VI-32グリッド)である。どちらも台地の縁に位置し、特にSQ21・SQ27一帯は晩期前半期の墓域が広がっており、これら建物跡との関係が注目される。また、SQ18は後期後葉であり、比較的早い時期に形成された数少ない遺構でもある。

〔晩期後半〕

図167の下段は、晩期4期以降の遺構配置である。

建物跡、掘立柱建物跡、盛土遺構、配石遺構が分布する。この時期の墓域は川原平(4)遺跡の方へ移動する。

台地の中心部に建物跡や掘立柱建物跡が環状に並び、その中心にM2(SQ43)・M3が形成される。M4は、M1同様に、これらの遺構群の外側に位置する。

建物跡は、東から南側にかけて分布する。各建物跡の周りには掘立柱建物跡が位置するが、建物跡と重複する場合もあり、同時性があるかは検討が必要である。

掘立柱建物跡は、柱穴群の分布では、西から北側に位置する。この一帯は、不確定要素の強いSI117を除けば、掘立柱建物跡で構成されており、掘立柱建物跡の密集域と言える。

組み合わせの確認できないピットの内、この時期に属するものは、概ねM2・M3の周辺に分布するが、M3の下部にも見られる。

M3の上層に、盛土遺構の一番新しい段階、晩期5～6期の土器が出土しているが、この時期を境に、川原平(1)遺跡における人間活動を示す痕跡が認められなくなる。詳細は報告書Ⅵに譲るが、晩期5～6期の遺構は川原平(4)遺跡に出現するので、様々な要因から川原平(1)遺跡での居住が困難になったと思われる。

本報告の範囲は、川原平(1)遺跡の中心区域であり、多くの遺構が集中しているが、報告書範囲外にも遺構は確認されている。全体の遺構の変遷は報告書Ⅶ(第580集)で取り扱うこととする。

第2節 遺物

平場地区では、後期後葉から晩期の土器が出土している。M3の下層から後期後葉の土器片も出土しているので、当該期に何かしらの活動がこの一帯でもあった可能性があるが、M3近辺で確認できた遺構からは、後期の土器片のみが出土した事例は見当たらない。主に晩期4期以降の遺物が出土している。またM3出土の土器の中には、西捨場出土と同一個体も含まれている。これ以外に、平場地区と

周囲の捨場との接合が見受けられ、平場地区と周囲の各捨場は、お互い関与していたと考えられる。

SB25の南東隅に位置する柱痕(Pit1914)から、赤彩の壺形土器が出土している。他に、Pit178、2883などで略完形の土器が出土している。柱穴出土の土器の多くが、破片資料である本遺跡の中で、完形もしくは略完形の土器が柱痕から出土するという点で、注目すべき出土状況である。縄文晩期遺跡では、柱抜き取り後、鉢、甕、壺等の埋納例が見られ、建物廃棄に関わる行為の結果と考えられている(柴田1993)。川原平(1)遺跡の場合、明確に柱穴から柱を抜き取った痕跡は確認できなかったため、類例と同じかは定かではないが、今後検討する必要があると言えよう。

なお、例言・凡例で触れたように、本報告書に掲載されている自然科学分析の結果の詳細は、報告書Ⅷ(第580集)に掲載されている。

(高橋)

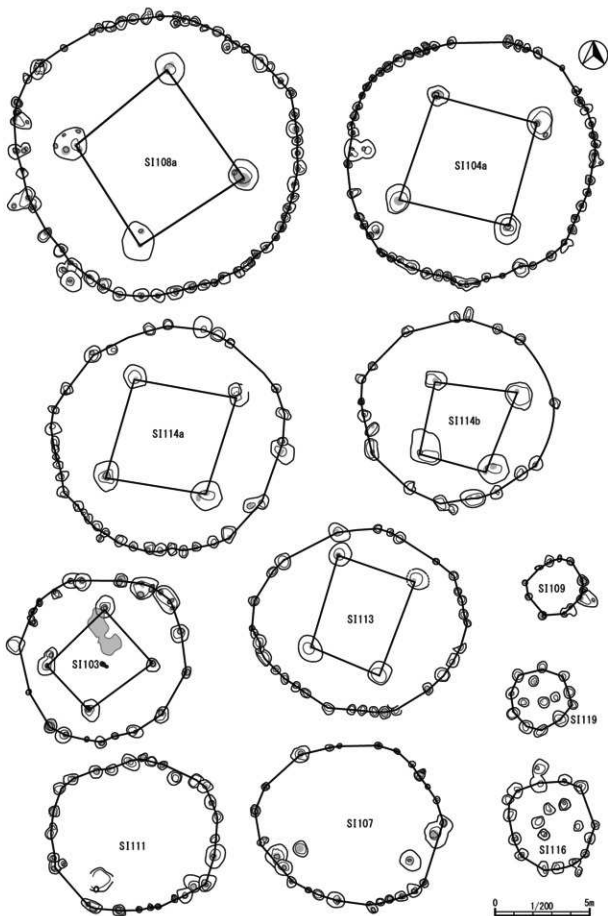


圖164 川原平(1)遺跡検出建物跡

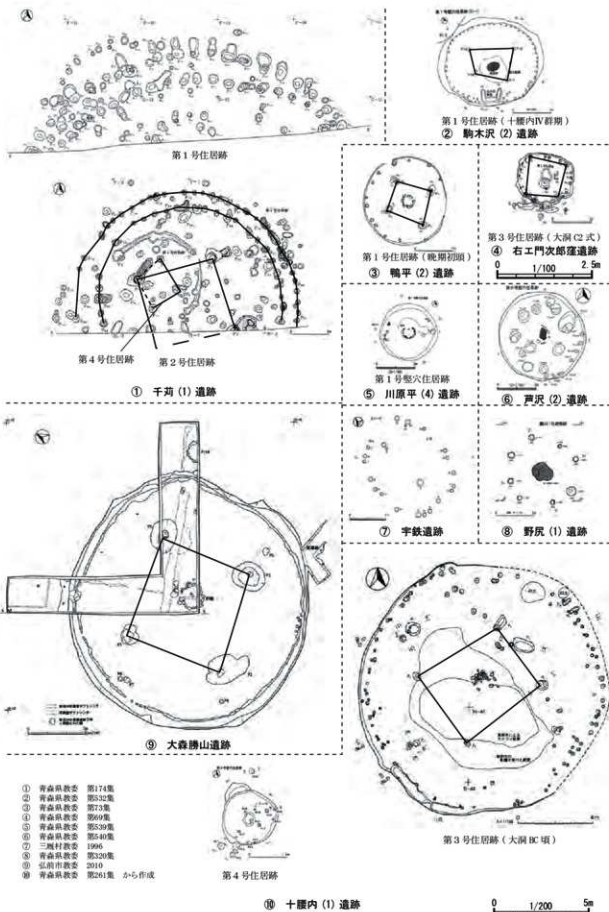


図165 青森県内の縄文後期後葉・晩期建物跡

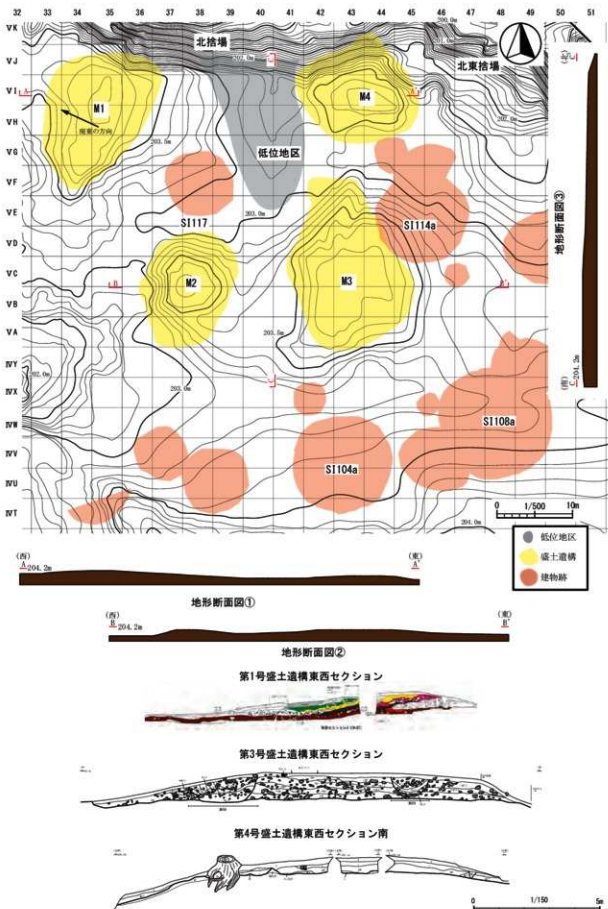


図166 平場地区の旧地形と盛土遺構・建物跡の位置

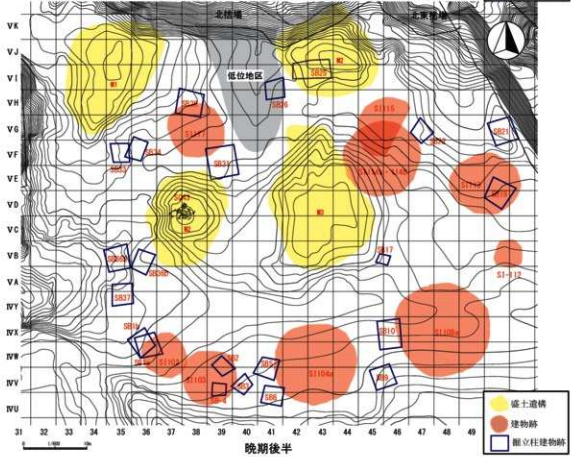
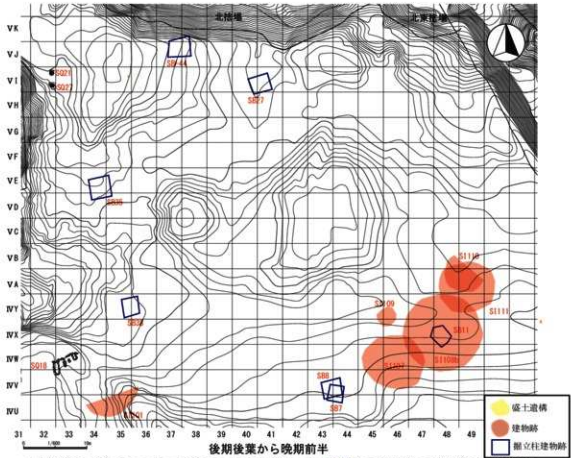


図167 平場地区の時期別遺構配置図

第3編 クラック地区

第1章 調査の方法

第1節 発掘作業の方法

クラック地区は遺跡北側の台地縁辺部に位置し、北捨場・北東捨場・第4号盛土遺構に囲まれた中間地点にある(図168)。クラック地区の報告範囲は、便宜的にグリッドに基づき図1のように区分した。平成26年度に北捨場・北東捨場の発掘調査を実施した際、台地の縁辺に沿って東西方向に延びる溝状の落ち込みを検出し(写真108)、平成27年度に本格的な発掘調査を実施した。クラック地区では、北捨場や北東捨場と同様に多量の遺物が出土することが予想され、特に遺物の層位的な取り上げや、遺物包含層中における遺構の有無の確認等に留意しながら調査を進めた。以下、発掘作業の方法について項目立てて記載するが、測量基準点・水準点・グリッドの設置、基本層序、写真撮影の方法等については、共通事項のため第2編第1章を参照されたい。

【クラックの名称】

平成27年度調査に先立ち、地形的に北捨場・北東捨場の斜面とは異なる凹地形が想定されたことから、両捨場と区別して「クラック」と呼称して発掘調査を開始した。クラックの名称は、あくまで北捨場地区・北東捨場地区と区別する意図で、調査地区・地点名を示すものとして便宜的に用いた。そのため、地形の成因を直接的に示す名称として用いるものではない点で留意されたい。

【表土等の調査】

表土と堆積土の一部については、平成26年度の北捨場・北東捨場における発掘調査時に掘り下げを行った。表土の除去は、切り株が多く重機の進入が困難であったため人力で行った。出土遺物はグリッド単位で取り上げた。また、堆積土上層の一部については、切り株の除去に際して一部掘削を行い、遺存状態が良好な遺物や特徴的な遺物が出土した場合は、出土状況の写真撮影やトータルステーションによる点取りを行った。

【遺構の調査】

遺物包含層中の遺構については、平面形状の確認や土層断面による掘り込み痕跡等の確認に慎重を期すため、堆積土や遺物出土状況等に周囲と異なる点がないか検討しながら調査を行った。遺構の平面図は、主に(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。また、遺構の土層断面図や炉跡の平面図は、簡易遺り方測量で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物は、基本的に遺構単位で層位毎または堆積土一括で取り上げた。

【遺物包含層の調査】

遺物包含層は層位毎に人力で掘削した。出土遺物は、グリッド・層位毎の取り上げを基本とした。遺存状態が良好な遺物や特徴的な遺物が出土した場合は、出土状況の写真撮影やトータルステーションによる点取りを行った。

第2節 整理・報告書作成作業の方法

整理・報告書作成作業は、平成28年4月1日から平成29年3月31日まで実施し、主に遺構の構築時期や遺物包含層の形成過程等の検討に重点を置いて進めた。

【図面類の整理】

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したため、整理作業では簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図等との図面修正を行い、発掘作業時の所見等を整理した。

【写真類の整理】

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構や遺物包含層からの遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付し、ハードディスク・DVD等に保存した。

【遺物の洗浄・注記・接合・復元】

遺物の洗浄を早期に終え、接合・復元作業を進めるようにした。遺物の注記は、調査年度・遺跡名・地区名、遺構名・グリッド名、層位、取り上げ番号等を略記したが、直接注記できない遺物については、収納したチャック付きポリ袋に注記した。また、接合・復元にあたっては、グリッド間・層位間接合を行い、個体数の把握や帰属層位の把握に努めた。

【報告書掲載遺物の選別】

遺物全体の分類を行った上で、細分層位で取り上げたセクションベルト出土遺物を中心に選別した。中でも、セクションベルト出土の土器については、図化に耐えない細片や確実な同一個体を除き、有文の口縁部資料のほぼ全てを抽出した。また、粗製の深鉢・鉢の場合、細分層位毎の特徴を示す代表的な口縁部資料および底部資料を主として抽出した。セクションベルト以外の出土遺物については、所属時期・型式・器種等の分かる資料等を主として選別し、可能な限り掲載した。

【遺物の観察・図化】

充分観察した上で、遺物の特徴を適切な表現で図化した。また、観察表・計測表等を作成した。一部の遺物については、写真掲載のみで報告した。

【遺物の写真撮影】

業者に委託して行ったが、実測図等では表現しづらい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

【トレース・版下作成】

遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレース作業は、(株)CUBIC製「トレースくん」とアドビシステムズ(株)製「Adobe Illustrator CS4・CS6」を併用して行った。実測図版の版下は「Adobe Illustrator CS4・CS6」、写真図版の版下は主に「Adobe InDesign CC」を用いて作成した。

【自然科学分析】

クラック地区については、土器付着炭化物の放射性炭素年代測定と炭素・窒素安定同位体比分析、土器付着物の塗膜分析、黒曜石の産地推定、セクションベルト採取試料の土壌分析を行った。

【調査成果の検討】

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。また、遺物については時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。以上の遺構・遺物の検討結果を踏まえて、本地区の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

(最上)

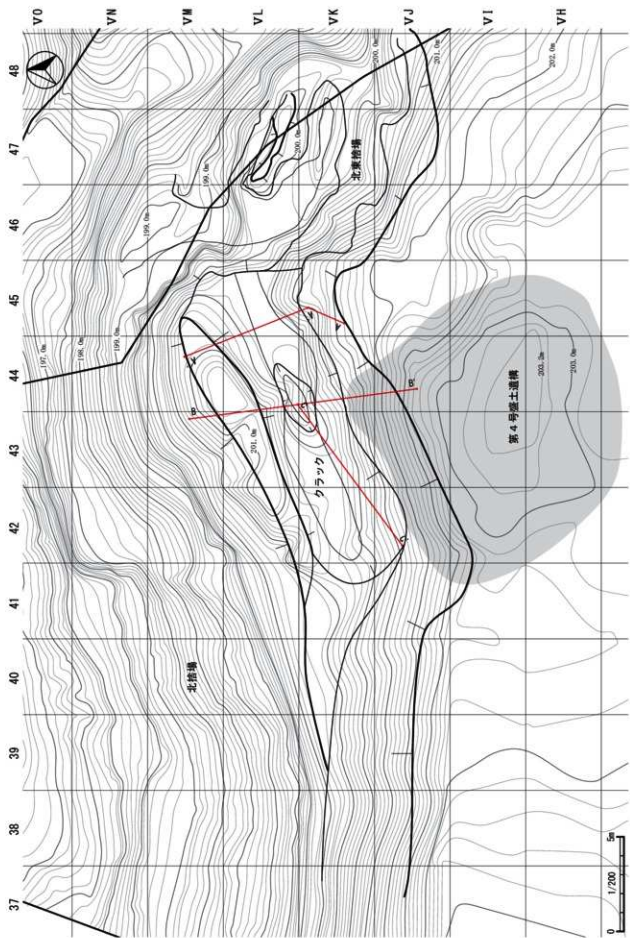


図168 クラック地形図・セクション位置

第2章 検出遺構と出土遺物

クラック地区からは、捨場とその堆積層上部に建物跡1棟が検出された。記載にあたり、「クラック地区」は図1に示す報告範囲、「クラック地点」は捨場自体を指すものとする。

第1節 遺構

第118号建物跡（略称SI118、図169、写真109）

【位置・確認】VL・M-44・45グリッドに位置する。本建物跡は、炉跡（SN68a・SN68b）とその周囲に分布する複数のピットで構成されるものとして捉えた。クラック地点の堆積土上部に構築されている。

【規模・形状】竪穴状の掘方痕跡は土層断面でも確認できず、建物跡の規模・平面形は不明である。建物跡の遺構平面図に破線で示した建物跡の推定ラインはあくまで目安で、ライン外側に分布するピットも本遺構に帰属する可能性がある。なお、北捨場に続く斜面部にもピットが数基分布する。

【柱穴・施設】ピットはクラック地点の東側に偏在して分布しており、炉跡の周囲に認められることから、建物跡の柱穴の可能性がある。規則的な柱穴配置は認められない。多くは基本層序第IV層で検出しているが、本来の掘り込み面はクラック堆積土上面ないし堆積土中と推測される。掘り込み面が明確な例は、クラック堆積土1b層中を掘り込むPit2802・3126の2基が認められる（図171・172）。柱穴規模は径約40～50cmが大多数を占める中で、Pit2802については径約120cm、深さ約130cmの掘方に径約60cmの柱痕を伴う大型柱穴で、本建物跡の主柱穴の可能性が考えられる。

炉跡はSN68aとSN68bの2基を検出した。重複がみられ、SN68aが新しい。ともに、クラック地点Aベルトの1b層と2b層の境界付近で確認した（図171）。両炉跡の火床面もほぼ同一レベルである。SN68aは径約50cmの円形の石囲炉である。内部には焼土が認められ、南半の炉石は被熱が顕著である。掘方は平面でのみ識別でき、土層断面ではクラック堆積層との区分が困難である。SN68bでは36×34cmの焼土範囲を確認した。炉石と考えられる15cm大の礫が、焼土の南西側に接して出土しており、本来、SN68aと同様の石囲炉であったと推測される。なお、炉跡とピットの確認面には相違があり、同時期性には疑問も残る。

【出土遺物】（図170、写真123） Pit2802から土器が出土し、晩期1b～2期が目立つ。柱痕からは晩期3期の土器片が出土している。なお、SN68bの西側約50cmの位置からは、火床面とほぼ同一レベルで晩期2期の台付鉢（図170・写123-1）が略完形で出土している。この台付鉢の出土層位はクラック堆積土の1b層相当であるが、広く堆積がみられる同層の中でもSN68a・SN68b周辺に限っては、晩期2期の土器が目立ち、晩期1b期を下限とする全体的傾向と比較して異質である。晩期2期の破片資料はクラック地点Aベルトに掲載したが（図178・179）、当該資料は本建物跡に伴う可能性がある。

SI118	ピット	2802
	掘方	晩期1b
	柱痕	晩期1b～3
	覆土	後期後葉～晩期1a・1b

【放射性炭素年代測定】上記の晩期2期に比定される台付鉢（図170・写123-1）の外面对着炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し、 $3,000 \pm 20$ yrBPの測定値が得られている（報告書Ⅱ第1編第5章第7節・試料KAWA(1)-179）。

【小結】ピットおよび炉跡周辺の出土遺物から、晩期2期に構築され、晩期3期には廃絶されたものと思われる。 （最上）

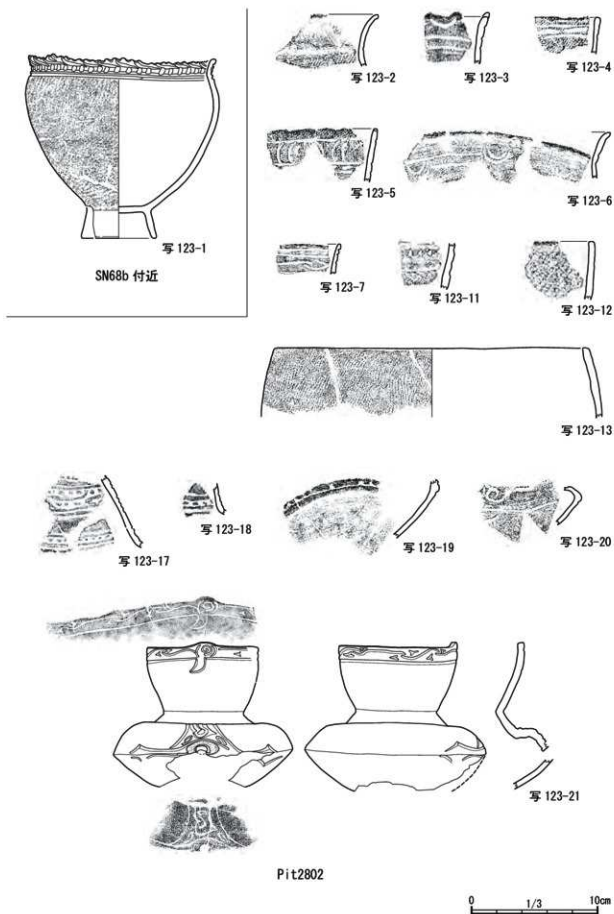


図170 第118号建物跡出土遺物

第2節 クラック地点

1 調査方法

クラック地点は、遺跡北側の台地縁辺部にみられる凹地状の地形に形成された捨場である。周辺には斜面地形を利用した捨場がみられ、クラック地点から北方へ下る斜面に北捨場、北東方向へ下る斜面に北東捨場が形成されている。また、クラック地点の南側では第4号盛土遺構が形成されている。クラック地点は、平成26年度における北捨場・北東捨場の発掘調査時に検出し、東西方向に延びる凹地状の地形であることが判明した。堆積土の一部については、当時の北捨場と北東捨場における掘削の過程で掘り下げを行っている。その範囲は、図168の土層断面Aライン以東、土層断面A-B間、土層断面Bライン以西のCライン以北に相当する。土層断面Aライン以東は完掘し、土層断面Cライン以北は、上層相当の掘削と西寄りの一部完掘を行っている。また、土層断面A-B間については、北東捨場調査時にトレンチ6・7を設定し、主にクラック1b層相当の掘削を行っている(報告書V第2編)。

本格的な発掘調査は平成27年度に実施し、まずは土層断面Aラインの観察によって詳細を把握することから始めた。その後、土層断面Cライン以北に残る堆積土を、Bラインに沿って一部掘り下げて先行トレンチとした。これらの土層観察により得られた地形の断面形状や、予想される捨場範囲等の情報に基づき、南北方向に2箇所、東西方向に1箇所の計3箇所にはセクションベルトを設定して周囲の掘削を進めた(図168)。なお、セクションベルトは以下のように呼称した。

[Aベルト] クラック地点東側の南北ベルトである。土層断面はAラインで作成した。ベルト幅は約1mとした。

[Bベルト] クラック地点の中央付近を通る南北ベルトである。土層断面はBラインで作成した。ベルト幅は約1.5mとした。

[東西ベルト] クラック地点の中央付近を通る東西ベルトである。土層断面はCラインで作成した。ベルト幅は約1.5mとした。

各セクションベルトの出土遺物については、細分層位での取り上げを基本とした。セクションベルト以外からの出土遺物は、大別層位で取り上げたものもあるが、A-Bベルト間については層対比を行いながら慎重に掘り下げ、層位を確実に把握できた場合は細分層位で取り上げた。また、細分層位中において層上面または層下位に出土遺物の一定量のまとまりが認められた場合、出土層位に「上面」、「下位」等を付して区別した。

2 地形

クラック地点の地形は東西長25m、南北幅9mの溝状を呈し、南北の断面形は緩いV字状を呈する。平場地区の段丘平坦面から標高202.7m付近で北方へ下る斜面に転じ、標高198.9mで最深部となることから、約4mの高低差がある。最深部から北側に向かうと地山の高まりが認められ、最高点で標高201.5mを測る。Bベルトでは、南北方向における地山の断面形が良好に捉えられ、南半と北半とで地山の傾斜が異なる特徴を見出せる。南半の傾斜は約30°であるのに対して、北半は約60°の急傾斜である。クラック地点北側は、北捨場が形成された斜面が続く。また、クラック地点の東端は弧状に挟れて断絶しており滑落崖の様相を示す。なお、最深部付近での地山面の検出は一部に留めており、図168の等高線および平面図については14層上面での測量であることを付記する。14層上面での標高は西端

で200.5m、東端で200.2mを測り、東方に向かって緩やかに傾斜する。

クラック地点における地形の具体的な成因については不明瞭な点が多く残る。そのため、クラックの名称については、地形の成因を直接的に示す名称としてではなく、あくまで調査地区・地点名を示すものとして便宜的に用いた。報告書Ⅷ第1編第1章において柴正敏氏は地形崩壊が考えられるとしている。地形崩壊の一つには地滑りやこれに伴う亀裂等の各種地形変動が想起される。これについては、遺跡北側斜面と、北東斜面から川原平(4)遺跡にかけてみられる複数の円弧状の斜面が手掛かりとなる。中でも北東斜面部には、VK-M-46・47付近に小規模な凹地形が数箇所みられる(図168)。また、遺跡周辺は地滑り地形が高密度で分布することでも知られる(国立防災科学技術センター1985)。ただし、クラック地点北側の高まり部分は著しく高く残る点で疑問も残り、また、最深部における断ち割り調査が十分な深さまで達しなかったことから、滑り面の痕跡の有無についても不明である。一方、クラック地点北側の地山の高まりに着眼した場合、弘前大学の小岩直人氏と新潟大学的小野映介氏によると段丘離水時の流路(チャンネル)の可能性があるとの見解も示されている。以上のように、クラック地点における地形の成因についてはいくつかの可能性が考えられるが、確証を得るには至らなかった。

3 堆積層(図171~173)

堆積層の名称については算用数字を使用し、細分層位には小文字のアルファベットを付した。捨場堆積層は1a層~9層で厚さは最大で1.5mほどである。捨場堆積層の内、南北ベルト(Aベルト・Bベルト)の4a~8c層では概ね段丘平坦面から深部方向へ堆積しており、加えてクラック地点北側の高まり部分のやや手前で終息することから、遺物の廃棄行為は基本的に各種遺構が分布する段丘平坦面側からと考えられる。以下、層位毎の特徴と土壌関連の自然科学分析結果について記載する。

【1a層】Aベルト北端の極めて限定的な範囲に分布し、層の厚さは約10cmである。黒褐色シルトを主体とする。北東捨場地区における捨場堆積層に連続する可能性がある。

【1b層】各セクションベルトで確認され、広範囲に分布する堆積層である。層の厚さは他の堆積層と比較して厚い。各地点で概ね50cmほどの厚さが認められるが、東西ベルトでは最大80cm弱の厚さがある。1a層と比較してやや明るい黒褐色シルトを主体とし、炭化物の混入も目立つ。また、非常にしまりがあるのも特徴の一つである。第118号建物跡のPit2802などは本層を掘り込んで構築される。

【2a層・2b層】Aベルト北寄りの極めて限定的な範囲に分布し、層の厚さは8cmと薄い。暗褐色シルトと黄褐色ロームが混在する層である。

【3a層・3b層】Aベルトで確認された厚さ10~20cmの堆積層である。黒褐色シルトを主体とし、20cm前後の礫が多く混入する。また、焼土粒や炭化物も認められる。土質は3c層と近似し明瞭な違いはないが、遺物出土量は少ない。

【3c層】Bベルトを中心にクラック地点の中央部付近で確認された。層の厚さは約30cmである。3a層・3b層と同様に黒褐色シルトを主体とするが、遺物の出土量は多く、個体土器の出土も比較的目立つ。

【4a層~4e層】4層中には暗赤褐色焼土が顕著にみられ、その他ローム、炭化物、礫等多くの混入物が認められるのが特徴である。4a・4b層はクラック地点東側のAベルトからBベルトを中心に、また

4c~4e層は、クラック地点西側の東西ベルトを中心に分布が確認されたが、ベルト間における層の連続性は確実なものではない。層の厚さは約20~30cmである。焼骨の細片等も出土している。

【5a層】クラック地点南東側のAベルトからBベルトにかけて分布する堆積層である。北方に下る斜面部にのみ本層の形成が認められる。暗褐色シルトを主体とし、層の厚さは約30cmである。

【5b層】Aベルト南側の極めて限定的な範囲に分布する焼土層である。層の厚さは6cmと薄い。

【5c層】クラック地点北東側のAベルトからBベルトにかけて分布する堆積層である。層の厚さは15~30cmである。暗褐色シルトを主体とする。遺物の出土量は極めて多く、個体土器の出土も目立つ。

【5d層】Bベルトから東西ベルトにかけて確認された。北方に下る斜面部にのみ本層の形成が認められる。暗褐色シルトを主体とし、層の厚さは15~20cmである。ベルト間における層の連続性は確実なものではなく、加えて5c層との上下関係は不明瞭である。

【5e層】Bベルトと東西ベルトで確認された。黒褐色シルトを主体とし、層の厚さは約20cmである。5c層と同様、遺物の出土量は極めて多く、個体土器の出土も目立つ。

【5f層】Bベルト北側でのみ確認された。本層は、クラック地点北側の高まりから南方に下る斜面部に形成されており、層の厚さは最大で約40cmである。10~20cmほどの礫が非常に多く混入する砂礫層で、遺物の出土量は極めて少ないことから、北側からの崩落土と考えられる。

【6層】Bベルトと東西ベルトで確認された廃棄焼土層である。層の厚さは15cmである。ベルト間における層の連続性は確実なものではない。

【7層】Bベルトから東西ベルトにかけて確認された。暗褐色シルトを主体とし、層の厚さは15cmである。

【8a層】Aベルト南側の極めて限定的な範囲に分布する堆積層である。黒褐色シルトを主体とし、層の厚さは約20cmである。焼土層である5b層直下に認められることから、焼土遺構など何らかの遺構堆積土の可能性も考えられる。

【8b層】Aベルト南側に分布する堆積層である。北方に下る斜面部にのみ本層の形成が認められる。黒色シルトを主体とし、層の厚さは約30cmである。

【8c層】各セクションベルトで確認され、広範囲に分布する堆積層である。層の厚さは概ね10~20cmである。黒色シルトを主体とし、クラック地点における堆積土の中では最も暗い土色を示す。遺物の出土量は多く、個体土器の出土も比較的目立つ。

【8d層】東西ベルト西側で確認された。黒褐色シルトを主体とし、層の厚さは約30cmである。

【9層】Aベルト中央の極めて限定的な範囲に分布する焼土層である。層の厚さは8cmである。遺物は出土していないが、本層より上位が人為的な捨場堆積層と考えられる。

【10a層~10f層】各セクションベルトで確認され、広範囲に分布する堆積層である。暗褐色シルトを主体とし、層の厚さは20~40cmほどである。炭化物や礫等の混入物の量比によって細分したが、基本的には近似性の高い堆積層である。本層から11層にかけて、縄文時代中期の土器片を少量包含する。

【11層】Bベルトと東西ベルトで確認された。黒褐色シルトを主体とし、層の厚さは約20cmである。

【12層】本層以下が無遺物層となる。各セクションベルトで確認され、広範囲に分布する堆積層である。黄褐色シルトを主体とする。

【13層】Bベルト北側でのみ確認された。本層は、クラック地点北側の高まりから南方に下る斜面部

に形成されており、層の厚さは最大で約70cmである。基本層序第IV層由来の褐色砂と20cm前後の礫が主体である。礫間には空隙が多く、クラック地点北側の高まり部分からの地山崩落土と考えられる。

【14層～19層】本層は当初、地山と捉えていた層であった。しかし、Bベルトで最深部付近での断ち割り調査を行ったところ、地山にあたる基本層序第IV層相当はより下部に存在することが判明し、14層～19層については、クラック地点堆積土の最下層と判断した。地山は第IV層相当の砂礫層で、色調や礫の量等により細分される。

【土層関連の自然科学分析】

セクションベルトから採取した土壌サンプルについて、花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析・放射性炭素年代測定の実施している（詳細は報告書Ⅳ第1編第2章第5節参照）。放射性炭素年代測定の結果については、「本節4出土遺物（2）土器」において後述する。

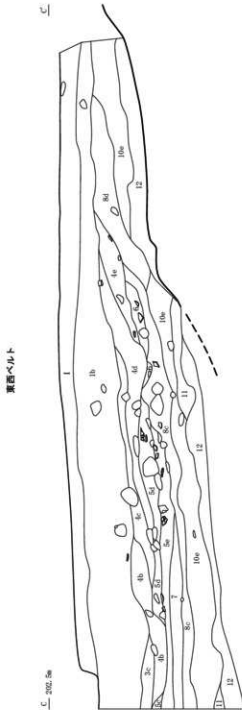
花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析の結果、12層から3c層下部までは概ね乾燥した堆積環境であったと推定されている。5e層・3c層上部・1b層においては、沼沢から湿地の環境も示唆されている。なお、植生については、堆積地ないし林縁にイネ科・ヨモギ属の草本育成が推測され、3c層上部から1b層においては近隣にトチノキの湿地林とクリ林の分布が指摘されている。

この他、12層より上位の堆積層では、土壌サンプル中から炭化種実等も確認された。炭化種実については、放射性炭素年代測定の対象試料に限定して種の判別も行っており、以下にその結果を示す。

Bベルト 1b層コラムA 3 (KT-014 Beta-427344)	: オニグルミ
Bベルト 3c層コラムA 7 (KT-016 Beta-430080)	: オニグルミ
Bベルト 3c層コラムA 9 (KT-015 Beta-427345)	: オニグルミ
Bベルト 3c層コラムA11 (KT-017 Beta-430081)	: オニグルミ
Bベルト 4a層コラムA13 (KT-018 Beta-430082)	: オニグルミ
Bベルト 4a層コラムA15 (KT-019 Beta-430083)	: オニグルミ
Aベルト 4a層 (KT-024 Beta-432659)	: オニグルミ
Bベルト 5e層コラムB 1 (KT-025 Beta-441123)	: トチノキ
Bベルト 5d層コラムA17 (KT-020 Beta-430084)	: オニグルミ
Bベルト 5e層コラムA19 (KT-021 Beta-430085)	: オニグルミ
Bベルト 6層コラムB 4 (KT-026 Beta-441124)	: トチノキ
Bベルト 8c層コラムB 9 (KT-027 Beta-441125)	: 堅果類
Bベルト 8c層コラムB11 (KT-028 Beta-441126)	: トチノキ
Bベルト10e層コラムB15 (KT-029 Beta-441127)	: トチノキ
Bベルト 12層コラムA29 (KT-022 Beta-432657)	: トチノキ
Bベルト 12層コラムA29 (KT-023 Beta-432658)	: クリ

試料に限られる中でも、1b層から5e層にかけてはオニグルミ、6層から12層にかけてはトチノキが多数となる状況が窺える。

(最上)



東西ベルト

- 1 頁巻頁岩 (100m) 1X, 層 (0.10~100m) 2X, しまりあり。
- 1a 頁巻頁岩 (0.5~10m) 1X, 頁巻頁岩 (0.5~10m) 1X, 層 (0.10~100m) 1X。
- 1b 頁巻頁岩 (0.5~10m) 10X, 層 (0.1~10m) 2X, 頁巻頁岩 (0.20~200m) 1X。
- 2 コーア頁岩 (1~10m) 10X, 頁巻頁岩 (0.20~200m) 1X, 層 (0.20~200m) 1X。
- 3a コーア頁岩 (0.1~10m) 10X, 頁巻頁岩 (0.5~10m) 1X, 層 (0.50~200m) 10X。
- 3b コーア頁岩 (0.1~10m) 2X, 頁巻頁岩 (0.5~10m) 1X, 層 (0.50~200m) 10X。
- 4 頁巻頁岩 (1~20m) 10X, 層 (0.100~200m) 10X。
- 5 頁巻頁岩 (1~20m) 1X, 層 (0.100~200m) 10X。
- 6 頁巻頁岩 (1~20m) 1X, 層 (0.100~200m) 1X, 層 (0.100~150m) 1X。
- 7 頁巻頁岩 (1~20m) 1X, 層 (0.100~200m) 1X, 層 (0.100~150m) 1X。
- 8a 頁巻頁岩 (1~20m) 1X, 層 (0.100~200m) 1X, 層 (0.100~150m) 2X。
- 8b コーア頁岩 (1~20m) 1X, 層 (0.100~150m) 2X。
- 9 コーア頁岩 (1~20m) 2X, 層 (0.100~150m) 1X。
- 10a 頁巻頁岩 (1~20m) 2X, 層 (0.100~150m) 1X。
- 10b コーア頁岩 (1~20m) 2X, 層 (0.100~150m) 1X。
- 11 頁巻頁岩 (1~20m) 2X, 層 (0.100~150m) 1X。
- 12 頁巻頁岩 (1~20m) 2X, 層 (0.100~150m) 1X。

図 173 クラック地点セクション図 (3)

4 出土遺物

クラック地点からは、主に縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての遺物が出土している。縄文時代晩期中葉の遺物は極めて少数に限られ、クラック地点は縄文時代晩期前葉までにはほぼ埋没したものと考えられる。

遺物の掲載方法については、土器、土製品、石器・石製品で各々異なる。土器は上位層から下位層への層位順とし、細分層位毎に示すことを基本とした。土製品は層位毎ではなく、分類毎に掲載した。石器・石製品は分類毎を基本とし、同一器種中で概ね上位層から下位層への層位順に掲載した。なお、土器と石器・石製品については、セクションベルト毎に掲載した。セクションベルト以外でも細別層位で取り上げたものについては、トータルステーションによる遺物点の位置情報や出土グリッド等から判断し、最も近いセクションベルトに組み込む形で掲載している。

なお、図版や遺物観察表には、細分層位以外の層名を使用した場合がある。例えばBベルト「5層」で取り上げた遺物は、「5a～5e層」の幅をもつ層位で取り上げたことを示し、細別層位を特定できないことを意味する。その他、セクションベルト以外の遺物取り上げに際して「上層」、「下層」、「トレ1上部」、「Ⅲ層」等を使用した場合がある。その詳細について以下に示す。

【上層】1層～5層に相当する。

【下層】6層以下に相当する。上層と下層の区分は6層の焼土層を鍵層にした。6層の分布がみられない範囲においては、他の堆積層と比較して土色等から区別が容易な8a層・8b層・8c層以下を本層で取り上げている。

【トレ1上部】先行トレンチの上位層を指すが、一部「下層」を含む可能性がある。

【Ⅲ層】基本層序第Ⅲ層とは厳密には異なり、クラック堆積層の内で出土層位が不明な遺物を指す。

この他、平成26年度における北捨場・北東捨場の発掘調査で取り上げた遺物については、全て「上層」に組み込んだが、その一部については「下層」を含む可能性がある。クラック地点の層位との明確な対比ができなかったことから、遺物観察表における出土層位は取り上げた当時の層名のままとしている。なお、北捨場については、整理作業時に層名の振り替えを行っていることから、観察表には振替層位も合わせて記載している。

(1) 遺物の出土状況

遺物は堆積層によって多寡が認められ、特に1b層・3c層・5c層・5e層・8c層で多量に出土している。これらの層位の内、個体土器などの出土が少ない1b層を除き、遺物分布を図174～177に示した。以下にその特徴をまとめる。

【3c層・3c層下位】(図174)

クラック地点の中央部付近に確認された堆積層で、VK・L-44グリッドに遺物の集中がみられる。特に、VL-44グリッドを中心に晩期1b期の土器がまとまって出土している。また、晩期1a期の個体土器も比較的目的立つ。Bベルト北端では、北方からの傾斜に沿う形で個体土器が横転ないし破砕状態出土しており、クラック地点北側の高まり側から廃棄された状況も確認される(図172)。

【5c層上面・5c層】(図175)

クラック地点の北東側を中心に確認された堆積層で、VL-44・45グリッドに遺物の集中がみられる。

土器・石器の他、土製品・石製品等の文化遺物も多く包含される。土器は晩期1a期を主体とするが、後期8期や晩期1b期も比較的目標立つ。ただし、これらの土器は時期により出土地点が異なる様相も窺え、晩期1b期の土器は東寄り、後期8期の土器は西寄りにみられる傾向がある。土偶(図215-1)は、頭部・体部・脚部に分かれて出土し、各々出土層位が異なるが、最も下位の出土層位から5c層に帰属するものと判断した。

【5e層】(図176)

クラック地点の中央西寄りに確認された堆積層で、VK-43グリッドを中心に遺物の集中がみられる。土器は晩期1a期以降を含まず、後期7-4期から後期8期を主体とする。また、緑色凝灰岩の玉未製品が出土している。

【8c層】(図177)

クラック地点のほぼ全域にわたって確認された堆積層である。遺物の集中範囲は捉え難いが、個体土器は西寄りにやや目標立つ。土器は8c層上面で取り上げた一部を除き、後期7-4期に限定される点で良好な一括資料といえる。

(2) 土器(図178~214、写真124~154)

土器は総重量1,612kgが出土した。時期は後期7-4期から晩期1b期までが圧倒的多数を占め、この他に縄文時代中期後半、後期7-3期、晩期2期~3期が少量出土している。

土器の接合・復元作業については、グリッド間・層位間接合を行い、個体数の把握や帰属層位の把握に努めた。捨場間接合については、時間的制約から整理担当者の観見に触れる限りで行った。複数の層位の接合資料については、基本的に最も下位の出土層位を帰属層位とした。ただし、資料によっては、個体に占める割合が最も大きい部分の出土層位を帰属層位とした場合もある。

掲載遺物の選別については、細分層位で取り上げたセクションベルト出土遺物を中心に抽出した。細分層位で取り上げた土器については、図化に耐えない細片や確実な同一個体を除き、有文の口縁部資料のほぼ全てを抽出した。また、粗製の深鉢・鉢の場合、細分層位毎の特徴を示す代表的な口縁部資料および底部資料を主として抽出した。

図234はグリッド別の土器重量分布を示したものである。主にVK-43、VL-44等で多いが、基本的には捨場堆積層の厚さと関係すると考えられる。表7には層位別の土器重量を示した。5c層の119kgを最大値として、1b層が94kg、5e層が69kg、3c層が44kg、8c層が28kgと続く。

表7 層位別土器重量

層位	Aベルト	Bベルト	東西ベルト	重量計(kg)
1a層	2.7	-	-	2.7
1b層	28.8	7.7	57.9	94.4
2a層	0.4	-	-	0.4
2b層	1.4	0	-	1.4
3a層	9.5	-	-	9.5
3b層	9.8	-	-	9.8
3c層	-	39.6	5.2	44.8
4a層	3.8	8.5	-	12.3
4b層	-	2.0	0	2.0
4c層	-	3.5	0.8	4.3
4d層	-	-	2.3	2.3
4e層	-	-	0.9	0.9
4層	-	-	20.8	20.8
5a層	2.3	5.6	-	7.9
5b層	0	-	-	0
5c層	94.7	24.6	-	119.3
5d層	-	4.3	6.5	10.8
5e層	-	11.3	58.0	69.3
6層	-	0.5	-	0.5
7層	-	2.5	-	2.5
8層	-	8.8	16.5	25.3
7層	-	3.8	11.3	15.1
8a層	8.3	-	-	8.3
8b層	14.6	-	-	14.6
8c層	8.1	3.6	16.3	28.0
8d層	-	-	1.5	1.5
8層	-	1.1	-	1.1
10a層	0	-	-	0
10b層	0	-	-	0
10d層	0	-	-	0
10e層	-	4.4	3.2	7.6
11層	-	-	0	0

[0]は0.1kg未満

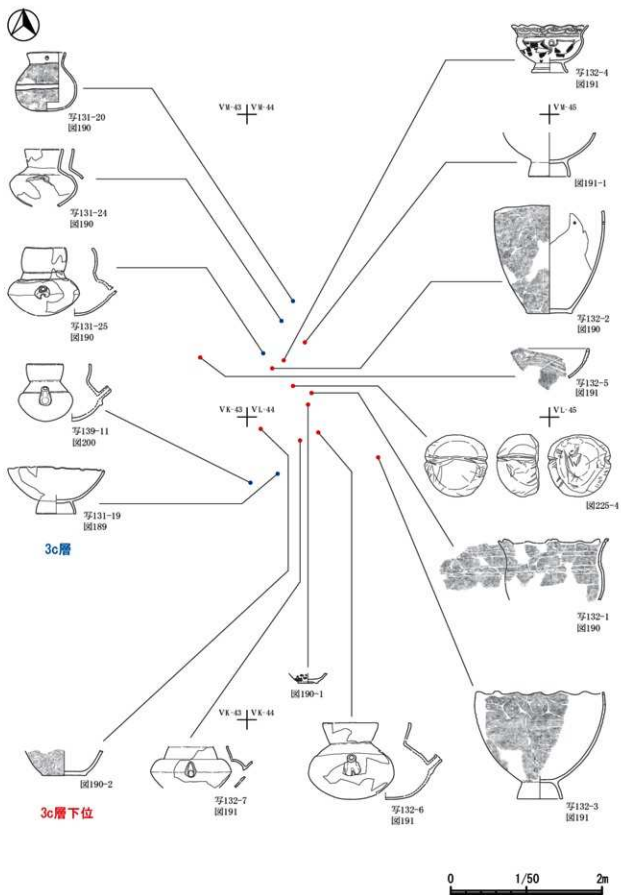


图174 3c層・3c層下位遺物分布

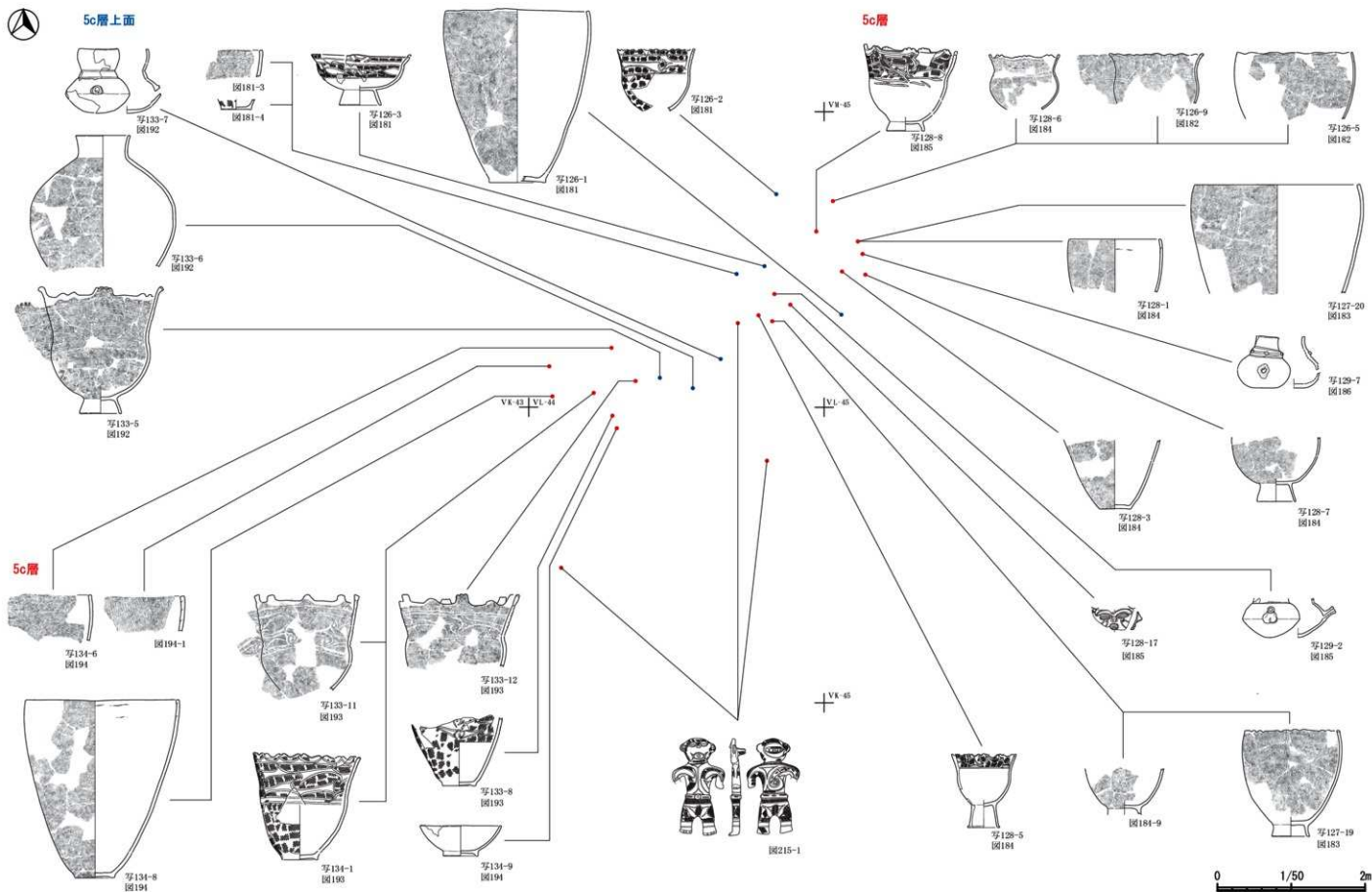


図175 5c層上面・5c層遺物分布

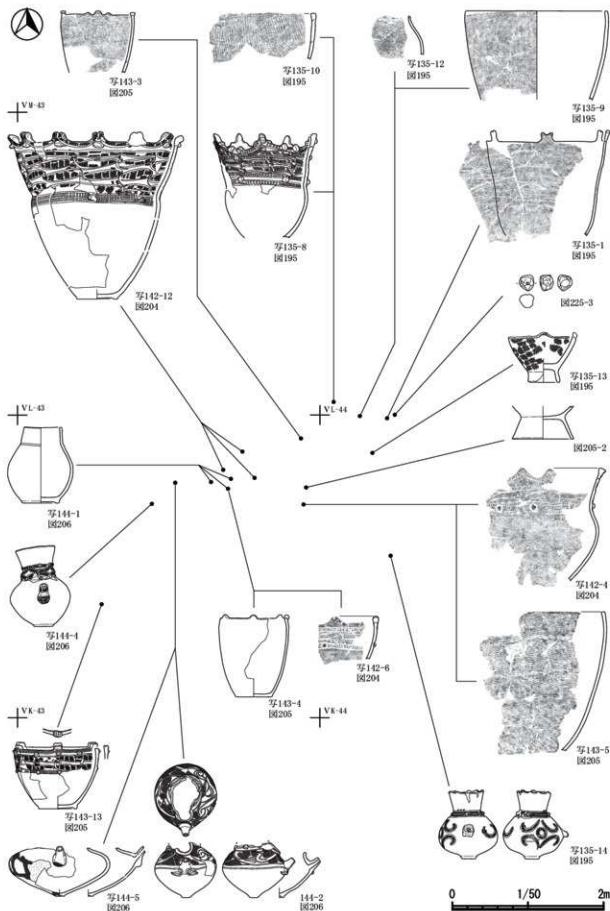


図176 5e層遺物分布

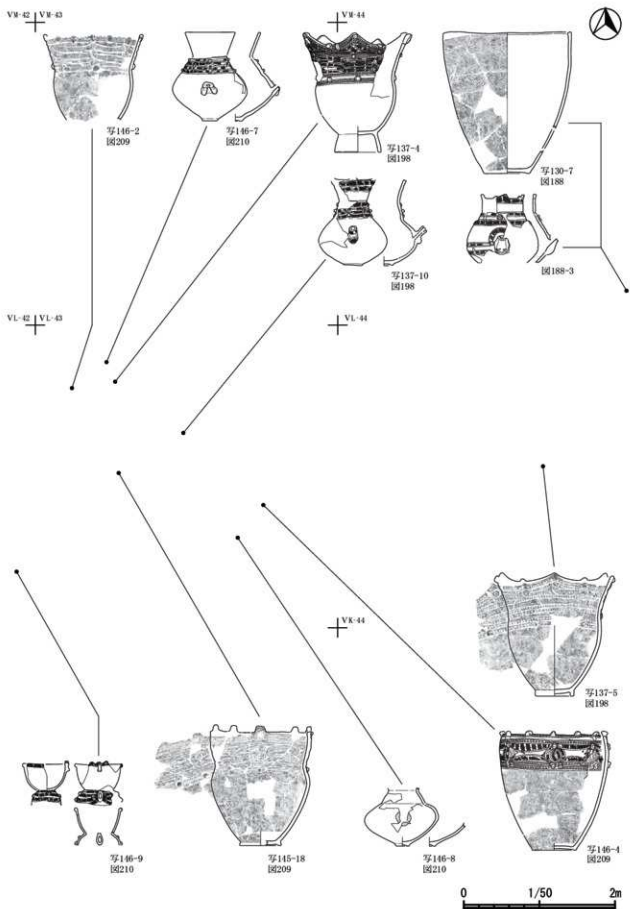


図177 8c層遺物分布

Aベルト (図178~188、写真124~130)

1a層 (図178、写真124)

堆積層自体が薄く、出土量も少ない。いずれも破片資料である。最も時期の下る資料は晩期3~4期である。写124-1は晩期3~4期、写124-2は晩期3期の鉢である。写124-3・図178-1は晩期1a期、図178-2は粗製深鉢である。晩期3~4期の土器については、クラック地点の中で最も新しい時期に相当する。また、本層はクラック地点北東端の最上層で確認された薄い堆積層であり、クラック地点上部に形成された北東捨場に連続する堆積層の可能性が高い。

1b層 (図178・179、写真124)

土器出土量の割に復元個体は非常に少なく、ほとんどが破片資料である。最も時期の下る資料は晩期2期であるが、晩期1b期も多い。この内、晩期2期の資料は第118号建物跡に伴う可能性がある。

深鉢・鉢の口縁部資料には、B突起や三山突起が施されるもの(写124-4・6・20・22)、口唇部に刻目をもつものや押圧状で間隔の狭い小波状口縁(写124-5・7~9・11~13・図178-3・4)、突起脇に限定して3本の刻目が施されるもの(写124-10)等がある。写124-4・22は、入組三叉文に接続する形で羊歯状文や羊歯状文風の刻目が施文される。写125-5は口唇部に刻目、口縁部に平行線的な入組三叉文、入組部に刺突が施される。写124-7は口縁部が大きく外反し、4条の横位沈線の内、上端が上向きの弧線文と接続、下端がノ字状に垂下しており、野脇類型(小林2010)に相当する。写124-14・15は晩期1a期に比定される。粗製深鉢は平口縁が主体であるが、小波状口縁(写124-17)も含まれる。写124-25は丸底の無文鉢である。

浅鉢は、写124-26が晩期2期で内外面に漆状の付着物がみられる。写124-27は装飾突起である。写124-28は晩期1b期の精製壺である。注口土器は写124-29が晩期2~3期、写124-30・31が晩期2期、写124-32が晩期1a期である。写124-30は口頸部が内傾し、口縁部から体部上半にかけて幅広の沈線による羊歯状文風の沈線文が施される。

2a層 (図179、写真124)

堆積層自体が薄く、出土量も少ない。いずれも破片資料である。最も時期の下る資料は晩期2期であるが、第118号建物跡の構築に伴う可能性がある。写124-33・34は晩期1b期、写124-35は晩期2期に比定される。

2b層 (図179、写真124)

時期の特定できる資料は晩期1a期である。ただし、本層の堆積時期は下位層の出土土器から晩期1b期以降と考えられる。図179-2・3・写124-36は粗製深鉢で、口唇部は面取されず、底部には低平な高台がみられる。写124-37は、口縁部が内湾気味に立ち上がる器形で、下向きの弧線文が4重に施される。写124-38は台付鉢で、二山突起が大小交互に配され、短沈線列が3条巡る。写124-39は小波状口縁の粗製鉢で、短く外反する口縁部に部分的なナデ調整、体部には無節原体による縄文施文がみられる。

3a層 (図179、写真124)

最も時期の下る資料は晩期1a期~1b期である。写124-41は、小波状口縁の波頂部下に上向き・下向きの弧線の組み合わせによる入組文、頸部には入組文とこれに接続する挟りの三叉文が施される。晩期1a期~1b期の範疇で捉えられ、4a層から同一個体が出土している(図181-1)。写124-42・43は同一

個体とみられ、小波状口縁の波頂部下に凹文が施される。写124-47は括れのない器形で、口縁部突起下に三叉文、突起間に弧線文がみられる。粗製の深鉢には、低平な高台をもつ図179-4が含まれる。写124-48は無文の粗製鉢で、体部が丸味を帯びる器形である。

3b層上面 (図180、写真125)

時期の特定できる資料は晩期1a期である。ただし、本層の堆積時期は下位層の出土土器から晩期1b期以降と考えられる。写125-1・図180-1は粗製深鉢で、口唇部は部分的に面取される程度である。写125-2は晩期1a期の台付鉢で、台部の端部がわずかに肥厚する。

3b層 (図180、写真125)

最も時期の下る資料は晩期1b期で、晩期1a期の復元個体もやや目立つ。写125-3は晩期1b期の深鉢で、直線的な体部から口縁部が大きく外反し、横位沈線は無文帯となる。写125-4～6は晩期1a期～1b期で、括れのある器形と括れのない器形があり、4・5は小波状口縁の波頂部下に挟りの三叉文が施され、入組文や弧線文と交互に配列する。写125-7～12は晩期1a期で、入組文に接続して三叉文が施されるもの(9・10)や、入組文内に縦位沈線が施され、三叉文が入組文の空隙に配されるもの(8・11・12)がある。写125-16は晩期1b期の浅鉢で入組三叉文が施される。写125-17は粗製壺である。

4a層 (図181、写真125)

最も時期の下る資料は晩期1b期である。深鉢・鉢は、図181-1が晩期1a～1b期、写125-18が晩期1a期、写125-19が粗製である。写125-20は小波状口縁の浅鉢で、内外面ともミガキ調整がみられる。写125-21は晩期1b期の注口で、外面に赤色顔料が残る。注口部に対応して1単位の口縁部突起がみられ、突起下にはノ字状の垂下沈線が施される。注口基部には渦巻状の貼付文が施される。

5a層 (図181、写真125)

時期の特定できるものの内、最も時期の下る資料は晩期1a期である。写125-22・23が晩期1a期、写125-24が後期8期、図181-2が粗製の深鉢である。写125-25・26は粗製壺で、体部に単節LR原体による縄文施文がみられる。

5c層上面 (図181、写真126)

最も時期の下る資料は晩期1b期である。粗製深鉢には、写126-1のように口縁部が緩く内湾し、底部が外面にやや張り出す平底状のものが含まれる。口唇部は面取されている。図181-4の底部は低平な高台である。写126-2は晩期1a期の鉢で、入組文に接続する三叉文が一部に認められる。写126-3は晩期1b期の台付浅鉢である。口縁部には1単位の突起がみられ、突起下に上向きの弧線文と、この弧線文を中心に両端部が三叉状となる横位沈線が巡る。

5c層 (図182～186、写真126～129)

5c層は土器出土量が最も多く、層上面から下位に至るまで復元個体も多い。最も時期の下る資料は晩期1b期である。晩期1a期の復元個体も多い。

深鉢・鉢には台付が含まれ、括れをもつ器形とまたない器形とがある。図182-写126-4・図184-写128-4は晩期1b期で、小波状口縁の波頂部下にC字状の沈線文と上向きの弧線文が施される。写126-7～12・写127-1～7は晩期1a期に比定される。小波状口縁の他、口縁部突起が配されるものもある。突起形状は多様で、一山突起(写126-11)、頂部に横位沈線1条の一山突起(写127-3)、二山突起(写

127-5)、三山突起(写126-8)、頂部刻目の台形突起(写127-1・7)等がある。入組文内には縦位沈線を施すものも一定量ある。三叉文は口縁波頂部下や突起下、あるいは入組文に接続する場合や入組文の空隙に配される場合がある。また、写127-6のように、入組部に刺突が施されるものもある。粗製深鉢は平口縁の他、小波状口縁もある(図183-写127-17・18)。写127-18のように括れをもつ器形も少数みられる。口唇部は部分的に面取されるものがやや多い。縄文原体は単節LRが多数を占める。写127-19は粗製の台付深鉢で、口唇部に押圧状の3本一組の刻目が施される。図185-写128-9は後期7-4期の鉢である。体部に最大径がある器形で、文様帯下端の区画沈線を欠く。浅鉢は、図185-写128-12が晩期1b期に比定される。図185-写128-13は無文の台付浅鉢で、推定5単位の二山突起がみられる。

壺は、頸部に横位沈線(図185-3)や突起(図185-写128-14)がみられるものが含まれる。

図185-写128-15は晩期1b期の注口と考えられ、北捨場に略完形の類似資料がある(報告書Ⅵ図97-14)。図185-写128-16・17は同一個体とみられる口縁部資料で、晩期1a期の人面付注口と考えられる。人面表現は、報告書Ⅰ図10-1、報告書Ⅱ図28-5の復元個体によく類似する。写129-1の注口基部には、三叉文が対置される。無文の注口には、底部が丸底で注口基部に一部沈線がみられるもの(図185-写129-2)や径の小さな高台で注口基部に二袋状の膨らみをもつもの(図186-写129-5)等がある。

8a層(図186、写真129)

いずれも破片資料である。最も時期の下る資料は晩期1a期である。写129-8～10、図186-1は晩期1a期、写129-11・12は後期7-4期の深鉢である。写129-13・14、図186-2～4は粗製深鉢で、口縁部突起をもつものも少数含まれる。写129-15は晩期1a期の浅鉢で、体部に隆帯・突起がみられ、突起上面には三叉状の沈線文が施される。

8b層(図186・187、写真129・130)

最も時期の下る資料は後期8期で、復元個体としては後期7-4期も含まれる。図186-写129-18～20は後期8期の深鉢で、20の口縁部には縦長の刻目列、体部には入組文の空隙に三叉文が施される。図187-写130-1は後期7-4期の台付深鉢で、口縁部に円柱状の突起がみられ、突起下や頸部と体部の境には円形・弧状等の貼付文が施される。写129-23は後期7-3期、写129-24・25、図187-1は粗製の深鉢である。

8c層上面(図187、写真130)

略完形の注口が2点出土している。写130-2は後期8期、写130-3は後期7-4期である。

8c層(図188、写真130)

後期8期以降の土器を含まず、後期7-4期の一括資料といえる。図188-1は底部に高台をもつ深鉢で、口縁部に一山・二山突起が交互に配され、突起に対応して頂部刻目の貼瘤が施される。写130-7は粗製深鉢で、口唇部が内割ぎ状に面取され、底部に低平な高台がみられる。図188-3は注口で、高さの異なる二山の口縁部突起が推定4単位配される。口縁部・頸部・体部には横位の縄文帯、注口部付近には貼瘤と弧線文がみられる。

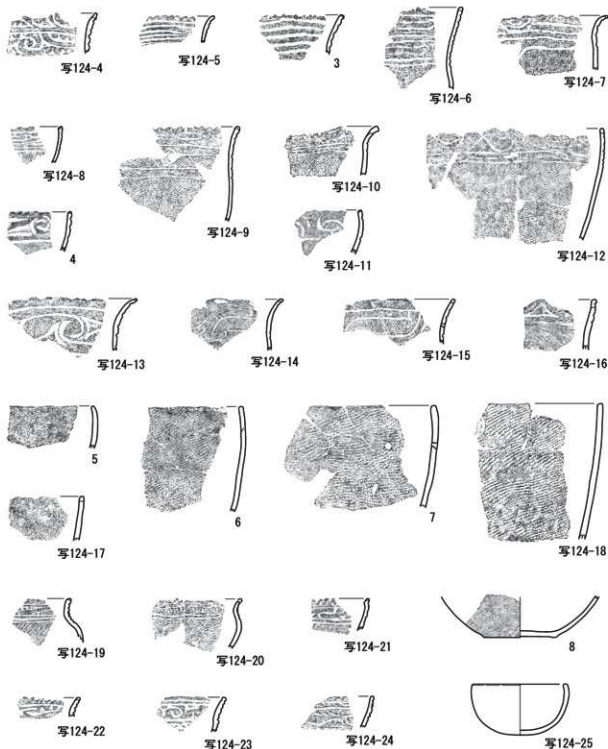
10a層(図188、写真130-8)

榎林式の深鉢片が1点出土している。

1a 層



1b 層



A ベルト

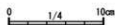
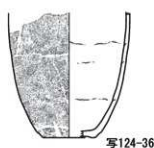
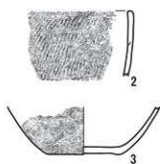


図178 クラック地点出土土器(1)

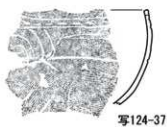
1b層



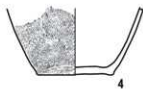
2a層



2b層



3a層



Aベルト

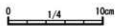
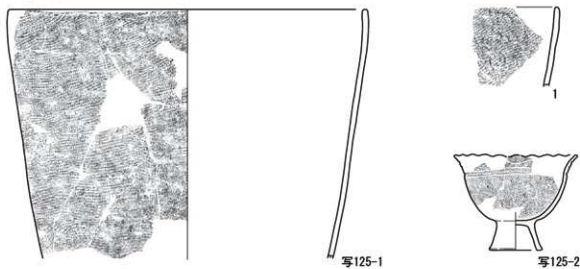
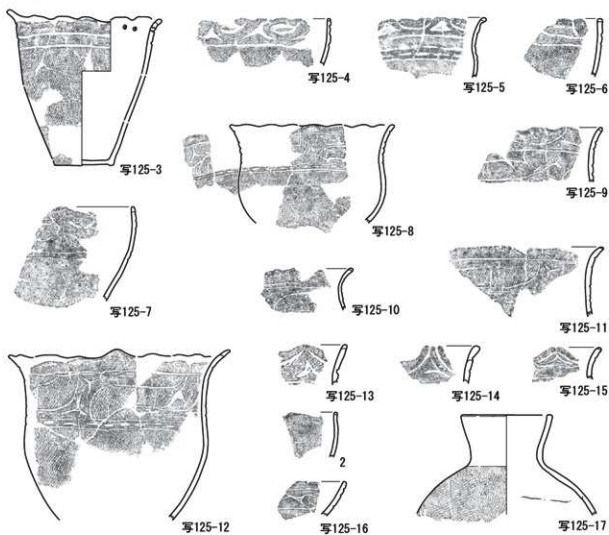


図179 クラック地点出土土器(2)

3b 層上面



3b 層



Aベルト

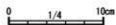
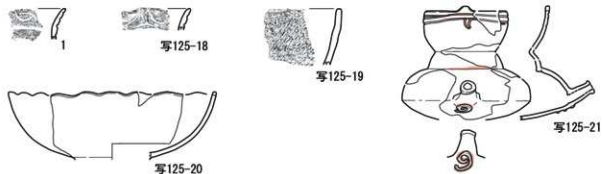
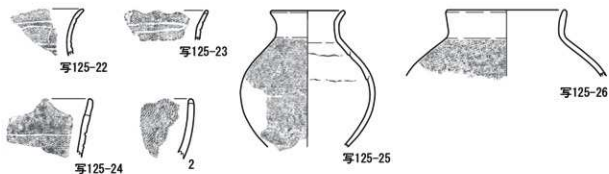


図180 クラック地点出土土器(3)

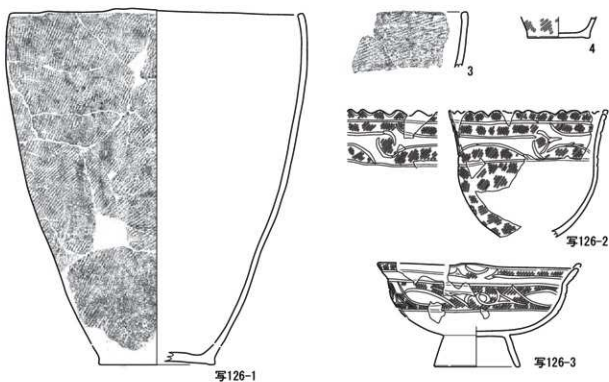
4a 層



5a 層



5c 層上面



Aベルト

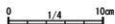


図181 クラック地点出土土器(4)

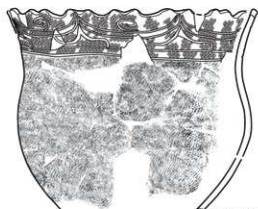
5c 層



写126-4



写126-5



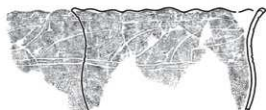
写126-6



写126-7



写126-8



写126-9



写126-10



写126-11



写126-12



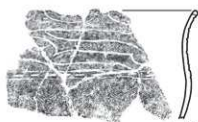
写127-1



写127-2



写127-4



写127-5



写127-3

Aベルト

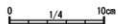


図182 クラック地点出土土器(5)

5c層

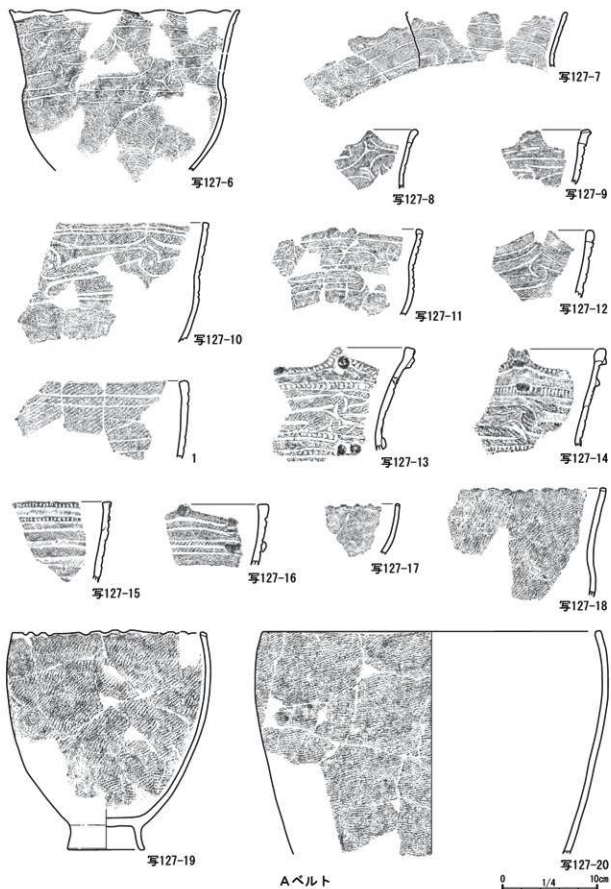


図183 クラック地点出土土器(6)

5c 層

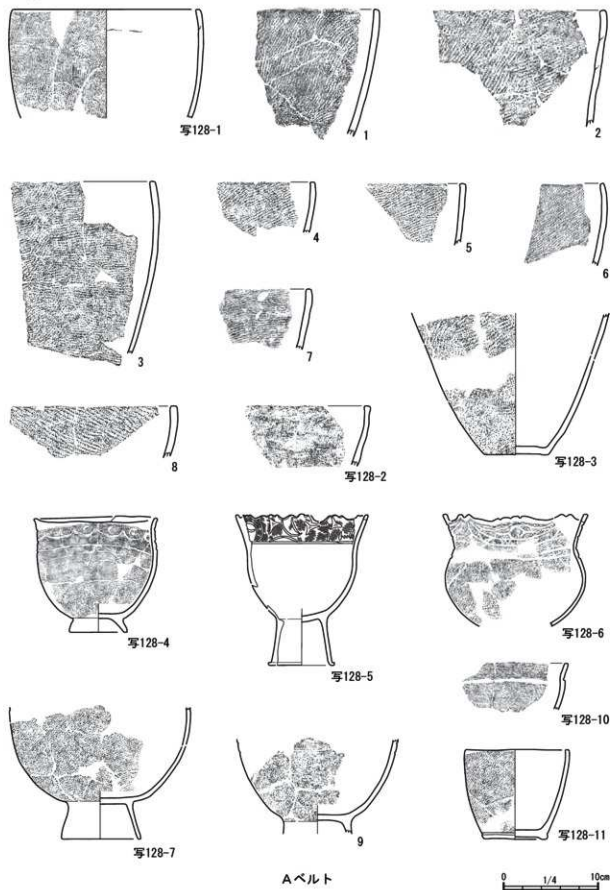
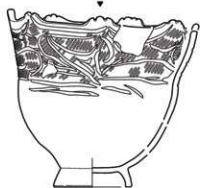
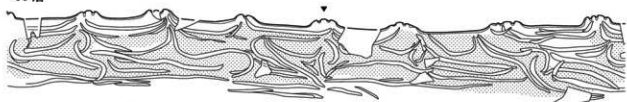


図184 クラック地点出土土器(7)

5c 層



写128-8



写128-9



2



3



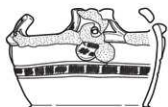
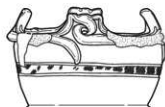
写128-14



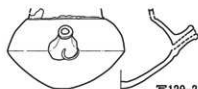
写128-12



写128-13



写128-15



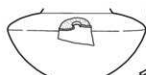
写129-2



写128-16



写128-17



写129-3

Aベルト

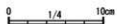
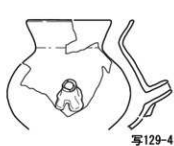
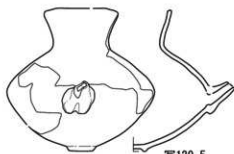


図185 クラック地点出土土器(8)

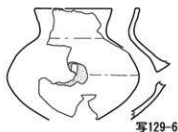
5c 層



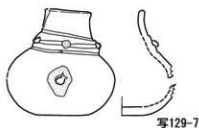
写129-4



写129-5



写129-6



写129-7

8a 層



写129-8



写129-9



写129-10



1



写129-11



写129-12



2



写129-13



写129-14



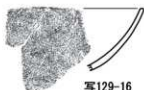
3



4



写129-15



写129-16



写129-17

8b 層



写129-18



写129-19



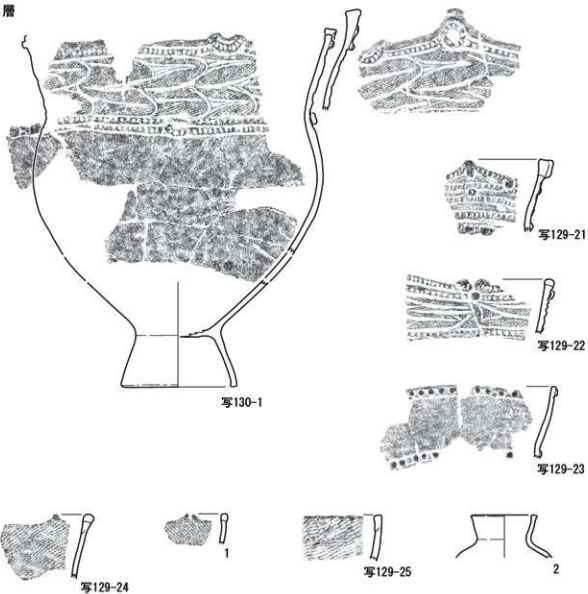
写129-20

A ベルト

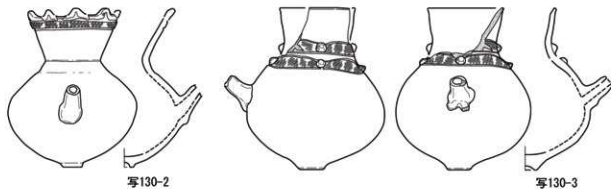


図186 クラック地点出土土器(9)

8b 層



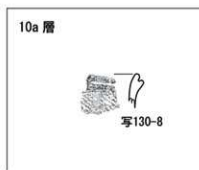
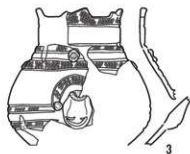
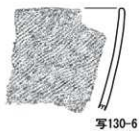
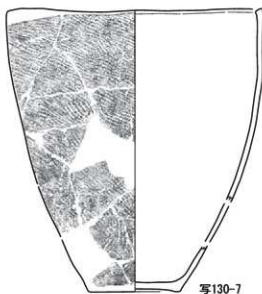
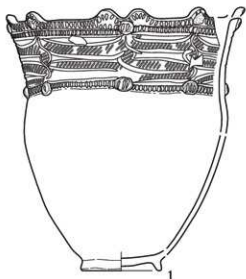
8c 層上面



Aベルト

図187 クラック地点出土土器 (10)

8c 層



Aベルト

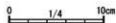


図188 クラック地点出土土器 (11)

B ベルト (図189～198、写真131～137)**1b層 (図189・写真131)**

最も時期の下る資料は晩期1b期である。器種は深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・壺がある。写131-1・2は口縁部が強く屈曲する深鉢で、4条の横位沈線が施される。2には上向きの弧線文とノ字状の垂下沈線がみられる。写131-3の縦位に蛇行する沈線文は、入組文の崩れと思われる。写131-4・5は粗製深鉢で、口唇部の面取がみられない。写131-6は晩期1b期の鉢で、無文地の口縁部に入組三叉文がみられ、体部に節の細かい縄文が施される。写131-8は精製浅鉢、写131-9は精製壺である。

3c層 (図189・190、写真131)

最も時期の下る資料は晩期1b期で、壺を中心に復元個体も目立つ。器種は深鉢・浅鉢・壺・注口がある。精製深鉢には括れをもつものが認められない。写131-12は口縁部直下に入組文が施される深鉢である。粗製深鉢には、口唇部に押圧状の2本一組の刻目が施されるもの(写131-17)や、小波状口縁(写131-16)等が含まれる。写131-19は小波状口縁の台付浅鉢である。写131-20は晩期1b期の壺で、口縁部に一对の貫通孔がみられ、体部最大径部に無文帯が巡る。写131-23は外面に漆状の付着物がみられる。

3c層下位 (図190・191、写真132)

最も時期の下る資料は晩期1b期で、復元個体が多い。器種は深鉢・鉢・浅鉢・注口がある。写132-1は晩期1a期の深鉢で、入組文が横方向に長く展開する。粗製深鉢の底部は、高台や低平な高台がみられる。写132-3は晩期1a期の台付鉢である。写132-4は晩期1b期の浅鉢で、体部には2単位のノ字状の垂下沈線が連繋して玉抱状に一組となる文様がみられる。写132-6・7は頭部が独立する器形の無文注口である。

4a層 (図191、写真132)

後期7-4～8期が出土しているが、本層より下位層の出土土器から、堆積時期を示す資料ではないと考えられる。写132-11は香炉で、頂部刺突の貼瘤間に三叉状の沈線文が施される。

4b層 (図191、写真132)

最も時期の下る資料は晩期1a期である。写132-12は晩期1a期の深鉢で、入組文同士の間は無文部を介さず結合している。写132-15は無文の鉢で、わずかに括れをもつ器形である。

4c層 (図192、写真132)

時期を特定できる資料の内、最も時期が下るのは晩期1a期である。写132-16は口縁部突起下に玉抱三叉文、入組文の空隙に三叉文が施され、晩期1a期に比定される。図192-4は晩期前葉の精製壺である。

5a層 (図192、写真133)

後期7-4～8期が出土しているが、本層より下位層の出土土器から、堆積時期を示す資料ではないと考えられる。器種は深鉢・鉢・注口がみられる。

5c層上面 (図192、写真133)

台付鉢・壺・注口の復元個体が3点あり、いずれも1m以内の近接した位置からまとまって出土した(図175)。写133-5は後期8期～晩期1a期の範疇で捉えられる台付鉢で、口縁部に頂部刻目3本の台形突起と二山突起が交互に配され、入組文の空隙に挟りによる三叉文が施される。写133-6は比較

的大型の壺で、体部最大径は推定32cmである。写133-7は無文の注口で、内湾する口縁部、独立する頸部、屈曲気味に張り出す体部、丸底の底部を特徴とする。

5c層 (図193・194、写真133・134)

5c層は土器出土量が多く、層上面から下位に至るまで復元個体も多い。後期8期～晩期1a期が主体である。精製深鉢には、括れをもつ器形と括れがほとんど目立たない器形があり、大半は口縁部突起がみられるが、後者の器形に口縁部突起をもたない平口縁が含まれる(写133-13)。体部は無文と縄文施文がみられる。写133-8は文様帯下端の横位区画沈線をもたない深鉢で、入組部の一部に刺突が施される。写133-11・写134-1の入組文は、横位に連続して展開する。写134-2～4は後期7-4期、写134-5～8、図194-1は粗製の深鉢である。写134-9は、平口縁で底部高台の無文浅鉢である。写134-10は、人面付注口の口縁部と考えられ、遠距離接合の資料である。既報告の南捨場出土資料(報告書Ⅱ図21-2)に、北捨場とクラック地点から出土した顔の破片1点ずつが接合しており、今回改めて図化したものを掲載した。人面表現は推定5単位の内、4単位が残存する。写134-11は注口の口縁部と考えられ、文様部分にのみ赤色顔料が残存しており、塗り分けがなされていた可能性がある。また、胎土・色調の特徴から図202-写141-7・8と同一個体の可能性がある。

5d層 (図194、写真134)

最も時期の下る資料は晩期1a期である。後期7-4期の破片資料もみられるが、混入と解釈される。写134-14は晩期1a期の鉢で、横位の縄文帯を介して上に魚眼状三叉文、下に入組文が展開する。

5e層 (図195、写真135)

最も時期の下る資料は後期8期である。写135-1～4は後期8期の深鉢で、多様な口縁部突起がみられ、頂部に横位沈線を施すもの(写135-2)や頂部に十字の刻目をもつもの(写135-3)等がある。写135-5～8は後期7-4期の深鉢である。写135-13の台付鉢は、上端部の破断面に顕著な摩滅が認められ、突起状を呈する部分が認められる。単に輪積み粘土の接合部分で欠損した資料とするには違和感があり、破断面を研磨して突起部を作出した二次整形の可能性も考えられる。写135-14の注口は、体部下半の内面に概ね注口部の高さまで赤色顔料が認められ、顔料容器として使用されたものと推測される。なお、下層出土の写154-4も同様の例として挙げられる。

5f層 (図196、写真135-17・18)

出土量は極めて少なく、破片資料のみである。後期7-4期～8期の深鉢体部片が出土している。

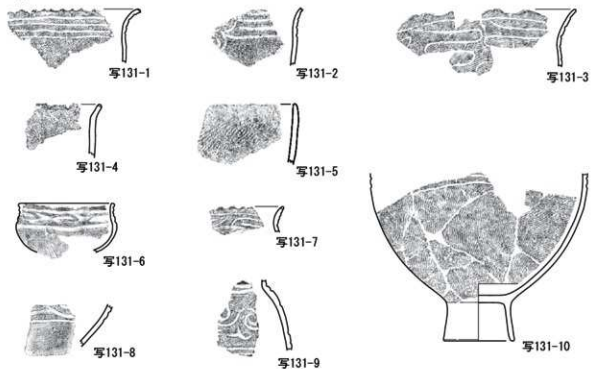
5層 (図196、写真136)

5a～5e層までの堆積層の内、層位を特定できなかつたものである。現場所見から5f層は除外できる。晩期1b期の深鉢(写136-1)と壺(図196-1)、晩期1a期の台付浅鉢(写136-3)、後期8期の台付鉢(写136-2)がある。

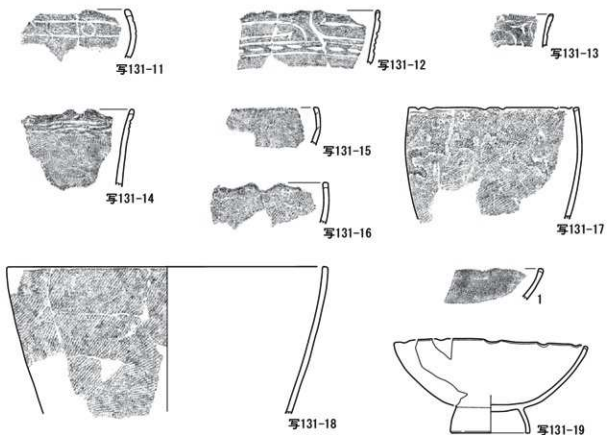
6層 (図196・197、写真136・137)

最も時期の下る資料は後期8期である。写136-4は後期8期、写136-5は後期7-4～8期、写136-6・7は後期7-4期である。粗製深鉢・鉢の口縁部には、二山状台形突起(写136-8)や貼瘤状突起(図196-2)をもつもの含まれる。口唇部は面取されるものが多い。写136-10は、内外面と一部破断面にも赤色顔料がみられ、特に内面底部には塊状に固着している。

1b 層



3c 層



Bベルト

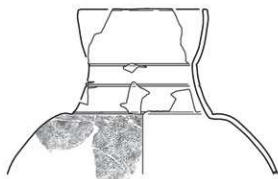
0 1/4 10cm

図189 クラック地点出土土器 (12)

3c 層



写131-20



写131-21



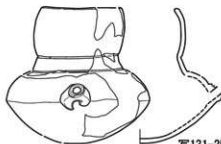
写131-22



写131-23

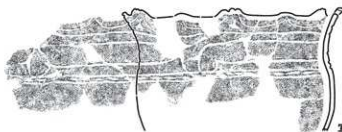


写131-24

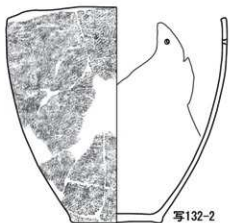


写131-25

3c 層下位



写132-1



写132-2

Bベルト



1

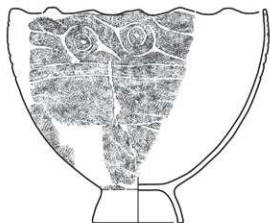


2



図190 クラック地点出土土器 (13)

3c 層下位



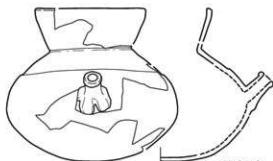
写132-3



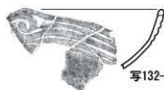
1



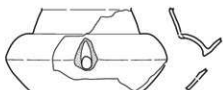
写132-4



写132-6



写132-5



写132-7

4a 層



写132-8



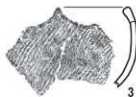
写132-9



写132-10



2



3



写132-11

4b 層



写132-12



写132-13



写132-14



写132-15

Bベルト

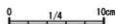
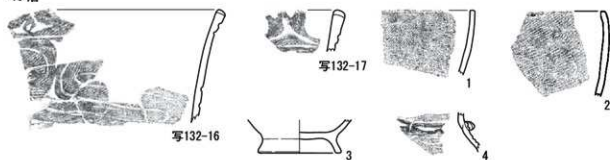
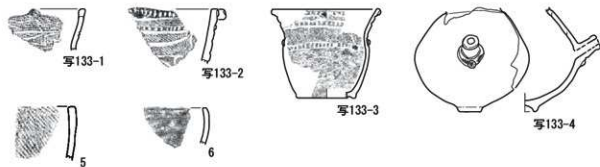


図191 クラック地点出土土器 (14)

4c 層



5a 層



5c 層上面

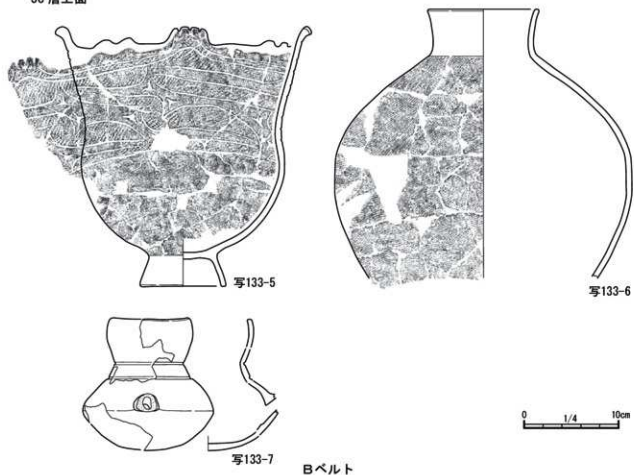
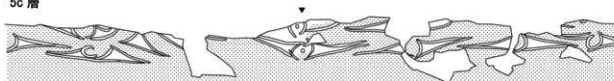


図192 クラック地点出土土器 (15)

5c 層



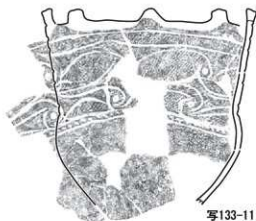
写133-8



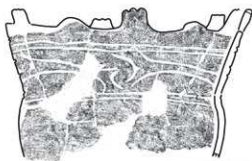
写133-9



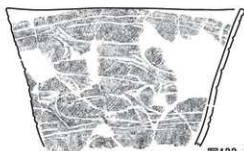
写133-10



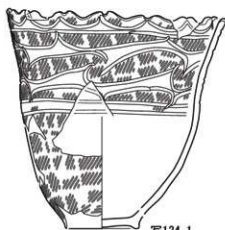
写133-11



写133-12



写133-13



写134-1



写134-2



写134-3



写134-4

B ベルト

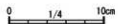
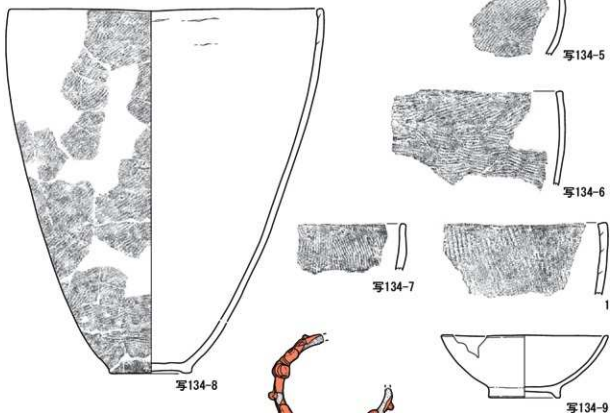


図193 クラック地点出土土器 (16)

5c層



5d層



Bベルト

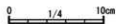


図194 クラック地点出土土器 (17)

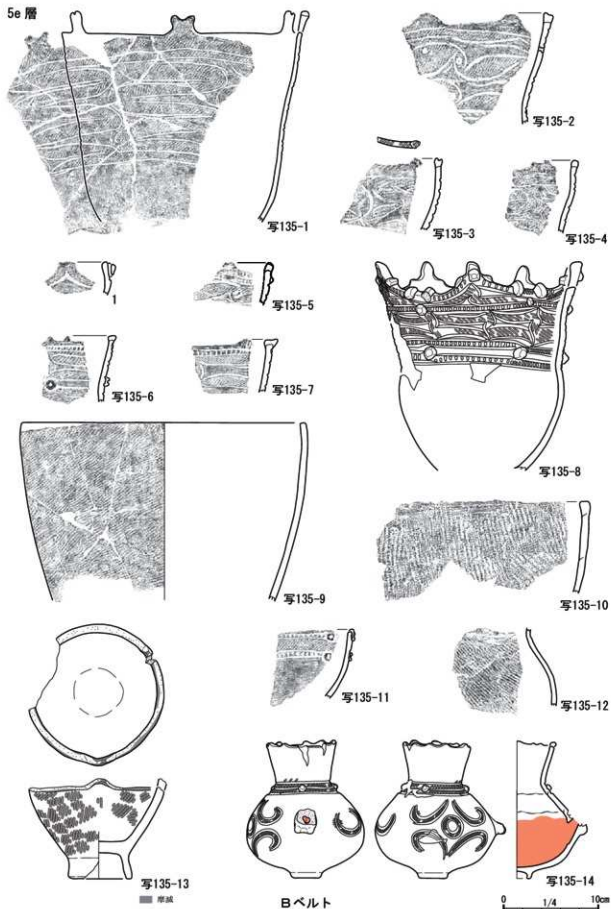


図195 クラック地点出土土器 (18)

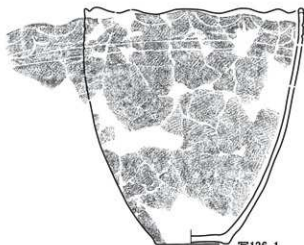
5f 層



写135-17

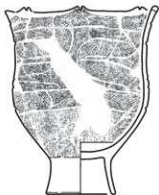


写135-18



写136-1

5 層



写136-2



写136-3

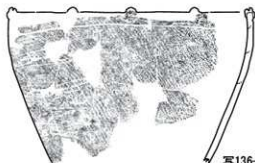


1

6 層



写136-4



写136-5



写136-6



写136-7



写136-8



2



写136-9



3



4

Bベルト

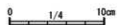


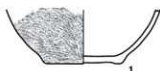
図196 クラック地点出土土器 (19)

6層



写136-10

■ 焼状に固着

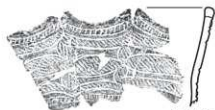


1



写136-11

7層



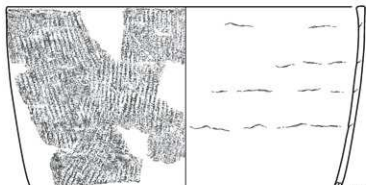
写136-12



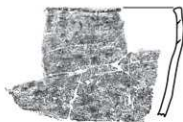
写136-13



写136-14



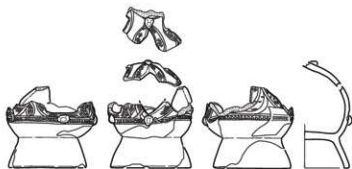
写136-15



写137-1



写137-2



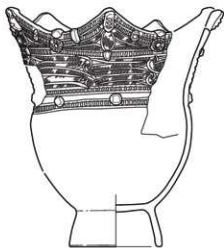
写137-3



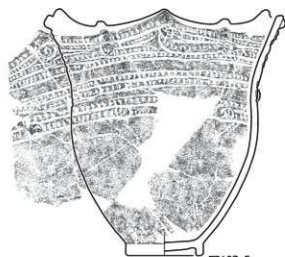
Bベルト

図197 クラック地点出土土器 (20)

8c 層



写137-4



写137-5



写137-6



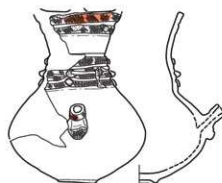
写137-7



写137-8

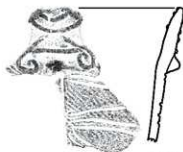


写137-9



写137-10

10e 層



写137-11



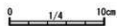
1



2



写137-12



Bベルト

図198 クラック地点出土土器 (21)

7層 (図197、写真136・137)

時期の特定できる資料は後期7-4期に限定される。写136-12・13は後期7-4期の深鉢である。粗製の深鉢・鉢には、口唇部が内削ぎ状に面取され、内側に肥厚するものがみられる。写136-14の体部下半には、縄文地に縦位の条痕が認められる。写137-3は香炉である。

8c層 (図198、写真137)

後期8期以降の土器を含まず、後期7-4期の一括資料といえる。写137-4は台付深鉢、写137-5は底部高台の深鉢で、いずれも波状口縁の波底部に貼瘤状突起がみられ、波頂部と波底部に対応する形で貼瘤や円環状の貼付文が施される。刻目列も特徴的な文様要素のひとつで、写137-5は入組文内にも刻目が充填される無文地の資料である。写137-10は注口で、口縁部突起の剥離痕がみられ、底部は幅広いの高台である。口縁部と頸部には、横位沈線と貼瘤による文様帯がみられる。注口基部は一袋状を呈する。

10e層 (図198、写真137)

円筒上層e式(写137-11・図198-1)と、中期後葉と考えられる深鉢片(写137-12・図198-2)が出土している。

東西ベルト (図199~210、写真138~146)**1b層** (図199・200、写真138・139)

最も時期の下る資料は晩期1b期である。器種は深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口がみられる。写138-1・2は晩期1b期の深鉢・鉢で、1の口縁部は大きく屈曲する。写138-3は括れない器形の深鉢で、口縁部直下に入組文、その下に円文・弧線文が展開する上下二段の文様構成がみられる。写138-4~7は晩期1a期、写138-10・11は後期8期、写138-12は後期7-4~8期の深鉢・鉢である。粗製の深鉢・鉢には、口唇部が面取されないものが目立ち、中には刻目が施されるものも含まれる。写138-19は晩期1b期、写138-20~22は無文の浅鉢・台付浅鉢である。壺は頸部に隆帯や突起がみられるものが多い(写138-23~25)。写139-1は後期8期の壺で、磨消部に赤色顔料が認められる。

3層 (図200、写真139)

最も時期の下る資料は晩期1b期である。他に後期8期~晩期1a期が出土している。写139-9・10は晩期1b期の鉢で、いずれも小波状口縁で括れない器形である。9の波頂部下には対向する三叉文による玉抱風の文様が施され、その内の1箇所には中央部に刺突が認められる。図139-11丸底の注口で、注口基部には影らみの中央部に凹みがみられる。

4c層 (図201、写真139-12)

東西ベルト4層の細分層位で取り上げたものは少数に留まる。晩期1a期の台付鉢が出土している。

4層 (図201・202、写真140)

4b~4e層までの堆積層の内、層位を特定できなかつたものである。後期8期を主体に、晩期1a期が出土している。写140-1~10は後期8期の深鉢・鉢・台付鉢で、口縁部突起が各種みられる。体部は無文と縄文施文がみられる。写140-12は小波状口縁の粗製深鉢である。写140-15は台付鉢で、台形突起が1単位残存し、突起下に貼瘤がみられる。写140-17は片口破片と考えられ、内外面に赤色顔料がみられる。写140-21の壺は、外面にやや明るい色調の赤色塗膜が認められ、自然科学分析によりパイ

ブ状ベンガラの使用が確認されている。また、漆以外の膠着材による塗布が推測されている（報告書Ⅷ第1編第6章第5節）。写140-18は推定4単位の脚をもつ浅鉢である。

5d層（図202、写真141）

最も時期の下る資料は晩期1a期である。写141-1は入組文内に縦沈線、入組部に円文と刺突が施され、晩期1a期に比定される。粗製の深鉢・鉢では結節縄文が1点含まれる（写141-3）。写141-7・8は同一個体とみられる注口で、7の外面には割れ口に沿って黒褐色の附着物が膜状にみられ、破断面にも浸透している。

5e層上面（図203、写真141）

最も時期の下る資料は晩期1a期である。器種は深鉢・鉢（写141-9・10、図203-1）、壺（写141-11）の他、注口と考えられる口頸部資料（写141-12）がみられる。

5e層（図203～206、写真141～144）

5e層は土器出土量が多く、層上面から下位に至るまで復元個体も多い。後期7-4期～8期を主体とする。器種は深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口がみられる。

精製の深鉢・鉢には、括れをもつ器形と括れをもたない器形がある。多様な口縁部突起がみられ、一山突起が密に連続する資料や波状口縁の資料も散見される。図203-写142-1は、刻目列と短沈線列が上下に並んで横走する。図204-写142-12の入組文は、口縁部突起間の位置で弧線を向き違いに縦走させた後に、横長の弧線で連結して描出される。入組文の一部空隙に三角形ないし三叉状の沈線が認められるが、入組文の描出が全体的に粗雑であるため、文様として認識し得るかについては判断に迷う。粗製の深鉢・鉢には、口縁部突起をもつ資料も多い（図205-写143-1～4）。口唇部は平坦に面取されるもの他、内削ぎ状に面取されるもの（図205-写143-5・8・10・14）も一定量含まれる。図205-写143-15は浅鉢で、口縁部に縄文帯と突起が施され、突起上面の口唇部には三叉状の沈線がみられる。図206-写144-2は正面の斜め前方に開口部をもつ注口である。上部は欠損して全体形状が不明であるが、珍しい器形といえる。

6層（図207、写真144）

時期を特定できる資料は後期7-4期に限定される。器種は深鉢・浅鉢・壺等がみられる。写144-11は後期7-4期の深鉢で、口縁部突起の頂部に刺突と弧状沈線がみられる。粗製深鉢には、縄文施文の他に無文の資料も比較的に立ち、口縁部が大きく内湾するもの（写144-15）も含まれる。

7層（図207・208、写真145）

後期7-4期を主体とするが、後期8期まで時期的に下る可能性のある資料も含まれる。図207-写145-1は後期7-4～8期の深鉢で、頂部刻目2本の台形突起と頂部刻目1本の小突起が交互に配される。入組文と刻目列で文様が構成され、貼瘤や三叉状沈線等の文様要素はみられない。内面の炭化物には一部光沢がみられ、炭素・窒素安定同位体比分析の結果、概ねC3植物・草食動物に由来する炭化物と推定された（報告書Ⅷ第1編第7章第5節）。図208-写145-5は後期7-4期の台付深鉢で、口縁波頂部・波底部に3単位の小突起がみられる。口頸部文様は刻目列を介して上下に二段構成で展開する。粗製深鉢には、口唇部が内側に肥厚するもの（図208-写145-10）や内削ぎ状に面取されるもの（図208-写145-11・12）が含まれる。

8c層 (図209・210、写真145・146)

後期8期以降の土器を含まず、後期7-4期の一括資料といえる。器種は深鉢・台付深鉢・注口がみられる。精製の深鉢(図209)は、明瞭な括れをもつ器形を主体に、括れない器形(写146-4)も認められる。体部は無文が多数で、縄文施文は少ない。底部は台付や高台がみられる。写145-18は入組文の空隙に一部三叉文が施され、三叉文が後期7-4期に存在することを示す資料である。なお、下層出土の図214-写154-1等も同様の例として挙げられる。粗製深鉢は、口唇部が内削ぎ状に面取される資料が多く、写146-6のように口縁部が大きく内湾する資料も含まれる。注口には頸部が独立するもの(写146-8)と頸部が独立しないもの(写146-7)がある。写146-7の注口基部は二袋状を呈する。写146-9は、口縁部には人面表現が1箇所認められ、頸部と思われる部分が二袋状となる特異な器形である。内外面には赤色顔料が認められる。

8d層 (図210、写真146)

出土量は少ないが、後期7-4期に限定される。写146-12は貼瘤状突起が施される粗製深鉢である。

10e層 (図210、写真146)

覆林式(写146-14)と円筒上層e式(図210-3・4、写146-15)の深鉢片が出土している。

11層 (図210、写真146-16)

円筒上層e式の深鉢片が出土している。

【上層・下層・Ⅲ層】(図211~214、写真147~154)

上層が1層~5層、下層が6層以下に相当する。平成26年度の北捨場・北東捨場の発掘調査で取り上げた遺物は全て上層に掲載したが、その一部については下層を含む可能性がある。Ⅲ層はクラック堆積層の内、出土層位が不明のものである。実測図掲載は、出土点数の少ない時期のものや特異な資料等に限定したため、写真掲載が主である。以下、図化した資料を中心に記載する。

上層(図211~214、写真147~153)では、縄文時代中期後葉、後期7-3期から晩期3~4期にかけての土器が出土しているが、晩期1a期が最も多い。図211-写147-3は、口縁部内面に人面表現のある深鉢である。口縁部内面の人面表現は図212-写149-14にもみられる。図211-2、写147-13は後期7-3期の深鉢で貼瘤が多用される。図212-写149-6は台部資料であるが、上部剥離痕の状況から二袋状に立ち上がる器形が想定される。図212-写149-10は、台部に三叉状の透かし孔がみられる台付浅鉢である。図212-写150-8は壺の可能性が考えられる資料で、口縁部に黒色付着物が認められる。図212-写150-3の壺は、体部の1箇所貼付による2単位の膨らみが認められる。これに対応する内面部分には、焼成前に注口部の穿孔が意図された痕跡が残る。図213-写151-8は、正面と裏面に各1面の顔をもつ人面付注口である。左側面には径2cmの開口部がみられ、隆帯貼付により肥厚する。頂部は開口部方向に向かって鋭鋭な突起状を呈するとともに、正面から裏面にかけて貫通孔が施されている。また、突起状の頂部と貫通孔は、角度によっては鳥の嘴と目のようにも見える。写152-7は注口部に複数回の穿孔痕跡が認められる資料である。注口部の側面観は縦いS字状を呈することもあってか、1回の穿孔では貫通しなかったものと推測される。穿孔方向は外面側からを基本とするが、特に基部付近には内面方向からの穿孔痕跡が観察される。写153-3~7は香炉で、3~5の内面にはス状の炭化物が付着している。報告書Ⅱ図21-1・図80-1も香炉内面に炭化物が付着する例で、香炉の使用・

用途を考える上で重要な資料といえる。写148-1の粗製深鉢は、内面炭化物に一部光沢がみられ、炭素・窒素安定同位体比分析の結果、C3植物に由来する炭化物と推定されている（報告書Ⅷ第1編第7章第5節）。

下層（図214、写真154）では、縄文時代中期後葉、後期7-4期～8期にかけての土器が出土している。図214-写154-1は後期7-4期の深鉢で、入組文の空隙に貼瘤がみられ、この貼瘤に接して2単位のスリ文が施される。写154-4の注口は、体部下半の内面と注口部の内側において赤色顔料の残存が明瞭な資料で、顔料容器としての使用が推測される。

Ⅲ層出土土器には、晩期1b期の台付鉢（図154-写154-5）、波状口縁をもつ後期7-4期の注口（写154-6）、香炉の頂部（写154-7）等がみられる。

【放射性炭素年代測定】

土器7点について、付着炭化物の放射性炭素年代測定を実施している。以下、土器の時期に沿って測定結果を示す（詳細は報告書Ⅷ第1編第5章第7節参照）。

晩期2期 図170 写123-1	(Aベルト1b層相当(SI118・SN68b付近)・KAWA(1)-179) : 3,000 ± 20 yrBP
晩期1b期 図189 写131-2	(Bベルト1b層・KAWA(1)-180) : 2,980 ± 20 yrBP
晩期1b期 図200 写130-9	(東西ベルト3c層・KAWA(1)-181) : 2,960 ± 20 yrBP
晩期1a～1b期 図182 写126-6	(Aベルト5c層・KAWA(1)-182) : 2,970 ± 20 yrBP
後期7-4期 図204 写142-12	(東西ベルト5e層・KAWA(1)-183) : 3,010 ± 20 yrBP
後期7-4期 図188-1	(Aベルト8c層・KAWA(1)-184) : 3,080 ± 20 yrBP
後期7-4期 図188 写130-7	(Aベルト8c層・KAWA(1)-185) : 3,070 ± 20 yrBP

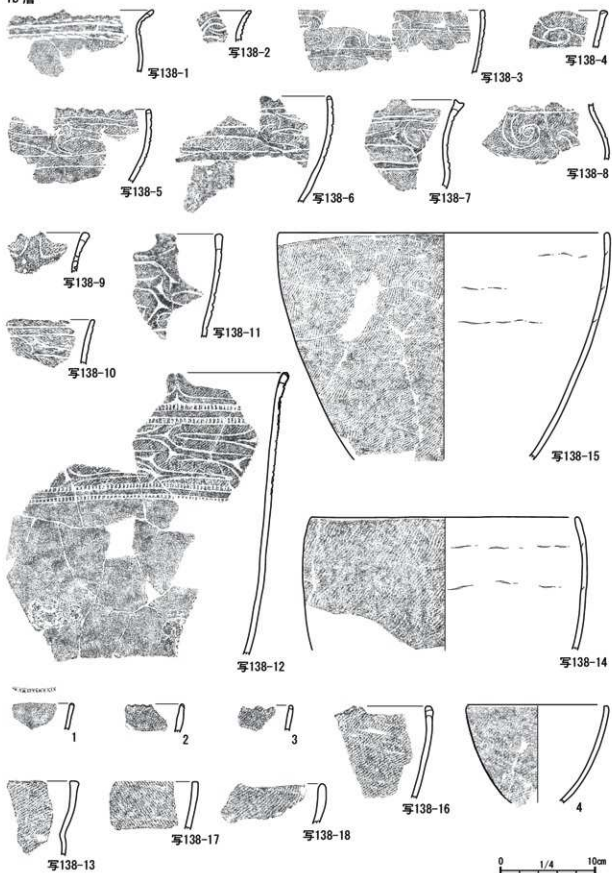
この他、土壌サンプル中の炭化種実について放射性炭素年代測定を実施している。以下、層位に沿って測定結果を示す（詳細は報告書Ⅷ第1編第2章第5節参照）。

Bベルト1b層コラムA3 (KT-014 Beta-427344)	: 2,970 ± 30 yrBP
Bベルト3c層コラムA7 (KT-016 Beta-430080)	: 2,930 ± 30 yrBP
Bベルト3c層コラムA9 (KT-015 Beta-427345)	: 2,990 ± 30 yrBP
Bベルト3c層コラムA11 (KT-017 Beta-430081)	: 2,890 ± 30 yrBP
Bベルト4a層コラムA13 (KT-018 Beta-430082)	: 2,920 ± 30 yrBP
Bベルト4a層コラムA15 (KT-019 Beta-430083)	: 2,940 ± 30 yrBP
Aベルト4a層 (KT-024 Beta-432659)	: 2,950 ± 30 yrBP
Bベルト5c層コラムB1 (KT-025 Beta-441123)	: 2,960 ± 30 yrBP
Bベルト5d層コラムA17 (KT-020 Beta-430084)	: 3,020 ± 30 yrBP
Bベルト5e層コラムA19 (KT-021 Beta-430085)	: 3,000 ± 30 yrBP
Bベルト6層コラムB4 (KT-026 Beta-441124)	: 3,000 ± 30 yrBP
Bベルト8c層コラムB9 (KT-027 Beta-441125)	: 4,430 ± 30 yrBP
Bベルト8c層コラムB11 (KT-028 Beta-441126)	: 3,640 ± 30 yrBP
Bベルト10e層コラムB15 (KT-029 Beta-441127)	: 4,130 ± 30 yrBP
Bベルト12層コラムA29 (KT-022 Beta-432657)	: 4,400 ± 30 yrBP
Bベルト12層コラムA29 (KT-023 Beta-432658)	: 4,360 ± 30 yrBP

両測定結果に基づくと、捨場堆積層の1b層～8c層の年代は、明らかに古い値を示した8c層の炭化種実を除き、中央値が3,080～2,890yrBPの範囲に収まる。土器付着炭化物の年代中央値は、後期7-4期が3,080～3,010yrBP、晩期1a～1b期が2,980～2,960yrBPにまとまりを示す。なお、クラック地点における地形の形成時期は、無遺物層である12層の4,400～4,360yrBP以前と考えられるが、詳細な時期は不明である。

(最上)

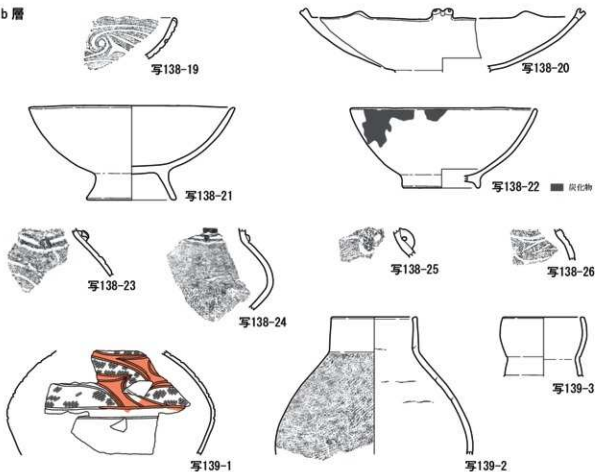
1b層



東西ベルト

図199 クラック地点出土土器(22)

1b 層



3c 層

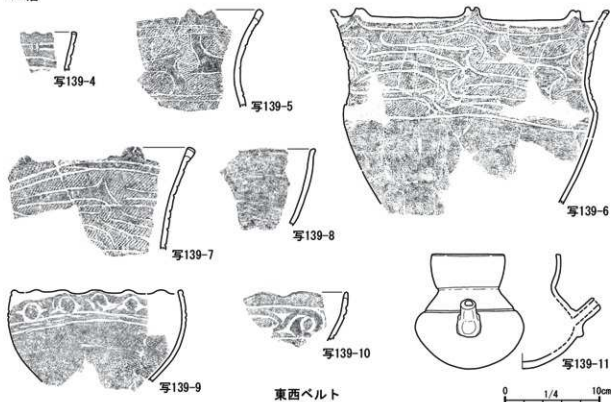
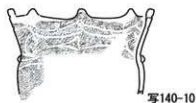
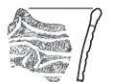
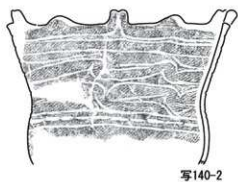


図200 クラック地点出土土器 (23)

4c 層



4 層



東西ベルト

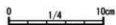
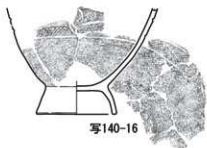


図201 クラック地点出土土器 (24)

4層



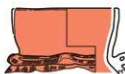
写140-15



写140-16



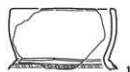
写140-17



写140-21



写140-22



1



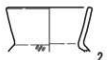
写140-23



写140-18



写140-19



2



写140-20

5d層



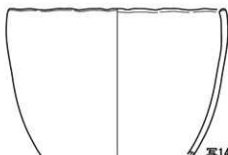
写141-1



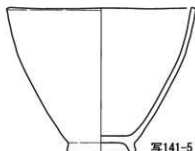
写141-2



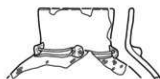
写141-3



写141-4



写141-5



写141-6



写141-7



写141-8

■ 黒褐色付着物

東西ベルト

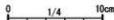
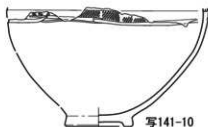


図202 クラック地点出土土器 (25)

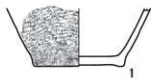
5e層上面



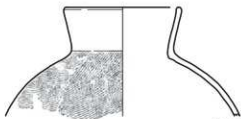
写141-9



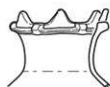
写141-10



1



写141-11



写141-12

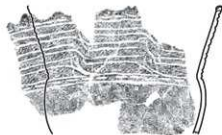
5e層



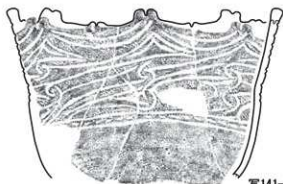
写141-13



写141-14



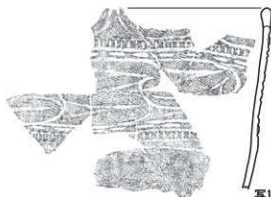
写141-15



写141-16



写142-2



写142-1



写142-3

東西ベルト

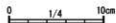


図203 クラック地点出土土器 (26)

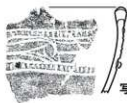
5e層



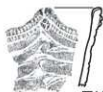
写142-4



写142-5



写142-6



写142-7



写142-8



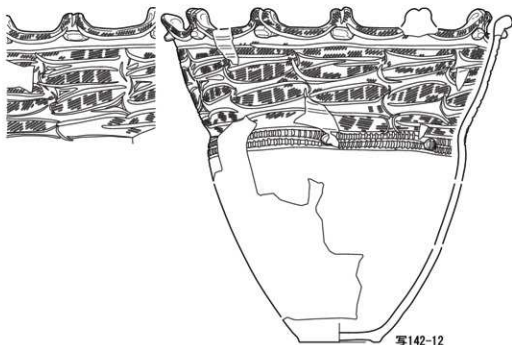
写142-9



写142-10



写142-11



写142-12

東西ベルト



図204 クラック地点出土土器(27)

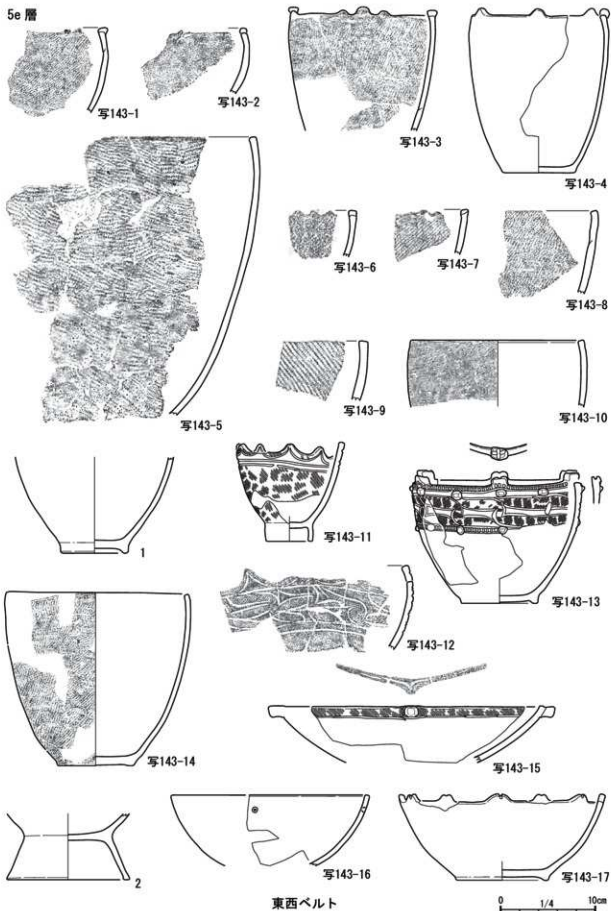
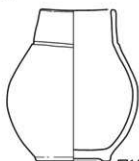
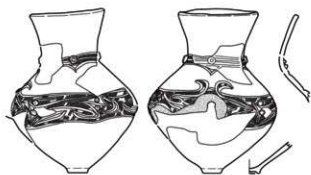


図205 クラック地点出土土器 (28)

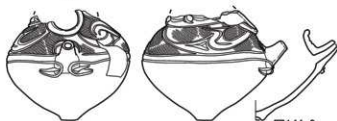
5e 層



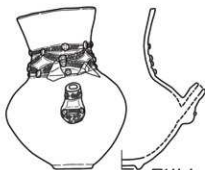
写144-1



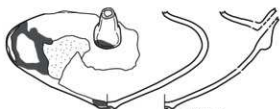
写144-3



写144-2

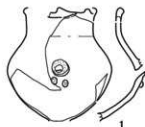


写144-4



写144-5

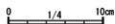
■ 黒色付着物



1



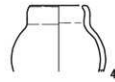
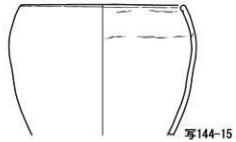
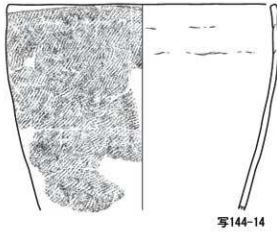
写144-6



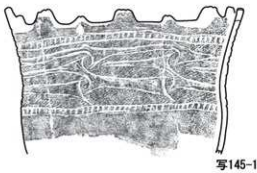
東西ベルト

図206 クラック地点出土土器 (29)

6層



7層

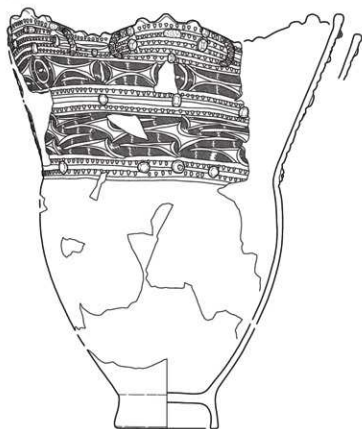


東西ベルト



図207 クラック地点出土土器 (30)

7層



写145-5



写145-6



写145-7



写145-8



写145-9



写145-12



写145-10



写145-11



写145-13

東西ベルト



図208 クラック地点出土土器 (31)

8c 層



写145-14



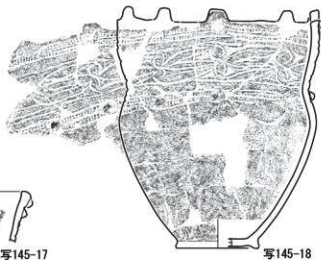
写145-15



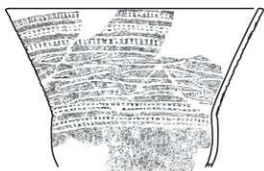
写145-16



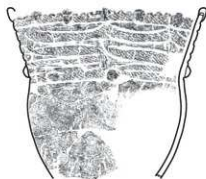
写145-17



写145-18



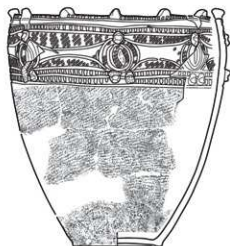
写146-1



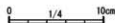
写146-2



写146-3



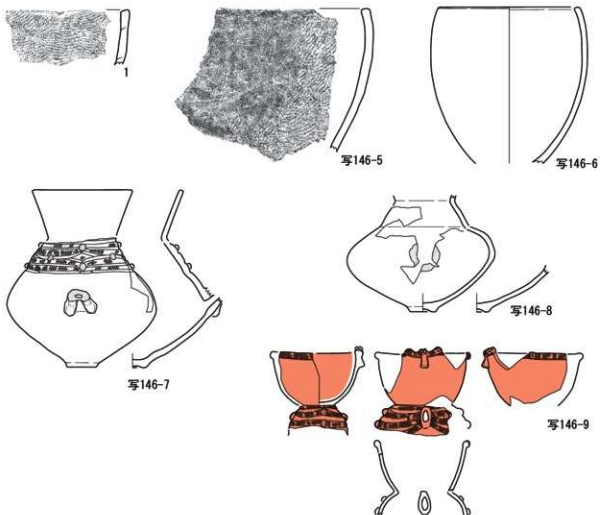
写146-4



東西ベルト

図209 クラック地点出土土器 (32)

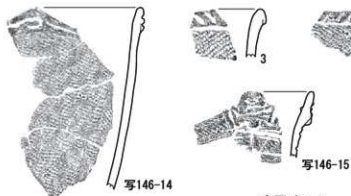
8c 層



8d 層



10e 層



東西ベルト

11 層



図210 クラック地点出土土器 (33)

上層

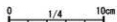
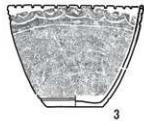
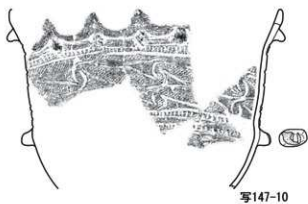
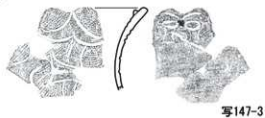


図211 クラック地点出土土器 (34)

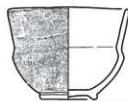
上層



写148-14



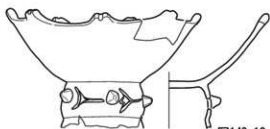
写148-15



写149-3



写149-8



写149-10



写149-6



写149-14



写150-1



写150-8

■ 黒色付着物

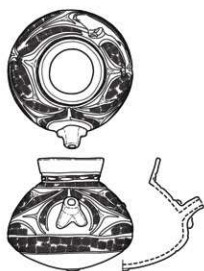


写150-3



図212 クラック地点出土土器 (35)

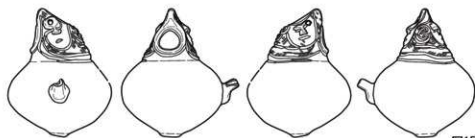
上層



写150-13



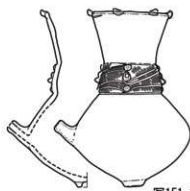
写150-14



写151-8



写151-9



写151-13

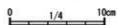
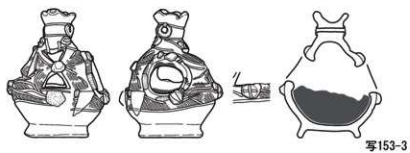


図213 クラック地点出土土器 (36)

上層



下層

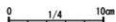
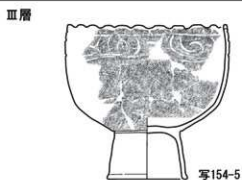
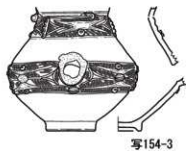
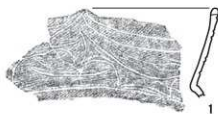


図214 クラック地点出土土器 (37)

(3) 土製品 (図215～217、写真155)

土偶5点、耳飾り11点(掲載9点・非掲載2点)、腕輪形土製品2点、粘土塊2点(掲載1点・非掲載1点)、円盤状土製品9点、ミニチュア・小型土器20点の計49点が出土した。この内、クラック地区の出土土製品として、報告書Ⅵに土偶3点(図22-5・図23-20・23)、ミニチュア・小型土器2点(図31-199・図36-272)が掲載されている。

土偶 (図215-1・2)

1は右手部欠損でほぼ完形の中実土偶である。首部と左足部にアスファルトの塗布がみられる。顔面はほぼ円形で鼻部が粘土粒、耳部は刺突で施文し、口部の両脇には弧状文を施文している。体部は粘土紐を巡らし、体部中央に直線の正中線を左右に弧状文を施文している。裏面は後頭部に粘土粒、体部に渦巻文を施文している。2は中実で頭頂部は皿状で顔面を表現していない。乳房は粘土粒を貼り付け、首部に連続刺突を施文している。

耳飾り (図215-3～9、図216-10・11)

形態は滑車形耳飾りであるが、片面のみ開口している4・中央部が貫通しているもの3・10・11、中実のもの6～9とバラエティーに富んでいる。4は表裏面に漆を塗布し、X字状文を施文しており、精巧なつくりである。7は黒漆を塗布している。

腕輪形土製品 (図216-12・13)

一部分のみの出土であるが、中央部に貫通孔がみられ円形を呈する。粘土紐を貼り付け縄文を施文している。

粘土塊 (図216-14)

片面の中央部が円形状に凹み、周縁が凹凸している不整形の形態である。

円盤状土製品 (図216-15～23)

21は底部破片で他は深鉢形の胴部破片である。形態は円形で15・16・18は打ち欠き後のスリが確認される。

ミニチュア・小型土器 (図216-24～31、図217-32～39、写真155-40・41)

器高が5cm以下のミニチュア(24～28)と5cm以上の小型土器(32～41)の二つのグループに分かれる。器形は鉢・台付鉢・壺・注口の器種であり、25～28は沈線施文の不規則な文様である。

(成田)

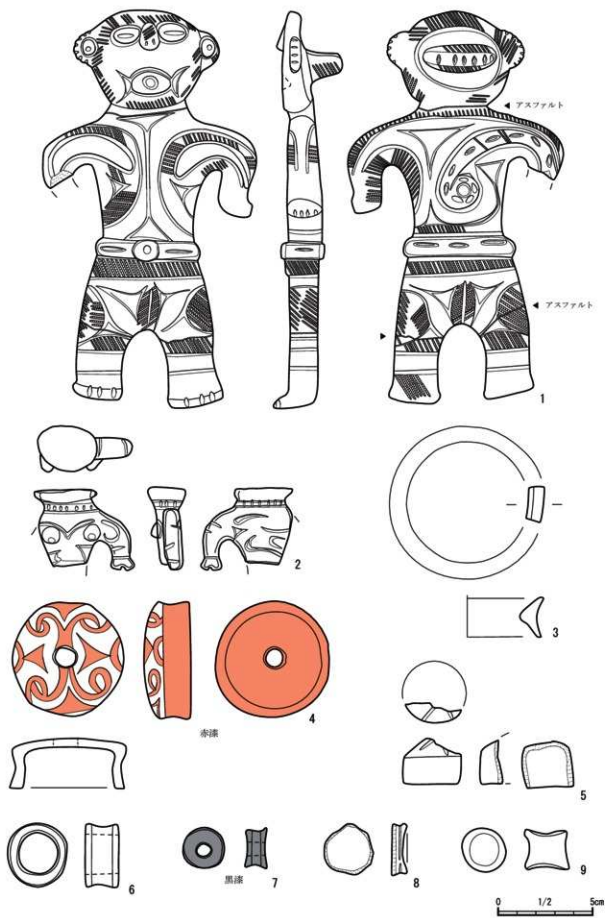


図215 クラック地点出土土製品(1)

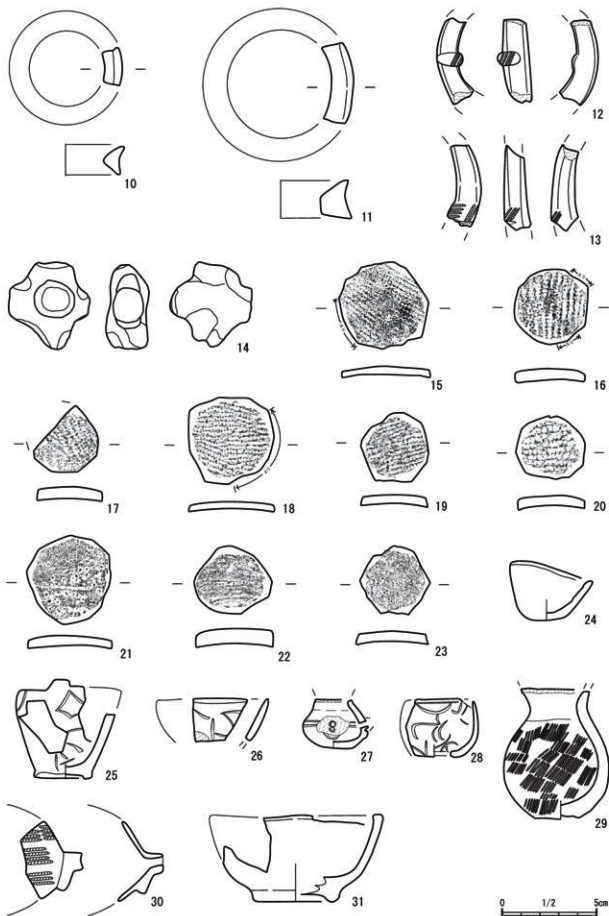


図216 クラック地点出土土製品(2)



図217 クラック地点出土土製品(3)

(4) 石器・石製品 (図218～233、写真156～171)

最下層に縄文時代中期の層を含むが、後期後葉から晩期前葉が大部分である。

ベルト部分については、細分された層ごとの取り上げがなされており、図化点数を増やした。一方、クラック上層の図化は絞り込んでおり、クラック地区全体を写真図版を用いて報告する。石鏃は有茎石鏃が多数を占め、ほとんどが珪質頁岩製であり硬く良質な石質のものが多く、各層の出土品は、形状や大きさの変化はあるが、丁寧な剥離加工で左右対称のものが多くという点で共通性が高い。石錐は棒状のもの、棒状で一端につまみのある物が多い。石匙は横型が多い。また、黒曜石は各層から出土した。掲載品のうち写158-50を除き産地分析し、いずれも木造出来鳥群であった。黒曜石製石器についての詳細や石器・石製品の報告の考え方は、報告書Ⅱに記載した。

Aベルト (図218～221、写真156～157)

[剥片石器]

写156-1～21は石鏃であるが、6のような長さ2cm程度の小形品がある。同30～32は縦型石匙、33～35は横型石匙である。横型石匙はつまみ部の作出と刃部の加工が、より丁寧である。写156-36は両刃礫器状の石核である。打面を交互に入れ替えながら、剥片剥離が行われている。同37の石核は、珪質の部分は中央上部に偏在しており、有用部分の剥片を剥離した後に作業が終了している。

[礫石器]

写156-44～157-14に掲載した。写157-14は、石皿であるが、折面のざらざらした凸の部分が砥石として使用されて、磨耗している。

[石製品]

3a層からは写157-18の赤色顔料が付着する岩版が出土した。脆弱になっており、図化した部分(図221-4)と写真の下部は接合しなかった。写157-19は半球状で底部の窪み石製品である。

Bベルト (図222～225、写真158～159)

[剥片石器]

各層出土品の石鏃は、Aベルトと同様に左右対称の物が多く形状等が類似している。石匙は写158-30・35・37～40と、つまみ部を礫皮付近の軟質部において、珪化の進んだ良質な部分を刃部としたものが多い。同31は幅広の縦長剥片を素材とし、つまみ部を素材剥片の末端に近い側縁におくことで、バルブ付近の盛り上がり避けて刃部を形成している。

[礫石器]

写159-1～13は凹石・磨石・敲石である。凹石の凹痕は数や形状に変化がある。1・10・11のように丸く大きく深い凹痕は、その内側の敲打痕は不明瞭である。7のように敲石の敲打痕が深くなった可能性のあるものとは異なる。13の凹痕は平面形が楕円形で深い。同14・19・20は石皿であり、19は礫の自然の窪みを利用したものである。

[石製品]

写158-56は、緑色凝灰岩製の玉の未成品である。五角形をしており成形の途中段階で浅い穿孔が行われている。同57は、正面及び側面で上下を分割するような横方向の幅広の線刻が、特徴的である。

裏面は凹んでおり、写157-19と同様の石製品の形状変異と考えたい。写158-58は敲打により槍先状の形に整形した石製品である。両面に研磨されて薄紫色がかかった石の色調が発現している。写159-15～18は石製円盤である。晩期1b期以前の時期の帰属が推定できる資料である。詳細は報告書Ⅷで記載するが、縄文時代後期後葉～晩期前葉にかけての遺物が多くを占めるクラック地点の石器組成の中では、石製円盤の出土量は他の捨場に比較すると相対的に少ない。

東西ベルト (図226～228、写真160～161)

[剥片石器]

写160-1～63は各層から出土した石鏃・石錐・石匙である。Bベルトと同様に、素材剥片の礫皮付近の軟質部を石鏃・石錐の基部(11・35・44)、石匙のつまみ部(46・47・49・51・58)においたものがみられる。64以降は削器・二次加工剥片・アスファルト付着の剥片(66)、異形石器(72)、黒曜石製の石核(76～78)である。

[礫石器]

写161-1～12は、磨石・敲石・凹石である。14は石皿としたが左側縁に剥離加工がある。左側縁の形状を整えるため、あるいは大形の石製円板への再加工を意図した可能性がある。

(齋藤)

[磨製石斧]

写161-15は閃緑岩製の磨製石斧で、刃部が欠損している。

[石棒類]

写161-18は、大形の石棒である。柄部は欠損している。

(高橋)

[その他の石製品]

写161-13は裏面の中央部を中心に、敲打により窪ませた石製品である。写157-19と同じグループと考えられる。同16は花崗岩製の石製円盤である。同17は、素材礫の挟り部分に敲打痕があり全体としてC字状の意匠に整えている。

上層 (図229～232、写真162～170)

クラック地点にあたるグリッドは平成26年の調査当時は北捨場であった。そのため、相応するグリッドの掲載品は、上層に含めて紹介した。

[剥片石器]

写162-1～68は石鏃と石錐であり、両者をあわせて記述する。27～30・46は先端部の加工が意識されているが幅広い形状である。左右対称の石鏃が多いことから、これらは未製品の可能性がある。44と写165-18は黒曜石製の石鏃である。石鏃は棒状のものが多く、同69～78は石筥、両面調整石器、石匙である。70は小形の石筥で、基部は石錐の先端部と類似した形状である。76の石匙は、右側縁の挟り加工によって突起を作り出している。石匙は写真163及び写164-1～5にも掲載した。ベルト部分と同様に、横型石匙は刃部を丁寧作り出すものが多い。縦型石匙は、写163-18のように、つまみ部分のみ作り出したものが多い。写164-6～165-17は削器、二次加工剥片、異形石器、石核、剥片である。写164-10は左側縁にアスファルトが付着する削器である。写164-11～15・21は削器としたが石鏃未製

品の可能性がある。同30は人体意匠の異形石器である。31はつまみ部分を持つが、刃部は非実用的な小ささであり異形石器とした。写165-8は自然の孔を持つ珪質頁岩製の剥片である。同14・16は珪質頁岩の石核を転用した敲石である。同10は写真正面の最後に剥離された剥片がヒンジフラクチャーだったことが読み取れ、その打点の背後に敲打痕がある。ヒンジフラクチャーの剥片の次の剥離は、うまくいかないことが多い。石核から敲石への転用初期の可能性とともに、さらなる敲打や両極打法に剥離方法を変えるなどした結果、敲打痕が形成された可能性もある。写169-4は鉄石英製の両面調整石器である。

(齋藤)

〔磨製石斧〕

写165-19~22に掲載した。石材は安山岩、緑色岩、デイサイトである。写165-19は刃部がつぶれている。敲石に転用した可能性がある。

(高橋)

〔礫石器〕

写真166~168は凹石、敲石、磨石、砥石、石皿である。写167-16は、隅丸方形で両面の中央部に大きめの浅い凹みが形成されている。凹みの内側の表面は荒れておらず、敲打痕は見られない。写168-14は、筋状の使用面を複数持つ砥石である。同15は、中央下部に窪まりを持つ石皿である。下部の厚みは薄く、窪まり部分は下方に向かって開いている。そのため当初からの礫の形状を生かしたというよりは、楕円の石皿を使い込み、薄くなり二つに割れた後の上部側を使用した可能性がある。同17は中高の石皿である。器表面には敲打痕が残っている。

(齋藤)

〔石棒類〕

図231-4は、大形の石棒である。西捨場の表採資料と接合した。図233-2は点紋粘板岩製である。柄部は欠損している。

(高橋)

〔その他の石製品〕

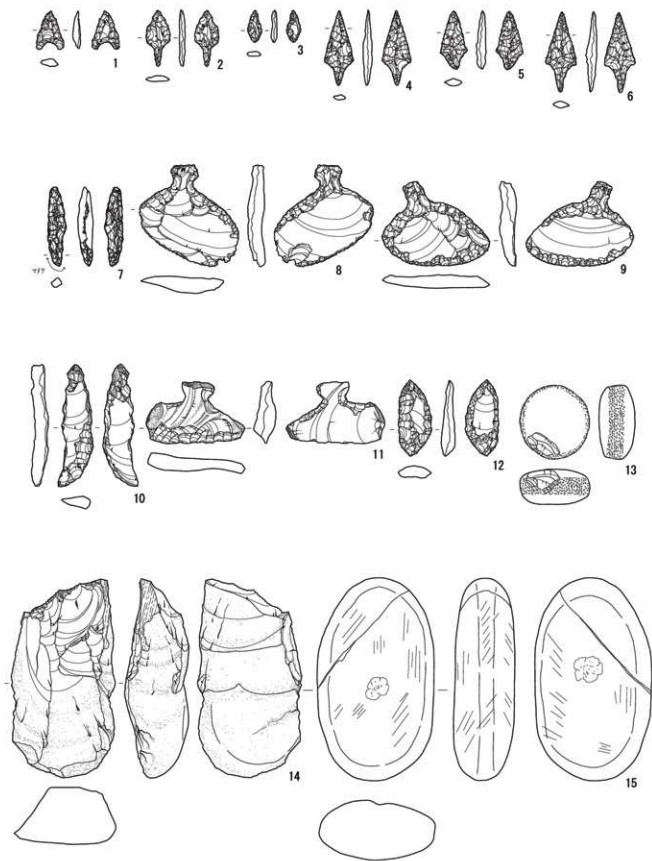
写169-1は岩版破片であり、2は擦痕をもつため線刻礫とした。同3~21は、4を除き石裂円盤である。3は異形の自然礫の正面の左側と左下を剥離して五角形にしたものである。剥離は両極打法で行われた可能性があり、正面左の節理部分の剥落は、その時の衝撃による可能性がある。

写真170は、線刻礫や玉類などである。1は屈曲した礫の側面が研磨により面取りされて、線状痕を持つ。2は正面側の中央部が若干の窪みを持つ自然礫を用いた線刻礫である。3は半球状で底部の窪む石製品である。4は上部を三角形に整えているが、3と同様の石製品の変異と考えられる。5は緑色凝灰岩製の玉である。6は軟質の緑色凝灰岩に上下に貫通する孔と側面に二条の溝を作り出した垂飾品である。

下層・Ⅲ層 (図233、写真171)

石鏃・石錐・石匙、凹石、石皿などが出土し写真171に掲載した。上層の出土品と加工と形状が類似している。

(齋藤)



Aベルト

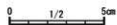


図218 クラック地点出土石器・石製品 (1)

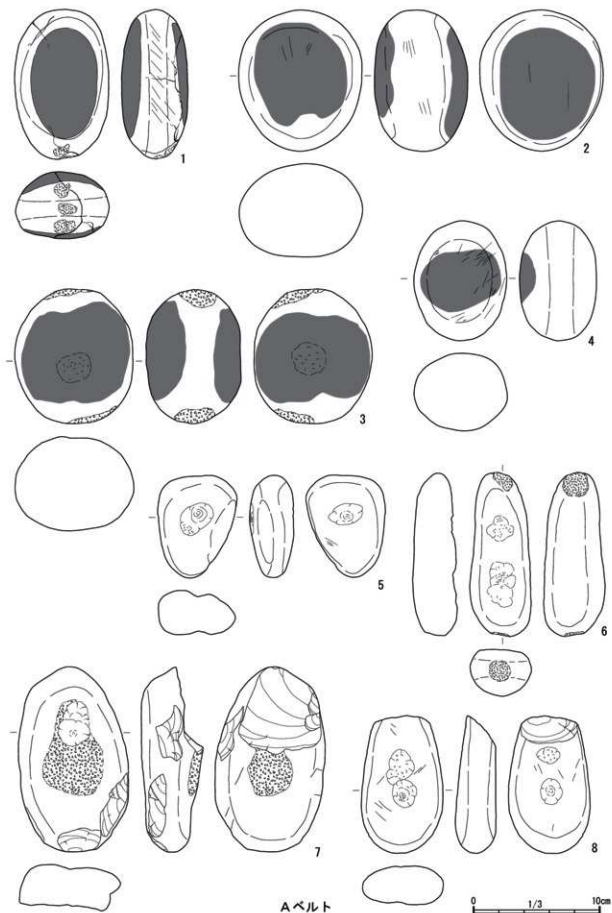


図219 クラック地点出土石器・石製品(2)

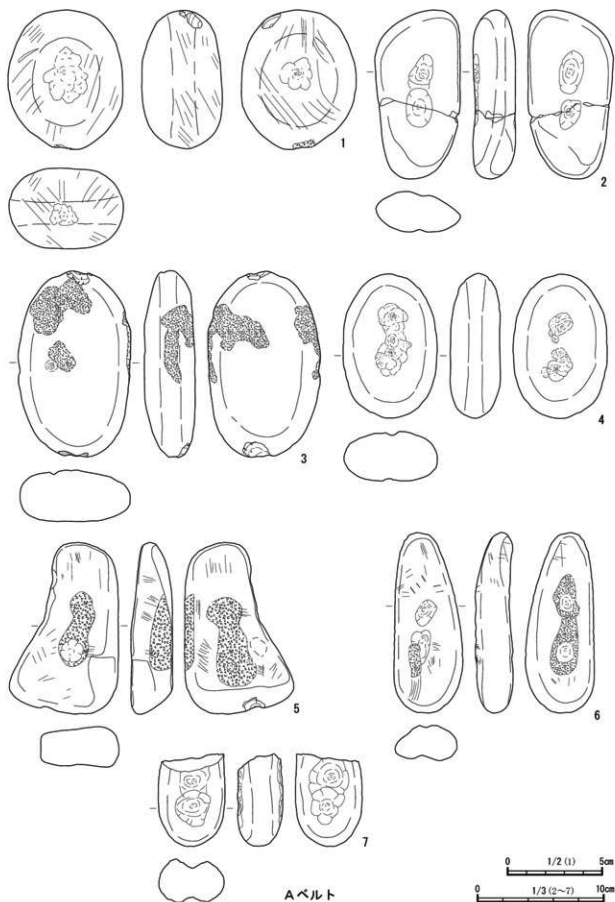


図220 クラック地点出土石器・石製品 (3)

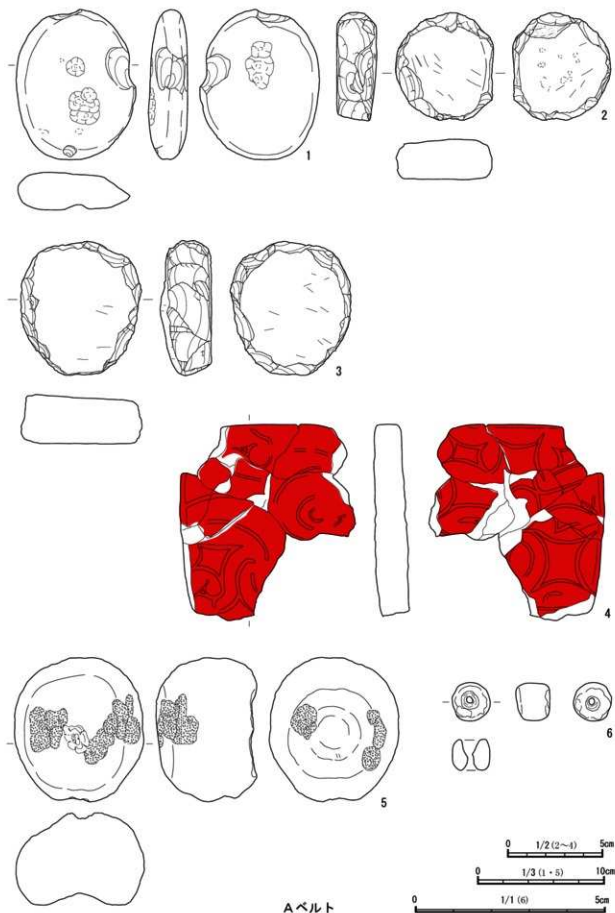
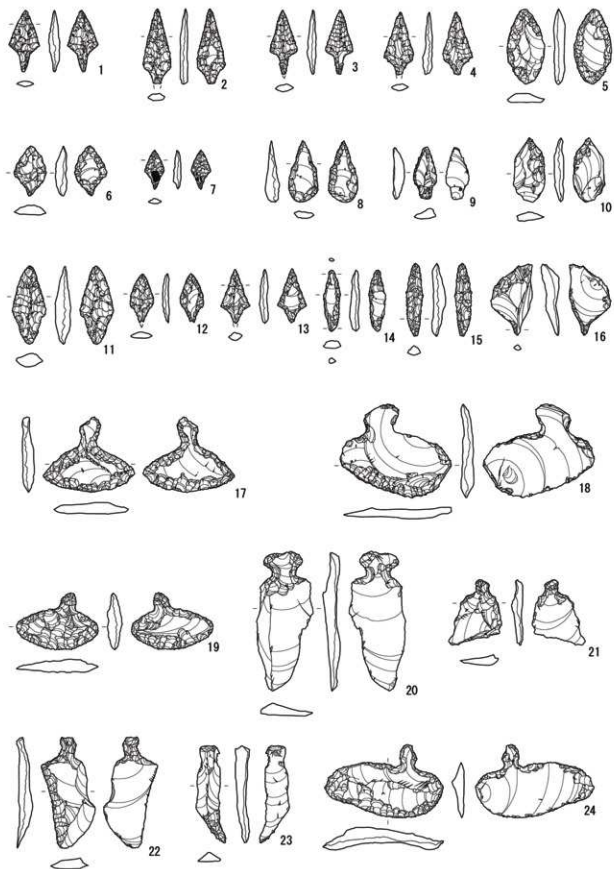


図221 クラック地点出土石器・石製品 (4)



Bベルト

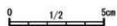
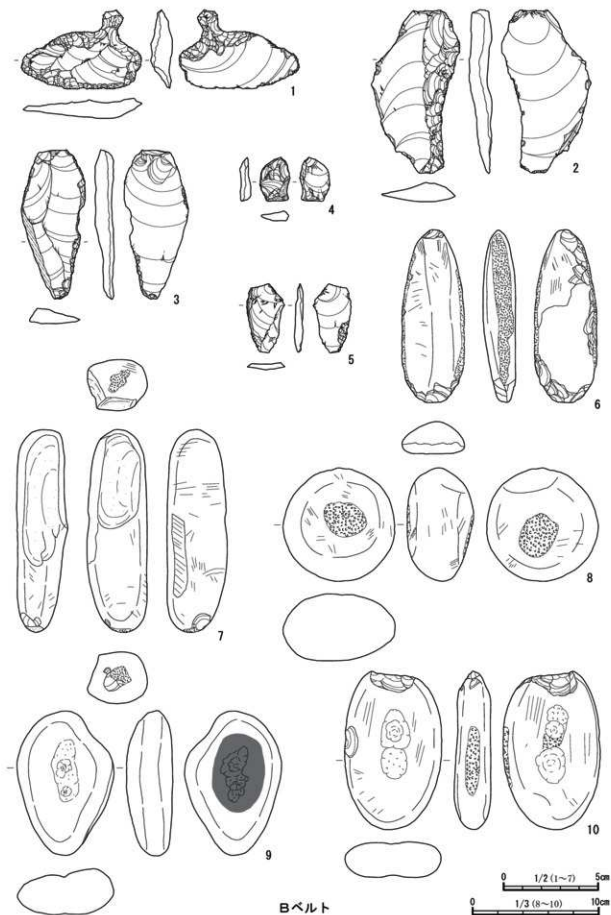
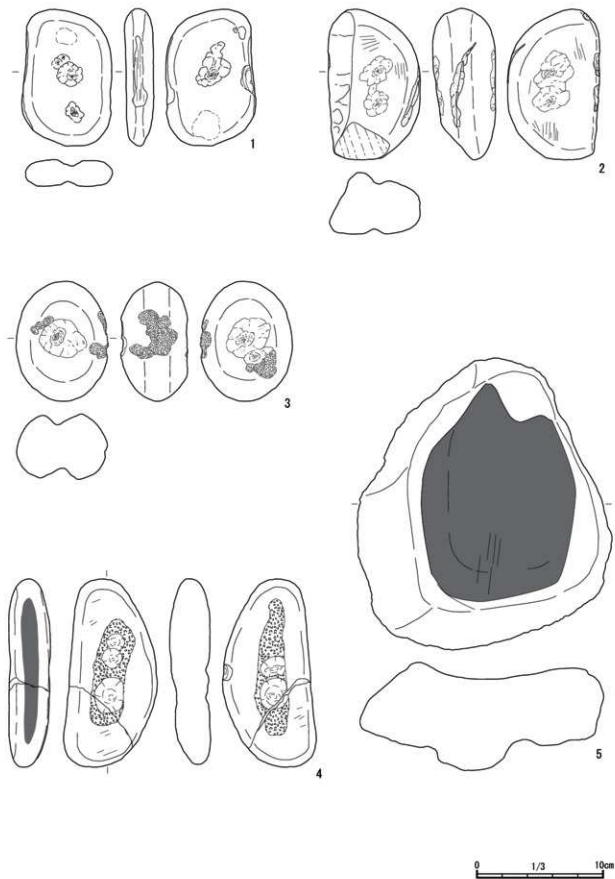


図222 クラック地点出土石器・石製品 (5)



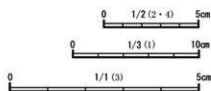
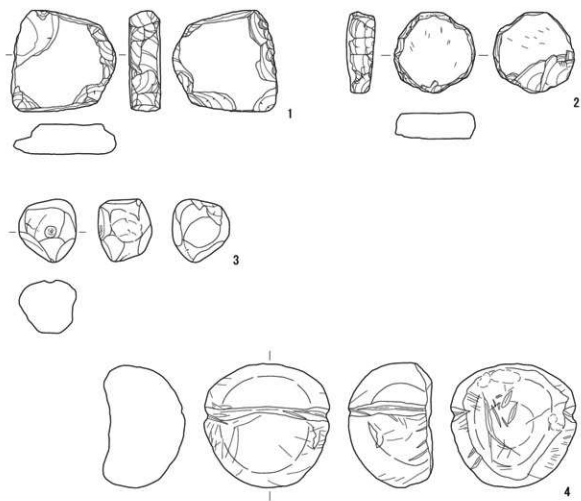
Bベルト

図223 クラック地点出土石器・石製品 (6)



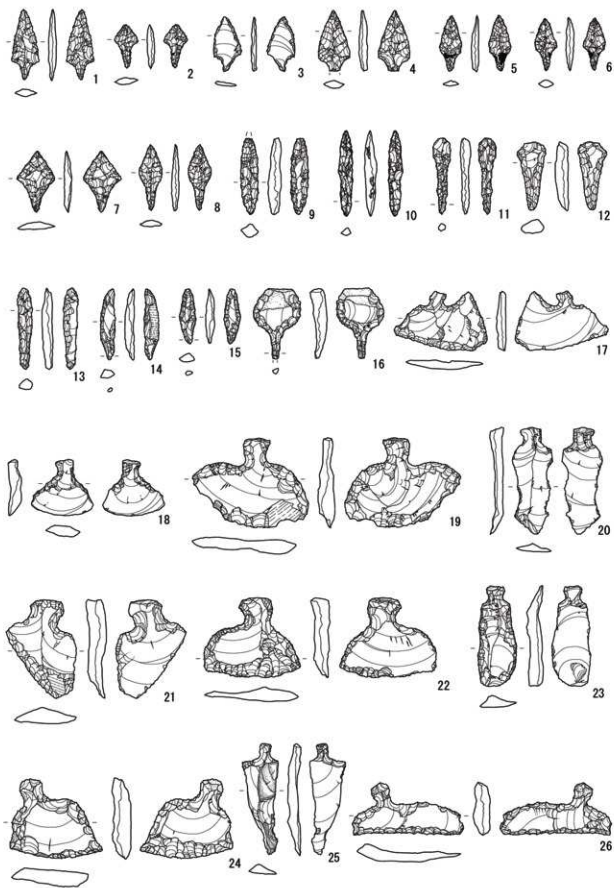
Bベルト

図224 クラック地点出土石器・石製品(7)



Bベルト

図225 クラック地点出土石器・石製品(8)



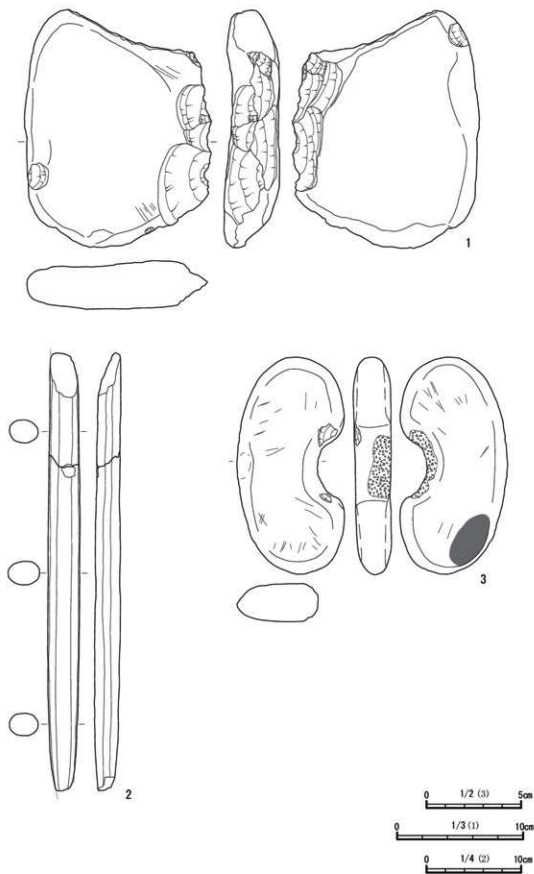
東西ベルト

図226 クラック地点出土石器・石製品(9)



東西ベルト

図227 クラック地点出土石器・石製品 (10)



東西ベルト

図228 クラック地点出土石器・石製品 (11)

上層

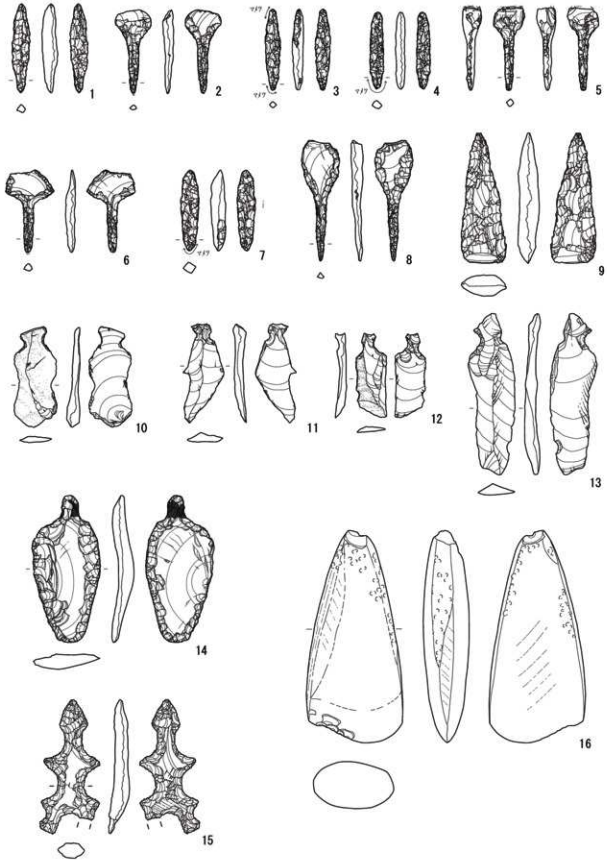


図229 クラック地点出土石器・石製品 (12)

上層

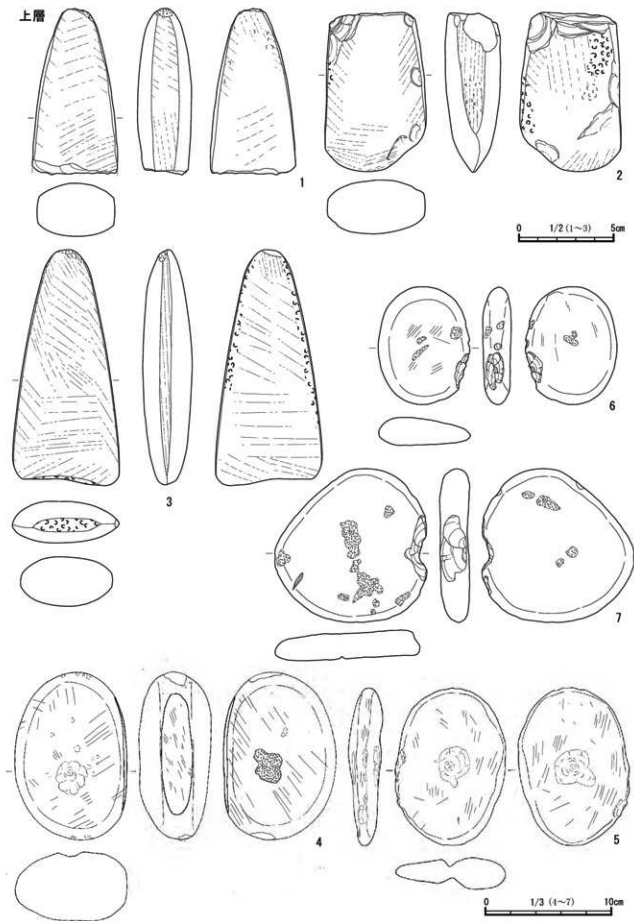


図230 クラック地点出土石器・石製品 (13)

上層

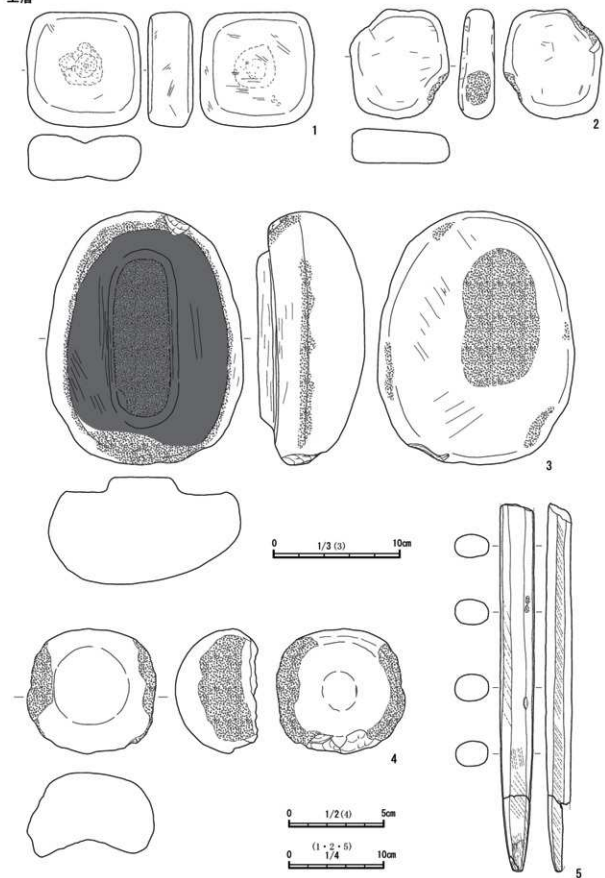


図231 クラック地点出土石器・石製品 (14)

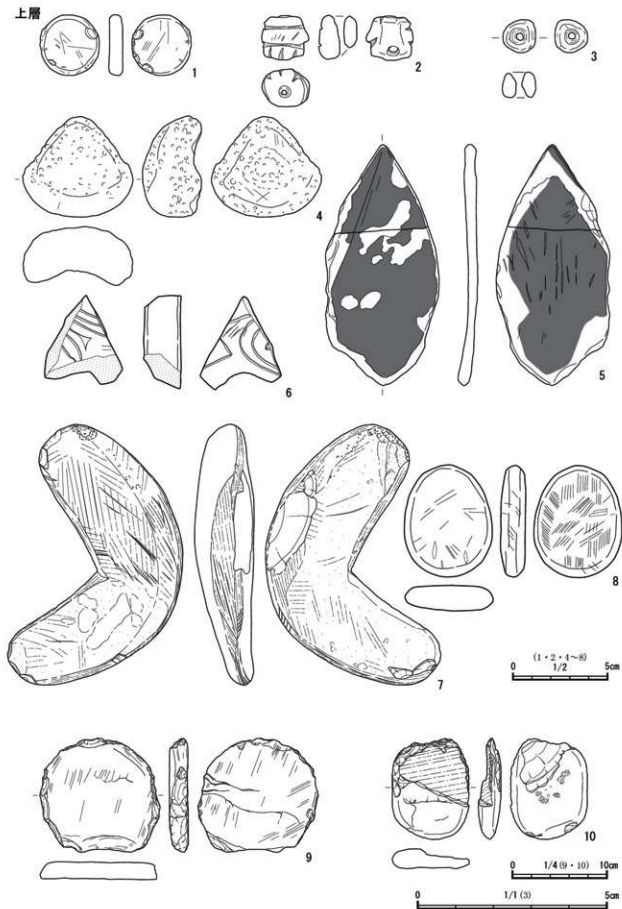
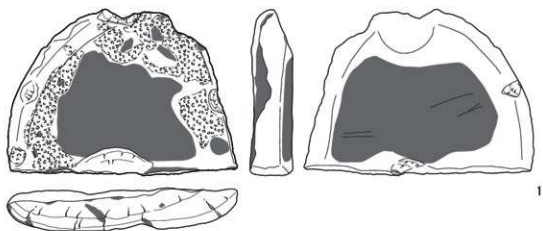
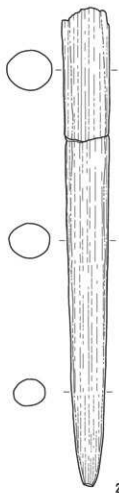


図232 クラック地点出土石器・石製品 (15)

下層



0 1/3 (1) 10cm



0 1/2 (2) 5cm

図233 クラック地点出土石器・石製品 (16)